

『完結』 ラウンドテーブル ～世界を救うはずだった勇者パーティ  
の尻ぬぐいをする事になった～

やーなん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔物との戦いで落ち延びた先で、三流冒険者だった主人公は凄惨な殺し合いの跡に遭遇する。

そこに現われた女神の提案に乗り、彼は全ての原因を知るべく過去へと遡り、人生を繰り返す。

……これは試練と徒勞の物語。

少しだけメタなTRPG風中世ファンタジーが、今始まる!!

※数年前に某所で投稿していた作品のリメイク版です。

# 目次

## 序章

神の卓上

1

## 第一章 気高き女騎士

二の目

11

三の目

23

六の目

36

四の目

49

五の目

66

一の目

80

女神と女騎士

97

## 第二章 白百合の剣姫

Xの目

110

女神フェイズ：諸悪の黒幕

128

Yの目

143

Zの目

159

$\alpha$ の目

176

$\beta$ の目

190

$\Omega$ の目

203

姫様と従者

219

## 第三章 背理の聖女

女神フェイズ：魔王軍

231

第六階層

243

幕間 傲慢の箱庭

257

第五階層

273

第四階層	288
幕間 龍魂の宝珠	302
第三階層	316
第二階層	329
第一階層	344
探偵不在、犯人の犯行自白	359
幕間のお話	
“暴君”の神話	369
たった一つの冴えたやり方	381
第四章 魔法の到達者	
人間道	388
餓鬼道	397
畜生道	407
修羅道	418
天道	429
地獄道	440
エピローグ	
徒勞の終わり	452
あくまで客人	471

## 序章

### 神の卓上

いらつしやいませ、皆様。

この度は私の卓へのご参加いただき感謝の極みでございます。

参加者は四名ですね。

それではキャラクターを作ってください。

ふむふむ、全員女性で作りましたね。

年齢も同じくらいで職業もバランスが取れてらつしやつて素晴らしい。

ああ、でも、出身国は近辺に集まっていてシナリオが組みやすくて私にも配慮がなされてある。

国ごとに受けられる恩恵は違うのですが、この地域でこの組み合わせは鉄板ですね。

次に能力値ですが、……おやおや、素晴らしい!!

全員が平均以上の能力値!! これは魔王を倒すのも夢ではありませんね!!!

取得される技能の取り方も皆様話し合いの末だからでしょうか、隙が無い!!

さてさて、それではお待ちかね、大惨事……もとい、経歴表ですが……ッ!?

これはこれは、彼女達は数奇な命運の元に生まれたようですね。

各々特徴があつてよろしいと思えますよ?

さて、キャラクターが完成した所で、プレイヤーの皆様は不要になつたので始末させて頂きます。

ザシユ、バシユ

え？ プレイヤーが居ないのに、どうやってシナリオを始めるのか、ですって？

なになに、心配ございません。

ほら、プレイヤーなら。

これからいらつしやるじやないですか。

ほら、ほらほら、やってきましたよ。私のシナリオの参加者が。

「何なんだ、これは……」

むせ返る血の臭いと惨状に、俺は瞠目した。

俺は魔王軍との戦いに破れ、落ち延びてきた冒険者の一人に過ぎなかった。

魔物の軍勢から逃げ延びるため、偶々見かけた遺跡らしき場所に逃げ隠れた所、悲鳴が聞こえて慎重に奥の様子を確認しに行った。

そして、最奥に有ったのは四人の女の死体だった。

争った形跡があり、それぞれ別の方法で殺されていた。

高貴な身分と思われるドレスの女は魔法で打ち抜かれていた。

女騎士と思わしき女は頭部に損傷が見受けられた。

メイスを持った女僧侶は首を真一文字に切り裂かれていた。

魔法使いらしいローブの少女は魔法を放った相手の最後の抵抗により胸を刺し貫かれていた。

まさしく惨状だった。

お互いにお互いを殺しあった結果、全員が死んだという悲劇が起こったのだろう。

「なんてことだ……」

そしてその一人には見覚えが有った。

魔法をその身に受けて必殺の一撃を繰り出す高貴なるこの女性。

この国の姫君だった。

遠くからでしか見たことは無かったが、その戦いぶりには「白百合の剣姫」と称えられるほどの強さを誇っていた。

俺の憧れの人だった。いや、剣士なら誰もがあこがれる最強の剣士なのだ。

今この世界を席卷せんと蹂躪する魔王に対抗できる数少ない人材だったというのに。

彼女を殺し、同士討ちとなったほかの三人も、その装備から同格の面々だというのが見て取れる。

俺はこの惨状にこの世界の終わりを予見した。

その時、まばゆい光がこの部屋を覆った。

部屋の奥の祭壇に設置されていた宝玉らしき物体から発せられる光だった。

「これは!!」

なにか言いようの無い巨大な何かが、圧力と成って俺の体を締め付ける。

この感覚と比べようの無いモノだが、昔組んだ召喚士が使役する精霊を呼び出す時に似ていた。

呼び出されるのは、精霊などとは比較にならない強大な存在であるのが本能で理解できた。

やがて光は収まり、そして。

「じゃんじゃじゃーん!!!」

馬鹿みたいに明るい声が部屋の中に木霊した。

「超ウルトラ救世女神ちゃん、呼ばれて飛び出て即参上!!」

遙か遠い異世界から、哀れな子羊を救うため、アルティメットな救いを、貴方にお届け!!」

現われたのは、意味不明なポーズを決めた頭の緩そうな女だった。女神を自称するくせに、黒い装束に黒塗りのとんがり帽子というどう見ても魔女としか思えない格好をしていた。

「あれ、即参上というか、ここ惨状？」

ま、いいや。貴方は何か私に願うことはなあい？

折角呼び出されたんだから、サービスするけれど？」

「だ、誰がッ!!」

俺は咄嗟に剣を抜いた。

「ま、惑わされないぞ、魔女め!!」

女神を騙るなど、おこがましいぞ!!」

切っ先は震えていた。実力差なんて本能が理解していた。

「……興味深い術式、協力的な上位存在を呼び出す為の魔術装置だね」

その女は俺の敵意など意にも介さず、自分を呼び出したであろう宝玉を手の甲で叩いた。

「本来なら私みたいなの？ 超絶最強女神を呼び出すなんて不可能な規模だけ？」

面白そうだから来てあげたのよ。実際この世界、詰む寸前みたいだし。抑止力的なこの世界の意思が後押しとかされたのかも」

そして、女はくるりと俺の方をむいて、にこりと笑う。

「で、何か願うことは決まった？」

有無を言わせようとははしない、確認の為の言葉だと直感で理解した。

「し、信じられるか!! お前が願いを叶えるなどと!!」

「あ、信じない？ そう、そうなんだ。

別に？ 私も信用されない相手からお願い事されても困るし？

そう言うことならちよつと勿体無いけど帰りますね。さようなら」



すると、その女は急速に気配が消えていく。

その姿が徐々に透き通り、そして……。

「待て、待ってくれ!! 本当に、本当に願いをかなえてくれるのか?」  
「あ?」

その、あ、には濁点が付くほどどの効いたものだった。

彼女は笑顔のまま消え去ろうとしていたが、かなり激怒していた。

「呼んでおいて私のことが信じられない、だけどいざとなったら待て?」

それはちよつと虫が良すぎませんか? 私つてば女神ですから。

機嫌を損ねた相手には容赦しませんし大嫌いになります」

「では願う!! 『待ってくれ、機嫌を直してくれ』!!」

「ふーん」

彼女は若干いぶかしんだが、すぐににこりと笑った。

俺が必死に懇願しているのが分かったのだろう。

「女性に心変わりを迫るなんて随分と失礼な話ですが、まあいいでしょう。」

「だけど貴方はこれで願い事を使ってしまいました。どうします?」

彼女は祭壇に乗って足を組んでこちらを見て笑っている。

「まず、貴方は誰なのですか?」

「なるほど、まずは私が誰なのか知りたいと。良いでしょう!!」

その女はニヤリと笑うと、ぴよん、と立ち上がり。

「遠い世界の壁を越え、呼ばれたからには慈悲を与える!!」

慈愛と救世の超絶究極なパーフェクト女神、アンズライールとは私のことですよ!!」

どどーん、と効果音まで自分で言いながら変なポーズを決める自称女神。

「つまり、この世界には存在しない神性なんですよ」

俺が余り分かってなさそうな顔をしていたからか、慌てて彼女は付け足した。

「女神様、とお呼びすればよろしいのでしょうか」

「そんな堅苦しい言い方しないでいいですつて!!」

故郷では『二代目』と名乗っていたので、そう呼んでも良いですし、気軽にあずにやーんって呼んでも……」

「じゃあ、アンズ様」

「……まあ、いいですけど」

心情的に二代目とは呼びたくなかったので、俺はそう呼ぶことにした。

「さて、この世界はどうしようもなく詰んでいきます。

私が読んだところあと数日でこの世界は滅ぶでしょう」

「そんな……でも、分かるんですか？」

「ええ、だって私は『全知ってほどじゃないけど全能』にして、『運命の女神の権能』を有しています。

流れ的にその四人が魔王と戦って打ち倒すシナリオっぽかったようですが……」

そう言っつて、アンズ様は四人の死体を見下ろし。

「どうしようもないくらい死んじやってますねー」

けらけら、と笑った。

「そんな、では、彼女らを生き返らせるとかは出来ないんですか!？」

「勿論、『出来ますよ!』」

彼女は断言した。

「やっぱり……え?」

そこは出来ないと言われるのかと思った。

「いえ、死者の蘇生くらい余裕ですよ。神様ですから。言ったでしょう、全能だって。

だけどこのまま彼女達を復活させたとして、この有様ではねえ……」

彼女の言いたいことは分かる。

このまま彼女らを生き返らせたとして、殺し合いの続きをするだけだろう。

「貴方の力で魔王をどうにかできないのですか?」

「ふーむ」

すると、彼女は支柱に自身の彫像があしらわれた天秤を取り出した。

「仮定する、私が魔王を消去する場合」

彼女がそう言うのと、天秤の片方がかたんと限界まで下がった。

「私がデウス・エクス・マキナすると秩序が崩壊してこの世界が消滅するっぽいですね。」

私の女神としての権限を越えたことは出来なさそうですね」

「では、座して滅びを待てと？」

「そうは言いません。」

ですが、やり方を変えればどうにかなると思いますけれど」

彼女はうーん、と唸ると、何かを思いついたのかパンと手を叩いた。

「実は私、運命の女神としての権能以外に『魔術神としての権能』も有しているんです。」

私の秘術で貴方を過去に送って見せましようか？」

「え、そんなことが可能なのですか？」

「だって全能ですから。ですが間違っではいけません。」

例えば、『貴方を過去に送ったとしても結果を変えることはできない』のだと」

「え、それはどういうことですか？」

俺が尋ねると、彼女は神妙に頷いた。

「執筆中のまま楽譜を演奏する馬鹿は居ないでしょう？」

つまり世界とは、始まりから終わりまでの道筋が決まってから誕生し、滅びるのです」

それは衝撃的な言葉だった。

「それでは、魔王がこの世界を滅ぼすのも決まっていると言う事なんですか？」

それでは過去へと戻る意味が無いのでは？」

「いいえ、この世界に迫る破滅はシナリオの破綻による棄却。」

意図されない滅びなのですよ。だから、どうにかできるのです」

「では、つまり、それをどうにかするには……」

俺はゆつくりと視線を下げ、どうしようもなく死んでいる四人を見下ろした。

「ええ、『滅びを回避するには、この四人に魔王を倒してもらう他無い』のです」

女神は笑みのままに断言した。

俺は愕然として膝が崩れ落ちた。

「ふむふむ、女神が与える試練としては丁度良いかもしれませぬね。

私はいつも願いをかなえる際に、必要な障害を与えます。そうして辻褃が合わないといけないのです」

「俺に、どうしろと……」

「……貴方は、この世界の救済を願いますか？」

であれば、この超絶救世女神アンズライールは貴方にその手段と方法を授けましょう」

慈愛の笑みを浮かべたまま、彼女は言った。

「……そんな大層な物じゃない」

俺はポツリと呟いた。

そして、無残な死に様を晒す姫君の手を取った。

「俺は騎士になりたかったんだ。

憧れの女性の下とまでとは言わないけれど、出来る限りその近くまで行きたかった。

だけど自分の才能の無さに嫌気がさして、挫折して冒険者なんていう日雇い仕事。

本当なら、俺は姫様に仕える騎士になりたいって願いたい!!」

「それぐらい、余裕ですけど?」

なにせ、大勢に全く影響が無い程度の変化ですし」

つまり結果は微塵も変わらない、運命の女神はそう言った。

「私は個人の運命に干渉できません。

役割を被せる事なんて造作も無いですし、才能ですら思いのままです。

だって『貴方が何をしたところで、何も変わらない』んですから」  
「俺は無力だと、運命の女神はそう言った。

「——それでも、『俺はこの人たちの一助になりたい』!!」

「素晴らしい」

俺の願いを、彼女は賞賛した。

「その願い、私が飽きるまで付き合いますよ。」

私は貴方を過去に送ります。そして、『この四人の死の運命を回避するべく、原因を探る』のです」

「はい」

「そこで間違えてはいけません。」

……『貴方は何も解決できない』のだと。

ではどうすればいいのか？ それは原因を探れば、自ずとそれが分かるはずです」

急速に、意識が遠のいていく。

まるで水の底に溺れるかのように。

「やて、と」

彼が過去へと消えるのを見届けると、女神は水平より僅かに傾いた天秤の上がつている方に何かを放り投げた。

からん、からん

それは、六面ダイス。

一の目を示そうとしたそれは、何かにつ張られるように二の目を示した。

## 第一章 気高き女騎士

### 二の目

「今日からここがお前の家だ」

俺は連れてこられた屋敷を見上げ、父親となる人物の手を握った。

女神の手により過去に送られた俺は、気が付けば実の両親の不幸に見舞われた直後だった。

そう、俺には両親は居なかった。幼い頃に事故に遭い、亡くなった。そうして天涯孤独となり、冒険者として日銭を稼ぐ日々を送るはずだった。

ところが、俺を養子に迎えたいという人物が現われたのだ。

その人物の名は、ギルバード・クリファア伯爵。

このヒルデン王国の由緒正しい貴族だった。

当然ながら、この人とただの庶民であるウチの家にはいかなるかわりがあったかは不明だが、少なくとも見えざる女神の采配によって彼と引き合わされたというのが妥当だろう。

こうして俺は、アラン・クリファアとなった。

新たな父によると、この国での法律では養子が爵位を得るには王族の認可が必要であるらしい。

その為には騎士として叙任され、功績を挙げなければならないのだという。

こうして俺は自動的に騎士となる道が定まったわけである。

かつて国の一般公募で騎士の選定試験を受けた時は凄まじい倍率で、一次試験で落とされた身としては複雑な気分だった。

そして、騎士とは即ち職業軍人であり、それ相応の実力と人格が求められる。

俺の場合、それに関しては問題ないようだ。

「筋が成っていないぞ、アラン!!」

俺の打ち込みをあつさりと弾き飛ばす、ギルバート伯爵。

「くッ」

「甘い!!」

返す刃で俺の苦し紛れの一撃を封じ、あつさりと腹部に殴打を食らった。

「げほッ、げほッ……」

伯爵……いや、父上の息子になり三年目。

だが今年で十歳になる俺を容赦なくしごきあげるのだ。

何を隠そう、このギルバート伯爵、剣術の達人として庶民でも知らぬ者は殆ど居ない英雄だった。

この人の下で鍛え上げられれば、誰だって一端の使い手になるだろう。

父上には俺が十年間実戦で培ってきた冒険者生活の全てが通用しなかった。

むしろ、その粗い剣筋を見せた瞬間。

「なんだ、その子供のチャンバラみたいな一撃は!!」

と、矯正すべく徹底的にしごくのだ。

「はあ、はあ、もう、ムリです……」

「愚か者、その程度で騎士になれると思っているのか?」

「おもって、ません!!」

「ならば、立ち上がれ!! お前なら出来る、根性だ!!」

「はい!!」

そして父上は熱血体育会系だった。

「ついに明日か……」

そうして父上に鍛えられて過ごし、15歳となった。

貴族の出身の人間は一次試験と二次試験をパスできる。

そして三次試験の選考試合だが、基本的に三次試験までこれた者は全員採用される。

つまり俺は最初から騎士の道が決まっていたが、騎士になるのも自



動的だったのだ。

無論、そんな甘えは父が許さなかったが。

父上からは選考試合で無様を見せれば即座に家から放り出すとまで言われた。

「不安かね」

明日が試合だというのに、今日もギリギリまでしごき上げると父上はそう言った。

「はい、もしかしたら自分が基準に満たず、選考から落ちる可能性もありえますから」

ここ八年ですっかり粗野だった俺の喋り方も鳴りを潜めていた。

「私も初めはそうだった」

「父上もですか」

「ああ、荣誉ある赤鷲騎士団の団員選抜試合の前日は腕の震えが止まらなかった」

物思いに耽るように、父上はそう言った。

「自分の全てを出し切れればいい。」

そうすればお前なら、必ず上手くいく」

父上は笑みを浮かべながらそう言った。

「父上……今でも、思わないわけではありません。」

私が父上の息子にならず、天涯孤独の身で生きていたとしたら……」

この八年間は冗談のような、しかし幸福な時間であった。

厳しくも強く優しい父親の元で鍛え上げられる日々。

それは俺が決して得られなかった時間だった。

そして、いずれ破綻するまやかしに似た一時のモラトリアムだった。

父上は数年後、魔物と勇敢に戦い、そして戦死する。

英雄の死は大々的に報じられたので、覚えている。

その息子になった自分は、未来に何の影響もなく終わるのだろう。伯爵家も間違いなく断絶する。まさしく居ても居なくても変わらない椅子に座らせられたというわけだ。

「きつと冒険者にでもなつて、うだつの上がない日々を過ごしていたことでしょうか」

「この道を選ぶことを強いた私が言うことではないが、何も変わりはないよ」

父上は穏やかな笑みを深める。

「お前が何者であろうとも、お前はお前がするべきことをしなさい」  
仁と礼、そして剣を父上は俺に授けてくれた。

俺はそれに応えねばならない。

「必ずや騎士となり、姫様のような強い剣士になります!!」

「……お前までああなつては困るがなあ」

姫様の剣術指南役だった父上は苦笑してそう言った。

俺の選考試合は、あつけないほど順調に勝ち進んだ。

俺は次の試合を待ちながら、俺のすべきことを考えていた。

あの場所で死んでいた四人の中で所在がハッキリしているのは、一人。

この国の王女、レナスティ姫である。

彼女はもう既に頭角を現し、活発化している魔物の討伐に奔走している。

それで俺のひとつ上という年齢なのだから恐れ入る。

この世界の滅亡は、約三年後。

これから一年後には魔王と呼ばれる存在が魔物の軍勢と共に隣国を攻め落とし、その版図を広げるべくこの国と戦争になる。

俺が逃げ延び、あの女神が降臨した遺跡はその国境付近にひっそりと存在していた。

アレがどうなっているか、確認しなければならぬだろう。

世界の滅亡が確定した日に、あの場所に向かえばあの惨劇を止められるかもしれない。

いったいどのような諍いがあったて殺し合いに発展したのか？

まずはそれを知らなければならぬだろう。

案外、体を張って止めれば話し合いで何とか成るかもしれない。

そんな幻想じみた願望を抱いていると。

「おい、あれ、姫様じゃないか？」

「何だって、ホントだ、こっち見てないか？」

周りの騎士候補たちがざわめき出したので、その視線を追うと、確かに姫様らしき姿が城の窓から試合の風景を見下ろしていた。

俺の胸に突如として緊張が生まれるが、ふと、彼女と眼が合ったような気がした。

すると、さつとカーテンが閉じられ、彼女は踵を返し部屋へと戻って行ってしまった。

ああ、と周りから残念そうな声上がる。

「選考試合の最終戦を始める!!」

アラン・クリファ、そしてイリーナ・バルハルト。前に出よ」

そんなこんながあったが、試験官の騎士が俺と対戦相手の名を読み上げる。

バルハルト家という名前には覚えがあった。

かのバルハルト騎士卿は、領地を持たない成り上がりの一代騎士候だが父上の戦友として幾度となく名前が挙がる猛者だ。

俺の相手はその子女らしかった。

俺はかの御仁とお会いしたことあるが、ご息女が居るとは知らなかった。

俺と彼女は兜越しに対面し、騎士の礼を取った。

「バルハルト卿のご息女と手合わせ願えるとは光栄です。

かの御仁の勇名は父からかねがね窺っています」

「……………」

「失礼、言葉は剣で語りましょう」

イリーナ女史は少しの気も緩ませずに剣を構えたので、俺もそれに習った。

彼女も父から俺の父上のことぐらい聞いているだろうから、油断するつもりはないのだろう。

「私は、お前に負けるつもりはない」

だが、唐突に彼女は口を開いた。

それは久しく感じなかった明確な敵意だった。

どう見ても試合相手に浴びせる類の物ではない。

「それでは、両者……始め!!」

俺が困惑していると、試合が始まった。

「ハアツ!!」

裂帛の気合と共にイリーナ女史が踏み込んできた。

「ッ!」

初手は様子見に徹したが、その一撃は女性とは思えないトロールの如き破壊力を秘めていた。

俺は確信した。これは試合だからと言って気を抜くと殺されかねない、と。

それから俺は防戦に徹し、相手の息切れを待つ戦法に切り替えた。

彼女とまともにやりあったら命が幾つあっても足りない。

そうして勝機を逃さなければ、勝てない相手ではなかった。

だが、運命はそれを許さなかった。

バチン、と彼女の一撃をいなした際に、盾と腕を固定するベルトが弾け飛んだのだ。

彼女の激しい攻撃に耐えかねたのだろう。

こうなると盾を振り回すのは難しくなる。

俺は盾を捨て、一気に勝負を決めるべく前に出たのだが。

「せやあ!!」

そんなことは相手もわかっていた。

あっさりと逆襲に遭い、俺は尻餅をついた。

「お、お見事!!」

やはり俺の勝てる相手ではなかったらしい。

俺は素直に彼女を褒め称えた。

「こちらこそ。見事な剣でした」

彼女は兜を脱いで、汗を振り払うように纏められた短い金髪を左右に振った。

そして彼女は俺に手を差し出した。

俺はその姿を唾然と見るしかできなかった。

「どうしましたか?」

「あ、いえ、ありがとうございます」

俺は彼女の手を取って、立ち上がると颯爽と踵を返し去っていく彼女の後姿を見ていた。

ずっと兜をかぶっていたので分からなかったが、彼女は間違いなく。

『あの場所にいた四人のうちの一人だった』のだ。

俺は王国騎士として叙任されると、辺境の砦に配属され、そこで訓練の日々を送ることになる。

隣国との境界線では魔物たちの軍勢と、王国軍が激突しているらしい。

だからと言ってこちらの砦の警戒も怠っていない場所ではない。

俺は心のどこかで、騎士になることに幻想を抱いていた。

いや、庶民の人間で騎士に幻想を抱かない人間は居ないだろう。

だが俺は、父上に厳しく騎士の心構えなどを教わってきた。

あと一週間で、あの日が訪れる。

暗い遺跡の中で、四人の女性が殺しあうのだ。

だけど俺は、……行くことが出来なかった。

騎士とは、責任のある立場なのだ。

俺はそれを放棄して、彼女らの所へ行くとは出来なかった。

俺は父の訃報をこの砦で聞き、己の役目を全うせよ、という遺言まで貰った。

この砦に配備された騎士の誰もが、父の死を悲しんだ。彼らは、俺にとって顔も知らぬ他人ではなくなっていた。

俺の役目とは何か？

無論、世界の命運を握る人たちの一助となることだ。

だが、俺には出来なかった。

目の前に、魔物の軍勢が迫ってきていたからだ。

この砦から逃げ出す愚か者は居ない。

この砦の背後には、無辜の民たちが居るからだ。

逃げ出すことなど、できなかった。

俺は、彼らを見捨てられなかった。

「つまらない死に方をしましたね」

暗闇から目を覚ますと、女神は俺を微笑みながら出迎えた。

むせ返るような血の臭い。

四つの死体と、女神を呼んだ祭壇。

間違いなくあの場所、あの時間へと戻ってきた。

「英雄ギルバード・クリファアの息子、アラン。

彼は魔物に包囲され、攻め落とされようとしていた砦から仲間と共に決死の覚悟で魔物たちに打って出た。

彼自身、三十に及ぶ魔物を切り伏せ、敵指揮官と相打ちした!!

王国は彼に最高位の名誉である白銀竜虎勲章を授与するものである——」

びりッ、と女神は壁新聞の紙面を破り捨てた。

「……失望なされましたか？」

「まさか、貴方という人物の人となりは分かりましたよ」

何度も重ねて紙面を破り、花びらのようになるまで千切ると、ぽいと投げ捨てた。

安物の紙の花吹雪が俺と死体に降りかかり、消えた。

「個人的には好ましいとは思いません。

人間という生物は、社会的な生物です。貴方はその歯車の一部としての責任を全うした。

その程度が出来ないようでは、誰からも信頼を得ることは出来ません」

女神は慈愛に満ちた表情で言う。

「ですが」

慈愛に満ちた表情のまま、彼女は俺を見下して、嘲っていた。

「貴方は何が出来ましたか？」

「目的のひとつでも達成できましたか？」

「いいえ」

「私は貴方に善意で機会を与えているに過ぎません。

私が飽きれば貴方はそれまでなのです」

「……はい」

「では、こうしましょう」

女神は栗色の髪の毛のひと房だけ緑色のそれを指で弄くりながらこういった。

『一人につき、六度まで過去に戻ることを許しましょう』

何十回も繰り返しても高が知れますから」

「それはつまり、どういうことですか？」

「一人に対して有利に近づける役割の変更などは、六度までということとです。」

貴方は都合24回の逆行で、この世界の結末を変えることが出来なければ、私はこの世界を見捨てるしかなくなるわけですね」

「そして残された回数は、23回。」

「……長らく忘れていました。」

母親に叱られる気分というものを」

私はアンズ様に深く頭を下げた。

「……………」

「私のわがままを叶えて頂き、ありがとうございます。」

これでよかったです。騎士として誰かの為に名に恥じることなく戦った。

本当に、これだけでよかったです。これで、悔いはございません」  
俺は教会で神に祈るときのように膝を曲げて手を組んだ。

「この身命、貴方様の授けてくれた使命の為に尽くす所存です」

「嗚呼、なんて……」

それは、とても慈愛に満ちた言葉だった。

「なんて、愚かしい」

母が子に向ける、慈愛と慈悲に満ちた言葉だった。

「自らの命の為ではなく、他者の為にその命を使う。」

長く浅くぬるま湯に浸かるように生きながらえるより、短くも燃え爆ぜるようその命を誰かの為に浪費する。

その気質は、英雄のものでしょうか。故に、私が試練を課すにふさわしい」

顔を上げると、アンズ様はとても嬉しそうに笑っていた。

「それで、どうするの?..」

誰に対してどのような有利な条件を得たい?」

荘厳な女神のような雰囲気ははずかへ、子供がいたずらの提案を待つように彼女は言った。



「イリーナ殿と同じ部隊に所属願いたい」

俺は次の役割を願いだした。

「ふむふむ、じゃあ、先の一回も彼女の一回とカウントするわね」

「ひとつ訊きたいのですが、全員に一回ずつというのはありなのでしょうか？」

「それはつまり、とりあえず全員の一回目を使いたいということかしら？」

「はい」

それで全員の素性が明らかになれば、大分有利になるのだが……。

「うーん、……それはなし。」

六回使い切るまで別の人間の為に時間を戻るのは無しとします。多分ややこしくなるから」

アンズ様はひと房だけ緑色の髪を弄りながらそう言った。

「わかりました。」

後の五回はイリーナ殿の為に費やすしかないと言う訳ですね」

『後出しの条件で悪いけれど、そういうことで』

「え、それって……つまり？」

「あッ……」

アンズ様は露骨に目を逸らした。

「じゃ、じゃあ、彼女と同じ部隊になるのに有利な家にするわね」

彼女はあからさまに話題を逸らしたが。

「いえ、アンズ様。できれば王国内で活動する間はクリファア家の人間で居たいのです」

「まあ可能ではありませんが」

「わがまま言ってますみません。」

私は出来る限り、ギルバード様の……父上の息子で居たい」  
「わかりました」

何か思うところがあるのか、アンズ様は何度も頷いて了承した。

俺は地面に横たわるイリーナ殿を抱き起こし、驚き見開かれていたその両目を閉ざした。

剣を交えた者同士として、最低限の敬意だった。

それと同時に、意識が水中に溺れていくように落ちていく。覚えのある感覚あった。

再び、戻ろう。あの家へ。

「ふう、危ない危ない」

彼を過去へ送ると、女神は振り返り、前より若干傾いた天秤の上がついている皿に六面ダイスを放り投げた。

からん、からん

ダイスは勢いよく投げられたにも関わらず、皿の上から落ちることなく収まった。

何度か不自然な動きをした後、出た目は三だった。

### 三日目

俺は再び、父ギルバードに引取られるところから始まった。

「せえや!!」

「はッ!!」

俺と父上との関係は、親子だけではなく師弟としての側面も強い。だから使用人を連れて遠出に行ったりしたことなど数えるほどもない。

父は俺を引取ったころには三十歳になっており、結婚して子供の二人はいてもおかしくない年齢だった。

しかし父上は武人として、己を高めることに全力を注いだ。今にして、二度も父上の息子となって何となく分かった。

この人は誰かに自分の剣を受け継いで欲しいのだ、と。

本来ならそれは適わなかったはずだ。

弟子というなら剣術指南役として姫様もそうだろうが、あのお方は強すぎてそういう風に思えないのかもしれない。

そして、俺は理解したのだ。

前回は父上に甘えていたのである。

今回、父上は家を空けることが多くなった。

「お前は筋が良い。いずれ私と同じところまでこれるだろう」

そう笑う父上はとても嬉しそうだった。

自分の後継者として、俺は成長していたお陰か、俺に留守を任せることが多くなった。

それはつまり、前回は俺の未熟ゆえに無理して帰ってきてくれていたのだろう

本当に父上には敵わない。

「父上、父上、今日もバルハルト様とお話をお聞かせください!!」

「おお、そんなにききたいか？」

俺は無邪気な子供を装い、バルハルト卿と父の武勇伝をせがんだ。そう言う話に目のない子供として振る舞い、12歳の頃に漸く核心を突いた。

「そういえば、バルハルト卿はご息はいらっしゃるのですか？」

「うむ？　なぜそんなことを知りたい？」

夕食時、俺はワインを嗜む父上に問う。

「いえ、もしいらっしゃるのなら、手合わせ願いたいと思ひまして」

「ふむ、それは残念だな」

父上はゆつくりと目を細めた。

「奴に息子がいれば、お互いに競わせたものだが」

「この際ご息女でも構いません、あの方なら娘だろうと剣を仕込むでしょうから」

「確かにそうだな。だが、それも敵うまい」

父上は首を振った。

『バルハルト卿に子供は居らんからな』

「そうですか」

俺は意気消沈したような仕草をした。

何となく、そうではないかとは思っていた。

バルハルト卿とイリーナ殿は、顔立ちが似ていないのだ。

つまり、イリーナ殿は養女だった。

しかもごく最近、これから三年以内に迎えられる子供なのだ。

考えられる可能性は二つだろう。

まず一つ目は、身寄りのないイリーナ殿をバルハルト卿が引き取った。だがそれなら女をわざわざ騎士にする理由が分からない。

彼は一代限りの騎士卿なのだから。

もうひとつの可能性は、逆に騎士にするために引取った可能性だ。

貴族の子息の推薦ならばほぼ確実に騎士になることは出来る。

彼が彼女の才能を目に付け、イリーナ殿が親元から離れたという線

である。

後者の方が濃厚で、恐らくそうなのだろう。

「であれば、いずれ姫様とお手合わせ願いたいですね」

「ははは、こやつめ」

本心だった。俺は父上から授かった剣術がどこまで通用するか見てみたい気持ちもある。

「本気ですよ。私は姫様のように成りたい」

「うむ、お前も励むといい。まあ、あそこまで剣術に打ち込まれても困るが」

父上は苦笑しながらそう言った。

俺は何の問題もなく十五歳になり、選抜試合の最終戦へと駒を進めた。

また姫様がこちらを見てくださるのかと思い、様子を窺っている。

「選考試合の最終戦を始める!!」

アラン・クリファ、そしてイリーナ・バルハルト。前に出よ」

だが、俺は名前を呼ばれて反射的に佇まいを正した。

俺はイリーナ殿と対峙し、お互いに礼をする。

「バルハルト卿のご息女と手合わせ願えるとは光栄です。

かの御仁の勇名は父からかねがね窺っています」

自然とその言葉が口から出た。

「……」

イリーナ殿は答えない。

もしかしたら、養父の武勇伝がぴんと来ないのかもしれない。

「失礼、言葉は剣で語りましょう」

俺はそう締めるが。

「私は、お前に負けるつもりはない」

前回と同じように、敵意と共にイリーナ殿は言った。

それに応じるように、俺は剣を構える。

ちなみに、試合は前回と同じような運びで終わった。

違いといえば、少しばかり試合が長引いたくらいか。

ほんの少し違和感を覚えたが、恐らく前回より俺の腕が上がったためであろうか

試合が終わり、イリーナ殿の手を取り立ち上がる。

彼女を礼を言っ、立ち去ろうとすると。

「二人とも、しばしそこで待て」

試合の審判をしていた騎士が、俺達を呼び止めた。

何事かと思っておれはイリーナ殿を見たが、彼女は何の動揺もしていないようだった。

まあ、彼女は優勝したのだから、この後の展開は予想がつくのだろう。

そして、周囲で待っていた騎士候補達がざわめく程度の時間を待たされると。

「特例として、イリーナ・バルハルト、並びにアラン・クリファの二名を赤鷲騎士団へと配属を決定する!!」

審判をしていた騎士がそう宣言し、周囲から喝采を浴びた。

彼はこの試合を見ていた騎士団長たちからそう要請されたのだろう。

この選抜試合の優勝者は、代々赤鷲騎士団に入団する慣わしなのだ。

それが準優勝者も含めて二名というのは前代未聞なのだろう。

「貴殿が同僚ならば、これほど心強いことはない」

「貴方にそう言っていただけののなら、これほど嬉しいことはない」

俺は一礼して彼女にそう返すが、顔を上げる頃には彼女はすたすたと向こうへ行ってしまった。

ガードが硬いと、苦笑しながら俺も元の位置へと戻った。

同じ赤鷲騎士団に配属された俺とイリーナ殿だが、新人は別々の部隊に分かれて配属されることになる。

そのため、あの試合以降は滅多に顔を合わせる事がなくなってしまうのだ。

同じ騎士団に所属することを、同じ部隊に所属したことになるかどうかはいずれ女神と論議することにして、俺は僅かな訓練と共に最前線へと送られることになる。

父上が赤鷲騎士団に配属されることを我が事のように喜んでくださったが、どこかそれを望んでいないように見えたのはこの為だろう。

この騎士団はこの国で最も伝統ある騎士団で、所属する団員は最精鋭の存在なのだ。

最も危険な位置で人民の盾となる希望の象徴でもあった。

例え意図された運命であったとしても、その一員として働けることは騎士として無上の誇りだった。

俺はそれに恥じない戦い振りをするつもりだった。

……

……

……

魔王軍が侵攻を開始し、三年目に突入した。

連中との戦いは凄惨を窮めた。

魔王軍は神出鬼没であり、背後から攻撃されることなど日常茶飯事であった。

奴らをただの蛮族や野獣の群と侮るなかれ。

魔物たちは歩兵階級のゴブリンやオークなどを、闇夜に紛れ飛行する鳥型の魔物で大量に輸送して攻撃するなど、高度に組織化されてい

る。

戦術・戦略を司るといふ魔王の配下たる魔人・魔族の存在もあいまって、人類は泥沼の消耗戦を強いられることになる。

各国はこれを連携して戦い、それでなお人類は魔王軍と互角の戦いを演じなければならなくなった。

この頃になって、王国軍は傭兵や冒険者たちを即席の兵隊として登用し、前線に投入。

ちようど、かつての俺がそうだった様に使い潰されていく。

この頃になると、俺は赤鷲騎士団の小隊長として部隊を率いていた。

俺のような若造が部隊を預かるに至ったのは、単に有能な先人達が死んでいったからに他ならない。

俺の部下は半数以上が同年代で、他の小隊でも同じような状況だった。

その中でも目覚ましい活躍を遂げるイリーナ殿は次期団長と目される存在となっていた。

「皆、今日はここで夜営しよう」

俺の部隊は遊撃として魔物を索敵及び強襲の役割を担っていた。

魔王軍との戦いは防衛線を敷くより、各所に部隊を配置し、連携を取り合って戦うという方が効率が良かったため、自然とこのような闘い方と成った。

その途中で、俺はかつて女神と出会った遺跡の近くへとやってきたので、夜営の最中に適当な理由をつけて部隊から離れた。

世界の滅亡が決まるあの日はまだ先であるが、先にあの場所がどういうものなのか確認しなければならぬだろう。

ところが。

「無い……」

遺跡があつた場所は、どこを探しても見つからなかったのだ。



よくよく考えてみれば、あんな分かりやすい場所にあった強力なマジックアイテムが、今まで発見されていないのは可笑しい話だった。滅亡のあの日にのみ入り口が開かれるのか、あの四人のうちの誰かが遺跡への道を開くのかは不明だったが、どのみち入れないことは事実だった。

俺は後ろ髪を引かれる思いもあったが、その場を去ることにしたのだ。

そして月日は流れ、滅亡の日が訪れた。

俺は何も出来なかったという後悔を抱きながら、部隊の皆に許せる限りの食事を振る舞い、その日を終えた。

「何も起きなかった、だと……」

そう、滅亡の確定したはずの日は過ぎ去っていた。

俺は困惑しながらも、魔王軍と戦い続けた。

それから二年の月日が流れ、俺はその活躍から中隊長となった。

当初から魔王軍と戦い続けた赤鷲騎士団の殆どが入れ替わるよう

な激戦につぐ激戦だった。

これが人類同士の戦いならば、休戦や停戦も有り得ただろう。だが、これは人類と魔物の生存競争であり、どちらかが滅びるまで戦いは終わらないのだ。

そしてどの国も疲弊し、多大な犠牲と引き換えに、人類は魔王軍と最終決戦を控えるまでと成った。

俺はその地位から片隅で拝聴するだけだが、最終決戦への軍議にも参加することが出来た。

そこには騎士団長となったイリーナ殿、連合軍の事実上最高指揮官となったレナスティ姫が居た。

遠くから二人を見ることしか出来ない自分だが、参加するだけでも意義はあるだろう。

そうして軍議の開始を待っていると。

「お待たせしました」

俺はその声の主を見て、目を見開いた。

誰もが汚れた鎧を身に纏う中、まるで戦場には場違いと思えるような純白の衣の女性がやってきた。

そして、その女性こそ、『あの場所に居た四人のうちの一人』だった。

「なあ、あの人は……」

「ああ、かの聖女クリステーン様だ」

隣の中隊長仲間に確認するようにきいたが、予想は的中した。

聖女クリステーン。

光神教を崇拝する人間以外であろうとも、知らぬ物はいない有名な有名人だ。

幼い頃に神の声を聞いたとされていて、市井の出でありながら強大な神聖術の使い手であるとか。

清廉潔白な人物で、教会の不正を幾度も暴き、人々から絶大な人気がある。

「こつちも今来たわよ」

遅れて入ってきたのは、魔法使いらしい格好をした小柄な少女だった。

彼女も、『あの場所に居た四人の一人』だった。

「彼女って、まさか……」

「ああ、魔導公国の最強の戦術魔法術師、アリサ・クローネンだ」

俺はまたしても隣の同僚に確認するように尋ね、確信した。

アリサ・クローネン。

隣国の魔導公国にある戦術に影響を及ぼすほどの強さを持つ魔術師集団でトップの実力を持つという。

戦いの中で屠った魔物の数は一万を超えるという強大な力を誇る。ちなみにあんな容姿だが、俺と同じ年である。

レナスティ姫。

イリーナ・バルハルト。

聖女クリステーン。

アリサ・クローネン。

意図せず全員の素性を知ることが出来た俺は、なるほどと納得した。

魔王を倒すのにふさわしい四人であるとも。

それと同時に、なぜこの四人があんな殺し合いを起こしたのか。

それについて悩んでいると、俺はもつと混乱する出来事に遭遇する。

それは、恐るべき魔力を有する魔王に対する対策について論じていたときだった。

「大丈夫、こつちには切り札がある」

そう言ってアリサが指を振るうと、何かがふわふわと浮いて出てきた。

「な……」

それは、あの祭壇に有るべき宝玉であった。

「あたしと、聖女殿、その騎士団長と姫君で取りに行った古代の秘宝だよ。

これは『龍魂の宝珠』と言つて、膨大な魔力が——」  
そこから先は、覚えていない。

その翌日、魔王の居城とされる要塞に攻め入る運びとなった。  
激戦の末に四人の率いる部隊が城内に突入した。

俺は部隊と共に場外にて敵兵と戦っていた。

城内からはこの世の物とは思えない轟音が幾度も鳴り響き、大地すら揺らした。

人類も魔物も、死力の末に訪れた結末は。

ぶおおおおおん!!!

それは、『勝ち鬨のほら貝の音だった』。  
それが城内から聞こえてきた。

「勝った、勝ったぞ!!!」

あの人たちが勝ったんだ!!」

誰からでもなく、皆がそう口にした。

「万歳!! 姫殿下万歳!!」

「万歳!! 騎士団長イリーナ殿万歳!!」

「万歳!! 聖女クリステイン万歳!!」

「万歳!! 大魔法師アリサ様万歳!!」

誰もが英雄達を称えるように声を上げていた。

「万歳、バンザイ!!!」

俺もわけが分からなかったが、人類の勝利を賛美した。

「万歳、バンザイ!!!」

「ばんざい、ばんざーい」

「万歳、バンザイ!!!」

「ばんざーい、ばんざーい」

そこで、俺は我に返った。

「ばんざーい、ばんざーい」

俺の真横で、一緒になって両手を挙げている女神アンズライールの姿があった。

周囲は音を失ったかのように静まり返り、色を失ったかのように色褪せ、全てが停止していた。

「これは、なぜ、いつたい……」

その時の俺の胸中を推し量れる者は居ないだろう。

『あの四人によって、魔王は倒されたはずなのに!!』

「うん、分かるわ、その気持ちとっても分かる」

両手を組んで何度も頷くアンズ様。

周囲の風景は、いつの間にかあの祭壇と四つの死体のみである遺跡の奥へとやってきていた。

「教えてください、アンズ様。」

あの四方は魔王を倒しました!! なぜ世界は救われないのですか!!

『その理由を探すために貴方は過去へ戻っているの』だけれど」

絶望し、涙を流す俺に対して、アンズ様は言葉とは裏腹に優しく背を撫でてくれた。

「理由? 理由があるというのですか?」

正しい手順を踏んでなお、この世界が救われない理由が」

「ええ」

「なぜですか、なぜなのですか!!」

貴方達はああして四人で宝珠を持ち帰り、魔王と戦い倒しうるのに!!

なぜここでこうして、争いあっていたのですか!!」

俺は女神ではなく、目の前で愚かな死に様を晒す四人に慟哭した。

「些細な歯車の食い違いが、誰も予想できない結末を生み出すのです。ひとつだけ、ヒントを挙げましょう。」

『あの後、魔王が滅びた直後から、未来は存在しないのです』

「……どういう、意味ですか」

「それこそ、世界が救われない証左でしょう。」

「さあ、嘆いている暇はありませんよ。あと22回。貴方は私の試練に立ち向かうのです」

アンズ様はにこにここと笑いながら言った。

それは俺が悩んでいる姿を楽しんでいるというより、自分の難題に挑んでいってくれる姿を嬉しがっているように思えた。

「イリーナ殿の副官にして欲しい」

俺はキツと顔を上げ、アンズ様に言った。

「いよいよ踏み込むんですね」

「はい、このままでは埒があきません」

今までののは少しばかり迂遠すぎたのだろう。

だから核心に少しも近づけなかったのだ。

「何なら、彼女の恋人でも構いません」

「流石にそれはちよつと同じ女として嫌だけど……。」

手段を選ぶな、とは言わないけど、相手の心に迫るなら間合いの取り方も重要よ」

「なるほど、剣術と同じですね」

「うーん、それはちよつと違うような……。」

まあいいか、とアンズ様は苦笑した。

あの光景を見た後で手段を選ぼうと考えられないだろう。

「ここからが本番よ、頑張つてね」

俺はアンズ様に頷くと、過去へと意識が遡っていくのを感じた。

「チユートリアルは終了、と」

女神は掌で弄んでいた六面ダイスを指で弾いた。

例によって天秤に落下したダイスは、皿の中をぐるぐるとせわしなく転がりまわる。

二と三の目が黒く塗りつぶされ、そこだけが接地しないためだ。

やがて、六面ダイスは動きを止める。

出た目は、六だった。

## 六の目

思うに、俺は考えが甘かったのだと思う。

最終的にあの場に居合わせれば惨劇を止められるかもしれない？

馬鹿が、そもそもあそこに居なかった自分が、どうして止められようか。

俺は考える。

もしかしたら、前回の魔王討伐の成功は、『ズル』に相当するのでは？と。

いかに正当な手順を踏もうとも、初手から王手を打とうともそれが褒められる勝利ではないからだ。

勝負は過程にこそ価値があり、結果の勝敗は確かに意味はあるだろうが、それは相対的なものでしかないのだ。

仮に俺が姫様以上に強くなり、単身魔王に挑みこれを討ち果たしたとして、女神が現われこう言うのだろうか。

「残念ですが、この先の未来はありません。ノーフューチャー!!」

そう、世界が救われるのは結果でしかない。

彼女は言っていたではないか、理由を知るために過去へ戻っている、と。

では、手を変えなければならぬだろう。

俺は自由に動かせる金を数え、行動に移した。

「父上、風の噂できいたのですが、バルハルト卿が養女を迎えたとか」

夕食の席でこのことを口にしたのは、俺が14を迎えた頃だった。

「なぜお前がそのことを知っている？」

父上はワイングラスを回しながら、表情を変えずに言った。

「父上の怠っている（？）近所への挨拶回りをしていれば、自ずと聞こえる話ですよ」

「……うむ、それは耳が痛いな」



俺達の住む屋敷は王都でも貴族街に位置している。

時間と金を持って余したご婦人がたの話し相手をすれば、その程度の噂話は余裕で手に入る。

ただでさえ、バルハルト卿は結婚もしていないので婿養子としては有望株なのだ。

多くの名家が彼を一代で終わらすことを惜しんでいる。

そして俺は、更に正確な時期を求めた。

バルハルト卿の屋敷の周辺を根城にするゴミ漁りや靴磨き、ドブ浚いなどに小金を握らせ、イリーナ殿が出入りするようになる時期を把握したのだ。

この辺の手管は今ではもう懐かしい冒険者時代にとった杵柄である。

その結果、ごく最近、ちょうど俺が14歳になった頃に彼女はバルハルト卿の屋敷に出入りするようになったことが分かった。

「奴が養子を貰ったことは、私も少なからず驚いているよ」

その様子から、父上も耳にはしていたのだろう。

「時期からして、騎士団に入れる為に引取ったのだろう。」

余程有望なのかそこまでは分からないが、少なくとも騎士神に憧れた夢見がちの類ではないだろう」

「なるほど。では今から手合わせが楽しみですね。」

可能なら、いずれ姫様とも剣を交えたいものです」

「ははは、こやつめ」

「本気ですよ。私は姫様のようになりたいので」

俺が本気でそう言っているのが分かると、父上はこう言った。

「そうだな。お前も姫様のような人望を得られるのならこの上ないことだ」

選抜試合当日、俺は時間があれば城の方を見て、姫様の姿を探していた。

もしかしたら、こちらを見てくださるかもしれない。

「選考試合の最終戦を始める!!」

アラン・クリファ、そしてイリーナ・バルハルト。前に出よ」  
俺の淡い期待は露へと消えたのだ。

俺はイリーナ殿と向き合い、お互いに礼をする。

「バルハルト卿のご息女と手合わせ願えるとは光栄です。

かの御仁の勇名は父からかねがね窺っています」

もはや定型句とかした挨拶を述べ、次の文言を構えていると。

「ギルバード様にご息子が居るとは知りませんでした」

「……え？」

俺は意表を突かれた。まさか彼女が言葉を返してくるとは。

これも彼女の副官にして欲しいと頼んだ『女神のお陰か』。

故に彼女の興味を引くことが出来たのだろう。

「言葉は剣にて語りましょう。審判が睨んでおられる」

「そうですね」

そうして、俺とイリーナ殿の試合は始まった。

「(……む?)」

俺は強烈な違和感に襲われる。

俺とイリーナ殿の試合は既に60合を超えて剣を交えている。

少々長引いた前回ですら、その半分で終わっていた。

俺は時間が戻るたびに経験や技術はともかく、肉体は子供の頃まで戻る。

その度に鍛えなおしているが、今回は前回や前々回ほど鍛えられなかった。

だが俺は、赤鷲騎士団の中隊長クラスの実力のまま、過去に戻っているのだ。

この時点でのイリーナ殿には荷が重いが、俺が弱かった初回はともかく、彼女は実力に加えて類まれなるセンスと幸運で俺を打ち破った。

だが今回の彼女は、過去二回とのいずれと比較しても、『弱かった』のだ。

まるで、過去二回の彼女から何かが抜け落ちたかのように。

「負けぬ。私は負けぬぞお!!」

それでも勝負が成立しているのは、イリーナ殿の恐るべき執念だった。

彼女の鬼気迫る気迫は、これまでには無かったものだった。

何だ。

何が違う。

俺は何を見落とした。

お互いに80合を超えて、疲労もピークに達したときだった。

俺は、女神の溜め息を聞いた気がした。

からん、からん

「え……?」

俺は、負けていた。

俺は地面に尻餅をつき、イリーナ殿に切っ先を突きつけられていた。

お互いに息も絶え絶えになり、肩で息していた。

「勝者、イリーナ・バルハルト!!」

審判がそう宣言した。

「いい試合だった。

一歩間違えれば、どちらが勝つか分からなかった」

そう言つて、イリーナ殿は兜を外すのも忘れて俺に手を貸してくれた。

「……ええ」

俺は頷き返したが、そうは思わなかった。

そう、『この選抜試合、彼女が優勝で決まっているのだ』

俺が多少の幸運程度で彼女を勝たせることが出来ないと判断されたのか、女神が直接介入して終わらせたに違いなかった。

俺が勝ってしまうと、致命的な食い違いが起こってしまうのだろう。

そのこと自体には、不満は無かった。

だけど俺は、釈然としない気分で赤鷲騎士団へと配属された。

俺達は別々の部隊に配属されたが、イリーナ殿が頭角を現すのはすぐなので、俺が副官に抜擢されるのはそう掛からないだろう。

だが俺はそれではダメだと思つて、機会を窺つては彼女に近づくとにした。

「おや、イリーナ殿。奇遇ですな」

俺は王城内に設置されている合同教会へと来ていた。

教会の内部は無数の神像が並んでおり、それぞれの信仰する神々への祈りを捧げることができる。

「……」

俺は彼女に話しかけると、イリーナ殿は祈りの姿勢のまま横目で俺を睨んできた。

祈りの邪魔をされたことを怒っているのだろうか。

俺は両掌を見せて悪かったと、示して数歩下がった。

やがて、祈りを終えた彼女が立ち上がった。

「意外ですな、てつきり貴方は光の神か騎士神を祭神とされているのかと」

俺は彼女の前にある報復の女神の神像だった。

彼女の業種からして、噛み合う恩恵を頂ける神ではなかった。

彼女はあの剣の冴えでありながら、専門は剣士ではなく仲間の盾となる重装戦士だった。

攻撃を受けた相手に対する痛みを増すといった加護を与える報復の女神とは相性はあまりよくない。

雑魚相手ならばそれでいいが、強敵相手だと盾職は守りに専念しな

ければ一瞬で部隊が瓦解するのである。

主祭神は変更時間が掛かる為、盾職には許されない“遊び”であった。

「無論、私の主祭神は騎士神だ。

だが私とて、誰かを憎みたいときだつてある」

そんな実益面ばかり見ていると、イリーナ殿は寂しげにそう言った。

「対抗神というわけではないのですね」

この世界の信仰の制度として、人間は二種類の神を信仰できる。

主祭神は言わずもがな、その人物の信仰する神のことだ。

人間なら九割近くが何かしらの神を祭神に据えている。

対抗神とは、ここ数百年で出来た比較的新しい信仰の形なのだ。

欲深な人間の浅知恵とも言える。

人間は神々からもつと加護を得るべく、畏れの力を加護として得る方法を発明した。

それが対抗神であり、主に自分が恐れる神を据える。

例えば火が怖いのなら火の神を対抗神に据えて、耐火の加護を得るのである。

無論、主祭神のそれとは微々たる物でしかないのだが、主祭神との組み合わせによっては意外な効果を齎したりもする。

例えば、騎士神と魔術神は仲が悪く、この組み合わせだと対抗神にした方が対抗意識を燃やして加護が効力を増すのである。

なので、この二柱は鉄板の組み合わせなのだ。  
「私に魔法技能は無いからな。

対抗神は当然、魔術神だ」

当たり前だと言わんばかりにイリーナ殿は言った。

魔法への対抗力を高めるのには魔法使いでもなければ難しいので、騎士神を祭神にする者は魔術神を対抗神に据えるのが有効だとされている。

彼女の隙のなさは信仰にまで現われているようだった。

「貴殿はどうなのだ？」

イリーナ殿は俺を見た。

俺はこの大陸でも少数派の無神者だった。

冒険者生活ですれてしまった俺には、神という不確かな存在を信じられなかったのだ。

だが、それも過去の話だ。

「私は天秤の女神を主祭神とし、天秤の女神を対抗神としています」  
主祭神と対抗神は同じでも良いのだ。

本来、対抗神は建前はともかく、畏れに対する自らの試練として位置づけるように作られたのでそういうことも可能なのだ。

そして、俺の信仰するアンズ様は俺に試練を与える存在でもあるからだ。

「天秤の女神か。聞いたことはないが、がめつそうな女神だ」

「ええ、だから私の部隊は光の神の信者ばかりで肩身が狭いのですよ」

イリーナ殿はきつと両替商の秤を思い浮かべたのだろう。

天秤に細工されていそうという点では同意しよう。

「この大陸におわす神々は数十ではきかないからな。」

マイナーすぎると変な目で見られるのは仕方がない」

そう言つて彼女は苦笑した。

最悪、実在しないと思われたのかもしれない。

その点、光の神は最大手の神だ。

人間から格上げされた神は逸話こそあれど、教えなどは残さないことは多い。

光の神は神々の盟主とされており、人々を導いたと教典には書いてあるらしい。

そして何より、分かりやすい恩恵がある。

『光の神の信者は、アンデッドにならないのだ』。

彼らは死ぬと光の神の下へと導かれて召されるから、らしい。

アンデッドの処理はどの国も頭を悩ませる問題だ。

国として光の神の信仰を推奨する所もある。

「それでは、私はそろそろ失礼する」

取り留めのない世間話を終えると、イリーナ殿は去って行った。

俺も適当な神像の前で祈ろうかと考えていると、あるところを見てギョツとした。

頭まで深々とローブを被った魔術神の横に並ぶように、天秤を持ったアンズ様の神像が置かれていたからだ。

彼女の自己主張の強さに若干呆れながらも、俺は彼女に祈りを捧げるのだった。

程なくして、魔物たちの動きが活性化しだした。

問題なくイリーナ殿の副官に抜擢された俺は、北部へ向けて行軍の準備を行っていた。

「アラン、こちらの準備は終わったぞ」

「こちらもです」

俺ともう一人の中年の下仕官と一緒に出立の準備を終えると、あとはイリーナ殿の到着を待つばかりなのだが。

「遅いですね、どうしたのですかね」

「分らん、が……城内が騒がしいようだな」

城門前で待機している我々から見ると、城の方が騒がしいのが良く分かる。

武官も文官も問わずに走り回っているのだ。

部下達もその様子に困惑の色を浮かべる。

俺達もどうすればいいか分からずに行っていると、イリーナ殿が城内からやってきた。

「小隊長、出立の準備は完了しております!!」

「……中止だ」

「……は?」

「中止だと言った!!」

困惑する下仕官に、イリーナは怒鳴り散らすように言い放った。

「一体どういうことなのですか？

城内の方も騒がしいようですし……」

「それについては緘口令が敷かれている。

私も事態を把握できないが、どうやら情報が錯綜している。この状況での出立は出来ない!!」

イリーナ殿は、軍務の邪魔をされたからか俺達が見たことがないほど苛立っていた。

「総員、待機を命じる!!」

指示があるまで自室に待機せよ!!」

それだけ言うと、イリーナ殿は踵を返して去って言った。

「どういうことだ……」

俺の呟きは、ここに居る全員の胸中を代弁していた。

だが、俺の場合はそれだけではない。

過去二回、こんな騒ぎは経験したことがなかった。

そう、今回の逆行は今までと違う。

凡その筋書きはあっているが、細かい所が違いすぎるのだ。

結局、俺達の出立は二日も遅れることとなった。

「おい、姫様が刺客に襲われたって本当か？」

「俺はかどわかされたってきいたぜ」

「姫様に限ってそれは無いだろ」

部下達は行軍の最中、そんな噂話を口にしていた。

「私語は慎め」

俺が注意するが皆は、だって納得できないだろう、という表情をしていた。

その通りだった、なぜならあの時、自分達も怪しまれたからこそ自室待機なんて命令が出たのだ。

「無駄口を叩くな、遅れた分は我々で取り戻すのだ」

イリーナ殿にまで叱咤され、部下達は首を縮こめます。

「とは言え、無理しても仕方ありません。

今日は次の村で休み、国境へと参りましょう」



「そうだな」

同僚の下仕官の言葉に、イリーナ殿は頷く。

「大変です、隊長!!!」

「どうした!!」

すると、先行していたスカウト技能持ちの部下が馬を走らせ戻ってきた。

「目的地の村付近で、魔物の軍勢を確認!!」

進路からして、村を襲うのは明確です!？」

「なんだと!？」

その報告に、皆の表情が真っ青になった。

「急ぐぞ!!」

とは言え、この部隊は歩兵ばかりで、馬に乗っているのは斥候と俺と下仕官、イリーナ殿くらいだ。

目的の村への到着は、四半日を要した。

残念ながら、手遅れだった。

「許さない……」

憤怒の表情の、イリーナ殿が呟く。

目の前には悲鳴と火を放たれた村、そして人々を蹂躪する魔物たち。

「皆殺しだ、この世の魔物は一匹残らず根絶やしにしてくれる!!」

激怒するイリーナ殿に続くように、俺達は村へと突入した。

全てが終わった後、残ったのは焼け跡だけだった。

「確認作業を終えました。

住人の殆どは逃げる間もなく襲われた模様。

そして、逃げ切れた者は皆無……全滅です」

全ての死体を確認できたわけではない。

だが、被害状況から言って、生存者は皆無の可能性が濃厚だった。

「くそッ、くそッ、くそッ!!」

もつと早く、もつと早く出立できていれば!!」

イリーナ殿は何度も焼け落ちた壁を殴りつけた。

「お止めください!」

気持ちは皆も同じです!!」

「うるさい、放せ、放せ!!」

怒りの余り錯乱しているイリーナ殿を羽交い絞めにして、何とか彼女の自傷を止める。

涙を流し悲しんでいるのは部下達も同じだった。

こんな時だからこそ、毅然とした態度を取ってほしかった。

「……ふう、ふうう……夜営の準備をしろ!!」

イリーナ殿はそれだけ言うと、表向きは平静さを取り戻した。

夜営の準備を終え、焼けた村を歩き回りイリーナ殿の姿を探す。

彼女はすぐに見つかった。

玩具みたいな木刀と盾を持って死んでいる小さな女の子を抱きしめていた。

「騎士神は貴殿を賞賛するだろう」

誰もが無謀だと言うだろうその少女の健闘を、彼女は称えていた。

「……情けない所を見せたな」

「いえ、初任務でこの有様なら当然でしょう」

俺に気づいたイリーナ殿にそう言った直後、俺は闇夜に光る目を見つけた。

「危ない!!」

俺はイリーナ殿を押しつけた。

その直後、無数の矢が俺に向かって降り注ぐ。

「アラン!」

「敵襲……です、どうか……みんなへ……」

彼女を庇い、その身に無数の矢を浴びた俺は熱を失っていくのを感じながら、イリーナ殿に伝えられることを伝えた。

完全に油断していた。

夜襲は魔物ばかりの魔王軍の十八番だというのに。  
同じ手で何度も部下を失ったというのに。  
俺は自嘲しながら、息絶えた。

「この世界の宗教というのは面白いですね」

俺は目覚めると、あの場所へと戻ってきていた。

「信仰する神は教えではなく生き様で選び、憧憬と尊敬を持って敬い奉る。」

少々ファツションじみているところは気に入りませんが、これも文化の違いという奴ですか」

アンズ様はどうやらご機嫌のようだった。

「私の試練を受け入れ、そしてそれに立ち向かう為に私を選ぶ。」

ふむふむ、そう言えば私ってちゃんとした信者とか居ませんでしたね。

我が師は崇められることを嫌悪しましたが、これはこれで悪くない」

「貴方はやはり人間神でしたか」

「こんな俗っぽい自然神は居ないでしょう？」

天秤の女神はこころごとく笑った。

「我々にとって、神に自身の名を教わることは最高の名誉なのです。」

太古から、神々は己の名を地上に残さなかった。人々の争いの原因になるからと」

「ええ、そうですね。私のところはそれで血みどろでしたよ。」

私自身もそれなりに苦労しました」

俺には宗教で血みどろの争いなんて想像できずに馬鹿馬鹿しい思いただが、アンズ様は万感のこもった溜め息を吐いた。

「だから私の神は貴方なのです」

「やだ……この世界の連中ってばちよろすぎ……」  
アンズ様は両手で口を覆ってそんなことを嘯く。  
この方は神々の名を知ることが出来るのがどんな最高位の司祭にも許されないことだと分かっているのだ。

「それで、次はどうします？」

きを取り直して、アンズ様は俺に問う。

「イリーナ殿に勝ちたいです」

「それは、私の力で勝ちたいということですか？」

「いいえ、自分の力で正々堂々と戦い、勝ちたいのです」

「ふむ……」

アンズ様はひと房だけの緑色の髪を弄ると。

「いいでしょう。」

次の逆行で、貴方の勝負自体に介入はしません。

ですが、何も意味はありませんよ？」

「意味は有りますよ。父の剣が最強だと証明できる」

「……ぷくく」

アンズ様は可笑しそうに笑った。

「ええ、いいでしょう。頑張りなさい」

その言葉と共に、俺の意識は急速に沈んでいく。

「その可愛げに、私も報いましょう」

女神は六面ダイスを弾く。

からん、からん

大きく傾いた天秤の皿にそれが落ちると、異様なことに両方の皿は水平に保たれた。

出た目は、四だった。

## 四の目

俺は父上に引取られたその日から、最盛期の肉体に近づけるべく自身を鍛え上げる。

「何がお前をそこまで駆り立てるのか分からないが、徹底的に見てやれないのが残念だ」

父上は、今回はあまりうちに帰ってこない。

前回はそうではなかったので、恐らく俺が考える物とは別の理由があるのだろう。

「父上、ひとつお聞きしたいのです」

14歳を迎えた頃のある日、俺は溜らずにきいてしまった。

「どうした」

「何ゆえ父上は俺を引取ったのですか？」

俺はある程度納得がいくくらいに自分を鍛え上げ、父上に挑んだ。全く歯が立たなかった。

幾ら父上とは言え、俺の成長スピードは異常に見えるはずだ。

それなのに父上は何も言わない。

何もいわず、俺を鍛えてくれたのだ。

今までも。

「私が剣神を信仰しているのは知っているな」

「はい」

「私はずっと御方を信仰していた。

だがある日、全く見たことのない女神が我が枕元へ立っていた。今でも夢ではないかと思うのだが、その翌日にお前に出会った。

一目で直感したとも。お前は、姫様と似ていると」

その言葉は、俺に少なくとも驚愕を与えた。

「俺が、姫様と？」

「無論、才能は天と地の差だ。」

彼女が三日で習得できる奥義をお前はひと月かかるだろう。

だがどこかで私はお前を姫様と重ねて見えたのだ」

父上はどこか遠い何かを見るように、月を見上げた。

「そして、それは正解だった。

今のお前なら、我が秘奥すらも会得できよう」

「それは、まさか……」

俺はごくりと喉を鳴らした。

ギルバード・クリファを彼足らしめる技能（スキル）が存在する。

ある特定の個人のみが有するスキルは、その人物に一定の期間師事した場合にのみ伝承される。

父上はその極まったスキルのみで、周辺諸国を震え上がらせた。

一軍にも匹敵するその奥義は、姫様にのみ伝承されたと知り、過去の俺は悔し涙を流したことさえある。

「ああ、お前にも伝授しよう。

俺が夢見の最中に劍神から授かった、最強の奥義を」

それは、何の比喩も無く最強のスキルだった。

半年近い血反吐を吐くような特訓の末、その力を会得したその日、俺は本当の父上の息子に成れたのだ。

選抜試合の最終戦の前に、俺は精神統一をしていた。

感覚を研ぎ澄ませることのみ集中させる。

「おい、あれ、姫様じゃないか？」

「何だって、ホントだ、こっち見てないか？」

俺の集中はあっけなく途切れた。

俺は即座に城の方を見やる。

数百メートルの距離を挟み、俺と姫様の視線が交錯した。

そして、姫様はカーテンを閉めてくるりと踵を返した。

「選考試合の最終戦を始める!!」

アラン・クリファ、そしてイリーナ・バルハルト。前に出よ」

俺は高鳴る鼓動を抑えて、場内へと入って行った。

「バルハルト卿のご息女と手合わせ願えるとは光栄です。

かの御仁の勇名は父からかねがね窺っています」

定型句に等しいその言葉を述べた。

「ええ、良い試合にいたしましたよう」

イリーナ殿はこれまでとまた違った反応を示した。

彼女の反応の違いが分からない。

父上とバルハルト卿は友人同士であるし、父上から彼女に俺の話が伝わっていても可笑しくは無い。

父上だって彼女のことを耳にはしていたのだから、可能性は無くは無い。

だが、これまでの試合のレベルから、彼女は俺にも勝てるだろうと踏んでいるのは気に入らなかった。

お互いに剣を構える。

「はじ——」

審判が試合開始を宣言する直前に、俺は「無手」と「無足」を使用した。

カ、キン!!

その直後、イリーナ殿の剣が上空に待った。

からん、かん、からん、と彼女の剣が落ちてくるまで、イリーナ殿は何が起こったかわからないと言った表情だった。

「アラン・クリファ!! フライイングだ!!」

「失礼、勇んだ余力み過ぎました」

俺は審判に慇懃に一礼した。

「失礼しました、イリーナ殿」

「いや、お陰で目が覚めた。

自分でも愚かしいことに慢心していたようだ」

イリーナ殿は剣を拾い直すと、——顔つきが変わった。

今のは彼女の強さを知る俺なりの誠意だった。

こちらは彼女の能力を知っているが、彼女はそうではない。これで、心置きなく戦うことが出来る。

「それでは、改めて……始め!!」

審判が試合開始を宣言する。

「はあ!!」

俺は今までの人生で会得したスキルの殆どを開放する。

常時技能 // 速剣の極意” // 一手より十手” // 一刀にして二刀流”

戦時技能 // 剣閃豪雨” // 斬撃牢獄” // 剣神の手”

縦横無尽の連撃をイリーナ殿に繰り出す。

相手の反撃を許さぬ徹底的な攻撃の嵐。

一撃よりも手数で相手を完全に封殺し、何もさせずに削り殺す。

試合とは言え、俺は殺す気で彼女に挑んでいた。

でなければ、逆に彼女に失礼だろう。

「良い風だ。もっと扇いでくれ」

だが、イリーナ殿は涼しい顔で俺の連撃を受け流し、耐え切った。無論、この程度で彼女の守りを突破できるとは思わなかった。

彼女の副官をしていた前回、あの部隊で盾職は彼女一人だった。

つまり、敵軍から彼女一人で十数人の人間を守っていたことになる。

質より数？

—— 笑止!! 真なる質は有象無象を容易く凌駕する。

千の軍勢より一人の英雄は同格なのだ。

今の連撃でゴブリンを千匹殺せようと、彼女は殺せない。

『それが、この世の真理なのだ。』

彼女の防御は鉄壁だ。

俺の知る限りでも、彼女の技能<sup>スキル</sup>

常時技能 // 守護領域” // 右手は盾、左手は逆手” // 護国の鬼” // 無

抵抗にして完全抵抗” // ツルギは盾に” // 防御の鉄人” // 騎士は敵

に背を向けず”

戦時技能 // 城砦突撃” // 不動堅固” // 絶対防御”



等など、頭の可笑しいくらい守りに特化している。

彼女を倒すには四方八方から囲んで魔法を浴びせる他無いだろう。

この鉄壁の城砦を前にすれば、確かに俺の連撃など扇で煽るようなものだ。

これで成長の余地を残しているのだから笑えない。

彼女の唯一の欠点は攻め手に欠けることだが、これは試合だ。

技のリソースが尽き、疲れ果てた俺をぶん殴ればそれで終わりだ。

なので、俺はメタを張らせて貰った。

「むっ!!」

イリーナ殿が違和感に気づいたようだった。

「さあ、どうしますかあ!!」

俺は戦時技能「削れる一撃」を使用し、彼女の装甲を剥がしに掛かったのだ。

一撃ごとに鎧や盾、防具の類の表面が抉られていく。

武器や防具が破損すれば使えない技能は多いのだ。

彼女の技能構成からして、防具が無ければその防御力は四分の一程度に落ちる。

こんな全身鋼鉄みたいな人間でも不意打ちの攻撃であっさり死ぬから、戦場とは恐ろしいのだ。

「ふん!!」

だが、ただでは終わらないのが彼女だった。

俺の技能の継ぎ目を狙い、「城砦突撃」を試みた。

分かりやすく言えば、防御力依存の攻撃技だ。

盾を前面に押し出し、強烈な体当たりで俺はすっ飛ばされた。

俺は以前彼女の剣をトロールの一撃と表現したが訂正しよう。

彼女の馬鹿力はサイクロプス並だ!!

勢いよく破城槌でも喰らったかのように俺はぶっ飛ばされた俺は痛みを堪えながら起き上がる。

対してイリーナ殿は余裕そうに歩いてこちらに向かってくる。

さっきので俺に回避技能が無いことが分かったのだろう。

悔しいがその通りだった、俺の剣はやられる前にやれ、が基本だからだ。

小細工は通じない。分かっていたことだ。  
ならば、俺が出来ることは一つだけだった。

「随分余裕そうですが、忘れていらっしやる。私が、誰の息子かを」

「———っ」

「覚悟!!」

俺は戦時技能「劍聖」と「無手無足無影」を発動させた。

父上が誇る最強の固有技能「劍聖」は、直後に使用する戦時技能での攻撃を防御力無視で繰り出し、範囲攻撃化させる剣術の究極奥義だ。

そして「無手」「無足」「無影」の一連を一度に行うこの奥義は、腕の初動を分からせず、足の入りを悟らせず、影すら追いつかぬ速度で攻撃する必殺剣。

「はあああああっ!!!」

俺はその時出来る最高の一撃を全身全霊で放った。

イリーナ殿の判断は咄嗟ながら、唯一にして最善だった。

即ち、「城砦突撃」だった。

技の出は俺の方が早かった。

だが、ほぼ同時に俺は彼女にぶっ飛ばされ、会場の壁に激突した。

俺はその衝撃で数秒ほど気絶。

俺の奥義はイリーナ殿を切り裂き、俺が叩き付けられた壁の反対側を真っ二つにした。

「……アラン・クリファ、場外!!」

勝者、イリーナ・バルハルト!!」

審判は暫く呆けていたが、場外に出た俺を反則負けとした。

そう、この選抜試合は一定の範囲内で戦うことをルールとして明記されている。

結果は変わらなかった。

女神は無意味だと言った。

それでも、全力は出せた。

「私の勝利だと……馬鹿な、実戦ならば私が……っ!?」

そこまで言つて、イリーナ殿は自分の状態を悟った。

「当然ながらあの奥義、殺傷能力は抜群である。」

それでは盾職などの前衛にも危険が及ぶ為、技能「劍聖」は斬る物を選ぶ。

つまり、イリーナ殿は無傷だった。

……イリーナ殿は。

ただ、鎧から兜まで、意味を成さなくなった防具や衣服が彼女の体から崩れ落ちただけだった。

「い、いやああああああああああ!!!」

今まで誰も聞いたことの無いだろう彼女の悲鳴が、会場に響いた。

少々のトラブルはあったが、俺は無事に赤鷲騎士団へと配属された。

俺が見せた強さは不思議なほど周囲へと知れ渡らなかった。

さすが伯爵の息子だ、と言われる程度である。

「これでよかったのでしょうか」

俺は合同教会にあるアンズ様の神像にそう語りかけた。

自分で希望したこととは言え、少々やりすぎたかもしれない。

「いいえ、全然、全く問題ありません」

アンズ様の神像は、まるで当人のように動いてそう言った。

「ですが、父上の『劍聖』は個人の範疇に納まるスキルではありません。ん。

これをもっている人間が、居ても居なくても同じと言うのは無理があるのでは?」

「どこがですか? 所詮個人の技能ではないですか。」

貴方の父上はなぜこの先亡くなるのか、分からないほど馬鹿じゃないでしょうか？」

「それは……」

「それ、に……貴方には酷な言葉かもしれませんが、私みたいな神の視点からすれば英雄なんて幾らでも替えがきくのです。

不可能を可能にするわけではない以上、大局に影響はしないのですよ。

例え貴方がこれから、その力で魔物を何万と斬り捨てても、ね」

俺はアンズ様の言葉に、二の句が継げなかった。

そう、父上のスキルは確かに最強だ。

だが代替できないわけではない。

所詮、剣を振るうだけなのだから。

それで波を押し返せても、海はすぐに元通りになる。

そう言うことなのだろう。俺も、父上も、波にもまれる砂粒に過ぎ

ないのだから。

「ならば、なぜあの四人なのですか？

英雄など替えが幾らでもきくなら、なぜあの四人でなければならぬのですか？」

「それこそ、問うだけ無意味な質問ですよ。

この世で最も残酷な答えを言いますか？ 私の口から、神の口から言いますか？」

「言いますか？ 真理を。人間という存在そのものを」

「……………」

「ほうら、あなた自身が一番よく分かってる。

何も特別ではない貴方がそうしている理由こそ、それなのですから」

アンズ様はそう言って、ただの神像へと戻ってしまった。

俺は暫くその場で蹲るほかなかった。

人間には受け止め切れない事実だからだ。

「祈りの最中に居眠りか？」

ふと、後ろから声を掛けられた。

「イリーナ殿。奇遇ですね」

イリーナ殿は答えずに、騎士神の神像の前にて祈りを捧げ始めた。

「……イリーナ殿は何ゆえに、騎士を志したのですか」

横目で、彼女は俺を睨む。

「私は、分からなくなりました。

私が幼い頃、憧れだけで騎士になりたかった。

だがこうして成ってみると、現実との違いに押し潰されそうになるのです」

「弱音か、下らない」

彼女はにべもなく斬って捨てた。

その姿に、俺は前回の彼女とは違う何かを感じさせられた。

覚悟が、違ったように見えた。

「私も似たようなものだ。

騎士神の逸話に魅せられ、騎士を志した」

イリーナ殿はそう言って騎士神の神像を見上げる。

騎士の神だというのに、仰々しい鎧や兜は着ていない。

盾と剣を掲げる、どこにでもいる人間にしか見えない。

「なぜ騎士神の神像が、他の神々の神像より小さく作られているか分かるか。

誰よりも屈強で、背後の仲間を守らなければならない騎士の神であるはずなのに」

「騎士神は多くの伝承や書物で、She……つまり、彼女と表記されるからでしょう」

「そうだ。騎士神は小柄な女性だったのだ」

その言葉を噛み締めるように、イリーナ殿は言った。

「これは彼女が魔物を前に勇気を震わせ、盾と剣を取った時の姿だとされる。

誰かを守るための勇気は誰にでもある、そういう場面なのだろう。

だが、それは所詮、綺麗事だ」

俺の脳裏には、前回の彼女の姿が思い浮かんだ。

息絶えた少女を抱きしめ、涙を流す彼女を。

「逃げずに敵に立ち向かう。なるほど、確かにそれは雄々しく、勇ましい行為だろう。」

だが、それは力無き者のすることではない。

なぜ大人に頼らない。なぜ恐れを為して逃げない。それは勇気ではないのか？

蛮勇こそ誇られるべき行いの筈だ。無様に生き残り、何が悪いのだ。

弱者が他人を見捨てて逃げることが、そんなに浅ましいのか？」

彼女の言葉の端々に後悔と、そして憎悪が見え隠れしていた。

「私は、人々にそんな事をさせない為に、騎士になったのだ」

「もしそれが、何の意味もなかったら？」

我々人間が、神々の気まぐれや運命に揉まれる川面の枝葉に過ぎなかったとしたら」

……それは、彼女にとって余りにも、そう……余りにも残酷な言葉になるとは思わず、俺はずっと後に後悔することになる。

「それで貴様は諦めるのか？」

立ち止まるのか？ 膝を折るのか？ かの英雄の息子とあろう者が。

見下げ果てたぞ軟弱者め。そんな輩に、よくもまあ痴態を晒させられたものだ」

「あれは……不可抗力で……」

「分かっている、思い出させるな!!」

顔を赤らめて若干声を荒げて言うイリーナ殿が可笑しくて、少し笑ってしまった。

「不愉快だ!!」

それを見た彼女はぶんすかと不機嫌になると、そのまま教会から出て行ってしまった。

俺は苦笑しながらその背中を見送った。

その後、俺はイリーナ殿の副官になり、最前線への派遣命令が出た。今回は何事もなく、出立できた。

前回の姫様が浚われたり刺客に襲われた云々は一体何なんだったのだろうか。

俺はその噂の真偽を確かめるすべは無く、その事件そのものは今回起こっていない。

そして当然ながら、何事も無く中継地点だった前回襲われた村へと到着できた。

拍子抜けするくらいあっさり。

だがこの村が襲われることはハッキリしている為、俺は周囲の警戒を怠らないようにイリーナ殿に進言しにいった。

「イリーナ殿、聞いたところによりますと、敵勢は神出鬼没とのこと。ここも最前線に近いですから、交代で周囲に警戒した方が良いでしょう?」

「当然だ、今班割りを決めていた所なのだ」

それを聞いて、俺はホッと一安心した。

これで今日か明日あたりの襲撃は何とかなるだろう。

居ても居なくても変わらない俺と違い、彼女は状況を変えられるのだから。

無論、それはアンズ様がきけば失笑するだろう言葉だったのだが。

それは、夜になって少し経ってからだった。

「隊長殿!! 大変です、丘の向こうから火の手が!!」

「何だ?!」

突然飛び込んできた同僚の副官の報告に、イリーナ殿は目を見開く。

「確か、ここから丘の方へ馬で少しの距離に隣の村がありましたね」

困惑しているのは俺も同じだったが、冷静に地図を広げて、その場

所を指差す。

「イリーナ殿」

「隊長殿」

俺と同僚の副官は、彼女の指示を待った。

「む、無論、救援に向かうぞ!!」

予想外の事態に焦り、驚いているからか脂汗を流し、声も若干震えていた。

「では、部隊を召集致いたします」

「どれくらい掛かる?」

「ここはそう広い村ではないので、一時間もあれば」

「それでは間に合わん!!」

一時間でどれだけの民の命が失われると思う!!」

イリーナ殿はそう副官に怒鳴り返すが、俺はどこかで確信していた。

もう、手遅れだと。

「アラン、我々だけで隣村に向かう。私について来い」

「隊長殿?! 無茶です!!」

「お前はここで部隊を召集次第連れて来い!!」

感情的に成った彼女を止めることなどでできず、俺は彼女を追って宿舎の脇の馬小屋へと向かう。

「アラン、どうか愚かな私を許して欲しい」

「いいえ、貴方の為に死地に向かうのなら本望です」

「ば、馬鹿なことを言うな!!」

本心だったのだが、怒鳴られてしまった。

俺達は馬に跨り、隣村へと急いだ。

丘の向こうは地獄絵図だった。

「馬鹿な……トロールの群に、サイクロプスだと……」

俺はイリーナ殿と同じ思いだった。



隣村は炎に包まれ、トロールの群が蹂躪し、数体のサイクロプスマ  
で炎の揺らぎの奥に見える。

俺の思ったとおり、生存者は絶望的だった。

この二種は魔王軍との戦いが中盤以降に出てくる主力部隊だ。

ここに現われたということは、きつとそういうことなのだろう。

「なぜ、なぜなんだ……私は、誰かを守ることすら出来ないと言っ  
たか」

「確りしてください、イリーナ殿!!」

俺は呆然とするイリーナ殿を叱咤し、状況を見定める。

しかし、そんな暇もないようだった。

何体かのトロールがこちらに気付き、サイクロプスを伴ってこちら  
に向かってきた。

「イリーナ殿、ここは一旦戻ってください。」

サイクロプスの目から放たれる怪光線は魔法攻撃……ヒーラーが  
居ない状況では分が悪い」

そして魔王軍には必ず空中から戦場を監視する魔物が存在する。

馬とは言え、逃げ切るのは難しいだろう。

「だが、それでは……」

「俺がこの場を引き受けましょう。さあ、行くんだ!!」

俺がそう声を張り上げると、イリーナ殿の馬が何かに突き動かされ  
るかのように勝手に勝手に走り出した。

「——アラン!!」

「イリーナ殿。どうか御武運を」

彼女の姿が見えなくなるのを見届けると、俺は敵勢に向き直った。

「ここが、今回の死に場所か」

そう、理解した。

連中がその為に用意されたのだということも。

その事実には、俺は不思議と唇が釣りあがった。

「なるほど、父上はこのように殺されたのか。

なんという粹なのだ、我が女神は」

この無数の化け物の群は、俺を終わらせるために遣わされた使者なのだ。

「ならばこそ、照覧あれ!!」

天秤の女神 ■■■■■よ!! 貴方は天秤の重さを量り間違えたと知れ!!

連中よりも、我が命は重いぞ!!」

地上では神の真名を唱えることも記すことも出来ない。だが己を鼓舞するには十分だった。

……

……

……

「ま、半分くらいは倒せましたね」

「……」

「断言しますが、彼女と協力すれば殲滅は可能でしたよ？」

無論、貴方には死んでもらいましたが」

俺はがっくりと肩を落としてうな垂れていた。

完全に自分の実力を見誤っていた。

「こんな風に毎回毎回死ぬのもあれなので、私がこれ以上無駄だと判断したらこっちで引き戻しますからね」

「わかり、ました……」

「こんな調子だから自分は半人前なのだ。」

「これで分かったでしょう？」

英雄なんて、所詮使い捨てに過ぎないって」

それを証明するように、俺は敵の軍勢に押しつぶされた。

「そしてわが師のように突き抜けてしまえば、逆に利用され続ける羽目になる。

英雄なんて物は自分で困難を進む狂人の一形態に過ぎないわけよ」

「私もその一人と言うわけですか……」

「自惚れるな、凡人が」

アンス様はとんがり帽子の内側を人差し指で回しながら、冷厳に言った。

「お前は父親の奥義を会得するまでどれだけ掛かった？

一度の人生を十年として、四回。実に四十年も掛けている。

お前の大好きなお姫様は三年でこれを会得した。

そんなお前が英雄だって？ 身の程を弁えなさいよ」

落ち込む俺を滅多打ちにするような言葉だった。

「だけど、正直あれを会得するのに四十年は標準的だと思うのよね。

お前の父親とお姫様が異常なのよ。

わかる？ 才能が突出すればするほど、当人は早死にするものなのよ。

貴方が死んだのは運命でも何でもなく、ただの実力不足に過ぎないわけよ。

だって、貴方はこの日まで生き残れなきや原因も探れないでしょう？」

それは励ましにしては棘が鋭かった。

「では、なぜ私の与り知らぬところで変わっていることが多いのですか？

正直なところ、魔王軍の強さすらも毎回違うように思えます」

「ふむ。確かにあまりにもフェアではない。

かと言って、『核心に等しいことを教えられない』。試練の意味が無いからね」

「核心、核心と仰いましたか!!」

「おやおや、十分すぎるヒントになりましたかね？

じゃあもうひとつだけ」

アンス様はニヤリと笑ってこう言った。

『イリーナ・バルハルトの真の目的は復讐である』

「ッ!？」

「何を驚いているのです？」

貴方もすでに分かっていたことでしょうか？

そして、ここからが大事なのですが。ぷくく」

アンズ様は心底可笑しそうに、愚かしそうに言った。

「じゃあ、誰に復讐したいんでしょうね」

「それは……」

魔物どもではないのか？

彼女の怒りは、常に連中に向けられていた。

だが俺は視線を下に向ける。

無残に横たわる死体が四つあった。

「さあ、そろそろ全体像が見えてきたところよね。

まだまだ一人目の試練なんだから、もっと私を楽しませて頂戴」

「では、彼女の復讐の対象を探る機会を頂きたい」

「ええ、どうぞどうぞ。」

次回貴方は自分が今どんなに馬鹿馬鹿しいことを頼んだのか知るでしょう」

「それはどういう——」

有無を言わさず、俺はいつもの感覚で過去へと遡って行った。

「さて、と」

女神の指の上の六面ダイスが弾かれる。

かん、とダイスは弾かれること無く天秤の皿の上、五の目で止まった。

「あーあ、ついにこの目が出ちゃったかあ。

あの子、多分すごく困惑するだろうなッー！」

女神はけたけたと可笑しそうに笑ってた。

## 五の目

逆行し10歳になった俺は、父上の許可を得て冒険者に混じるようになった。

俺は伯爵の息子である身分を隠し、平民と同じように様々な依頼をこなした。

冒険者と言う職業は一般的に最底辺の存在として扱われる。

町の人間からすれば煙たがられるような存在ではあるが、需要は決して減らなかった。

彼らは確実とは言えなくとも依頼をすれば、大抵のことは引き受けてくれるし、ある程度の融通もきくからだ。

毎日のように誰かが死に、毎日のように補充される。

その門は自己責任さえ果たせば、ものすごく広く開かれている。

世間一般でいう冒険者とは、彼らのことではない。

実績と実力を積み重ね、信用を得た存在こそ冒険者であると依頼主に歓迎される。

それ以外は遺跡荒しの無頼漢、都市周辺の魔物を狩る掃除屋。そんなところだ。

自分もかつてはそれらであった。

冒険者と言う職業は夢はある。ロマンもある。

ただ、それが掴めるのは当然のように成功した一握りのみであると言っただけのことなのだ。

自分は彼らに混じり、騎士志望だと周囲に吹聴しながら実績を重ねた。

そうした得た報酬の殆どをつぎ込み、そして二年を掛けて見つけた。

イリーナ殿の出身地を。

俺は衝撃を受けた。

彼女の故郷は、あの時、三度目の逆行で初任務で訪れ焼かれた村

だったのだ。

依頼を終え、即席のパーティに用事があるからと一足早く抜け、彼女の姿を探し後を追った。

イリーナ殿は何の変哲もない宿屋の娘だった。

即席の仲間達は今日はそこに泊まるらしいが、自分は今彼女に顔を合わせるわけにはいかなかった。

冒険者ギルドの支部にも格安の雑魚寝だが宿泊施設ぐらいいはあり、そこで夜を明かし彼女について調べることにした。

そこで丸一日観察した結果、俺は更なる衝撃を受けた。

あの時、イリーナ殿が抱いていた骸の少女が、何度も彼女の宿屋に出入りしていることに気づいたからだ。

あの年頃の丁稚は珍しくはない。俺は嫌な予感がした。

「おい、お前ずつと宿屋の方見てるけど、あれか、気になるのか？」

先日パーティを組んだ冒険者仲間がにやにやとこちらに気づいて話し掛けて来た。

やはり物陰から観察していると傍目から見ると怪しいのだろう。

「ああ、一目惚れだ。顔を合わせるのも恥ずかしい」

「堅物のお前にもそんなところがあるとはなあ」

人間というのは信じたいことばかり信じる生き物なのか、俺がそう言っていると彼は何度も頷いてイヤらしい笑みを浮かべた。

「ところで一つ聞きたいんだが、あの女の子は何て言うんだ？」

「実に親しげだが、そこから会話の糸口を得たいと思う」

「なるほどな、いや、名前は知らねえけどよ？」

「どうにも姉妹らしいぞ。あんまり似てないが」

「やはり、か……」

それは最悪の予想が的中したことを意味した。

通りであるの二人は親しげなわけである。

そして、あのイリーナ殿が憎悪をこの上なく見せたのも納得がいく。

だが、そこで俺は疑問に思った。

彼女が報復の女神に祈りを捧げていたのは、この村が焼かれる前で

ある。

ということは、彼女の復讐の対象はこれから現われるということだ。

俺は一旦この村を離れて、資金繰りに専念した。

とにかく金が必要になると判断したからだ。

そうして王都周辺の魔物退治に精力的に活動していると、信じられない噂を耳にして俺は実家へと駆け込んだ。

「父上!!」

「どうしたアラン、血相を変えて。」

まさか冒険者や依頼主との間でトラブルにでもなったか?」

武具の手入れをしていた父上は心配そうに俺を迎えた。

「なにを……なさっているのですか?」

「見ての通りだ、武器は己の手足も同然。手入れは怠ってはいかんからな」

「そうではありません。父上は姫様の剣術指南役でしょう。」

まだ暫くは王城に詰めると仰っていたじゃないですか」

「ああ、それか」

父上は武器と布を置いて、溜め息を吐いた。

『解任されたよ、御役御免だ』」

それは到底信じられない言葉だった。

今までそんなこと、決してなかったからである。

「そんな馬鹿な。父上以上の適任など居ないはず……!!」

「確かにな。だが、剣術以外のところがお気に召さなかったらしい。」

従者に対する態度を改めるよう諫めたら、この通りだ」

絶句した。

俺は両目を見開き、口は魚のように無意味に開閉していることだろう。

「陛下から内々に謝罪まで頂いたよ。」

あんなに甘やかし、わがまま放題に育ててしまったのは自分の不徳が招いた結果だと」



「そんな、そんな!!」

私は姫様は高潔で才気溢れる御方だと聞き、ずっと憧れていたのですよ!!」

「ああ、幼い頃はそうであった。

彼女は私の誇りであったよ」

父上の目はもう取り戻せない過去を見る目だった。

俺は、この日から暫く何事も身に入らなかった。

修行は身に入らず、合同教会で祈りを捧げる日々だった。

なぜ、なぜなのか。なぜ姫様は父上を裏切ったのか。

その問いの答えを、アンズ様の神像は答えてくれるはずもなかった。

そのまま半年近く塞ぎ込んだ俺は、己のすべきことを思い出して冒険者生活に戻った。

皆が俺がやつれているのを見て、想い人に振られたと想ったらしく、散々からかわれた。

俺は言い返す気力もなかった。

俺はそれから暫くさり気なくイリーナ殿の様子を観察しつつ、その時を待った。

そして14歳のある日、イリーナ殿が養子に出されたのだ。

その時は村に人たちが大勢で彼女の門出を祝った。

その姿を遠くから確認し、少し日数を開けた後に俺は王都のギルドに内々に依頼を出した。

内容はこうだ。

さる人物の調査を依頼したい。

彼女はある時期からバルハルト卿の養女となり、その目的は騎士になることであろう。

自分はライバルとして彼女を危険視している為、その弱点を探りたい。

経歴などからどのような技能を持っているか探ってくれ、といった感じだ。

こんな下らない内容の依頼でも、冒険者というのは報酬があれば受けてくれる。

俺は信頼の出来るパーティを名指しし、半月掛けて徹底的に調べさせた。

そして、分かった。

『イリーナ殿に、復讐対象など存在しないことが』

明らかに矛盾していた。

イリーナ殿は今日まで親類を誰かに殺された訳でもなければ、親しい人間が特に不幸に見舞われたこともない。

アンズ様がこちらに嘘を吐く理由などない。

だが、彼女は言った。『イリーナ殿の真の目的は復讐にある』と。

そこで俺は気づいた。

この明らかかな矛盾を成立させない方法が、ひとつだけ存在していた。

しかし、それはつまり……。

「確かめるしかないか」

今回の行動方針が決まった。

……

……

……

選抜試合はもう既に語るべき所も見ろべき所もないので省略する。程ほどにイリーナ殿と戦い、そして負けたくらいだ。

話はそれから一週間後の叙任式の話になる。

この式典により、俺達は初めて騎士としての資格を得るのだ。

騎士になる度に毎回繰り返していることだが、面倒だなんて思った

ことはなかった。

それは参加者全員同じようで、誇らしさが顔に出ている。のだが、式典の開始は遅れに遅れていた。

こんなことは初めてだった。

「一体どうしたんだ……」

「なんでも、王族の到着が遅れているから、らしい」

「マジか、道理でいつまでたっても始まらないわけだ」

「でも遅れているって、王城はすぐそこだぜ？」

「ほら、あれだろ、参加予定の王族ってあのワガママ姫……」

「あッ……」

ぼそぼそと呟き合う同僚達は、その結論だけで大体の事情を把握してしまったようだ。

そう、毎回この式典に参加する王族は、レナスティ姫だった。

騎士の叙任は王族の仕事なので、彼女らが居なければ始められないのだ。

結局、叙任式の開始は遅れに遅れ、三時間は遅れたことだろう。このことに関しても、いい加減明らかにしなければならぬ。

騎士となれば、王城へと行く機会も度々ある。

例えば事務方に給料を貰いに行く時とか、報告書を届けに行くとか。

俺はそのあたりの雑務を積極的に引き受けて、王城に入る機会を増やしていった。

すると、何度目かの登城でその光景に出くわした。

どうやら、彼女の従者がなにやら失態をしたらしい。

「遅い、遅すぎる、この程度の雑務にどれだけ時間を掛けているのよッ!!」

その怒声に、俺だけでなく周囲の誰もがそちらに目を向けた。

いつもならもう既に戦場で頭角を現している姫様だったが、今回はなぜかそんなことはなかった為、そのお姿を見ることが出来るとは

思っていたが、その予想は見事的中していた。

あまり嬉しくない方向だったが。

その後も姫様は公衆の面前で従者を何度も怒鳴りつけていた。

俺は姫様に対するイメージがガラガラと崩れ去るのを感じていた。

戦場で遠くから見る彼女は、いつも凛々しく気高かったからだ。

それだけに悲しくて、悔しかった。

「お止めください!!」

気づけば、俺は従者と思わしい女騎士の前に出ていた。

「人前で無遠慮に誰かを罵るのが、高貴な人間の為さる事ですか!!」

俺のその行動に、手や足を止めていた周囲は度肝を抜かれたように目を見張っていた。

「貴方は誰ですか？」

不機嫌そうに、彼女は俺を睨んだ。

俺は躊躇うことなく名乗った。

「私はアラン・クリファ。」

父ギルバートのことは姫様もよくご存じでしょう」

俺が名乗り、姫様も面を喰らった様子だった。

「……わかりました、今回のことは彼に免じて許します」

彼女はそう言つて、くるりと踵を返した。

去り際の彼女の表情は、どこか負い目から来るようなものに見えたのは、俺の妄想でないと思いたい。

周囲も、また首が飛ぶのかとはらはらしていたようだが、ホッと胸を撫で下ろした。

「ありがとうございます」

俺に助けられた女騎士は、どこか複雑そうな表情で俺に礼を言うと言つて去って行った。

いかに過去に戻ろうとも、魔物の活性化ばかりは止められない。

俺はイリーナ殿の副官に任命され、同僚と初任務の準備に追われて

いた。

部隊の編成、行程の確認、食料の有無など等など。

さあ、あとは出発するだけだ!!

「中止だ!!」

意気揚々と初任務に燃えていた俺と部下達は冷や水をぶっ掛けられる思いだったことだろう。

「隊長、なぜですか?」

「下らなすぎて言う気にも成れん!!」

初任務の出立を邪魔されたからか、イリーナ殿は前以上に激怒していた。

「各自解散し、今日は休暇とする」

その言葉の端々に、憎憎しさを滲ませるイリーナ殿の姿に、俺だけでなく皆も寒気がしたに違いない。

俺は確信した。

彼女の表情は、獲物を見定めた復讐者のそれだったからだ。

結局、再出動の命令は掛からなかった。

彼女の故郷がどうなったか、想像もしたくもないし言うまでもないことだった。

俺達に再び任務が下るのは、それからひと月の後だった。

最前線で魔物と戦う部隊の為に慰問に向かう姫様の護衛という大抜擢だった。

誰もがその拝命に大喜びで今日は酒場で無礼講だったが、イリーナ殿一人だけは鉄面のごとき無表情だった。

「暢気なものだ。」

今この時ですら魔物の手によって人々は苦しんでいるというのに「そしてその両目は据わっていた。」

正気と狂気の狭間を行ったりきたりしているようで、俺は恐ろし

かった。

「イリーナ殿、すこし酔っているのではないのですか？」

少々疲れているようにも見えます」

「そうかもしれないな」

俺は彼女が心配になつてそう言ったが、彼女は今日一滴も酒を飲んでいなかった。

「これは酒の席での冗談だが……」

「はい」

「私は後悔しているよ。騎士になつたことを」

「なぜですか？」

「誰かを守りたいと言う気持ちに、立場など意味が無いと気づいたのさ」

イリーナ殿は手に持ったグラスの中で揺れる酒の波紋を食い入るように眺めていた。

「ですが、止める訳にはいかないのでしょうか？」

「そうだ。全て自分が決めたことだ」

彼女の語り口調は穏やかだったが、そこらの泥酔者などよりも余程危うげだった。

「そうだ。一度始めたことを、止められるはずがないんだ」

彼女は自分に語りかける。

「そうだ。諦めるなんて、出来やしないのだ」

一気に酒を煽る。そして何が可笑しいのか、彼女はけたけたと笑い始めた。

酒場の熱気から、切り離されたかのように彼女の周囲だけこの世界と切り離されているように、俺は思えた。

……

……

……

さて、姫様の護衛という大任を預かった我が隊だったが、浮かれていたのはあの日だけだった。

なにせ、この世界の姫様は悪名高いワガママ姫であり、事実俺達は使用人というか召使いのよういき使われることとなった。

やれ喉が渴いた水を持ってこい。

やれ熱いから扇げ。

やれ汗をかいたから湯浴みがしたい。

通常なら三日で終わる行程を十日掛かったといえ、俺達の苦労を理解してもらえらるだろう。

俺が諫めようとも、その度に仲間達から必死に止められた。

今は個人ではなく部隊として行動している為、連帯責任で何を言われるか分からないからだろう。

「……やってらんねえ」

ある日の夜営、寝ずの番を担当し同じ焚き火を囲っている同僚が漏らした。

「何がお姫様だ。無理難題好き放題言いやがってさ」

「不敬だぞ」

もう一人の同僚が諫める。

「不敬？ オーケー、それでこの召使い生活をやめられるのなら構わないね!!」

「やめろって」

愚痴る同僚に、哀願じみた声音でもう一人の同僚が言った。

「俺、騎士を辞めさせられたら、実家から勘当されちまう。」

姫様と問題起こしてみろ、俺の実家なんて跡形も無くなるだろう  
さ」

「……」

そこまで言われては、彼も黙らざるを得なかったのだろう。

だが、暫くして。

「俺、何のために騎士になったのかな……」

「女の子にもてたいって言ってなかったか？」

「いやそれも有るさ。」

実際、伝統ある赤鷲騎士団の団員だって言えばちやほやされるしな？

「だけどさ、改めて思うんだ」

彼は枝先に括りつけた干し肉を焼き火で炙りながら、少し恥ずかしそうに言った。

「俺達は女の子を守るために戦うんだろ？」

「女の子を戦わせない為にさ」

「うちの隊長は女だぞ」

「ありや例外だ。ガードが硬すぎる」

その物言いに、俺達は小さく笑った。

「俺は本気で突かれたことがあるが、ありやあサイクロプス並だったぞ」

「マジかよ……」

俺の言葉に二人はドン引きだった。

「まさか、突撃したのか？」

「ああ、本気で挑ませてもらった」

「度胸あるな、お前……」

お互いの微妙な認識の齟齬を楽しんでいると、同僚の一人が気づいた、

気づいてしまった。

「なあ、隊長といえは遅くないか？」

「ああ、なんだか姫様に御用があるとかで……」

その二人の言葉に、俺は猛烈な嫌な予感に襲われた。

俺はそのことを知らなかった。

寝ずの番は交代制だ。一人ずつ定時に交代して休んでいく。

俺は今さっき交代してきたばかりだった。

「一応、見てこないか？」

俺は神妙な表情でそう言った。



俺の鬼気迫る表情に、二人は押されるように頷いた。

「おい、おかしいぞ、護衛が居ない」

同僚の一人が、姫様の天幕を前にして言った。

「……おい、中から気配も息遣いも聞こえないぞ」

斥候技能を持つ同僚が戦慄した様子で俺達を見る。

「……責任は俺が取る。」

姫様、ここに居られますか!! 緊急時ゆえに御免!!」

俺はそう言って天幕の中へと入り込んだ。

「なっ……」

「ど、どうした!?!」

「こっ、これは……」

俺の様子から二人の同僚も覚悟を決めて入り込んできた。

そして、惨劇を目の当たりにした。

壮絶な表情で息絶えるレナスティ姫。

彼女を庇うように正面から斬り捨てられている従者の女騎士。

そして、口から血を吐き倒れ伏せるイリーナ殿だった。

「おい、お前は皆を起こしてこい!!」

もう一人は状況検分を手伝え!!」

「お、おう!!」

俺の指示に同僚の一人が外へ出た。

「見てみる、吸音石の魔法具だ」

俺は効力を失った魔法具が落ちているのを見つけた。

周囲の音を消し去る魔法具だが、これは外に音が漏れないようにするタイプだ。

「……これは、嘘だろ」

「どうした?」

「こ、これを見てくれ!!」

狼狽する同僚から、それを受け取る。

俺も目を剥き驚愕した。

「報復の女神の呪印……」

血塗られた短剣のシンボル。

それは、その復讐が正当なる物であると、かの女神が証明するため信者に送られる代物だった。

「改神していたのか……」

言うまでもないが、彼女は騎士神を信仰していた。

信仰する神を変える場合、その神に一週間続けて祈り続けなければならぬ。

だが、問題はそうではない。

「イリーナ殿。貴女は姫様を……」

問題は、神が彼女の凶行を正当な復讐として認めたことだ。

無論、俗世でそれが法的に便宜を図るものでは全く無い。

復讐対象やその親類への攻撃材料として、報復の女神が送るのだ。

その行為が誰に認められずとも、神だけは正当性を保障すると。

そして神々がおわすこの地上で、それを突きつけられて動揺しない者は稀だろう。

それこそ、自覚が無ければ尚の事だ。

「それで、死因はどうだ？」

「隊長は服毒して亡くなっている。」

護衛は見ての通りだが、姫様は首を絞められたあと、急所を短剣で刺されている」

冒険者上がりの同僚はその斥候技能を遺憾なく発揮し、死体の検分を終えた。

状況は明らかだった。

「つまりイリーナ殿が剣を抜き、危機を察した護衛を斬り捨て、姫様に呪印を突きつけ動揺したところを首を絞め上げ、気を失った所を胸を短剣で突き刺した」

「そして、自らは毒を飲んだ」

それは恐ろしい結末だった。

計画的な犯行であり、そして何より憎悪に満ちていた。

俺は同僚に現場保存を指示し、天幕を出るとイリーナ殿の持ち物を改めた。

やはり、と言うべきか彼女は遺書を認めていた。

そこには、今回の凶行の動機が記されていた。

俺は全てを理解した。

「女神■■■■よ。お願いがあります」

俺は女神に祈りを捧げると、意識が沈んでいく。

女神の元へと行くことなく、俺は過去へと遡る。

彼女の結末を、見届ける為に。

「ええ、分かりました。それで良いのですね？

はい、では、頑張ってください」

手中の六面ダイスを弄ぶ女神は、ついにそれを振ることなく、天秤にダイスを置いた。

置かれたダイスの目は一。赤い円が惨劇を予見しているようだった。

## 一の目

「君を引取りにきた」

父上は馬車で来るでもなく、幼い俺の元へやってきた。

俺の本当の実家は、王都の街道のひとつにある小さな花屋だった。

親父たちからは家業を継ぐ二代目として期待され、俺はそれが嫌で嫌で仕方がなかった。

花屋なんて平凡で面白みの無い仕事は嫌で、幼いながらも両親に反発していた。

今では、それも悪くなかったのかもしれないと思えるようにはなつた。

「申し訳ありません、クリファ伯爵。」

御厚意は大変嬉しいのですが、断らせてもらってもよろしいですか？」

「しかし、この家は君一人だろうか？」

子供が生きていくには大変なはずだ」

「それならば、もつと貧しい子供達に施しなさってください。

俺には両親の遺産も手元にありますから」

本当は、そんなことは言いたくなかった。

俺にとつて父親は、もう顔も声も思い出せないこの家の住人ではなくなっていたのだから。

「……そうか」

父上……クリファ伯爵は残念そうに首を振った。

「当てにならんものだ。

やはり見知らぬ女神に夢見に立たれた所で、それは神々の悪戯でしかなかつたわけだ」

「恐らくその女神さまは、私も会いました」

俺がそう言うと、伯爵は驚いたように目を見開いた。

「女神様のご厚意にもお断りをお願いしました。

そしたら怒って帰られてしまわれました」

「そうか……あまり女性を無碍に扱うものでは無いぞ。

何か困ったことが有れば、いつでも訪ねてくるといい」

伯爵は俺に告げると帰っていった。

俺は両親の遺産を元手に装備を整え、再び冒険者となった。

前回同様こうして冒険者に戻ってみると、自分にはこの職業が性に有っているようだった。

気楽で行き当たりばったり、夢もロマンもあるが挫折と死に満ちている。

冒険者仲間達は気が良い奴らばかりで、しかしどこか殺伐としている。

その中に居るのがどこか心地よかった自分もいた。

だが俺は、父上に言われた言葉を忘れたことはない。

俺は、俺の成すべきことをするだけなのだ。

「今日から暫くここに滞在したいのですが、よろしいですか?」

十五歳になった俺はイリーナ殿の生家にやってくると、受付をしている店主にそう言った。

「はい、勿論大丈夫です。

冒険者ですか?」

「ええ、自分は魔物退治を専門としていますが、最近このあたりで魔物が多いと聞きましたので、稼ぎ時かと」

俺は三等級冒険者の地位を示すプレートを見せてそう言った。

冒険者にも等級が存在し、俺は五等級から一等級の丁度真ん中だ。

一等級に近いほど優れた冒険者で、五等級は成り立てかゴロツキぐらいだ。

ちなみに一等級など十数年に一組ぐらいで、二等級にもなれば十分

信頼される実力とされる。

「魔物退治してくれる冒険者が居てくださるのなら心強いですね。

こんな辺鄙な場所はお若い貴方には詰まらない場所でしょうけれど」

三等級は中堅だが、それでもそれなりの修羅場を潜り抜けたベテランとされる。

店主はそんな人物がこの辺鄙な村に滞在してくれるのが嬉しいようだった。

「それだけ平和だったと言うことでしょう」

この辺りなど、時たまゴブリンあたりが出るのがせいぜいだろうし。

それから俺は、この宿を中心に魔物退治に明け暮れた。

半年もすればすっかり村の人間と俺は顔見知りになり、道行く先々で挨拶されるまでとなった。

「おかえりなさい、アランさん」

「今日もご無事で何より、さき、お夕飯をお食べになって」

店主夫妻は依頼をこなして帰ってくる俺を暖かく出迎えてくれた。

「ありがとうございます」

「でも、こんなところで魔物退治してもあまり儲からないでしょう?」

「ですが、魔物は日々活性化しています。」

巷では魔王が復活したなどと言われています。誰かがやらなければならぬことです」

心配する店主夫人に俺はそう返した。

「それに、俺はこの村には恩がある」

「恩?」

「この村出身なんでしょう? イリーナという騎士様は」

俺がそう言うと、店主夫妻は顔を見合わせた。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんを知っているの!!」

近くでテーブルを拭いていたイリーナ殿の妹御も姉の名をきいて

驚いたようにこつちを振り返った。

「ええ、魔物相手に苦戦したところを偶々近くで訓練をしていたように、助太刀して頂いたのです」

嘘ではない、遠い過去だが、彼女には何度も助けて貰った。

「この魔物の頻出が収まるまで、彼女に代わって私がこの村を守りましょう」

誇らしげに笑う彼女の家族に、俺は来るべく未来を思い胸が痛んだ。

イリーナ殿は、来なかった。

焼け落ちる家屋、蹂躪される人々。

俺の奮戦は虚しく、魔物の軍勢は小さな村をただのついでのように滅ぼした。

「娘を……頼みます……」

息絶えた店主の最後の言葉を聞き、最後まで抵抗しようとした彼女の娘を抱き上げ、村を脱出する。

「放して、放してよ……」

「ダメだ、君を死なせるわけにはいかない」

腕の中で暴れる少女を必死に宥め、魔物の追跡から逃れるべく走る。

「何で、どうして……」

泣きじゃくる少女は己の身に起きた悲劇に慟哭する。

「……どうして来てくれなかったの、お姉ちゃん」

彼女の悲痛な叫びに、俺の心は決まっていた。

その後、近くに来ていた騎士団に保護を求め、彼らと協力して反撃に打って出る。

その中にも、イリーナ殿は居なかった。

……

……

……

滅亡が確定するあの日がやってきた。

俺はその日まで最前線で冒険者として戦った。

三年もの間戦い続けた辺境の勇士として俺は称えられたが、そんなものは何の意味もなかった。

俺が出来たことは、一人の少女を救うことだけだった。

何一つ、大きな流れを変えることはできなかった。

女神の言ったとおり、何も変わらなかった。

だが、何も変わらない中で、何かを変えることはできた。

それがどれだけ残酷な事実であったとしても。

俺の前には、かつて見つからなかった遺跡の入り口があった。

道具袋から『ディテイクトオーラ』のスクロールを取り出した。

そこに込められた魔法が発動すると、遺跡の中へと向かって四つの影と足跡が続いた。

俺もそれに続いて遺跡の中へと入っていく。

その道半ばで、巨大な魔力の波動を感じた。

それはもう既に見知った力だった。

俺は物陰に隠れて奥の様子を窺った。

彼女らなら俺の気配など簡単に察知できるだろうが、アンズ様の強



大すぎる波動の中でそれは不可能のはずだ。

「じゃんじゃじゃーん!!!」

そしてあの四人の目の前に、アンズ様が降臨した瞬間だった。

「超ウルトラ救世女神ちゃん、呼ばれて飛び出て即参上!!」

遙か遠い異世界から、哀れな子羊を救うため、アルティメットな救いを、貴方にお届け!!」

無駄に後光などを演出で使いながら、アンズ様は決めポーズで現われた。

それに対して、四人は無言だった。

「あれ、滑った？ 小さい女の子とかには受けたんだけどなあ……」

「運命の女神……そう言うのはもういい」

面倒くさそうに大魔法師アリサ・クローネンは言った。

「我々は貴方が私達に与えた試練について聞きたいのです」

「はい？ 何ですかそれ」

聖女クリステイーンの言葉に、アンズ様は小首を傾げた。

「惚けないで頂きたい」

感情を押し殺したような声で、イリーナ殿が言う。

「貴方が我々に課した、理不尽な試練についてだ」

「あー、はいはい、なるほどなるほど」

合点がいったといわんばかりに、手を打つアンズ様。

「ちよつとこの世界の全次元の私と情報を統合しますので、少々お待ちを……」

アンズ様は立てた人差し指をくるくると回すと、チン、とどこからともなく音がした。

「話は分かりました」

急に厳かな態度になって、アンズ様は頷く。

「思うに、私の課した試練はまだ終わってないようですが？」

「何度やっても同じことでしょう!!」

悲鳴じみた声音で、レナスティ姫が叫ぶ。

『何度やっても理不尽な出来事は決まったように避けられない。それを何とかしても別の形でやってくる。』

魔王の脅威は立ち向かうたびにどんどんと強くなる!!』

これじゃあ六度だろうと百度だろうと、変わらないじゃない!!」

その言葉に、俺はやはりかと思った。

彼女らの行動が毎回戻る度に違っていたのも当然だ。

俺は六回過去に戻ったのではなかった。

『俺は、六種類の過去へと戻っていたのだ』

だからアンズ様は一人につき六度まで逆行を許すと決めた時は何も言わず、まずは一人ずつ試すのはダメと言った時は後付で悪いと言ったのだ。

「でも、願いは叶えてあげたでしょう?」

「確かに願いは叶った!!」

だが、我々はあんな形で望みを叶えたかったわけではない!!」

イリーナ殿の悲痛な叫びを、心底不思議そうにアンズ様は頬に手を当てた。

「試練と言ったけど、実際には私は何にもしていないもの。

この世は何事も辻褃が合うようになっていて。それを試練といったに過ぎないの。

それとも貴方達、くじで巨大な宝石並みの価値の金銭を得たとして、その後絶対に幸福になるとでも思っていたの?」

「それは……」

「貴方達はそれぞれ己の運命を捻じ曲げる不条理な願いを願った。

だったらその分の揺り戻しが来るのは至極当然のことじゃないのかな?」

貴方達の身に起こった理不尽も、魔王や魔物が強くなったのも、その結果でしかないということでしょう」

何を当たり前のことをいうのだ、という表情でアンズ様は言った。

「その不可能を可能にするからこそその全知全能じゃないの!?

あなた言ったじゃない、自分は全知全能だって!!」

「ええ、言いましたね。」

でもそれはただ単に全知全能というだけなんですよ」

「はあ!?!」

意味が分からない、とアリサは言った。

「全知全能はあくまで特技であって、権限ではないということですよ。」

ほら、貴方達だって誰かを殺せる力を持っていても、それが許されるわけじゃないでしょう?」

「そんな、そんなの、意味無いじゃない!!」

「そうですよ。事実上何の意味のないフレーバーテキストです。」

事実私は全知全能ですが、全知全能のまま私がここに来ると宇宙の法則が乱れるみたいなことになって滅亡するので、自分の権能が許される範囲でのみ力を行使できるようにセーブしているのです。

いやあ、私も成ってみるまでここまで不自由な物だとは知りませんでしたけど」

てへ、と可愛らしい仕草で己の失敗経験を語るようなアンズ様に、アリサは膝から崩れ落ちた。

「なので、『私がこの世界で出来ることは、この世界の限りあるリソースをやり繰りして物事を釣り合うようにすることぐらいですかね』

あ、あと魔法とか魔術とか教えますよ?」

「……じゃあ、私の願った『私の村を救いたい』という願いは、別のどこかの村を犠牲にしか叶えられないということですか!!」

そう尋ねるイリーナ殿の声は極寒の中に居るかのごとく震えていた。

「オー! イエス!!」

だって、『神様にも出来ないことが人間個人に出来るわけじゃないじゃないですか』

それが、残酷な全ての答えだった。

イリーナ殿は獣のように膝を突き、獣のように慟哭した。

その声に俺は胸が締め付けられるような思いだった。所詮、人間は運命に揉まれる川面の枝葉に過ぎなかった。そう言う風に、この世界は作られているのだから。全知全能の神であっても、その盤面は叩き壊すか何もしないかのどちらかしか出来ないのだ。

「戻してくれ……」

やがて、血を吐くような叫びを、イリーナ殿は漏らした。

「全て、無かった事にしてくれ!!」

我らの愚かな願いを全て、消し去ってくれ!!」

それはどれほどの苦渋と決意に満ちた言葉だろうか。

己の愚かさを知り、彼女は高潔な答えを示した。

「ええ、分かりました」

慈愛の笑みを浮かべた女神は、哀れな小娘に慈悲を示した。ただ、

「それが、貴方達全員の総意であるなら」

その目はちつとも、笑っていないかった。

「え……」

その意味が理解できなかつたのか、イリーナ殿は目を見開き、そして背後の仲間達を見回した。

誰もが、彼女から目を逸らした。

「なぜだ……なぜ皆、目を逸らす。」

このままではこの世界が滅亡するんだぞ?

お前達は私利私欲で、この世界を滅ぼすつもりか!!」

「落ち着いてツ、私だって同じ気持ちよ!!」

姫様がイリーナ殿の肩を掴んで必死の形相で言った。

「黙れ!!」

だが、イリーナ殿はそれを振り払った。

「あの時、二度目の逆行で、お前の我侷が私の故郷を滅ぼした!!

お前があんなくならない命令を下さなければ、ああはならなかった

!!

そんなお前をどうして信じられるか!!」

「あ、あれは、だって、貴方も喜ぶかと思つて……」

「それがお前の国民を殺したと言つているんだ!!」

イリーナ殿は姫様を突き放すと、残りの二人に鬼の形相を向けた。

「お前達は どうする」

その怖気の走る声音に、後衛二人はびくりと肩を震わせた。

「そ、そうですね……」

「どつちにしろ、碌な人生じゃなかったし」

「ああ、そうそう」

顔を見合わせて声を絞り出すクリステインとアリサに、軽い声が割つて入る。

「貴方達個人の『負債』に関しては私は関与できませんので、悪しからず」

その時、彼女らの表情を見ることは出来なかった。

その言葉の意味が分からず困惑するイリーナ殿を除いて。

「……ふむ、自覚はあるようですね。」

ちなみに、総意という言葉ですが、別に四人が一人になつても総意ですよ?」

それは暗に、話がまとまらないなら殺しあつても決めろ、という女神からの拒絶の言葉だった。

「タイムリミットは、この砂時計の砂が落ちるまで。」

……あと三分と言つたところでしょうか」

虚空から取り出した砂時計を置いて、どこまでも残酷に女神は決断を急かした。

四人は意を決したように武器を取った。

「残念だよ、私達……仲間だったのに」

「もう昔の話だよ」

「どのみち、もう戻れはしません」

「私にだって譲れないことはある」

対峙する四人は気づいていなかった。

女神がサイコロを掌から地面に零れ落としたことを。

かん、からん

「ふむ、この目は……」

出た目は、一。

「全員同士討ち。全滅ですか」

つまらなそうに、女神は呟いた。

ほぼ同時に、四人はそれぞれの攻撃によって倒れ伏した。

奇しくも、それは俺が最初に見たときと同じ光景だった。

「うーん、ありきたりな結末だったけど、それなりに笑えたし良いか」

掌にサイコロを弄びながら、女神は欠伸した。

そして、入り口の方を見た。

「ようやく、ここまで戻って来れましたね」

女神が微笑む。

物陰から出た俺と、落ち延びてきた俺が重なり、俺はここへと戻ってきた。

「……これが、真相ですか」

「ええ、全てと言うにはあなたの知る情報に欠落が多いですが」

俺は四人を見下ろす。

余りにも愚かしい結末だった。

「さて、ではこれから貴方の『本当の役割』を果たしてもらいます」  
「本当の役割？」

「もう分かっていることでしょうか？」

そう言っつてアンズ様は左手を突き出し、パチンと指を鳴らした。

「……あ……れ……私……」

それはいかなる奇跡か。

今しがた同士討ちしたイリーナ殿が目を覚ました。

外傷は初めから無かったかのように、消え去っていた。

「え……？ あれ、どうして……」

「おめでとーございます。」

貴方は四人のうち一人となりました」

呆然とするイリーナ殿に、乾いた拍手が贈られた。

「貴方の願いを聞き届けましょう……と、言いたいのですが。

実はこの場にはもう一人、人間が居たのです」

アンズ様が指差す方には、俺が居た。

釣られて俺を見るイリーナ殿は、目を見開いた。

「お前は、アラン……なのか？」

「初めてお会いしますね」

いえ、と俺は首を振った。

「これで六度目の初めてですね」

「ま、まさか、嘘だ……なぜ私は気づかなかった」

「そりゃあ、気づけないようにしたからですよ」

悪戯が成功したかのような子供っぽい笑みを浮かべて、アンズ様は言う。

「イリーナ殿、天秤の女神とはそこに居られるアンズ様のことです。

そしてこれに見覚えはございませんか？」

俺は道具袋から二つの物を取り出した。

「それは、なぜそれが、ここに」

「はい、貴方の遺書と報復の女神の呪印です」

俺は理解の追いついていないイリーナ殿に詰め寄った。

「お願い、やめて、来ないで……」

「この遺書にはこう書いてありますね。」

レナスティ姫がイリーナ殿の部隊を傍におきたいと我が俣を言った。

その所為で自分の故郷が滅びた。だから、彼女を殺したのだと」

「やめてくれ、後生だ……」

「だけど今回、貴方は来なかった!!」

誰かを助けるのに立場は必要ないといった貴方が!!

自分に諦めるのは軟弱だと言った貴方が!!

試練に耐えかね、どうせ無駄だと故郷の危機に姿さえ現さなかった

!!

……見損ないました、イリーナ殿」

もはや彼女に言葉も無かった。

ただの無力な少女は、己の不甲斐なさと思かさに泣き崩れた。

「さて、裁定の時間です。」

貴方は彼女を罰しても良いし、赦しても良い。

ただし、私が納得できない結末となったら……わかりますね?」

「はい」

俺がアンズ様選ばれた理由、『それは彼女達の処遇を決める為だった』。

「残念ながら、私は誰かを罰する権限が無い。」

ほら、『神は人を罰しない』。ならば、その為の代行者が必要でした」

「ではアンズ様、彼女はいかなる罪を持って裁かれるというのですか」

「それは勿論」

アンズ様はにこりと笑った。

「己の悲劇から目を逸らそうとした罪ですよ」

え、とイリーナ殿は涙でぐずぐずの顔を上げた。



「私は言いましたよね？　まだ試練は終わっていないと。」

私の試練はどのように悲劇を回避するかではなく、どうしようもない悲劇に直面しながらもそれを乗り越えていく為の答えを得たか、なのですよ。

だから、貴方は根本的に間違っていたのです」

「そんな、酷い、私を六度も絶望させるために、私の願いを叶えたというのですか」

「ええ。そうです」

躊躇い無く女神は頷いた。

「悲劇から目を逸らす。それは感情の否定です。」

それを為すのは人間であることの否定。感情が無ければ、それはもう人形と同じ。

それに比べれば、貴方自身の愚かさや復讐を行ったことなど、些事でしょう」

常人には理解しがたい神の価値観だった。

「だから絶対に、貴方は目の前の悲劇から目を逸らせないようにしました。」

それ以外には全く手を加えていません」

「あう……あ……」

イリーナ殿は悟ったのだろう。

全ては、神の手のひらで踊らされていたに過ぎなかったのだと。

「イリーナ殿、罰を申し伝えます」

罰と聞いて、彼女の体が震えた。

だが俺は容赦なく、彼女に罰を告げる。

「それは、この世界で生き抜き、試練の答えを得ることです」

それこそが、己の悲劇を否定した彼女の何よりも重い罰だ。

「ですが、私個人としては貴方を赦したいと思えます。

だって貴方は本当にいつも誰かの為に戦って来た。

それだけは、嘘じゃないから」

そう言っただけは、嘘じゃないから、彼女に手を差し伸べた。

「一緒に答えを探しましょう。」

そして見つかった答えがどれほど惨いものだったとしても、貴方は一人じゃない」

「私は……私は……」

俺は感極まった彼女に肩を貸すことにした。

「し、知らなかったんだ、こんなことになるなんて……!!」

私は家族を助けたかっただけで、それが、どうして、なんで!?

私の家族が何か悪いことでもしたのか!?

どうしていつのまにか世界がどうこうって話になるんだ!?

魔王があんな恐ろしい存在になるなんて思わなかったんだ!?

本当は魔王なんかと戦いたくなかった、戦いだって本当は嫌だ!?

でも、だけど、どうしようもなかった!! 何の意味も無かった!!

家族を助ければ、他の誰かが死ぬ!! 何でそんなの私に選ばせるん

だ!!

嫌だ、嫌だよ、そんなの選べないよ、残酷すぎるよ!!

他の誰かに代わりに死んでくれなんて、私言えない。

もうやだ、こんな理不尽、耐えられない、耐えられなかったんだ!!」

半ば支離滅裂に感情任せに己の言いたいことを吐露しながら、イ

リーナ殿は子供のように泣きじやくった。

彼女が今まで否定しようとした物、目を逸らしていた物が一気にあふれ出たのだ。

なるほど、罪か……。

「本当は、全員が終わるまで貴方と同じように逆行していることは伏せようと思ったんですけど、飽きてきちゃいました。

でもほら、あと最低18話引つ張るのって無理そうでしたから?」

方針転換ってというか、状況判断ってというか？」

そしてこの色々と台無しな女神だった。

「なぜ、私だったのですか？」

なぜ私が代行者として選ばれたのですか？」

「あの場で総意は、間違いなく貴方だったからですよ」

彼女の言葉に、俺は驚いた。

「その貴方が私に願った。」

身勝手な願いを願い、それを無かったことにしようとしていた四人に呆れて帰ろうとしていた私に、機嫌を直して欲しい、と」

アンズ様は目を落とす、今さっき、砂時計の砂が落ちきった。

「これから貴方に与える使命を告げます」

「はい」

『彼女らが何を願ったのか、当ててみなさい』

くすくす、とどこか意地悪な笑みを浮かべて彼女は言った。

「そんなの当てられるわけが無い。」

この三人からそれを聞き出すなんてまず無理だ」

暫く一人にして欲しいと部屋の隅っこで膝を組んで座っていたイリーナ殿が漏らした。

どうやら、言葉以上に難事のようなだ。

「その過程で知ったことを加味して、最後に貴方が彼女らを罰するのです。」

分かったなら、ここに帰って来る度に言っても構いません。

では、次は誰ですか？」

「姫様をお願いします」

「わかりました、では彼女に対して有利な状況をセッティングしましょう」

そこで、ふとアンズ様はにやりと笑った。

「ただ過去に戻しても面白くありません。」

貴方は六度、六種類の過去へとそれぞれ無作為に戻りました。そこに重複は無かったですが、今度はそれがありません」

「でも、それって運次第でかなり不利なのでは？」

「大丈夫、スペシヤルなサプライズを用意しておきましたから」  
にやにやと笑うアンズ様に不安を抱きながらも、俺は頷いた。  
俺の意識が沈んでいく。

俺は再び使命を果たすべく、過去へと戻るのだ。

「あ、そうそう。」

もう分かっていると思いますけど、六の目から順番に彼女らは逆行してきたわけですが、これからは私の振るダイス目はシークレットつてことで」

女神は『あなた』を見てそう言った。

「そう、『あなた』です。」

そう、今この文字を追っている『あなた』ですよ。  
なぜそんなことするかって？ その方が面白いでしょう？

だからわざわざダイス目の重複ありにしたんですって」  
女神は六面ダイスを弄びながら笑う。

「まあ、ゲームマスター権限って奴ですよ。」

さしてきて、ダイスロール、と」

ぽいっと天秤の上にダイスを放り投げる女神。

からん、からん

ダイス目は——、「おっと」確認する前に女神の手がそれを隠す。

「全知全能の私ですが、ダイスの結果だけは分からない。

そうでないと、面白くないですからね」

そうして女神はにやにやと、結果が出るのを待ちわびるのだった。

## 女神と女騎士

イリーナは思いを馳せていた。

「(これから私はどうすればいいのか)」

自分の願いは叶わないものと知ってしまった。

いや、叶うには叶うが、それは自分が決して望む形ではなかったのだ。

彼女のやろうとしたことは結局、湖から水を掬って飲むのと同じことだった。

それで確かに己の喉は潤う。湖全体からすれば僅かな量だが、それでも水が減ったのは変わらない。

問題は、その湖の水が決して呑んではならない他人の血であったということなのだ。

彼女は失ったはずの家族や村の人たちの命を願った。

その願い自体は尊いモノであったが、詰まるところその願いが尊いのは願いのままであるからなのだ。

死んだ誰かの蘇生は、叶った時点で尊くも何ともない、ただの不条理な結果でしかないのだ。

イリーナは今はおぼろげながらしか思い出せないかつての戦いの日々を思い出し、自嘲した。

イリーナはかつて、おぞましい実験を行う魔法使いの討伐を行ったことがあった。

その魔法使いは何人も人間を犠牲にし、自分の娘を生き返らせる実験を行っていたのである。

その男に、かつて自分はなんと言ったか思い出したのだ。

「お前の行いは間違っている。

誰かを犠牲にしてお前の娘を蘇らせたとして、お前の娘は喜ばない

!!

「赤の他人のお前に何が分かる。

娘を失った我が悲しみを、娘の痛みや苦しみを、なぜ分かるというのだ。

見るが良い、我が娘はこんなにも喜んでいるぞ!!」

狂った魔法使いは、到底人とは呼べないおぞましい怪物を示して笑ったのだ。

結局は自分も同じ穴の貉だったのだ。

過程が綺麗であれば、神に願った結果ならば、違うと思っていた。それがとんだ思い上がりだと、知りもせずに。

よくある話である。

自分の村の畑に川から水を引いた。

水流が変わり隣の村が干上がった。

そう、物事は辻褃が合うように出来ている。

それは神ですら覆せない事実なのだ。

「そう自分を責める必要はないと思いますけれどねえ」

まるで私の心を見透かしたように、女神は言う。

彼女は、しゃくしゃく、と片腕に抱えるほどの大きな紙の器に山盛りに入った白い粒のようなお菓子彼女が食べているのはポップコーン。を口に放り込んでアランが四苦八苦しているさまを、魔法か何かで壁に映した彼の映像を見ていた。

時折けらけらと笑っているのを見ると、自分の時もそうであったのかと思えば途轍もなく惨めな気持ちになった。

「私の醜態だけでなく、私の心まで見透かすのですか」

「ええ、だって私、全知って程じゃないけど全能ですから」

悪趣味な、という雰囲気隠さない彼女に、女神は当たり前のようにそう言った。

彼女の全知全能は自分が自分の為に使用する分には特に問題ない

のだろうか。

「私に罰を求めた貴女が、私に自分を責める必要はないのですか」

「それはまあ、神様のなアレみたいなの？」

私は人の心が分かるウルトラ天使な女神なので、神罰や救済とプライベートは分けているんです」

天使なのか女神なのかハッキリしろ、と言いたいのをイリーナはぐっと堪えた。

「実の所、本気で願いを叶えてあげようかなって思ったのは貴女だけでした」

「所詮誰かの犠牲の上の成就でしょうに」

「ちよつとそれ、全知全能舐めてますねー」

不可能を可能にするから全知全能なんですよ」

女神はちよつちよつと人差し指を左右に振った。

「……ちよつと待つて欲しい」

貴女はアリサに言っただろう。全知全能は所詮自由に振るえない特技に過ぎないと」

「ええ、でもそれって要は神の所業でしょう？」

私は便宜上女神つて名乗ってますが、『神つばい何か』らしいんで、厳密に言えば神様では無いのです」

「意味が分かりません」

「ええ、分からなくて結構です。所詮俗世の人間には理解できないことなので。」

でも簡単に言うなら、実際神様に全知全能つて不要だと思いません？」

イリーナは彼女が何を言いたいのか全く分からなかった。

「神々がなぜ、役割が細分化されてそれぞれの事象を司っているか分かりますか？」

全ての権限を持つ大きな誰かが居るより、その方が都合が良いからです」

「それは、独裁政権や民主主義との違いを言っているのか？」

「この場合、両者の速さは人間のそれとは全く逆ですけどね。」

ほら、威厳のある神様ってやけにもったいぶって何かをするのを出し渋ったりするじゃないですか？」

女神は分かりやすく物事を表現するためか、虚空にため池みたいな物を作り出した。

「神々は概念上の存在です。」

物質の世界にアクセスするには、実体が必要になります。

つまり、こんな感じのため池に鉄球を放りこむようなことなんですね。

ため池の上に掌に乗る程度の大きさの鉄球が現われ、ため池に落ちて激しい水柱と波紋を齎した。

「これほど波風立っていながら、世界全体を揺るがす神の権限でも小さな物です。」

私が全ての能力を発揮できる状態で現われたら、こんな感じになりますね」

今度は先ほどより遥かに大きな鉄球がため池の上に現われ、落下し派手に水を周囲に撒き散らした。

「分かるでしょう？」

神々の力は特化している方が世界に与える影響は最小に抑えられるのです。

やたら神々が代理だの使いだのが好きなのは、水面の揺らぎをもっと抑えることが可能だからなのです」

「だから貴女は全知全能は意味が無い、と」

「ええ、私の情報量はこの世界の法則を容易にかき乱す。」

全知全能の存在が顕現した影響を無力化して存在するのは、少々面倒なんです。

特に私は自分が周囲に与えた影響を、結果が出るまで判別できないので」

「だから、全知って程でもないけど全能だと？」

「はい。本来私が……いえ、私達は三位一体の存在。」



完全に全知全能を名乗るには私の師匠と私の姉弟子が居なければなりませんね」

それは、イリーナには途方も無い話だった。

これだけ強大な力を持つ神が、実際には三分の一に過ぎないというのだから当然だが。

「私の師匠がありとあらゆる権限を持って干渉し、私の姉弟子が結果を観測し、私が正しく物事を捻じ曲げる。」

三重の制限とプロセスを経て、究極の力は行使されるようになっていくのですよ」

「あえて不便に、軽々しく強大な力を行使できないように、ですか？」  
「だって怖いじゃないですか。全てが自分の思いのままになるのって」

その言葉は、ある意味で一番の衝撃だったかもしれない。

超然とした価値観を持つこの女神の、人間らしさを垣間見た気がした。

「その三位一体の究極の全知全能を持つてすれば、あらゆる不可能という言葉は戯言と化するでしょう。」

その力を持つて、私は貴女の願いを叶えてあげてもよかったです  
が、残念だけど貴女はその資格を自ら放棄した」

「私があなたの課した試練に耐え切れれば、その報酬に不可能を実現させた、と？」

「ええ、全くふざけた話でしょう？」

女神は淡く笑いながらイリーナに言った。

全くふざけた話だった。

「解せませぬな。なぜ、私にそこまでしてくれようと思ったのですか？」

「理由は二つあります。」

貴女たち四人の中で、貴女は結果ではなく過程の変化を望んだ。

私に頼んで自分の村の人々の命を救って欲しい、ではなく自分で救う機会を欲した。

私はね、誰かを救済する際には必ず試練を課すようにしているんです」

すつ、と女神は突き出した指を鳴らした。

イリーナの脳裏に、無数の風景や人々が浮かび上がる。

それは、無数の数限りない人生だった。

「ある特別何も取り得もない善良な人間が大型車両の事故で不幸にも亡くなりました。

哀れに思った私はその魂を別の世界で転生させてあげることになりました。

そこでちよつと老婆心ながら、お約束なので色々な才能や英知を授けました」

そしてイリーナの脳裏には、己の二度目の人生に嘆き、絶望する青年の姿が映った。

「かつて一度目の人生で培った様々な先進的な知識や才能を未熟な転生先の世界で発揮した彼は、その歴史を揺るがす行為で歪みを齎した。

彼が成功するたびに、代わりに周囲が失敗するようになったのです」

その青年はその所為で孤独に成った。

ありとあらゆる成功を約束された彼は、周囲から疎まれ、その成果を盗んだ物だと蔑まれた。

その批判すらも、成功によって掻き消され、周囲に更なる失敗を振りまく。

青年は孤独を窮めた王となった。

国民も何も無い、領土と己だけの王国の主に。

「ある飢えに苦しむ兄妹が居ました。

兄は自分がどうなってもいいから、妹を助けて欲しいと願いました。

私はその願いを叶え、餓死した兄の寿命の分だけ妹を生かすことに

しました」

そしてイリーナの脳裏には、空ろな瞳で男達の慰み者になる少女の姿が映った。

「その結果、己で金銭を得る手段を持たない少女は娼婦に身を落とし  
ました。」

どんなことをされても寿命が来るまで死なないその少女は、おぞましい欲望の捌け口としてとても重宝されたのです」

その少女は何度も首を吊って兄の下に行こうとした。

だがどれも偶然、たまたま失敗に終わった。

いつしか少女はこんな運命にした己の兄と女神を呪った。

あまりにも見るに耐えないので、女神はその少女を「居なかった」  
ことにした。

「私は人間だった頃、とても疑問でした。

なぜ神は人を救わないのか、とね。私は特定個人を救うすばらしい  
女神になってみよう、と浅はかな小娘は思っていたのです。

集団でもなく、国家でもなく、世界でもなく、どうしようもない不  
幸に見舞われた誰かを救う神へと。

……成ってみて、痛感しましたよ。

神が誰かを救うなんて、余りにも馬鹿馬鹿しく、意味など無いとね」

そう、その女神の行為は無意味で無駄で不躰で無遠慮だった。

それは彼女の行動が問題なのではなく、物事はどうしても吊り合う  
ようにしか出来ていないということだった。

だが、全ての人間が不幸や嘆きのどん底に落とされた訳ではない。

「ある青年が居ました。彼は願いました。

同じ時代、同じ地球の日本という島国、同じ親と生活に困らないだ  
けの社会的地位と、決定的な悲劇に見舞われない程度の幸運を欲しま  
した」

あまりにもつまらない彼は、つまらないながらも無難で幸福な人生  
を全うし、つまらないまま死んでいった。

彼の選択は賢かったとも言えるし、変化を望まぬ臆病で弱い人間だったとも言える。

「私は思ったのです。救われる側にも、救いに耐える土台が必要であると。」

だから、私は試練を与えるのです。

決して叶わぬ願いに翻弄され、得た先にある答えから導き出される真の救いを与えるために」

だから女神は、個人的にイリーナを責めはしなかった。

責めもしないが救いもしない。

彼女はその資格が無かったと言うことだ。

たとえそれが、どんなにささやかで尊い物でも。

無差別に個人を救う女神は、救われる者を選別すると決めたからだ。

「そして、第二の理由が、これですよ」

今度はイリーナの脳裏に、夜空と思わしい場所に浮かぶ無数の岩が何か漂っている光景が浮かんだ。

「これは……?」

「私の故郷です」

イリーナは、彼女が何を言っているのかすぐには理解できなかった。

「この無数の岩や土の塊みたいな物が？」

「ええ、かつてこの岩や土の塊はひとつであり、巨大な球体でした。」

そこは緑が生い茂り、海や山があり、人や動物が住んでいました」

「球体に? そんなところにどうやって住めるのですか?」

イリーナは意味が分からなかった。

当然だろう、『だってこの世界の大地は平ら』なのだから。

世界の果てには奈落があり、そこから先は混沌があるだけだという。

「ふむ」

女神は何か思案すると、イリーナの脳裏にまた別の光景が浮かんだ。

それは、主柱に支えられた円形の大地だった。

「テーブルに置かれたピザみたいな世界なんですね、ここは」

イリーナとて、自分の住む世界の全貌を見たことなどない。

「これが、神々の視点……」

世界の最果てはやはり奈落であり、その先には暗闇が満たされていた。

一説によると、魔王や魔物の勢力はそこから這い出て湧き出てくるといわれていた。

「この柱、折ってみたらどうなるのかな……」

「止めてください!!」

子供みたいな好奇心で目を光らせる女神に、イリーナは全力で抗議した。

「ジョーク、ジョークですよ女神ジョーク。」

でもこう、やってみたくありませんか？　こう、ポキッと

「……………」

「ほん」

あんたが言うのと冗談にならない、と視線で訴えるイリーナに、流石に女神も不謹慎だと思っただらしい。

「まあ、お互い故郷を失った身、ちよつとした共感が力を貸してあげようと思っただけですよ」

それに、と女神はイリーナを見た。

同情の視線だった。

「『この世界もこれから私の故郷と同じような感じになるんですから』」

それはゾツとする予言だった。

「あの岩と土の塊だけに……」

「ええ、『そうなりますね』」

「馬鹿な!? それはなぜッ……」

そこで、イリーナは思い当たる。

魔王だ。

「魔王……魔王がこの世界を滅ぼすというのか!!」

「ええ、と言うか……あなただって何度も経験してきたことでしょうか？」

私は同情しているのです。集団・国家・世界を救わない私ですが、世界の滅びは何度も見てきたし、イラツとしてついつい滅ぼしてしまつたこともあります。

でも今回、この世界の滅びは想定されていないことや個人的な思いもあつて、ちよつとばかり手を貸そうと思つているんですよ」

そこでイリーナは気づいた。

この女神が先ほど見せた光景は、例外なく個人に対しての救いや試練だった。

だが、その中に一度でも救い終わつたり試練に失敗した相手に追加で何かをしたのは無かった。

そう、あのアランという存在は初めてのケースなのだ。

「我々に、もう一度魔王と戦えと仰るのですか？」

「ええ、『その為にわざわざあなた達を罰しているんですよ』」

勿論、これで再起を図れないようなら、……こんな世界、滅んだ方がマシでしょう」

彼女の罰とは、つまり体のいい赦しなのだ。

だが、そこまでしてやっているのに問題を解決できなければ、それこそ救われる価値も無い。

想定される滅びなど待つまでも無く、この世界は勝手に滅びるのだから。

ここに至り、イリーナは己らがいかに馬鹿な空回りをしていたのか悟つた。

この女神は少なくとも、自分の手段を変えずにイリーナたちを通して世界を救おうとしているのだ。

「だが、しかし、どうやって魔王を倒す？

あの恐るべき力を持った魔王を……」

イリーナは自問自答する。

精一杯考え、ふと、魔王との戦いの直前との会話を思い出した。

「女神よ、貴女は私達の運命以外に何も手を加えていないと言ったな」

「ええ、言いましたね」

「それはつまり、『私達が強くなり、救った命の分だけ誰かが死ぬのは決まったことである』。そうだな？」

「ええ、そうですね」

「じゃあなぜ、魔物の質が上がる!!」

明らかに魔王軍の保有する戦力の見通しが不透明だ!!

魔王軍全体の強さが上がれば、対抗できる戦線は限られる。つまり

それは……」

「ええ、あなたの考えている通りです」

女神はゆっくりと首肯した。

「道理だ!! 勝てぬが道理なわけだ!!」

魔王の背後には、『権限を持って人間を殺し滅ぼせる神が居る』ということか!!」

この世界の戦力とは、英雄の強さに乗算した兵数で大雑把に決まる。

つまり、英雄が強ければ農民を率いていようが正規軍と戦力的に良い勝負ができるということだ。

逆に言えば、英雄の質が良くなればそれ相応の戦力を用意しなければならぬ。

そう、つまりはそれを計算して魔王軍の戦力を水増ししてぶつけてくる、黒幕がいると言うことに他ならない。

だって彼女らが救った分を殺すだけなら、そんな戦力は要らないの

だから。

「本当にあなたは賢いですね。

ええ、まあだから助けてあげようって気持ちになれたわけですが」

「……女神よ、図々しいことこの上ないが、頼みがある」

イリーナの心はもう、決まっていた。

「あなたの出す試練の邪魔はしない。

だが、彼に出来る限りの協力をしたいのだ」

「ええ、あなたの好きにすると良いでしょう」

そこで自分に頼らないところが、女神が彼女を気に入っているところであった。

キヤラクターシート

名前：イリーナ・バルハルト

種族：人間 性別：女性 年齢：19歳

出身：ヒルデン王国

クラス：ガードナー／ナイト

信仰・対抗：騎士神・魔術神

経歴

- ・ 家族を失っている。
- ・ 正義感が強く、疎まれがちである。
- ・ 苦手な食べ物、或いは飲み物がある。（セロリと酒を選択）

逆行履歴

一度目

：家族を救うべく戦うも、トラブルにより失敗。

二度目

：ワガママ姫の横槍により目的達成ならず。



三度目

：内心悔っていたアランに油断し、苦杯を舐める。

この時、魔王軍の強さの違いに疑問を抱く。

四度目

：魔王に挑み、勝つ……が。

五度目

：魔王に挑み、大敗する。

そして自分の願いが叶わないと悟る。

六度目

：惨劇に至る。

## 第二章 白百合の剣姫 Xの目

アンズ様の力で逆行し、俺が再びギルバード卿の養子となり、一年が過ぎた頃だった。

父上は何度か逡巡し、躊躇った後にこう言ったのだ。

「今日は私についてきなさい」

俺は言われるがままに父上に付いて言った。

父上の目的地は、城内だった。

行き先は貴族や文官の仕事場である一階ではなく、王族などが過ごす二階へと進んだ。

父上は見張りの騎士達も顔パスだった。

「姫様。私です、よろしいでしょうか」

父上がしつかりとした作りのドアをノックする。

室内から促す声があり、それを受けて俺と父上は中へと入る。

「ギルバート、その子は？」

中には、若かりし姫様が机で本を広げていた。

彼女は視線を本から私に向けた。

「私の息子です。多忙極まる姫様の一時の慰めになれば、と」

「そうですか。よろしく願いますね」

それだけの言葉を交わすと、父上は一礼して踵を返す。

俺もそれに付いていった。

「あの、父上……？」

「お前はたまに登城して姫様の話し相手をしなさい」

「えっと、それは分かりましたけど……」

だが話し相手をしろ、と漠然に言われても、勝手が分からない。俺が子供らしさに似合った困惑した表情をしていると、父上は廊下の奥へ向かって手招いた。

「ソフィア。少しよろしいか」

「はい、ギルバート殿」

振り返ると、見覚えのある少女騎士が歩いてきた。

あっ、思わず口に出しそうになった。

姫様がワガママ姫だった時に俺が庇った専属護衛の女騎士だったのだ。

どうやら彼女は幼い頃から護衛を務めていたようだ。

「今日から姫様の話し相手になる息子のアランダ。お前の好きに使いなさい」

「分かりました。では早速城内での作法を教えるので、彼を今日一日お借りしてもよろしいですか？」

「私は好きに使えと言った」

「分かりました」

ソフィアと言うらしい少女騎士は、そのまま子供らしい所作で俺の手を引くと、ぱたぱたと走り出した。

「あの……」

「いいから、黙って付いてきて」

そして彼女はあまり使用されていないらしい図書室へと入ると、老司書が眠りこけているのを確認し、奥へと俺を連れ込んでいった。

完全に人目に付かないだろう一角へと辿りつく、彼女は本棚のひとつに彼女は背中を預けた。

「あの、ソフィア殿？」

「ようアラン、前々回振りだな、今回はお前、何回目だ？」

俺は思わず、えっとした表情になった。

彼女の物言いが、まるで十年來の知己にでも会ったようなそれだったからだ。

困惑する俺を他所に、彼女は不思議そうな表情になった。

「おい、お前が言ったんだぞ。

自分は無作為に六回のうちいずれかに逆行している、って。

あのへんちくりんな女神の差し金だって」

腕を組んで眉を顰めて彼女は言う。

ここに至り、俺は漸く事情を察した。

「あなたも女神様に願いを叶えてもらったのですか？」

「んなわきやねーだろ。こちとらタダ働きだよ。

っーか、なんで今更そんなこと聞くんだ？」

……ははあ、読めたぞ、お前一度目だな」

彼女はこっちの事情を勝手に把握すると、にやにやと笑みを浮かべた。

「そっちは違うだろうが、こっちはもう知らない仲じゃないんだなあこれが」

「ええと、まずはお互いの事情を知る前に、自己紹介しませんか？」

楽しそうに笑う彼女に、俺は提案した。

「そうだな。私はソフィア・バードン。

代々王家に仕えるバードン侯爵家の長女で、今より幼少の頃から姫様に護衛兼話し相手として仕えている」

「なるほど。自分は……その様子じゃ名乗る必要はなさそうですね」

「ああ、なにせ私達は寝屋を共にした関係だしな」

その言葉に、俺はギョツとした。

「こ、恋仲だったのですか!？」

「いやむしろ、体だけの関係だったな……」

「ふっ、ふしだらな!!」

「言っておくが、お前の所為だからな」

急に真面目な表情になって、ソフィア殿は言った。

「……冗談では、ないのですね?」

「冗談だったらどれだけ良かった……」

彼女は思い出したくもないと言った表情だった。

「も、申し訳ない……一人の男として責任を取らなければ……」

「気にすんな。全部あのアホ女神が悪いんだ」

むしろ彼女は同情するように俺の肩を叩いた。

このままでは埒が明かないので、お互いにさっさと本題に入ることにした。

「まずは最初に確認しておきたいことがあります。

ソフィア殿。あなたは何ゆえに記憶を保持して逆行を行っているのですか？」

『少なくとも、私の意思じゃない』。

ただ『私の認識を弄ると、何だか面倒らしくて』な、女神がわざわざ事情を説明して了解を取り付けてきやがった。

試練だか何だか知らないが、こっちはいい迷惑だ  
「なるほど……」

確かに目的もなく同じ人生を何度も繰り返させられているというのなら、この態度も納得だった。

「次に確認したいのですが、今回はあなたにとって何回目ですか？」

私は厳密には違いますが、一度目に当たります」

「それは聞いている、あの騎士団長殿の世話したんだってな」

「なるほど、知らされてましたか」

「ああ、『こっちの認識では五回目だよ』。

過去のあんたの話では、次の一回でこの茶番も終わるってことだが」

ソフィア殿は腕を組んだまま、しかめっ面になった。

「聞かせて欲しい、前回、確かに姫様たちは魔王を討ち取ったはずだ。なぜ試練とやらは終わらない？」

魔王という強大な敵を倒すことが試練じゃないのか？」

「それは自分が話していない、と？」

「試練の終わりとやらについてははぐらかされた。

その様子じゃ、今聞かされるからその前に私があると辻褄が合わなくなるからなんだろうが……ああ、もうじれったい」

彼女はイライラした様子でそう吐き捨てる。

「では簡単に説明しますね」

俺はなるべく、掻い摘んで女神の試練について語った。

「ふーん、なるほどねえ。」

私も四度も繰り返せば何となく自分のやることなすこと思い通りにならないとは思ってたけど、そういう仕組みだったとはねえ」

ソフィア殿は納得した様子で頷き、口を歪めた。

「良い様だ。好き勝手物事を捻じ曲げた馬鹿どもめ。」

「お前もそう思うだろう?」

いい加減ウンザリしているのだろう、彼女は同意を求めるようにこちらを見た。

「女神様や姫様たちに振り回されるあなたの気持ちは分からなくもない。」

イリーナ殿だけでなく、彼女らはきつと身勝手な願いを口にしたのだろう。

だがその為と同じ分の歪みをその身に受けている。

それを哀れに思っても、馬鹿にしようとは思えない」

「へっ、良い子ちゃんめ。」

まあ、私は連中が報いを受けるといのが分かれば多少なりとも溜飲は下がる。

どうせなら、その場に立ち会いたかったものだが」

への字に口を曲げたソフィア殿はふんと鼻を鳴らす。

「とりあえず、確認したいことがある。」

あなた達からすれば今回は五回目で、前回は魔王との決戦があった。そうだな?」

「ああ。その前も決戦自体はあったが、敗北した」

「つまり、『三度目と四度目は魔王と戦った』ということだな?」

「あの『四人が集結して』、という注釈が付くがな」

「なるほど」

俺は心のメモ帳にそれを書き留める。

「前回の戦いはどのような物だった？」

血みどろの消耗戦で、決戦前の会議でアリサ殿は切り札を用意していたか？」

「ああ、そうだ。何とかの宝珠だろうか？」

確か、『三度目はその切り札は無かった』

「なるほど」

ではあの『未来がないと女神が言った戦いは四度目に当たる』様だ。  
「今度は姫様についてだ。」

彼女が周知されるほどワガママだったり、誘拐だの刺客が送られてきたという噂があったことがあったはずだ。

それぞれが何度目か分かるだろうか？」

「ああ、忘れられるはずもない。」

『前者は二度目で、後者は一度目だ』

「なるほど」

有益な情報が次々出てくる。

つまり、この王国の逆行での大きな出来事は以下のとおりになる。

一度目、姫様が誘拐または刺客が来る。

二度目、姫様がワガママで、周囲が混乱する。

三度目、魔王と決戦するが、敗北する。

四度目、魔王と血みどろの決戦の果てに勝利するが、未来は無い。

五度目、詳しくは不明だが恐らく魔王に敗北したのだろう。

そして六度目に、あの場所で惨劇が起こる。

「教えて欲しい、一度目に姫様が誘拐されたただの刺客が来たただで城内が一時期混乱した。」

そのような噂が流れたが、あなたは何か知っているか？」

「知っている。が、仮にも主人だ。彼女の名誉の為に答えられない」

と、彼女は言うが、その表情は苦虫を噛み潰したような忌々しげな物だった。

「では彼女が誘拐されたり、刺客が送られてきた訳ではないのか」  
「……………」

彼女は黙秘を貫いた。

だがそのムツとした表情が全てを物語っていると見えるだろう。

「その次の周回でワガママ姫の誕生だ。恐らく彼女自身に問題があったのだろう。」

勿論、彼女がそうなった原因は……………」

「黙秘する。言うのも馬鹿馬鹿しい」

ソフィア殿は忌々しさを振り払うように首を振った。

「ではこれは核心なんだが……………」

「ちよつと待て、お前ばかり質問しては不公平だ。」

「こちらも聞きたいことがある」

「わかりました、何でしょうか」

俺は一旦、彼女の話を書く姿勢になった。

そして彼女は衝撃的なことを言った。

「お前に女神は言っていないだけで、魔王を倒すことも試練のうちなのではないか？」

「それは……………まさか……………」

「考えても見ろ。どのみち魔王が蔓延れば、人類は滅亡だ。」

仮にも全知全能を謳う存在が、それを分からぬ筈が無いだろ」

それは、実に当たり前のことだった。

「それに、仮に十全に願いが叶ったとしても、だ。」

それが後に魔王に蹂躪されるのでは意味が無いだろう?」

道理である。

例え莫大な貨幣を得たとしても、その日のうちにその価値が暴落するなら意味など無い。

そしてそれを承知で願いを叶えるなどと持ちかけるなら、それは悪魔の所業だ。

「だから私は尋ねたのだ。」



なぜ魔王を倒して試練が終わらなかったのか、と」

「……」

俺は答えられなかった。

「……分からない。だが、女神様はあの後、未来は無いのだと」

「未来が無い？」

「ああ、世界の全てが石のように固まり、その先の未来は存在していない、と」

「意味が分からん」

ソフィア殿は髪の毛を掻き毟る。

「単純に、試練の成功条件を満たしていなかったから、とかでは？」

「だがお前の口ぶりでは、女神は単純な強さで解決できる障害を置いているようには思えない」

「……何か別の意図があるのでは？」

「その見当はついているのか？」

俺は首を振る。彼女は溜め息を漏らした。

「それで、お前の質問は何だ？」

「ああ、それなんだが……俺の試練に関してだ」

俺は女神様に姫様は何を願ったか当てて見せろと言った。

あなたならなにか分からないだろうか」

「そりゃああアレだろう。姫様は——」

その時、何の前触れもなくソフィア殿の頭上に本が落ちてきた。

「いてっ!？」

その不自然で作為的なタイミングで落ちてきた本のタイトルは、  
”組織での各々の役割”。

要は余計なことをするな、という女神からのお叱りだ。

「……へいへい。くそっ」

ソフィア殿は頭を摩り、適当な所に本をしまった。

彼女も無言の意図を察したようだった。

「ソフィア殿、貴方はタダ働きだと仰ったが、何の目的も願いも無い者を女神様が遣わすとは思えない。

貴方は貴方なりの目的があつて今の立場を甘んじているのではないのですか？」

俺は彼女の態度からそのような意図を感じた。

彼女が誰かから強制されて同じことをし続けるとは思えないのだ。

そして、長い沈黙が訪れた。

ソフィア殿は口を噤み、何度か躊躇った後にこう言った。

「あえて言うなら、今こうしていることか」

「え……？」

「我が願いは、『我が君主へ忠誠が永遠に続くことを示すこと』だ

だからそもそも、私に願いや目的は無いとも言えるし、我が忠誠が神にも歪め難いという事実は実に誇らしい」

どこか決まりの悪そうな表情でそう答えた。

俺はその言葉を意外そうにきいていた。

「つまり貴方の目的は、姫様への忠誠と献身であるか？」

「そう受け取ってもらえれば構わない」

何だか意外な気分だった。

アレだけ自分の主人のことを悪し様に語っていたというのに、それは忠誠心からくる苦言だったということか。

「ああ、そうだ。多分、今回はお前、何もすることが無いだろうから、今のうち今後のことについて考えといた方がいいぜ」

「それはどういうことですか？」

「教えてやらん。あんたには私も色々と振り回された。

それにどうせすぐに分かることだ」

ソフィア殿はそれだけ言うと、今後の連絡については遣いを出す、と言って彼女は去って行った。

そして、彼女の言葉の理由は彼女の言うとおりにすぐに分かった。

実に簡単なことだ。単純に、姫様と会う機会が無い。

姫様は姫様だけあって、多忙を極めた。

毎日何かしらの稽古や習い事がスケジュールぎっしりに詰め込まれている。

それを淡々とこなしていく彼女を、俺は超人か何かを見るような目で見守っていた。

俺が話しかける機会が有るとすれば、父上と姫様の稽古が終わった時くらいだ。

それも彼女が次の習い事に行ってしまう。

話し相手とは言うが、これでは姫様の部屋の植木鉢がひとつ増えたようなものである。

そんな日々を過ごしている、ある日のことだった。

「おうアラン、町のパン屋に行ってこれを買って来い」

ソフィア殿は俺にそう言っただけを押し付け、帰って行った。

ついに使いつ通りにまで身を落としかけたか、と嘆きながらすることも無いので、俺はしぶしぶパン屋に向かった。

幸い知っているパン屋だったので、迷うことは無かった。

目的のパン屋にやってくると、まず行列に目が行った。

そして店構えもどこと無く立派になっていた。

俺は暫く来ていなかった為、そのパン屋の発展ぶりには驚いていた。

昼時では無いのになあという間に何種類ものパンが飛ぶように売られていく。

俺は慌てて行列に並んだ。

これは一時間は待つようだな、と憂鬱な気分になっていると。

「あ、もしかしてアラン君？」

暫く待っていると、従業員の一人がこちらに気づいて駆け寄ってきた。

「あ、えっと……」

「久しぶりだね、貴族の人に引取られたってきいていたけど元気？」

その少女には見覚えが有った。

俺はかつて花屋の息子で、その店はこの通りに位置する。

知らない仲では無いのだが、俺はいつも父上に引取られるところから始まる為、咄嗟に彼女の名前が思い出せなかった。

「……もしかして、私のこと忘れちゃった？」

「い、いや、そう言うわけじゃないんだ、久しぶりだったから咄嗟に名前が出なくて……」

「もうっ、ステラだよ、ステラ!!」

そう、ステラだ。このパン屋に産まれた看板娘だ。

彼女は頬を膨らませて可愛らしくこちらを睨んできた。

「あ、その格好、もしかしてお城の遣い？」

「え、いや、そんな大層な物じゃないんだが……」

「だった並ばなくて良いのよ、ちよつとこつちに来て」

俺はステラに手を引っ張られ、店の裏口から中に入っていく。

「これ、ちゃんとお姫様に届けてね」

そう言つて、彼女は置いてあつたバスケットを俺に押し付けてきた。

「姫様？　これ、姫様宛てなのかつ!？」

「そうだよ。姫様は時々うちの店にパンを買いに来られるの。」

最近忙しいから従者の人が取りに来るんだけど」

ステラはそう誇らしげに語った。

「まさか、知らないで来たの?」

「ああ……知らなかった。姫様がわざわざ市井にまで足を運ぶとは」

「とにかく、ちゃんと届けてよね。つまみ食いしたら許さないから」

「そんなことしないよ」

俺は早速バスケットを持ち帰った。

「よう、遅かったな」

「姫様の要請だというのならそう言ってください」

「あ、悪い。そうだった、お前には初めてってことになるのか」

こちらを待ち構えていたソフィア殿はうんうんと納得したように頷いた。

「姫様はあの店のパンが大好物だな。」

あそこの看板娘とは友達なんだ」

「ほう、そうなのか」

姫君と市井の町娘との身分を越えた友情ということか。

そんな絵本の中のような出来事が本当にあるのだな、とその時の俺は感心するだけだった。

いよいよ俺も十五歳、例によって騎士の選抜試験の日になった。ふと視線を感じ、王城の方を向くと姫様が遠目にこちらを見ていたのだ。

俄然やる気になった俺だったが、今回のイリーナ殿は前回に魔王を倒しただけあって、普通に惨敗した。

俺は王城の親衛隊に配属された。

要は王城の城内警備や王族の護衛を担う部隊だ。

これから激動の時代が幕開けするのだが、俺が親衛隊に配属された初の任務というのが栄えある姫様の護衛である。

いや、栄えは無いか。なにせ夜遊びの共犯なのだから。

「姫様はどこに向かうのだ？」

俺は同じ共犯者のソフィア殿に尋ねた。

「私に分かるわけ無いだろう」

彼女も分からないらしい。

この夜明けに姫様が出歩くのは初めてのことにらしいのだ。

俺達が出来るとは、お供をすることだけだ。

実際俺とソフィア殿が束になったって姫様には勝てないのだし。

やがて辿り着いたのは、意外なことにあのパン屋だった。俺とソフィア殿は周囲の見張りを命じられ、姫様は裏口の戸をノックした。

この時間、パン屋は仕込みに忙しいだろうから、店主ではなくステラが顔を出した。

彼女は突然の姫様の来訪に、驚いた様子だった。

俺達は夜中の静寂もあって、二人の話の内容を聞くことができた。

「姫様、こんな時間にどうなさったのですか？」

パンが焼き上がるにはまだ時間が掛かりますし」

「ステラ、聞いて欲しいのです」

困惑するステラに、姫様は真剣な声音で言った。

「私は、これから王族の勤めを果たします。

もうここに来ることも、このパンを食べることも出来ないでしょうが、どうか私のことを見守っていてください」

「……………はい、ステラは姫様をずっと応援して参ります」

そして、二人はひしつと抱きしめあった。

実に感動的な場面だったのだが、俺は横のソフィア殿に尋ねた。

「なあ、もしかしてお二人は実は姉妹だとか、禁断の関係だったりするのか？」

「ふざけたこと抜かすとその首掻っ切るぞ」

ソフィア殿は見たことも無い形相で俺を殺意の眼差しで睨んだ。

そんな三流芝居の脚本みたいな展開ではないらしい。

俺は彼女を宥めていると、姫様が戻ってきた。

「戻りましょう。これ以上は城の者に心配を掛けます」

戻ってきた彼女は王族として一段と磨きを掛けていたように見え

衝撃的な出来事が起こった。

姫様が王城内にてクーデターを起こしたのだ。

クーデターと言っても、暴力的なものではなかった。

現国王やその周囲の人間の不正を暴露し失脚させると、自分の都合のいい人間を配置して権力を己の手に集中させたのだ。

その所為で一週間ほど王城の政務が滞ったが、政変が起こったにしては鮮やかな一幕だった。

「あの姫様がクーデターだって？」

一番驚いていたのは、多分ソフィア殿だろう。

彼女は一番姫様に近い位置に居ながら、それを悟らせなかったのだから。

そして、これは五度目の人生を経験した姫様の最適解だと俺は知った。

初任務から帰ってきたイリーナ殿を重用し、即座に他国の人間と協力関係を結び始めたのだ。

それらの行動は、異様なほどすんなりと上手くいく。

きつとクリスティーン殿やアリサ殿と示し合わせての行動に違いない。

それからの対魔王軍戦線は人類側の比較的優位を持って進むことになる。

俺は姫様が親衛隊を伴って前線に赴くまで、情報を集めた。

これまでの経験から、このようなクーデターは記憶に無かったからだ。

そこで俺はふと思いついた。

俺がアンズ様の力で初めて逆行したあの時は、辺境の砦に勤務していたのでこの情報が伝わっていなかった可能性があった。

それ以外の五回はすべて王都の近くまで行ったり来たりしていたので、その情報が耳に入らないはずが無いのだ。

姫様率いる王国軍は、電光石火の戦術で魔王の居城に切り込む戦略を取り、同盟軍もその側面を補佐する形で戦いは進んだ。

その結果、戦端を開いて半年近くで、魔王に喉元に迫ることが出来た。

そして決戦の日である。

俺は姫様と共に魔王の城内に踏み込んだ。

幾多の魔物を切り伏せ、他の三人の部隊と合流し、魔王との決戦へと挑んだ。

「良くぞここまで来たな、人間どもよ」

魔王の低い声音が王の間に響く。

魔王は、俺の知る如何なる魔物とは違った。

まるで竜を人の姿に押し固めたかのような外見をしていた。

そしてその背丈は二メートルを超え、強烈な魔力を放っていた。

俺はその異様な覇気に慄く。

まさに魔の王を名乗るにふさわしい化け物だったからだ。

「魔王、お前はどこからやってきた!!」

お前のような生物が、この世に居ていいはずが無い!!」

アリサ殿が叫んだ。

「我は我が母により遣わされた。

一度は失敗したが、二度とそのような醜態を晒すわけにはいかぬ」

「母、だと……」

「そう、空の彼方よりこの世にやってきた偉大なる魔物の母は、我に命じた。

人間を苦しめよ、人間を痛めつけよ、人間を追い詰めよ、人間を恐怖と絶望の淵に立たせよ、と」

魔王はその悪意しか感じない命令を福音か何かのように語る。

いや、事実福音なのだ。彼らにとっては。

「人間達よ、その命と絶望を母に捧げよ」



そして、人類と魔王との戦いは始まった。  
戦いは熾烈を極めた。

強大な魔力だけでなく、魔王の身体能力は想像を絶した。  
全面衝突から一時間の激闘の末に、魔王の体が崩れ落ちた。  
人類が勝ったのだ。

生き残った面々は、勝ち鬨を上げた。

その瞬間、俺は言いようの無い不安に襲われた。

「どうしたアラン、私達の勝ちだぞ!!」

ボロボロに成るまで共に戦ったソフィア殿が、俺の肩を叩いた。

「簡単すぎる……」

「はっ」

「上手く行き過ぎている。

恐ろしいほど、皆様たちは失敗していない。

本来なら吊り合わないほどに……」

俺の耳には、アンス様の天秤が傾く音が聞こえた気がしたのだ。

「考えすぎ……だ……」

ソフィア殿は俺の不安を笑い飛ばそうとして、……出来なかった。

呪詛が、聞こえたからだ。

「ママ……痛いよ、ママ……たすけて……人間たちが、僕をいじめるんだ……」

魔王が、その異様な外見から全くそぐわない言葉を吐く。

「……ママ、僕、頑張ったよ、もういいよね？」

言われたとおり、いっぱい、いっぱい、人間たちをいじめたよ」

床に這い蹲る魔王は虚空を見上げ、彼にしか見えない何かに問う。

「だから、だから、だから、もう、本気だしても良いよね？」

その直後、高密度の黒い靄が発生した。

それは怖気が走るほど禍々しい何かだった。

まるでこの世の邪悪や悪徳を魔女の釜で煮詰めて気化させたかのような代物だった。

それが地に伏す魔王をまるで抱きしめるかのように包み、その頭を撫でた。

「うん、分かった」

その時の魔王の表情は、人間でも喜色であると容易に読み取れた。

「お前達、死（ほろ）んで良いってさ」

……  
……  
……

「お帰りなさい」

俺は、あの場所に戻された。

「嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼あああああああああああああああ  
!!!!」  
だが、俺は半狂乱のままだった。

俺は自分が死んだことも気づかずに剣を振っていた。

「化け物、化け物め、化け物が、うあ、うああ、あああああ!!!!  
すつと、狂い叫ぶ俺の額にアンズ様の手が当てられた。」

「あ……ああ……」

「正気呼び戻しました。」

立て続けで疲れたでしょう。少し休みなさい」  
その言葉に、俺は全身の疲れで重くなるのを感じた。  
過去に戻るのとは別の、深い眠りに俺は落ちていった。

## 女神フェイズ：諸悪の黒幕

誰かがずっと、自分を見ている。

そう感じたのはいつのことだったのだろうか。

暗闇の中に何もすることなく立ち尽くす俺を、彼女は見ていた。

それは赤い瞳が二つ。

それ以外に何かを判別する物はなかったが、不思議とその視線の主は女性であると理解できた。

俺はそれを、恐ろしいと感じていた。

この暗闇はまるで暖かな深海の如く俺の体を浮かばせている。

その中に、その赤い双眸は存在していた。

ゆっくりと、その視線が、両目が、近づいてくる。

逃げることは出来ない。

否、そもそもが勘違いであることが気づいた。

この暗闇そのものこそが、彼女の腕の中であることに。

この恐ろしくも暖かな波間のような暗黒は、しかし母親の腕の中で

眠る赤子がする無条件の安らぎと安心感を備えていた。

俺は、この暗闇の中で眼を閉じた。

それが正しいのだと本能で理解したからだ。

俺は夢見の中で、更なる眠りに就く。

二度と覚めないかもしれない、深い眠りへと。

そして理解する。

これが、この安らぎこそが、死であると。

「戯れは止しなさい」

その時、ふと、声が聞こえた。

声など響くはずもないこの場所で、その声は全てに浸透する。

その後、俺は全身を鷲掴みされたかのように暗闇から引つ張り上げられた。

「起きたか」

眼を開けると、イリーナ殿の顔があった。

その間にある胸部の膨らみからして、自分の顔は彼女の膝の上にあるようだった。

「死んだように眠っていたぞ、よほど疲れていたのだな」

「ええ……そうかもしれません」

俺は恥ずかしさを感じる暇もなく、起き上がった。

「助けて頂きありがとうございます」

俺はアンズ様に頭を下げた。

「あの程度、ただの悪ふざけでしょう。」

彼女も本気で連れて行くつもりは無かったはずです」

「……何の話だ？」

俺とアンズ様の会話は、当事者にも分からないものだ。

イリーナ殿の困惑をよそに、俺は言った。

「アンズ様、あれは、あの黒い靄のような存在は、何なのですか？」

それに包まれた直後に、魔王は恐ろしい変貌を遂げて全てを蹂躪したのだ。

「彼女は、『邪悪と悪逆の女神』」

アンズ様は相手の正体を、特に引つ張ったり隠したりもせず明示した。

「あらゆる邪悪と悪逆を司る、偉大なる女神です」

「偉大……？ その女神は邪神ではないのですか？」

イリーナ殿の疑問は尤もだった。

「邪悪と悪逆を司る女神が、悪逆で邪悪な存在でないはずがないのだから。」

「偉大ですよ、少なくとも真面目で厳格です。」

「あなた達は神々が、享樂の限りを尽くし樂園に住むだけの存在だと思えますか？」

「流石にそんな風には思っていませんよ……」

「ええ、今のは極端な例でしたね」

アンズ様はくすくすと笑う。

「神々が神として存在するには、維持費が必要なんですよ。」

世界の法則として根ざす神と言う存在が居座るには、何かしらの方法によって得た力を世界そのものに還元しなければなりません。

つまり、世界っていうアパートに住むには家賃が必要ってことですね」

急に所帯じみた話になってきた。

威厳には拘らないアンズ様の物言いに、どう反応すればいいかわからず俺とイリーナ殿は顔を見合わせた。

「さて、その家賃を払うにはどうするか。」

無論、神々には出来ることは限られますね。各々の権能の許す限りを使用し、アパートの設備などを維持することが大半でしょう。

彼女も、邪悪と悪逆の女神もその例から逃れることは出来ません」

「つまり、その女神は存在するためには邪悪と悪逆の限りを尽くす必要がある為、そうしているに過ぎない、ということですか？」

「全く違います」

イリーナ殿の言葉を、アンズ様は全否定した。

「言ったでしょう、彼女は真面目で厳格であると。」

その性質は、むしろ死神に近い。

彼女の権能はこの世に蔓延る邪悪と悪逆の管理と選別。

「この世に混乱や破壊を齎すのではなく、逆に秩序を守る側ですよ」「そんな馬鹿な、現に彼女は魔王を遣わし、この世界に破壊と混乱を齎しているではないですか!!」

「神（ひと）の話は最後まで聞きなさい」

睨まれ、イリーナ殿は口を噤んだ。

アンズ様は普段の見た目相応の態度ではなく、神として話をしていくのだ。

「例えば、五歳にも満たない少年が居たとしましょう。

彼はテロリストに命じられ、爆弾を抱えて大勢の人間を殺傷せしめました。

さて、この少年は邪悪か否か？」

問われて、俺とイリーナ殿は再び視線を合わせた。

「それが諭されただけなら、否でしょう。少年に罪はない」

俺は答えた。

「ええ、そうですね。

ですが、その少年は自分の行いで多くの人間が死ぬことをちゃんと説明されていました。

その上で実行したのです。これは邪悪と言えますか？」

「五歳の子供が、死を理解できるはずがない……」

イリーナ殿が首を振って答えた。

「ええ、そうした無垢なる悪行を働いた者の魂の罪過を選別するのも彼女の仕事です。

他にも無自覚な悪意や、無意識の行動で結果的に誰かを傷つけた場合、それを死後に裁く権限を持っているのですよ」

それだけ聞けば、それは偉大なる神の所業だった。

人間では決め切れない罪悪を選別する、究極の審判なのだから。

「ただ、ひとつだけ問題があるのです」

「問題？」

アンズ様は妙に勿体つけてそう言った。  
その正体についてあつきり語ったくせに、妙に躊躇っていた。

「彼女……邪悪と悪逆の女神はそれ自体が邪悪と言うわけでは有りません。」

ただ、彼女の性根というか性格そのものが、その……邪悪なんです」  
俺とイリーナ殿は、その意味を理解するのに数秒を要した。

「つまり、彼女と言う神自体は邪悪ではないが、その意思や個性が邪悪と言うことですか？」

「はい。そうです」

そう言つて頷くと、アンズ様は目を逸らした。

「……」

「……」

「……」

絶句とはこの事だった。

「武器を売る武器商人自体は悪でもなんでもないが、その武器商人は戦争を煽り儲けを得ている、そんな感じでしょうか？」

「まさにそんな感じなんです」

「結局クソ野郎ってことじゃないですか!!」

俺は思わず叫んだ。

「ただまあ、彼女は少なくとも私なんかよりはずっと確実に多くの人間を救っています。」

無数の次元に渡って人間人外問わずの大規模な彼女の教団が存在するくらいですから」

「信じられませぬ」

「曖昧な救いや言葉より、ハッキリとした死やそれに纏わる概念は人間にとって明確なものですから。」



それに、彼女の裁きに該当する人間だけが彼女を信仰している訳では有りません。

裁きを待つ人間の家族や友人、親しい人間も彼らの救済を願う彼女を崇める。

とても需要の大きい上に、当人はそんじよそこらの権威や威厳だけの神々よりずっと精力的ですから。

もし、彼女を根本的に消し去って欲しい、なんて私に願われても慎んで拒否せざるを得ませんしね」

「……」

極めて活動的で信者によく慕われている神。

なるほど、偉大に違いなかった。

その結果、自分達の世界が滅ぼされようとしているわけだが。

「ちよつと待つてください。

彼女の権能はあくまで悪の管理や死者に対してだけなのですか？」

「……………」

アンズ様は答えなかった。

「おかしいですよね。

それだけではどう考えても我らの世界を滅ぼす理由がわからない。性格が悪いから、それが神々にとつて世界を滅ぼす理由になるのですか？」

言われて見れば、イリーナ殿の言うとおりであった。

「さて、気を取り直して次にいきましようか」

「し、質問に答えてください!!」

「次はどういう感じにしましょうか？」

アンズ様はあくまでその質問に答えるつもりは無いようだった。

「アンズ様——」

「答えてやればいいだろう。二代目」

え、と俺は振り返った。

そこには、黒い靄が人の形を模っていた何かがあった。

「リエーサセツタ……」

何かを憂うような視線で、アンズ様はそれを見た。

それがその存在の名前であるのは、それを口に出さないことですぐに分かった。

邪悪と悪逆の女神、リエーサセツタ。

その化身こそがその黒い靄の正体なのだ。

「生前の私の名前を知るお前がその名を言うのはいささか滑稽だね。

さて、どうした、教えてやればいいだろう？

何ゆえ、この世界が滅びるべきなのかを」

彼女は実に楽しげに、挑発的にアンズ様に言った。

「それを言った所で、神々の視点から理由を語った所で、彼らの理解は得られません」

「もつとハツキリ言ったらどうだ、お前が人間に配慮するような殊勝な女神じゃないことはこの二人も良く知っているだろう？」

「……」

アンズ様は黙って目を伏せた。

「笑える、笑えるな。超越神たるお前は、嘘だろうと何だろうと吐けるだろうに。」

その哀れみが返って人々を苦しませると分かっているくせに」

「その超越神って呼び方止めてくれませんか？ 恥ずかしいので」

「これだから遊びで誰かを救っている奴は嫌なんだ。」

私の業務を妨害しないで欲しい。もう既に、この系列の世界は五つ滅ぼした。

あとこの世界を滅ぼせば、この枝を切り落とせる。そうすれば並行世界も丸ごと全滅できるのだ。邪魔をするな」

「私はもう少し待つべきだと言いましたよね？」

「言ったな。だがそれで私が手を緩める理由にはならない。」

「この世界とその系列の平行世界は、私の定めた基準にて滅ぼすことが決定している」

神々のやり取りを、人間に過ぎない俺達は口を挟めなかった。圧倒されていたのだ、二人の神の存在感に。

「原初の種の世界から芽吹いた無数の平行世界の根幹となる幹から枝分かれした数多の次元と世界の数々。

それを維持し、長く成長させる為には要らない世界は切り落とさなければならぬ。

その選別すらも私の権能。例え全知全能とは言え、邪魔させることは許さない」

「私の救いを遊びと言いましたね？」

ではあなたはどうかのですか。この世界の人間をいたずらに弄び、余計な苦痛を与えている。

滅ぼすなら一思いにすればいいのに。まさか、それが慈悲だともいうのですか？」

「そうだと」

邪悪と悪逆を司る女神は、鼻で笑って肯定した。

「私はこれまで一百万の世界に対しておよそ三百の割合で世界を滅ぼすことに失敗した。

これはそれぞれの世界に対して、私からの挑戦に勝ったからだ。

その報酬として、私はその世界を滅ぼさないでいる」

「それをこの世界に強いるというのですか？」

「例外は無い。滅びたくなければ、我が子を倒して見せろ。

それを為しえた時のみ、この世界に未来は訪れる。

出来ないとは、言わせないぞ。この世界より遥かに文明レベルが低い人類で私に勝った者もいるのだからな」

それは、試練であった。

ただしそれは、絶滅かそれ以外の全てを失うことを強いる、一方的な強要に過ぎなかったが。

「それに二代目。お前は分かって居ない。

魔術を窮めた果てに神に至ったお前は死を経験していない。

お前は今人間に試練として何度もやり直しをさせているが、そもそも死に耐えられる人間がどれほど居る？

お前こそ人間達に惨いことをしているのだ。

生きながら死の果てを歩んだ私に、そもそも根本的に死を体験していないお前が私にとやかく言うこと自体が間違いなのだ」

彼女の正論に、アンズ様は押し黙った。

完全に言い負かしたことを悟ると、彼女は俺達を見た。

「さて、小娘。なぜこの世界が滅びるべきか、知りたがっていたな？」  
その女神の化身は人の形を模しているながら、人の特徴は赤い瞳だけだった。

その瞳が、イリーナ殿を射抜いた。

それだけで絶大な恐怖に襲われているだろうことは、隣にいる俺がよくわかってしまっていた。

「それは、——」

「ねえ、それはもつと後に言った方がより彼らを絶望させられると思いませんか？」

ぴたり、とアンズ様の言葉に彼女は口を止めた。

「……良いだろう。

いずれにせよ、結果が出るまで私がこの世界ですべきことは何も無い。

私は今、お前と違って他にも五件の滅びと三千の無垢なる魂の裁可があるのですね、ここで失礼させてもらおうか」

黒い靄が霧散していく。

その右手に見える靄が、アリサ殿を指差した。

「この世界が滅ぶべき理由は、彼女に問えばいい。

この世界の人間で唯一、それを知りえたのはそいつだけだからな」  
それは置き土産とでも言うように、そう言つて彼女の化身は姿を消

した。

『もう一度、取りこぼした希望を手に来るかどうか、楽しみに見ているぞ』

彼女の声が反響して残り、その気配そのものも漸く消え去った。それと同時に、俺達は腰を抜かしたみたいに崩れ落ちた。

「一万に対して三百、か……。」

まあ、彼女にしては良心的な数字か。

とは言え、あの難易度は私の全面協力を前提としている所が心憎い」

アンズ様は帽子のつばを弄びながら笑った。

「それで、次はどうしますか？」

あれほどの出来事があった後なのに、彼女は無遠慮に問うてくる。

「……少し考えさせてください」

とにかく今は、整理する時間が欲しかった。

……

……

……

「アリサ、お前はやはりこの世の真理に迫っていたのだな」

イリーナ殿は物言わぬ彼女を抱き起こし、その髪の毛を手櫛で直した。

「もつと真面目にあの時、お前の話しをきいて居ればよかった。

私は本当は得がたい仲間を持っていたのだな」

そう独白する彼女は、後悔に満ちているようだった。

「四度目、魔王を倒した後あなた達に何が有ったのですか？

邪悪と悪逆の女神の言葉が正しければ、我が子とは魔王のことで

しよう。

その魔王を倒したはずのあなた達は、なぜ滅びを回避できなかったのですか？」

俺は何となくその答えを悟っていたが、問わずにはいられなかった。

「愚かな私達を許して欲しい」

まず、彼女はそう前置きした。

「魔王を滅ぼしたあの時、周囲の時間が止まり、彼女が現われた」

イリーナ殿は顔を上げ、アンズ様を見た。

「彼女は言ったよ、良くぞ偉業を成し遂げた。」

もう一度、ひとつだけあなた達の願いを聞き届けましょう、と。

今思えばそれこそが、彼女の語った三位一体の究極の救いが為されるのが許される瞬間だったのだろう」

そして、彼女は自嘲の笑みを浮かべた。

「我々は話し合いの末に、もう一度のやり直しを願った。」

お前も知っているだろう。魔王との血みどろの消耗戦の後、この世界は大きく荒廃した。

魔王を倒した私達は、次はもっとやれる、と思ってしまったのだ」

「……ああ……」

彼女の懺悔に、俺は思わず呻いた。

ぼた、ぼた、とイリーナ殿の両目から涙が滴り落ち、アリサの顔の

上に弾けた。

「愚かだった、余りにも愚かだった!!」

私達に誰かの命を左右する権利など無いというのに!!

あの戦いで生き残った者が、次の戦いで命を落としていたかもしれないのに!!

そんなこと、私達は考えもしなかった!!」

深い後悔と悲しみが、彼女を満たしていた。

「なあ、アラン。仮に次にもっと上手くやれたとして、じゃあそれで満

足したらそれは傲慢だと思わないか？

更に上手く、更に犠牲を少なく!!

どこかで妥協するとして、妥協されて失われた命は私達を許しはしないはずだ!!!

……余りにも馬鹿げていた。神でもない私達に、それを背負うなんて出来ないのに」

「……」

俺は彼女に掛ける言葉が見つからなかった。

俺が彼女のときに三度目を経験し、未来が無いと女神が言った時の気持ちを思い出したからだ。

なぜ、どうして、と。

その気持ちが分かるといったアンズ様の胸中も推し量れるというものだ。

「それを知った彼女は、試練の難易度を上げました。

せっかく慈悲で与えたチャンスを掴み取ったのに、むざむざとそれを捨てた馬鹿者どもに思い知らせるために」

ある意味で、その時に人間は神の思惑を超えたのだ。

その予想外に突き抜けた方向ではあったようだが。

「そうさ、私達は馬鹿者どもだ!!」

「落ち着きましよう、もう終わったことですよ」

正直な所、俺は複雑な気分だった。

自分も曲がりなりにもあの地獄を経験し、そこで何人もの同胞や戦友を失った。

彼らを助ける機会が有るとすれば、俺だってそうしただろう。

たとえそれが、彼らの覚悟を無為にするとしても。

だが彼女らに呆れている自分もいるが、同時にその正しさを羨んでも居た。

だって、今度こそ自分達のために願いを使えばよかったのに。

他人のためにそれをふいにしたのだ。

だからだろうか。

「アラン……」

「他の誰があなた達を責めても、自分だけはそれを責めたりはしませんよ。」

私はあなた達の努力を、ずっと傍で見てきたんですから」

俺はそんな彼女達が誇らしかったのだ。

イリーナ殿は泣き崩れて、友の亡骸に縋り付いた。

俺はそんな彼女の肩を抱いて、慰めることしか出来なかった。

「アンズ様は、あの女神と人間だった頃からの知り合いだったのですか？」

彼女の感情の発露が収まりつつあり、手持ち無沙汰になった俺はアンズ様に気になっていたので尋ねた。

「ええ、まあ。正直、意外でしたよ。」

生前の彼女はそれはもう、邪悪と悪逆の限りを尽くし、大勢の人間を殺し辱めてきましたから。

私も彼女は邪神となり邪悪と悪逆を撒き散らし、増長させる存在になると確信していたほどです。

私は魔術によって神域に至りましたが、彼女の場合はその行いによってが大きいでしょう。

彼女自身も神を嫌っていたので、神格を得たときは驚いたんじゃないでしょうか」

「そんな人間が、邪悪と悪逆を管理する側になった、と」

「そうですね、彼女は生来から真面目だったのでしょうか。」

ただ、人の世には彼女には許せない物が多すぎたのだと思いますよ。

ですが、実を言うと納得をしている自分もいるのです」

そう語るアンズ様には、憐憫の情が見て取れた。

「余りにも周囲を憎んでいた彼女は、痛みを与えられる側から与える



側になり、そして今は痛みを知り慰撫する側へとなった。

彼女以上に、適任は居ないでしょう。元もとの素質も神に祭り上げられるのに不足は無かったですし」

「彼女が優れた神であることは、何となく分かります。

そして公平な審判であり、冷酷な管理者であることも。

ですがどうにも、アンズ様からはかの女神に対する言い様のない感情を感じられます」

「ええ、まあ」

アンズ様の答えは歯切れが悪かった。

「とりあえず、誤解なく彼女のことを伝えられたようで安心しました。

彼女は称えられる以上に、嫌悪されてもいるので」

アンズ様はそう言い終えると、この話はこれで終わりにしましう、と言った。

「……予想以上に長くなってしまいましたね。

試練の続きを行きましょう。貴方が出来ることなど、それだけなのだから。

レナスティ姫の願い、分かりましたか？」

「……この世界を救いたい、とかでは無いですよね？」

「ええ、全く違います。

流星に一語一句正確に当てろなんて鬼畜なことは言いませんが、貴方は発想力以前に本質が見えていませんね」

強烈なダメだしを受けてしまった。

「見方を変えれば簡単に分かりますよ。

いいですか、『この時点で彼女の願いを推理することは可能』です」  
人差し指を立てて、アンズ様は言う。

「……ううむ」

「これ以上のヒントは控えましょうか。

次の世界へと貴方を送ります」

「今回はこちらの希望はきいていただけなのですか？」

「王族に干渉するのですよ。

それに近づく手段は限られるので仕方がないでしょう」  
確かにそうだった。

そして急速に俺の意識は遠のいていく、  
俺は次の世界へと旅立っていくのだ、

「それにしても、相変わらず可哀相な神性（ヒト）でしたね……」

その憐憫の意味は、女神にしか分からない。

女神は賽を振るう。

出た目を確認した直後に、それを拾い上げた。

「ええ、はい、分かっていますよ。」

彼女を変に刺激したりはしません……はい、ええ、わかっています  
すつて、師匠」

どことなくウンザリした様子で、女神はサイコロを弄ぶ。

『『こんな偶々寄っただけの世界の為に、本気で肩入れするわけない  
じゃないですか』』

それが慈悲深く人間らしい女神の、嘘偽り無い残酷で酷薄な本音  
だった。

## Yの目

俺は何度も逆行をしているので、前置きは省こう。  
俺は姫様のお付きになった。ここまでは前と一緒だ。  
そしてすぐにソフィア殿と接触した。

「私からすればこれは三度目だ」

彼女はそう俺に教えてくれた。

「なあ、お前は一通り経験したんだろう？」

教えて欲しい、これからどうなるのか知っているのか？」

「あなたにとつての前回の俺が教えていないのなら、俺は教えられない。」

それがお互いにとつて都合がいいはずだ」

「ふん、そうかい」

俺と彼女の会話は、その程度で終了した。

どうにも彼女から隔意を感じたのだ。

さて、三度目の姫様の様子であるが、俺はまだまだ彼女と言う存在を知らなかったのだと思ひ知る。

「アラン、匿って下さい」

お付として手持ち無沙汰だった俺はメイドたちの手伝いでリネン室に洗ったばかりのシーツを運んでいたときだった。

突如姫様が現われ、俺が持ってきたシーツの山の中に隠れ潜んだのだ。

その直後に彼女の家庭教師の先生が姫様を探しに来たことで、大体の事情を察した。

「姫様なら一階の方に向かっておいででしたよ」

と、俺は嘘を吐いて姫様を庇った。

「ありがとうございます、アラン」

家庭教師をやり過ぎすと、もともと、とシーツの中から姫様は這い出てきた。

とても姫様とは思えない格好である。

「姫様の為ですから」

「ならばお父上にお伝えください。」

もっと剣術の稽古を増やして欲しい、と。

私にお勉強は性に会いません」

「仰せのままに」

俺は恭しく一礼をすると、姫様は何を思ったのか、シーツの中へと再び身を投げた。

そして何をするでもなく、大の字で目を閉じた。

「……勉強、お嫌いなのですか？」

「ええ、そうですね。こうして逃げ出してしまうくらいには」

前回、五度目のときはこの程度の会話すらも出来ない多忙さだった姫様だったが、あの時は相当な無理をしていたんだろうな、と思った。

「姫様」

「なんですか？」

「父上に稽古を増やすよう言うのは承りました。」

その代わりと言っては何ですが、少しだけお願いがあります」

姫様は目を開け、俺を見た。

その無言の視線が続きを促す。

「この私めと、手合わせ願いたい」

「アランと？ それくらい構いませんけど、どうして？」

「恥ずかしながら、私は父上に見出され、父上の名に恥じぬ息子で居ようと努力してまいりました。」

ですが、その為にはとても目障りな相手が居たのです。

それは私より前から父上の薫陶を受け、その奥義すら授けた赤の他人が居たからです」

「姫様の唇は笑みを形作った。」

それは誇らしさから来る優越感に違いなかった。

「姫様、あなたの強さはそれこそ私が花屋の息子だった頃から憧れてまいりました。

ですが、今となってはその腕に嫉妬するばかりでございます。

どうかこの私めに、身の程を教えて頂きたい」

俺は五度目の姫様の太刀筋を拝見したことがある。

見惚れてしまった。背筋が凍った。天才だと思った。

彼女の強さとは別の、輝きを見たのだ。

「いいですよ」

姫様は頷いた。

「ただし、こういうのはどうでしょう？」

勝った方が負かした方のいう事を聞く、というのは「

「えッ!？」

この「えッ」は、予期せぬ幸運に歓喜したからではなく、避けられない不運や理不尽に直面した時の「えッ」である。

決して俺は姫様に邪な感情を抱いたわけではない、と断言させてもらう。

女神の聖像に性的欲求を抱く人間が稀なのと同じである。

俺にとって姫様とは聖像のごとき存在なのだ。

つまり姫様は無機物……あれ、俺は何を言っているんだ。

さて、その日から俺と姫様は共犯……否、同盟を組んだ。

俺は姫様が授業やお稽古から逃げ出す手伝いをする。

時々俺は彼女を見つけ出し、教師達の前に引きずり出して彼らの信用を得るのだ。

無論、これが姫様と示し合わせたゆえの行動であることは明白である。

そうすることで恒常的に逃げ道を確保することが出来るのだ。

俺も俺で思惑があるので彼女に協力することにした。

ソフィア殿を巻き込もうとも思ったが、どうにも彼女は俺と姫様を避けているように思えた。

前回、即ち二度目で彼女がどうなったか思えば当然なのだが、それでは彼女の発言と矛盾が発生する。

俺はわけが分からなかったが、とりあえず保留とした。  
所詮、彼女は第三者に過ぎないのだから。

「この辺の本、あまり面白くないわね」

今日、姫様は図書室の中へと来ていた。

当然ながら、習い事をサボっての行動である。

俺は何をしようと基本的に彼女を咎めないと姫様は知ると、お付としての使用頻度はソフィア殿と逆転した。

彼女はあの性格なので、失礼にならない程度には嫌味を言っていたらしいのだ。

まあ、あとで彼女も姫様と一緒に叱られるので仕方がないのだが。  
「つまらない」

そう言っつて、姫様は本棚から本を引っ張り出しては積み上げていく。

俺の仕事はそれを元の位置に戻すというものだ。

なるべく彼女の居た痕跡を消そうと言う努力である。

そうして分かったことだが、姫様はあんまり小難しい本を好まない様子だった。

年頃の女性が好きそうな恋愛小説だとか、そういうのをお気に召さない。

最終的に落ち着いたのは、童話の本棚だった。

童話と言っつても、挿絵の方が主となる児童向けの物ばかりだったが。

「童話がお好きなのですか？」

「ええ、小難しいことを考えるまでも無く、終わるから」

そして彼女は新たな本を広げ、読み終わると顔を顰めて俺に頼むでもなく本棚に戻した。

気になった俺は、戻されたばかりのそれを手にとって見た。

タイトルは、『仲良し姉弟』。

そこまで厚さは無く、十数ページの代物だった。

内容は以下のとおりだった。

昔々あるところに、仲良しの姉と弟が住んでいました。

お父さんとお母さんは居ませんでした。

だから姉はたいへんでしたが、がんばって働いています。

手にはいつぱいのあかぎればかりで、弟はいつも姉を不憫に思っていました。

姉のおかげですくすく育った弟はある時思い立ちます。

「僕も働いて、姉さんに楽をさせてあげよう!!」

姉はまだそんなことしないでいい、と弟を止めましたが、彼はそれを聞かずに家を飛び出しました。

弟は町中を駆け回り、仕事を探しました。

ですが、いくら頑張っても仕事にありつけませんでした。

仕方なく、弟は友達のパン屋に仕事を欲しいと告げました。

友達を頼るのはあまり気が進みませんが、仕方ありませんでした。

しかし、友達は弟の顔を見たたん、戸を閉めてしまいました。

「悪いけど、お前を雇うなってお前の姉さんから言われてんだ」

そういった友達の言葉に、弟はハツとしました。

彼は引き返し、今まで当たった職場に向かいました。

彼の想像通り、その全ての職場に姉の息がかかっていたのです。

憤慨した弟は家に戻り、姉を問い詰めようと思いました。

「お帰りなさい」

家に帰ってきた弟に、姉は優しくそう言いました。

弟は言いました、なぜ僕の邪魔をするんだ、と。

不平不満をぶつける弟は、はたと気づきました。

姉が見たことも無い笑顔を浮かべていたからです。

姉は言いました。

「あなたが自立するなんて許さない」

姉は鉈を振り上げると、弟に振り下ろしました。

弟は悲鳴を上げました。

いたい、いたいよ、とのた打ち回りました。  
それは弟の手足が使い物にならなくなるまで続きました。  
「ずっと、ずっと、仲良く暮らしましょうね」  
ふたりはそれからもずっと、仲良く暮らしましたとき。  
めでたしめでたし。

俺はその内容に絶句した。

ファンシーな絵柄で彩られた猟奇的な姉の一方的な愛情に、言葉も無かったのだ。

作者の悪意すら透けて見えるその内容に、姫様はこちらを見てこういった。

「酷い話でしょう?」

姫様が顔を顰めたのが納得の一冊だった。

「だけど、私はその姉の行動が分からなくも無いのです」

「そうなのですか?」

正直な所、俺には理解できない類の代物だ。

「大切な弟を独占して置きたい。

自分の手から離れてしまうと、どこか遠くにいつてしまうようで。

つまり、姉は寂しさを味わいたくなかったのですよ。たとえば、弟を傷つけてしまっても」

「ですがそれはきつと、罪ですよ」

「ええ、きつとそうですね」

自分の悲劇から目を逸らしたイリーナ殿は、神罰に値するとアンズ様は言った。

ならばこの姉も、行動の善悪を別として罪なのだろう。

俺はアンズ様を通して知った。

罪と罰は、善悪とは関係ないのだと。

そして死や苦痛、世界の破滅すら——システムでしかないのだと。

俺と姫様の試合の結果はいうまでもない。



俺は都合八度目の逆行で、それぞれ修羅場をくぐってきた。

姫様は三度の逆行で、俺の強さを軽々と凌駕したのだ。

俺がイリーナ殿と張り合えたのは、ひとえに彼女が盾職（ガードナー）だったからだ。

技量と手数を上回る天才相手に、敵うはずもなかったのだ。

それこそ、描写不要と断ぜるまでに。

だが、今回重視するのは姫様の強さでもなく、その人柄や性格である。

決して完膚なきまで叩きのめされた情けなさから詳細を記さないわけではない。ないったら無いのだ。

「それで、一体どのようなご用命ですか、女王様」

俺は姫様の呼び出しを受けて慇懃無礼にそう申し上げた。

「別に無理なことを頼もうとは思っていませんよ」

警戒心を露にする俺に、姫様はくすくすと笑う。

そしてすぐに真剣な表情になる。

「実は私、アランのことはこうして側付になる以前から知っていたのです」

「え?」

「実は城下町に、私にはステラというお友達が居るのです。

彼女からあなたのことは聞いていたのですよ」

それから姫様はいくつかの俺の幼い頃のエピソードを披露した。

俺は即座に羞恥で全身が沸騰しそうになった。

「や、止めてください!!」

「それですね、お願いと言うのは他でもありません。

実は先日、彼女と喧嘩してしまったのです」

「喧嘩、と申しますと?」

「他愛のない口喧嘩です。

やれ王族のクセに、やれ庶民のクセに……そういった言葉の応酬です」

となると、やはりステラはそのようなことを姫様と言い合える間柄

なだろう。

気まずそうな彼女の表情を見ながら、俺は数秒考えた。

「なぜ、自分なのですか。」

別にソフィア殿でも構わないでしょう。

むしろ、女性同士の喧嘩なら、女性に間に入った方がよろしいのではないのですか？」

「彼女にも頼めないからこうして貴方に頼っているのです」

それに、彼女に関しては貴方に頼んだ方が良い」

「……」

姫様はさすがのように俺を見てくる。

「わかりました。他でもない姫様の頼みです。」

ですが、なぜソフィア殿に頼れないのですか。それだけははっきりしてください。

ステラに謝るにも彼女の警護は必須です」

俺がそう言うと、姫様は俯いてから口をもごもごとさせて何度か躊躇ったが、意を決して顔を上げ、こう言った。

「ソフィアはステラの味方をしているからです」

「はい？」

「私より彼女の意見が正しいと支持しているのですよ」

「……」

思いのほかくだらない理由だった。

考えてみれば姫様が誰かと喧嘩するにもソフィア殿は必ず同行する。

必然的に彼女の前で論争することになるわけだ。

つまり、姫様は完全に中立な使者が欲しかったのだろう。

俺は何となく二人の喧嘩の内容は姫様の願いに関わる重要な事柄が関わっているのではないのか、などと思っていたのだが、知るのも面倒そうな話っぽいのでため息を吐いた。

俺はこの時、その喧嘩とやらが姫様の願いの根幹に等しいものであ

り、以後三度に渡る彼女の人生及び逆行に関わる凄まじく重要な事柄だったことを知るのには、かなり先の話である。

俺は年頃の女性と言う未知で不可解な生物のことを、きつとどこかで甘く見ていたのだろう。

なにせ、

「姫様!!」

「ステラ……!!」

ほんの数分話し合っただけで、涙を流しながら抱き合う二人。そんな二人を、俺とソフィア殿は呆れ果てた目で遠巻きに見ていたのだ。

この時点で、俺はこの二人の喧嘩の内容などという事柄を考えたくも無くなっていったのである。

「二人は一体どんな下らない喧嘩をしていたんですか?」

「よくある庶民と高貴な人間のすれ違いみたいなもんだ」

加えて、ソフィア殿もそんな軽く言う物だから、俺はなるべく考えないようにしたのだ。

冒険者時代から、護衛というのはあまり対象のプライベートに入り込まないのがベストと深く教訓に刻み込まれていたからである。

さて、俺も十五歳となり、例によって例の如く選抜試験を受けた。

叙任式に出席された姫様に騎士位を賜り、俺は騎士となる。

ただ、式の最中は一度も姫様とイリーナ殿が視線すらあわせなかったのは気になった。

親衛隊に配属された俺の初任務だが、さすがに使いつ走りではなかった。

だが、ある意味では使いつ走りの方がマシであった。

「……」  
「……」  
「……」

「……」

俺とソフィア殿は姫様のお供として付き添っていた。

俺達が何をやっているのかというところ、それは冒険者ごつことしか言えない。

それもこれも、自分の剣術を実戦で試したいと仰る姫君の発端である。

無論ながら、一個中隊ほどの護衛が付き添う筈だったが、姫様はこれを拒否。

俺とソフィア殿だけで十分だと言い、文句があるなら自分を負かしてから言えと親衛隊相手に啖呵をきつたのだ。

「さあ、参りましょう!!」

「えッ」

姫様はろくに準備もせず、遺跡の中に入って行った。

当然ながら、中には危険な仕掛けや罠がたくさんある。

それらの情報も無しに突撃するなんて無謀極まる。

最低限の備えはしてあるが、それだけである。

そして俺達の中にはスカウト技能持ちは居なかった……。

「うん? この床、沈みましたのかしら?」

「姫様!! 前から大岩が!!」

「仕方がありません、叩き切りましょう」

姫様は正面から転がってきた大岩を斬り捨てた。

「うん? 今何か足に引っかかりましたか?」

「警報の罠です!! すぐに魔物が集まってきました!!」

「仕方がありません、叩き切りましょう」

俺達は鳴り響く警報の中、次々湧いて出てくる魔物を何十体も斬り捨てた。

「おや、これは何でしょう」

「恐らく、侵入者に対する謎掛けでしょう。」

「この先にある宝を得るにふさわしいか試しているのです」

「仕方がありません、叩き切りましょう」

「えッ」

姫様は壁ごと謎掛け部屋を破壊し、奥の宝を入手した。

「おや、強そうな魔物の気配が」

「この遺跡のボスでしょう。」

アレは恐らくトロールキング……強い再生能力を持つ魔物。

しかし困りました、やつに物理攻撃は効きづらい……」

「仕方ありません、死ぬまで叩き切りましょう」

「ええ……」

文字通り、ボスの再生能力が尽きるまで延々と相手を切り続けた姫様だった。

「はあ……」

「慣れるしかないぞ」

ソフィア殿は達観した様子で俺の肩を叩いた。

そんなこんな波乱万丈な遺跡探査は終了し、俺達は夜営を行っていた。

「こうして炎を囲んで食事を取るのはいいものですね。」

思うに、お城の皆はこういったことしないから頭が固くなるんだと思うの。

それともスープにつけて柔らかくするべきかしら、この硬いパンみたいに。

このパン、硬いなら硬いで最初から切り分けて売ればいいと思うのだけれど」

焚き火を囲んだ俺達はだったが、姫様のテンションは高く変な話をしていた。

「姫様、何ゆえに冒険者の真似事をなさろうとしたのですか？」

俺はあえて姫様の話を遮って、そう言った。

すると、姫様は少し寂しそうな表情になった。

「私達三人がこうして顔を合わせる機会があまり無いからですよ」

「それは、どういうことでしょうか」

「私はもう眠ります。ごめんなさい」

そう言つて、姫様は寝巻きに入つてしまった。

彼女の寝息が聞こえた頃、俺はソフィア殿に尋ねた。

「ソフィア殿、姫様のお言葉は一体？」

「正式に姫様の婚約が決定したのだよ」

相手は誰かは知らないがね、とソフィア殿は言つた。

『「これは、姫様最後のワガママだ」』

そう呟く彼女の心境はいつたいどのような物なのか。

俺には分からなかった。

それから数日は、なぜか童心に戻るような思いだった。

姫様の悔いにならないように、俺は付き従つた。

彼女の無軌道な歩みは、どこか子供の頃の懐かしさを感じたのだ。

そして、それも終わる日もやつてきた。

「姫様」

やつてきたのは、部下を引き連れたイリーナ殿だった。

今回の姫様の行動は、親衛隊を動かさないことになつていたので、

それ自体は不思議ではなかった。

「ウエズーリ卿が戦死なされました」

それを耳にした姫様は目を剥いた。

「あの勇猛なウエズーリ卿が!? なぜ!!」

「今、散発的な魔物の集団的な襲撃が各地に起こっています。」

各国の首脳陣はこれに首謀者が居ると判断し、連携することに当てる  
ことが決まりました」

イリーナ殿は淡々とことを進めようと言葉を紡ぐ。

「どうか、このような戯れは終わりして、城にお戻りください」

「……わかりました。」

あなた、少し向こうで話があります。少しいいのでこちらに来て  
てください」

「……わかりました」

姫様はイリーナ殿にそう言うと、少し離れた場所へと向かい、何事

かを言い合っていた。

それは待ち合わせ場所を決めているように思えた。

きつと、前回の行き違いを清算する為の邂逅の為だろう、と俺は思った。

「では、いきましようか」

姫様はこちらに戻ってくると、イリーナ殿の部下達に守られ、城へと戻っていく。

「お前も大変だったな、アラン。」

姫様のお守りをする羽目になるとは」

「いいえ、これも仕事ですから」

そんなイリーナ殿との取り留めのない会話で、ちよつとした疑問も浮かんだが、それは後でアンス様に確かめることとしよう。

それ以降、俺は姫様と私的に会う機会を完全に失うこととなる。

以後、彼女は連合軍の旗本として、後方待機のお飾りとなる。

彼女は味方の慰撫に務め、士気を保つ源となつて多大な貢献をした。

最終的に彼女以外の上官が死に、直接指揮を執り戦うことを余儀なくされる。

激闘の五年の果てに、彼女及び仲間三人は魔王に敗北した。

そしてそれはこれから二度に渡る、彼女たちの試練と苦難に満ちた人生の序曲と成つたのだ。

……

……

……

「お帰りなさい」

魔王戦の最中、魔王の放った魔法の余波で息絶えた俺はアンス様の

下へと戻ってきた。

と、言う事になっっているが、俺の時間の感覚は姫様の最後の我がままが終わった直後である。

それ以降はダイジエストでことが進んだように思えた。

死んだという感覚も薄い。

もしかしたら、アンズ様はあの邪悪の女神に言われたことを気にしているのかもしれない。

「イリーナ殿、あの後お二人は和解されたのですか？」

「ああ、真夜中に会合を設け、お互いの悔恨を清算した。

三度目からだよ、我々が本格的に魔王の脅威に対抗しだしたのは」

イリーナ殿はどこか複雑そうな表情で、姫様の遺体を見ていた。

「アラン、今度で分かったと思うが、姫様は——」

イリーナ殿は息を吸い、

「考え無しの大馬鹿だ!!」

大声でいった。

「……………」

俺は痛ましい何かから目を逸らすように、視線が虚空を彷徨った。

「そもそも、我々四人のうち他の三人は皆そうだ。

細かい作戦などを考えるのはいつも私で、他の連中はごり押しで何かを解決しようとするアホばかりだった……………」

「……………」

「姫様のクーデターの根回しは、名義を借りた私が殆ど行ったようなものだ。

父上のコネで方々への協力を取り付け、ソフィア殿にも内緒で彼女の父上である宰相殿にも話をつけたのも私だった」

まさかあのクーデターの立役者がイリーナ殿だったとは…………。

「残念だったな、アラン。

これで姫様の勇姿は見納めだ。

四度目にソフィア殿の記憶がないと言うことはそうなのだろう」



そう捲し立てるイリーナ殿はどこか、姫様のお守りから解放された故の開放感で満ちているようだった。

俺とイリーナ殿の視線が合う。

この時お互いに、俺と彼女は通じ合ったのだ。

この奇妙な戦友同士は、奇妙な仲間意識を共有したのである。

「なにか、アドバイスはありますか？」

「何か思い付きで行動したとき、ああこの人は何も考えていないんだな、と思えばいい」

それは達観の境地だった。

「ところで、アンズ様にお聞きしたいのですが」

「なんででしょうか？」

「俺はイリーナ殿と同様の世界におくりこまれていていると思っっているのですが、イリーナ殿の為に戻った時の名残が姫様の為に戻った時にも見えました。」

一体どういう風になっているのでしょうか？」

つまり、立場が違う過去に戻る俺の為に、二人の共有している認識に矛盾が生じているのではないのか、という疑問である。

「ふむ、良い質問ですね」

アンズ様は深々と何度も頷いた。

「私の生まれ故郷で最も勢力があつた神はまだ何もない世界に、光あれと言ったらそうなったそうです」

「はあ、こちらの光の神みたいですね」

『『あなたの疑問は存在しません。そうになりました』』

「……えッ!?!」

「そう言う細かい上にどうでもいい疑問を抱く必要はありません。」

まあ、神様特権って奴ですね。何のために替えのきく立ち位置にしていると思っっているんですか」

俺の疑問は陳腐化され、思考の隅へと消えた。

正直それってずるいと思う。

「それで、彼女の願いは分かりましたか？」

「……もつと自由に生きたい、とかでしょうか？」

「設問は、彼女が最初に私に何を願ったか、ですよ。」

あなたの答えは調理前ではなく完成品の料理を見て料理の名前を  
当てようとしている」

「???」

「まあ、自ずとわかることでしょう。そのようにしているし。」

さて、次へと送り出しますよ」

俺の意識が沈んでいく。

さあ、行こうか。

これまでは姫様の光を見てきた。

これからは、彼女の心に住まう闇を覗きに行くのだ。

からんからん、とサイコロが転がる音がする。

## Zの目

その世界が何度目か、ソフィア殿に尋ねる必要は無かった。

ワガママ姫。

そう呼ばれる姫様の願いの成れの果てが存在するからだ。

彼女の願いが何なのかは知らない。

だが、彼女が姫様の願いの暴走した結果であるのは明白だ。

「最近、姫様は変わられた」

姫様のお付をして欲しい、と俺に頼んだ父上はどこか悲しそうに言った。

「父上は姫様を信じておられないのですか？」

「分かっているとも。」

手が掛からない子の親でしかない私でも、あれは幼子の駄々っ子であると」

父上は俺の頭を撫でると、こう言った。

「だが、このままでは必ず間違った方向へと進む。

ソフィア殿も居られるが、お前も側へとよく仕えるのだ」

「はい、父上。お任せください」

俺は心の中で、ごめんなさい、と謝った。

だが、流石はワガママ姫。ここでもひと悶着あった。

「いりません、帰りなさい!!」

父上が俺を姫様のお付にすると直接申し上げた直後のことである。

彼女は俺も見た事が無いほど嫌気を纏わせそう言った。

流石の父上もその態度には呆然とした様子だった。

「姫様、なにを動揺しておられるのですか」

それは、疑問の言葉だったのだろう。

そう問われた姫様は、一瞬呆けて目を見開き、すぐにその表情を引

き締めた。

「剣士が動揺を悟られるようではいけませんな」

父上は俺などよりも余程姫様のことを理解し、見透かしていた。

姫様は少し悔しき交じりの複雑そうな表情の後、毅然とした態度で言う。

「帰りなさい、ギルバード」

「はっ、しかし息子は置いて行きます」

「不愉快です、さっさと私の前から消えなさい!!」

「では、次の稽古の時にまた」

父上は優雅に一礼をして姫様の私室から退出した。

「あなたも適当にその辺りで適当に時間を潰して帰りなさい」

「ご安心ください、姫様。」

私は父上のお目付け役になるつもりはございませんから」

えっ、と漏らす姫様に、俺は笑みを浮かべた。

「俺は姫様の味方ですよ」

「なあ、その、なんだ……」

その後に出会ったソフィア殿はとても気まずそうに俺を見たり虚空に視線を彷徨させた。

「前回、何があったのですか?」

「……覚えていないのか?」

「私は今の所は過去から遡る形で来ている。」

女神様は無作為だと仰っているが、何者かの意志を感じ得ない展開ですね」

俺がそう言うと、ソフィア殿は沈痛な面持ちで押し黙った。

「……た……のだ……」

「はい?」

「……前回ッ、お前を殺したのは私なのだ!!」

絶句とはこのことだった。

「……教えてください、何があつたのかを」

「ツ……言えない。あれは極秘に課せられた任務だった」

「敢えてそれつてもう無効なんじゃ、とは言わない優しさを俺は発揮した。」

「気にするな、とは言えませんが、お互いに姫様を支える立場です。」

「今回は辛いかも知れませんが、挫けずに頑張りましょう」

と、俺は何とか彼女を宥めることにした。

「……礼と言つては何だが、お前に役立つ情報をやろう。」

「今度その為に呼びつけてやる」

「分かりました」

俺は頷いて、彼女との会合を終えた。

ある日のことである。

「姫様、どうして私の授業に出席してくださらないのですか!!」

「姫様のお部屋に年配の家庭教師の女性がやってきた。」

「必要ありません。」

「だってやつても結果は見えているから」

「何を仰います、日々の研鑽こそ音への理解を深めるのですよ」

「恐らく何らかの楽器の先生らしかった。」

「私は必要ないと言いました。」

「お帰りください、先生。私これから中庭で汗を流しますので」

「姫様は姫様でいらっしやるのに、剣術ばかり!!」

「もっと優雅で王族らしい趣味を見つければいいよ、国王陛下が――」

「――もういいです」

「それは、底冷えするほど冷たい声だった。」

「先生ほどの腕前なら、教える相手が私でなくても大丈夫でしょう。」

「その教養をもっと別な方へとお使いください」

「それは極めて単純な拒絶の意志だった。」

「そんな、そんな!!」

「姫様はお帰り願うと仰いました。

ささ、お帰りはこちらでございます」

俺は屈辱と怒りで震える先生を部屋の外へとお連れした。

「姫様、アレはよくありません」

「なぜですか？ どうせ私には才能が無かったのですから、やるだけ無意味というもの」

「いいえ、違いますよ。

敵を作るようなやり方ではいけません。

やりたくない授業があるなら、すっぽかしてしまえばいい。

やりたい授業もすっぽかし、私がお連れする。

そうすれば色々やりやすくなると、私は愚考いたします」

それを聞いた姫様は、小悪魔のようににやりと笑みを浮かべた。

「中庭へ行きます。外に居るソフィアと供をしなさい」

「仰せのままに」

俺と姫様は部屋の前の警護をしているソフィア殿を引き連れ、中庭へと向かった。

「アラン、ソフィア、相手をしなさい」

中庭へと着くと、姫様はドレス姿だと言うのにすらりと剣を抜いた。

勿論、模擬用ではなく真剣である。

「かしこまりました。

及ばずながら胸を借りますよう」

「光栄の至りでございます」

ソフィア殿と俺は共に剣を抜いた。

二対一であるが、こうでもしないと相手にならない。

ソフィア殿は姫様の護衛になるだけあってただの供回りではない。

魔王との戦いも着いて来れる猛者だが、俺と一緒にあっても姫様には及ばない。

神々は天賦の才を姫様に与えたもうたのだ。

俺達に彼女を傷つける意志は無いが、本気でやらねば彼女を満足できな  
ない。

「おい、そのメイド。」

万が一の為に誰かヒーラーを呼んで来い」

「か、かしこまりました!!」

俺はたまたま通りかかったメイドに向けて、そう申し付けた。

「これで遠慮なくやれますね」

姫様はとても楽しそうに笑みを浮かべた。

その日は俺達だけしかヒーラーの世話にならなかったのは、言うま  
でも無いことである。

その日から、姫様のワガママはエスカレートしていく。

最初は授業などをすっぽかしていく程度だけだったが、その対象が  
自分から周囲へと移行して行ったのだ。

「これ、前々から思っていたのですけどおいしくありません。

下げてください。そして二度と私に出さないでください」

食事の時、嫌いなメニューが出ればそれを作り直させ、果物などの  
デザートを要求し始めた。

「何ですかこのぬるい水は。」

私の元に戻ってくる時は魔法かなにかで冷やしてから持ってきな  
さい」

忙しそうなメイドに水を持ってこさせておいて、この台詞である。

結局宮廷魔術師に頼み込んで冷えた水を持ってきたが、遅いと叱ら  
れた。

「思うに、先生はもつといい働き場所があると思うのですけど」

俺は敵を作るのは良くないと言ったが、それでも姫様にも我慢なら  
ないことはあるらしい。

しつこく食い下がってくる先生方は、二度と来なくていいと告げ  
た。

彼女のワガママとは大きくその三種類。

決して国庫を浪費して財政を傾けたとか、影で使用人に残虐な仕打ちをしているとかでは断じてなかった。

だが、彼女のその振る舞いは尾ひれが付き、巷ではワガママ姫の異名が一人歩きする。

俺はその悪名に戦々恐々としていたが、何てことはなかった。

父上の言ったとおり、幼子の駄々っ子に過ぎないのだと。

「姫様、あなたは御自分の風聞についてご存じないのですか」

ある日、父上が姫様の稽古を終えた時、あの事態は起こった。

「何のことでしょうか？」

「惚けられますか。」

それも良いでしょう。息子は確かに役目を果たしているようですし」

そう言つて、父上は俺を見た。

俺はその言葉に戦慄した。

俺は姫様のストッパーとして機能などしていなかったからだ。

むしろ、俺は姫様の味方として小細工を張り巡らせたり、ワガママのフォロワーに回っているばかりだった。

どちらかというが増長させているとも言える。

だが俺は、それがもう悪いことだとは思えなかった。

善とは、悪とは、罪が罪足りえ、罰が罰足りえる為のものではないからだ。

俺は彼女の全てを知りたい。ただそれだけだった。

そして我が神の名の下に、判断を下すのみだ。

「姫様は姫様のなさりたいことをなさると良い。

ですが、使用人に対する態度は改めた方がよろしいでしょう。

解雇なされた先生方も、決してあなたを憎く思つて諫言しているわけではないのですから」

「ギルバード、あなたもそう言うのね」

父上に諫められている姫様は、どこか悲しそうだった。



「そのようなことは聞きたくありません」

「ではどうしますか。」

私はこれから、稽古の度にこのようなことを申し上げるでしょう」  
「ならば、二度と私の前に顔を見せないことね」

「わかりました」

父上は佇まいを正すと、姫様に一礼した。

「アラン、姫様を頼むぞ」

父上はそれだけ言うと、場内から去って行った。

俺はかつて解雇を言い渡されたという父上との違いを肌を感じていた。

あの時、父上は姫様にどこか失望していた。

だが、今回は違う。

父上は、俺を通して何かを姫様から感じ取ったのだ。

そして俺は、父上から姫様を任された。

「そう言うことですので、これからも私は姫様の共犯者として侍らせていただきます」

「あなたは何も言わないのね」

姫様は儂く笑って、俺に視線を向けた。

その仕草が、明日にも命が費える蝶のような儂さに、俺は見惚れる。

「父は全てを私に任せてくださいましたから」

「……そうですか。」

私も彼の息子として生まれれば良かったかもしれませぬ」

姫様はそんな冗談を口にして、中庭から出て行った。

俺はそれに付き従う。

その彼女の冗談が、自虐であると知るのはそう遠くなかった。

「お前はなぜ、姫様のワガママを許すんだ？」

真夜中、俺はソフィア殿に連れられ、灯りも点けず城内を歩いていた。

見回りの騎士に見つかれば大事になるのは明白だ。

だが、今は俺達が見回りの手伝いをしている側である。だからこんな無駄話ができるのだ。

「なぜでしょうね。私にとって姫様は理想の方であるのに」

「普通、失望しないか？」

身勝手にワガママで……厚顔無恥で傍若無人だ。

我々までその対象にされるのは遠くないぞ」

「そうかもしれません」

俺は機械的に頷いた。

彼女の言葉について考えていたからだ。

「もしかしたら、嬉しいのかもしれませんが」

「はあ？」

ソフィア殿は、暗闇の中でも分かるほどへんなものを見る目で俺を見た。

「凛々しく、強く、優しさを兼ね備えた姫様は確かに理想的で素晴らしい御方でしょう。

ですが俺はどこか、その姿に違和感を感じている」

「……………」

ソフィア殿は何も言わなかった。

「これは私の内なる願望なのかもしれません。

嗚呼、零落し孤立し、この華やかな城内の中でポツリと咲く姫様はまるで、穢れを知らぬ白百合のようなのです。

その儚さが、自分にはとても美しく見える。

研ぎ澄まされ、鋭さを増す刃のように、自分は——俺は強く、彼女に惹かれる」

そこに邪な感情は無い。

なぜなら、雨風に晒され、散る花びらを見て美しいと感じるのと同じだからだ。

「お前ってさ、ド変態みたいなこと言っているって自覚があるのか？」  
「そうかもしれません。」

ですが、思うのです。俺は彼女が魔王と戦い、その命を散らす寸前の絶技はきつと……この世の物とは思えないほど美しいのだと」

「お前……いますげえ気持ち悪い顔してるぜ」

呆れたようなソフィア殿の声が聞こえる。

「それで、自分に見せたい物とは？」

「ここだ。そら、口を閉じな」

俺はソフィア殿に促され、図書室の中に入ると、奥から話し声が聞こえた。

「ああ、陛下……ようやくお会いになれましたね」

「すまない、ここ暫く、娘のワガママのせいで仕事が増えたのだ」

「仰らないで、姫様の話なんて。」

今は私だけを見ていてくださいませ」

「ああ……そうだな。愛しているよ」

俺は思わず、ソフィア殿の顔を見た。

彼女は唇に人差し指を当てると、ゆっくりと音を立てずにその場から離れるよう促した。

「父親がああの有様だ。」

何となくだが、分かるだろう？」

「……姫様は愛に飢えている、と？」

「そこまでは知らん。」

だが、あれが無関係だとは思えんね」

ソフィア殿はにやにやと笑い、カンテラに火を灯した。

もう火を消しておく必要は無かった。

俺が十五歳で騎士となり、親衛隊として配属されても俺の仕事は変わらない。

そしてある日、姫様は自らの命運を決定する選択をした。

「国境周辺での魔物の活性化における慰問訪問？」

「はい、来月の終わりに予定しています」

俺は持ってきた書類を姫様に差し出し、そう告げた。

姫様は王族なので、伝統ある行事に参加したりする義務があったりする。

その度に俺も連絡役として忙しくなったりもするのだ。

「ふーん、護衛はいつも通り親衛隊なのですよね？」

「はい、勿論です」

俺は頷いた。

「あ、そうだわ」

ぽん、と姫様は手を叩いた。

こういう時の姫様は録でもない事ばかり思いつく。

それもそうだろう、彼女は何も考えてはいないのだから。

「あなたの同期で、赤鷲騎士団に入団した女騎士が居たでしょう」

「イリーナ殿でしょうか。選抜試合で剣を交えたので良く覚えております」

「彼女も今では活躍し、部隊を持つほどだとか。」

「だったら彼女に私の護衛を任せましょう。その方が、彼女も箔がついて喜ぶはずですよ」

「なるほど」

俺は頷いた。

「姫様の護衛とあれば、激情で死にたくなるほどの榮譽であるでしょう」

俺は、姫様に死を齎す書類を作成し、それが承諾されるサインを頂いた。

俺は邪悪の女神が姫様を抱きしめている姿を幻視した気がした。

「おや、イリーナ殿。こんな時間にいかがなされましたか」  
そして運命の日はやってきた。

慰問の為に outgoing、夜営の最中に姫様の眠る天幕の前に立つ俺は、能面のような表情で幽鬼の如き足取りでこちらに歩んでくるイリーナ殿に声を掛けた。

「そこを退いてくれ。アラン」

「ご用件を窺いましょう。」

姫様に対してご用なら、明日にお願いします」

俺は事務的に返事をした。

「急な用件だ。周辺の斥候から魔物が現われたかもしれないと報告が来た。」

姫様に危険が及ぶかもしれない。そう伝えてくれ」

「何ですって、分かりました」

我ながら白々しくそう言って、俺はイリーナ殿に背を向けた。

「すまん……」

即座に、俺は背後から殴られた。

どさりと地面に倒れた俺は意識こそ失わなかったが、体は動かさなかった。

「何者だ!! 姫様の御前と知っての狼藉か!!」

危機を察したソフィア殿の声が聞こえる。

「あッ、があ?!」

血飛沫が飛び散る音、何かが倒れる音が聞こえた。

「な、何事ですか——あ、ッ!?!」

姫様と、何かが揉み合う音。

「何でこんなことするか、そう言う顔をしているなッ!!」

お前は知らないだろうが、お前がこんなくだらない任務をくれたお陰で、私は故郷を救う機会を失ったんだ。これを見ろ!!」

イリーナ殿の怒声と、姫様の咳き込む声。

「げほッ、ごほッ、そ、それ……は……」

「そうだ、報復の女神の呪印だ!!」

神はこの行いを正当な物と認めた!!

お前の、お前の所為だ!! 私の憎かったのは、魔物だけだったのに、家族や誰かを守りたかったただけなのに!!」

涙声のイリーナ殿の声と、再び揉み合う音。

「お前があんなこと、願った所為だ!!」

後先考える脳も無いくせに、剣を振るだけしか脳が無いくせに!!

次に願う機会があればその能天気でお花畑の脳みそに、まともな脳みそを詰め込むように願うことだな!!」

ぶつ、と恐らく短剣が突き刺さった音が聞こえた。

「は、ははは、っは、はははは!!!」

きゅ、とビンからコルクが抜ける音と、何かを飲み干す音。

程なくして、何かが倒れる音がした。

俺はかろうじて動く体を張って動かし、天幕の中に入り込む。

中には血を流し絶命するソフィア殿、毒を煽り息絶える寸前のイリーナ殿。

そして、短剣を突き刺され、胸と口から血を流し倒れる姫様がいた。

俺は死に行く姫様を独りにさせないように、その手を握った。

「ご……ごん……な、こと……ごはッ……なら……」

涙を流し、血を吐く姫様は、恐らく俺が手を握っていることすら気づいてしまい。

「お、ひッ……べ……ぎばに……なひ……たひッ……なん、でッ」

願わなければよかった、と続けたかったのだろう。

それさえを言う時間さえ、彼女には許されなかった。

「ああ……そうなのですね、そうだったのでですね、姫様」

俺はなぜ、彼女が美しかったか悟った。

彼女は、御伽噺の中の存在だったのだから。

架空のプリンセスだったのだから。

タイトルがあるとすれば、それは「白百合姫」だろうか。

「美しい……」

めでたし、めでたし。

……

……

……

「さて、答えを聞きましょうか」

俺はアンズ様の前に立っていた。

『姫様の願いは、自分がお姫さまになることです』

俺は忘れていた。

俺が逆行する世界は、『四人の願いが叶った後の世界』なのだ。

イリーナ殿や、姫様には一度目より以前があるのだ。

そう、一度目とは逆行一度目ということであり、逆行する前にアンズ様に願いを言ったゼロ度目があったのだ。

「審判を始めてよろしいですか？」

アンズ様は慈愛の笑みを浮かべて俺に問う。

「ええ、おねがい——」

「六十点だ」

俺が頷こうとした時、それを遮る声が響く。

俺は振り返る。そこにはイリーナ殿が立っていた。

「お願いします女神様、私はお姫様になってみたいんです」  
どこか皮肉るように、誰かの真似をイリーナ殿はした。

「確かにそれで正解だろう。だけど十全ではない。」

アラン、お前はあいつの全てを知らない」

「それは、どういうことでしょうか」

「今のままでは十分な審判ができないということだ。」

……そうだろう、女神さま」

イリーナ殿はアンズ様に視線を向ける、追って俺も彼女に目を向けた。

「私はどちらでも構いません。」

あと三度を使いたいというのなら、それでも構いませんし、このま  
までも最低限の情報は出揃いました」

「……そう言われては、行かないわけにはいきませんね」

俺は、姫様の全てを知りたかった。

その為なら、後何度でもやり直そう。

「わかりました。ところで、あなたはこれについてどう思います？」

アンズ様の手には、あの童話「仲良し姉弟」の本があった。

「姉が弟へ向けた歪んだ愛を向けたものではないのですか？」

「ええ、それもひとつの正しい解釈ですね。」

では、これに似たひとつの話を教えましょう」

そう言って、アンズ様は息を吸った。

「これは私の姉弟子の弟子二人の話です。」

弟子弟子紛らわしいなあ。つまり私の姉さんには二人の弟子が居  
たわけです。

私の世界の風習で、魔法や魔術の奥義を継げるのは一人のみ。

二人はその為に研鑽し、競い合っていました」

一息、一拍。

「ところが、この二人の弟子、姉弟子の方は神に愛された才能の持ち主  
でした。」



それはもう、性格以外何の欠点も無いくらい、万能の天才でした。自意識過剰で見栄っ張り、自分は至高の存在で、自分以外を虫けらとしか思わないド畜生野郎でしたが、天才でした。

妹弟子はそんな性格最低女でも、不思議と慕っており、魔道の奥義も姉弟子が受け継ぐべきだと思っていました」

何か恨みでもあるのか、片方をやたらとこき下ろして語るアンズ様。

「妹弟子は、分からないことは何でも教えてくれる姉弟子を尊敬していました。」

内心見下されていることを気づいてもいました。

姉弟子も、そんな妹弟子を憎からず思ってはいました。まあ、どうせ将来使える駒になるとでも思っていたのでしようが。

そんなある時、あることが分かったのです。

ひとつだけ、妹弟子が姉弟子より優れていることがあったのです。

それは弓術でした。

妹は僅差でしたが、姉を上回っていたのです。

ですがこの時、姉には妹への殺意が芽生えたのです」

アンズ様は語りながらダイスを弄ぶ。

「自分より全てにおいて劣っている妹に、何かひとつとは言え上回られた。」

プライドが馬鹿みたいに高い姉は屈辱と羞恥と怒りと憎しみで満たされたのです。自分がどんなに妹よりも優れているにも関わらず、です。

似ているとは思いませんか、この絵本と」

「そ、そうですか？」

何となく大筋は似ているような気もするが、愛情と憎しみは別の物だ。

「いや、とても似ていると思う」

「えッ」

俺は思わず、そう言ったイリーナ殿を見た。

「その絵本は、姉弟の歪んだ愛情を書き記しているが、それは表面的な問題だ。」

なあ、もし弟が就職に成功し、稼ぎを得ればどうなると思う？」「暮らしが豊かになるんじゃないのか？」

「はあ……」

俺はあからさまに呆れられ、溜め息を吐かれた。

「いいか、それは表面的な問題だ。」

簡単に言えば、家族内での立場が逆転する。

両者の稼ぎは圧倒的に弟の方が勝るだろう。この絵本は男性社会への批判を描いている」

アンズ様からイリーナは絵本を受け取り、中を開く。

挿絵から察せる弟が仕事を求めた先は、鍛冶屋、大工、荷運び、傭兵、そしてパン屋。

あからさまに男が活躍する仕事ばかりだった。

「姉は養う側から養われる側になるだろう。」

姉はそれを嫉妬し恐れていたのさ。自分が必要とされなくなることを、な。

それに、これらの職場全てに弟の就職を断らせる影響力があったのも疑問だ。

彼女の稼ぎは恐らく……」

そこまで言つて、イリーナ殿は絵本を閉じた。

「……………アンズ様、愛とは何なんでしょうか」

「神様的には人によって違う物。」

私個人の見解としては、氷のようなものだと思います。

容易に解け、混ざり、固まるもの。熱いのではなく、冷たいもの。時には触れるものに張り付き、火傷させる激しいもの」

アンズ様はそのように所見を述べた。

「だから、あなたの抱く歪な愛情も、私は否定しません」

「愛情？ 姫様へのこの感情も、愛情であると仰るのですか」

俺は確かに姫様を敬愛しているが、それを愛と言えるのだろうか。

「あなたは、彼女の本当の姿を望んでいたのですよ。

だから私が作り出した偽りの彼女が剥がれ落ち、偶像から人の身に墮した時、あなたは彼女の魂を見た。

そう、あなたは気づいていたのですよ。

心の中で、彼女の姿が偶像であると」

「……………」

「行きなさい、あなたの忘れていた真実を知るために。」

私が、彼女が歪めてしまった本当の姿を探すのです」

アンス様の手から、サイコロが零れ落ちる。

からん、からん、とサイコロは六の目を出した。

俺の意識が落ちていく。

再び俺は、過去へと戻っていく。

美しき君の、真実を知るために。

## αの目

「父上、一つお尋ねしたいことがございます」

「なんだね？」

姫様に関して四度目となる逆行。

父上の養子となるのはいつもと同じだ。

俺は姫様の剣術指南役である父上に、尋ねてみた。

「姫様はやはり昔から剣術においては才気あふれる御方だったのでしょうか」

「当然であろう、誰でも知っている」

今日の稽古を終えて気を良くしたのか、父上は深く頷いた。

「お前は私の教えをその若さで物にし始めているが、それは日ごろの努力の賜物。

私が居ない合間にも努力を重ねているが故だ。

だが、姫様の才能は天性のモノ。残酷だが努力では辿り着けない領域にある」

そのように断言する父上に、俺は羨望や嫉妬を禁じ得なかった。

父上の元で幼少期を繰り返すこと、既に八十年ほどになる。

女神の加護か、それとも麻痺か。もはや時間の経過を苦痛に感じるような感性は当の昔に消え去っていた。

俺が父上の奥義全てを会得するのに四十年。それから更に全盛期の父上の指導を四十年受け続け、その倍近くの年月を戦場にて実戦を経験してなお、俺は姫様に及ばないのだ。

まさに英雄の中の英雄。

悪の魔王を打ち倒す英雄譚の主人公。

血筋、才能、勝利を体現した王道を歩むべき存在だった。

たとえばそれが、女神アンズ様によって舗装された道筋であろうとも。

俺はアンズ様の御力によって、父上の養子となる宿命を持って逆行している。

姫様も、おそらくは同じなのだろう。

この国の姫君として生まれ、英雄として戦う宿命を背負っているのだ。

そのように、彼女が神に願った。

では、俺が知るべきこととは何であろうか？

あの美しく高貴な仮面の裏側を、剥ぎ取ることなのだろうか？

アンズ様がそれを望んでいるのなら、俺のすべきことは決まっている。

まずは、もっと情報を集めるべきであろう。

そして、この日がやってきた。

「今日は私についてきなさい」

ついに来た、と四度目になる父上の言葉に素直に従う。

王城に向かい、姫様の私室へと向かっていく。

「姫様。私です、よろしいでしょうか」

父上が以前の周回と同じようにドアをノックする。

やはり同じように、室内から促す声があり、それを受けて俺と父上は中へと入る。

「ギルバート、その子は!?!」

今までと異なったのは、若かりし姫様が思わずと言った様子で広げていた本を放してしまったことだった。

ぱたん、と独りでに本が閉じでしまう。

「私の息子です。多忙極まる姫様の一時の慰めになれば、と」

「そ、そうですね。よろしく願いますね……」

姫様の様子に違和感を抱きつつも、父上は一礼して踵を返す。

俺もそれに付いて行く。

「アラン、もしかや姫様と面識があるのか？」

「まさか。父上の養子になる以前に、祭りの際にお城のバルコニーから拝見した程度ですよ」

そうか、と父上は一先ずは俺の言い分を呑み込んだ。

しかし間違いない、今回は俺と姫様は初対面だった。

そしてこの時点で、姫様がパン屋のステラを通じて俺の事を知っていたなどと、俺は知らない情報のはずなのだから。

「ソフィア。少しよろしいか」

「はい、ギルバート殿」

そうしていると、いつものようにソフィア殿を父上が呼び出した。

「今日から姫様の話し相手になる息子のアランダ。お前の好きに使いなさい」

「ギルバート殿のご子息ですか？」

そのソフィア殿の反応に、おや、と俺は小首を傾げた。

彼女は俺を見て、訝しそうにしていたのだ。

「失礼ですが、年頃である姫様に異性を側に置くのはどうかと思うのですが」

「陛下には話を通してある。あの方も気難しいお年頃だ。

愚痴を言える相手ぐらい必要だろう」

「それは自分の役目なのですが」

「その役目をするには、お前は少し堅物すぎる」

父上の物言いに、俺は少し可笑しくなって笑ってしまった。

確かにソフィア殿は少々難儀な性格をしているが、根は真面目で堅物だ。

そして、忠義の士でもある。決して裏切らない護衛としてはうってつけで俺も全幅の信頼を置いているが、愚痴を黙って聞いてくれる相手では無からう。

「こら、アラン。人を見た目で判断するでない」

俺が思わず笑ってしまったのを、父上は軽く微笑んで諭した。

そして俺の態度が気に障ったのか、ソフィア殿は俺を睨みつけて来た。

「申し訳ございません、ソフィア殿」

「いえ、既に決まっている命令とあらば従うまでです」

不承不承と言った様子であったが、ソフィア殿は頷いた。

「父上、では私はソフィア殿に城内での作法を教授願おうと思います」

「そうしておくといい」

そう言つて、父上は一人歩き去つて行つた。

「ソフィア殿、合同教会に行きませんか？」

俺の言葉に、彼女はゆつくりと頷いた。

.....

.....

.....

「お前が、夢に出て来たあの女神が遣わした男か」

俺がアンズ様の神像の前に立つと、ソフィア殿は目を細めてそう言つた。

「今回は、やはり一度目か」

その反応を見て、俺は確信を抱いた。

つまりこの世界は、姫様たちが願いを叶えて貰つて逆行した初めての世界なのだろう。

だからソフィア殿に俺との面識が無いのだ。

うる覚えであるが、確かイリーナ殿の時もそうであつた気がする。

「教えてくれ、お前は何をしたいんだ？」

あの女神はお前に何をさせようとしている？」

「俺はただ、姫様の全てが知りたいだけです」

俺は彼女の問いに真面目に答えた。

「教えてください、ソフィア殿。」

姫様は本当に貴女の知る姫様なのですか？」

「.....お前は何を、言っているんだ？」

俺の言葉にソフィア殿は困惑を隠し切れない様子だつた。

「少し長くなりますが、よろしいでしょうか」

「ああ、頼む」

俺は出来る限りのことをソフィア殿に説明した。

「時間を逆行している？ お前や、姫様が？」

「今はまだ、信じられないかもしれませんが。」

ですが、いずれ貴女も思い知ることになりますよ」

俺はソフィア殿が逆行に巻き込まれることを話していた。

俺が今のところ若い順番の世界から遡ってきていることも。

「姫様には天秤の女神様による試練を課されている。

それは私たちには想像も絶するような困難と苦痛に満ちた道程なのです。

私はその助けになるべく、女神様に遣わせられました」

「……………」

「お願いです、幼い頃より姫様に仕えている貴女に聞きたい。

姫様について教えてくれませんか？」

「……………わかった、何が聞きたいんだ？」

彼女は一度だけアンズ様の神像を見上げた後、俺に視線を戻してそう言った。

「姫様は、女神さまに願ったそうです。

自身がお姫様になりたい、と」

「その結果、あの方がこの城の姫として誕生したという結果が今の世界である、と」

「何か心当たりはありませんか？」

「ひとつ考えられるのは、影武者と言う線だ」

彼女は顎に手を当てて、そう口にした。

「だがそれを私にまで隠す理由はない。

間違いなく『姫様に替え玉は居ない』はずだ」

「あなたは宰相の娘ですものね」

「ああ、私を影武者にするならともかくな。

だがそもそもの話だが、この問答に意味なんてあるのか？」

ソフィア殿は根本的な話に切り込んできた。

「あの女神は人々の認識を弄れるのだろうか？」

だったら、姫様が前世で何者であろうが、今生では姫様は姫様だ。

そこを問うのに、いったい何の意味が有る？

誰も異常を異常と認識できないんだからな」

「それは、そうですか……………」



「そしてそれを異常と言い張るのは、お前だけだ」  
「……………」

「私から見ても未来の私は、お前にそのことで何か言ったのか？」  
「いいえ」

「だったらそれは重要な事じゃないんだろ」

彼女の言うことは尤もだった。

もしこの世界に異常があるのだとしたら、滅びた世界を行き来している俺の方が異常なのだ。

「分からない、女神さまは俺に真実を知れと仰った。

歪められてしまった真実を探せと」

「姫様の、本当の姿か」

ソフィア殿は腕を組んで考え込み始めた。

「いくら考えても、今ここでは答えは出ないだろう。

どうせ何をしても結果は変わらないのだろうか？

であれば、お前自身が見極めることだ」

「……………そうですね」

これ以上ソフィア殿を問い詰めても、有力な情報は無さそうだった。  
た。

「本当の姿、か」

合同教会を出る俺の背後で、ぼそりとソフィア殿が何か呟いた気がした。

そして俺も、彼女も気づいていなかった。

アンス様の神像が持つ天秤が、水平から傾いていたと言うことに。

§ § §

何かを学ぶために何よりも必要なのは、意欲である。

学ぶための環境がどれほど揃っていたとしても、当人が学ぼうとしなければザルで水を掬うようなものである。

その点でいえば、姫様の脳みそはザルだった。

「姫様、次は礼儀作法のお稽古になります」

ダンスの稽古を終えた姫様に、ソフィア殿が次のスケジュールを告げる。

彼女の役割は護衛だけに終わらない。

姫様の御目付け役であり、秘書のようなものなのだ。

「もう、うんざりです……」

姫様は自室のベッドに身を投げ出した。

レースとフリルのドレスがふわりと舞い上がり、俺はとっさに目を逸らした。

「姫様、はしたないですよ」

ソフィア殿よりも先に、俺が苦言を呈した。

「今日は気分が優れないと、先生に言っておいて」

「またですか？」

咎めるようなソフィア殿の視線が姫様の背に突き刺さる。

「……お腹が空きました」

「厨房に行って何か軽食でも持ってきましようか？」

今回は姫様の真実に迫る為に甘やかさないと決めていた俺であったが、つい長いこと側付きとして仕えていた癖でそんなことを言ってしまう。

「いいえ、ステラのパンが食べたい」

そう言うと思った、と俺は胸中で溜息を吐いた。

姫様がワガママ姫の時もそうであったが、彼女は時折無性にあのパン屋のパンを食べたがるのだ。

ハッキリ言って、ステラの実家は庶民向けのパン屋だ。

パン一つの値段は法律によって一律決められているので、パン屋はいかに原価を抑えて保存性を追求するか工夫が求められる。

庶民向けのパンはカビに強くひと月は持つが、実際にひと月経ったパンは釘が打てると揶揄されるような硬さだ。

それでも出来た当日くらいなら、創意工夫次第で普通に食べれる。だが、王宮で出るような貴族向けの柔らかいパンからして、食べやすさだけでも比べ物にならない。

所詮庶民を飢えさせない為のモノに過ぎないのだから。

「では、俺が買ってきましようか」

「頼む。お前では姫様を甘やかすからな。」

私はここで姫様の説得を続けるよ」

そう言つて、ソフィア殿は手をひらひらを振って俺を送り出した。城内から出て、俺は城下町へと繰り出した。

冒険者時代では見慣れた街並みを歩き、かつての実家があつた通りへと辿り着いた。

ステラの実家のパン屋はちょうど書き入れ時を逸したらしく、売れ残りのパンが少し棚に陳列されているだけだった。

「ステラ、いつもの奴だ」

俺の声にかウンターで帳簿を付けていたステラが顔を上げた。

「ああ、アラン君。いつものやつね」

彼女は店の奥へと引つ込むと、姫様の為のパンを持ってきた。

「いつも悪いな」

実はこれは最近知つたのだが、このパンは姫様の為の特別製らしいのだ。

なので店頭に並ぶパンに比べればかなり柔らかく食べやすい。勿論、普通に売ったら大赤字であろう。

だが、このやり取りに金銭の授受は発生していない。俺はてっきり今まで事前に支払いはしているものだと思つていた。

売り物にするわけではないので、法律違反ではない。考えたものである。

「いいの、姫様のおかげで貴族様向けの『ケーキ』の味の好みが変わるし」

そして、この商魂たくましいステラである。

ケーキにはパンのように法律で値段が決まっていない。

あまりお金の無い貴族には、手頃な値段で美味しい『ケーキ』が食べれると言うわけだ。

「あまり変な綱渡りをするなよ」

「えへへ、もしもの時はアラン君が守つてよね？」

ステラは太陽のようににへらと笑う。

流石人気の看板娘である。無意識に人を引き付ける何かがあった。  
「アラン」

名前を呼ばれて振り返ると、そこにはソフィア殿が居た。

「ソフィア殿、どうなさいましたか？」

「少し小言を申し上げたら、癩癩を起こされてな。」

顔も見たくないと仰せなので、私もこちらに来た次第だ」

「なるほど……」

姫様も、そろそろ限界なのかもしれない。

「ここが庶民のパン屋か。」

いつもは裏口から伺う故に新鮮だな」

そう言ってソフィア殿は、店内を見渡し始めた。

そう言えば、ソフィア殿は姫様の護衛をしているだけあって、名門貴族のお嬢様であった。

実家の領地に戻れば、それこそ姫様扱いであろう。

そう言えば、以前の周回で戦地にて野営をした時、硬いパンが食べられないと言っていた気がした。

「……先に行っていてくれないか、私はここでステラ殿と世間話でもして時間を潰すよ」

「あまり彼女に迷惑を掛けないでくださいね」

「当たり前だ」

帳簿を書いているステラを一瞥し、俺は彼女に軽口を叩いておく。

そして俺は一足先に、姫様の元へと向かうのであった。

「……………」

「どうかしましたか？」

パン屋の帳簿にでも興味があるのか、ソフィアはじつとそこに視線を向けていたのを、ステラは不思議そうに小首を傾げた。

§ § §

毎回のごとく俺は十五歳には騎士になり、親衛隊に属することに

なった。

そんなある時、遂に姫様の我慢の限界が訪れてしまった。

「アラン、城を抜け出すので供をしてくれませんか？」

「姫様？」

俺は迷った。

姫様に付き合うことぐらい、別に構わない。

そんなことをすれば俺の人生はオジヤンだろうが、そんなことは逆行を繰り返している俺には今更だ。

ここ最近、姫様は荒れ始めていた。

お稽古をすつぽかす割合は更に増え始め、小言を言うソフィア殿を目に見えて遠ざけ始めた。

お城に住むお姫様と言っても、その生活は華やかな物ではない。

ここ最近、魔物の勢力が活発化しており、貴族のパーティーの回数は激減していると言う。

姫様は箱にしまわれる宝石のように、王城で稽古の毎日だ。

そして最近はお城に勤める宮廷料理人の出す一流の料理さえも喉が通らない有様である。

お姫様と言う、絵本の中の理想と現実のギャップが彼女を苦しめているのだ。

「姫様、なぜ急にそんなことを？」

俺は彼女に尋ねた。すべてを放り出すほど、姫様は無責任では無いはずだった。

「……婚約が、決まったのです」

姫様は、絞り出すように言葉を吐き出した。

「なるほど」

結婚は、王族の義務である。

言うなれば姫様の教養は付加価値であり、高く相手に売りつける商品なのだ。

貴族の女性とは、突き詰めれば政略結婚の道具に過ぎない。

だが、それを拒むことは傲慢だろうか？

確かに結婚は王侯貴族の義務かもしれない。

だが、逃げ出したいほど弱っているこの姫様を見て、それを突きつけることは俺にはできなかつた。

「姫様の為なら、地の果てまでもお供いたしましょう」

「ありがとう、アラン」

こうして、俺と姫様の逃避行は始まった。

「どうしたんですか、お二人とも」

俺と姫様の逃避行は数十分も掛からず終わった。

「お願い、ステラ。匿って」

そんなことを口にする姫様に、裏口から顔を出したステラは困惑した様子で俺たちを交互に見た。

「とりあえず、中で話をしましょう」

彼女はそう言つて、俺たちを中に招き入れた。

そして姫様の懇願の結果、落ち着いたら王城に戻ると約束して匿うことを彼女は了承してくれた。

それから、二日後。

案の定、王城は大騒ぎになっていた。

俺は親衛隊として城内の様子を姫様を搜索する振りをして、報告したりすることを繰り返した。

ソフィア殿も何やら忙しいらしく、ここ最近はあまり顔を合わせない。

その日の俺は、夜中にパン屋の裏口から店内に入り、ステラの部屋を訪ねた。

今回は、姫様への報告ではない。

仕事が忙しい為、あまり話す機会の無いステラに姫様との馴れ初めなどについて尋ねる為だ。

この話題になると、姫様は言葉を濁す。そして大抵の場合は誤魔化す。

きっとステラは、以前の姫様と知り合いなのだ。

その縁が、無償の信頼となって二人の絆となっているのだろう。

「ステラ、居るかい？」

俺は彼女の部屋をノックした。

……だが、返事は返ってこない。

「ステラ？ 寝ているのか？」

彼女はこの時間、経理の仕事をしている筈なのを確認済みだった。

不審に思った俺は、ドアに耳を当てた。

からん、からん

中から、何の音も気配も無かった。

ドアノブのカギの有無を確認する。冒険者時代の癖だ。

カギは、掛かっていなかった!!

「ステラ、入るぞ!!」

自分を納得させる為だけの台詞を言いながら、俺は部屋の中へと押し入った。

中は真っ暗で、誰も居なかった。

「ステラ、居ないのか？」

からん、からん

俺は、その気配に気づけなかった。

「——ッ!？」

俺が対応できたのは、寸前だった。

俺の右腕が、白刃が過ぎ去る。俺が動かなかつたら心臓を貫いていた位置だ。

「刺客だと、何者だ!!」

咄嗟に剣を抜いて反撃するも、態勢が悪く力が入らない。

刺客の不意打ちに対応できずに、俺の反撃はあっさり弾かれた。

そして剣の間合いの内側に入り込まれ、闇に紛れた短刀が俺の腹部を狙う!!

「させ、るか!!」

俺は相手の刺突の腕を掴み、その勢いを利用して一緒に倒れこみ押え込むことに成功した。

偶然にもその先にはベッドがあり、気が軋む音が二人分の重さを示していた。

「武器を放せ!!」

刺客を抑え込み、俺は声を荒げ言った。

「く、くく、そんなに私と寝屋を共にしたいのか、アラン？」

その声に、俺は思わず驚いて拘束を緩めてしまった。

「——悪いな」

刺客の、ソフィア殿の体が反転し、その勢いそのまま俺の首を掻っ切った。

血を浴び、同じベッドに俺たちは寝転がる。

そして俺は意識を失う直前に、誰かの悲鳴を聞いた気がした。

§ § §

「ソフィア殿、なんで……」

女神さまの目の前に戻って来た俺は、呻くようにその言葉を吐き出した。

「あの女、影騎士か。護衛にはうってつけの職種ジョブだな」

俺の惨状を見ていたのか、イリーナ殿がそう呟いた。

影騎士とは、盾職ガードナーと暗殺者アサシンの両方の技能を複合して用いる者を言う。

「所謂、回避盾ってやつですね。護衛の為に敵のヘイトを集め、その身軽さで敵の攻撃を避ける。暗殺への知識があるのも、護衛向きなんでしょうね」

何やらあくびをしながら、アンズ様がそう言った。

「ああ、同じスピードタイプの剣士として相性が良かったから、彼女は戦場では背中を預けられる相棒だった」

そんな彼女に殺された俺は、想像以上にショックを受けていた。

「まさか忘れてたんですか、彼女が自己申告してたじゃないですか。

自分はあなたを殺したことが有るって」

「……」

「まあ、イジめるのは止めましょうか。

私も何だか数年ぐらいぼーつとしてたような気分で眠いですし」



俺は顔を上げることが出来ずにアンズ様の言葉を受け止めることしかできなかった。

「これ以上、続けますか？」

「はい、何もわからず止めるなんてできませんから」

そうですか、と俺の答えにアンズ様は眠そうに答えた。

「実を言いますと、前回、あなたが審判を始めると言ったら少し面倒なことになっていたんです」

「え、どういうことですか？」

「彼女を巻き込む羽目になったのは、あなたが原因なんですよ」

理解が出来なかった。

ソフィア殿を巻き込んだのは、俺の所為だっけ？

「まあ、一概にあなたの所為とも言えないのが時間の概念の面倒なところなんですけれどね。」

私はその辺を超越しちゃってるんですけど、あなた達にそれを適用しちゃうと越権行為になっちゃうんで」

「あの、仰っている意味が分からないのですが……」

「説明してもわからないでしょうから、気にしないでください。」

ハイッ、アンズちゃんのスーパーヒントタイム終了!!」

軽い口調でパンツと手を叩いて、この話題を終わらせるアンズ様。

「それじゃあ、お次にレッツゴー!!」

女神の神賽が振るわれる。

からん、からん

視界が歪み、感覚が海に沈むように落ちていく。

そうして、俺は次なる世界へと旅立っていく。

今度こそ、真実を探して。

## βの目

俺が父上に引き取られてから住むのは、王都でも一等地になる貴族の屋敷だ。

花屋の息子だった頃に住んでいたある通りと比べて道も外観も整っている。

俺は前回では出来なかったステラに話を聞こうと思ったのだ。

二人が一体どれくらいからの付き合いなのかは、俺は知らない。

だが、パンの受け渡しは必ずパン屋の裏口で行われる。そして、時間もある程度は決まっている。

俺はまず、今現在に姫様とステラが知り合いなのかどうかを確かめようとした。

そして、驚いた。

ソフィア殿を伴ってはいるが、姫様が直接ステラからパンを受け取っているのではないか。

そう言えばステラも、昔は姫様がパンを受け取りに来たと言っていたような気がした。

もう既に、二人は友人同士。

俺はステラが姫様の真実を知るために必要な存在であると確信を抱いていた。

俺は知り合いであるという点を生かして、慎重に彼女に近づくことにした。

「あれ、アラン君？ お貴族様に引き取られたって聞いたけど、どうしたの？」

「このパンの味が忘れられなくてね」

「うふふ、へんなの!!」

俺とステラも年頃は大きく変わらないが、彼女はもう既に店頭に出て売り子をしていた。

子供が店の手伝いをするのは珍しいことではない。

それに、焦る必要もないのだ。

その日の俺は、ただパンを買って帰った。

俺が親衛隊に配属されるのは『決まっている』。

今俺の年は十歳、その時間まででさえ五年もある。

姫様の側付きになってからも時間はあるのだ。

今度は油断しないように、ゆっくりと慎重に機会を伺うとしよう。

今回は布石を打つだけで十分だ。

そうして、俺は二年近くステラのパン屋に通い続けた。

時折世間話をしながら、まだ踏み込むことはしない。

攻め時はまだだ。

俺は慎重に警戒しながらステラの周囲を注意深く観察し続けた。

お陰でステラの家事情に詳しくなってしまった。

ステラの親父さんは頑固な職人肌の人で、一日中パンを焼いている。

姫様のパンを焼いているのも、勿論彼である。

そんな親父さんだから、ステラはおろそかになりがちなパン屋の経営に四苦八苦しているのだとか。

そんな愚痴を彼女から聞かされた。

俺は覚えていないが、もつと幼い頃には何度も一緒に遊んだこともあるそうだ。

今の俺には、遠い昔過ぎておぼろげにしか記憶にない。

そのように少しずつステラと親しくなっていくと、いよいよ俺が父上に連れられ、王城へと向かう日がやって来た。

俺はいつも通り、姫様にお目通りを叶うと、礼儀作法の指導の名目でいつものようにソフィア殿と二人きりになることになった。

「なあ、その、なんだ……」

その歯切れの悪い台詞には、覚えがあった。

「前回、俺を襲ったのはあなたでしたね」

「……ああ、やっぱり本当なんだな。お前の言っていたことは」

バツが悪そうに、ソフィア殿は顔を逸らした。  
やはり、『今回の逆行は二度目』であるらしい。

私はワガママ姫の居る、この世界に再びやってきてしまったのだ。  
奇しくも前回の逆行に続く形で。

「仕事とは言えお前を殺した後、姫様やステラ……二人に大層嫌われてしまったな。」

親衛隊の任を解かれた後、前線の指揮を執ることになった」

地獄だったよ、と万感の籠ったその言葉は俺にも痛いほど理解できなかった。

「今でも覚えている。魔人将の一人と相対し、その凶刃にて倒れたと思っただら、私は二年前の自室にて目が覚めた。」

しかもこの身も若返り、時間さえ巻き戻っていた。

この時、私は身をもつて理解したよ。お前や姫様たちの味わっている試練とやらの苦痛をな」

彼女のような健全な人間が逆行を繰り返すのはやはり常人には理解できない苦しみなのだ。

今回のような二度目と、以前会った五度目のソフィア殿と比べ、後者の彼女は性格も荒んでいた。

恐らく彼女は、私たちと同じように死を経験して逆行を繰り返している。

俺はそのまともな感性がどこか羨ましく思えた。

「ソフィア殿、教えてください。」

なぜあの時、私を襲ったのですか？」

「言えない、極秘の任務だった」

「では勝手な想像ですが、——王命でしょうか？」

俺は鎌をかけた。だが、最も高い可能性であろう。

「……もはや、意味の無いことか」

そして溜息と共に首を振った彼女のその言葉が、俺の予想を肯定していた。

「姫様には婚約の話が持ち上がっていた。」

万が一、傷物にでもされたとあれば、そんな輩は生かしてはおけな

い」

「でしょうね」

そしてその俺は第一容疑者だろう。

しかし、そうなるの一つ疑問が残った。

「なぜ、ステラの家で実行する必要があったのです?」

ソフィア殿は騎士であると同時に、対暗殺に優れた暗殺者だ。

俺を殺すだけなら、わざわざあんな確実に痕跡が残る場所では実行すまい。

「それはッ——」

ここで、俯き加減だったソフィア殿が弾かれたように顔を上げた。

「……後生だ。それだけは言えない」

「ステラですか? 一体彼女に何が!!」

俺はあえて、姫様ではなく彼女の名前を出した。

動揺している彼女は、俺の誘導尋問に足を掬われてしまった。

「勘違いするなよ……」

必死な形相で、ソフィア殿は俺を睨んだ。

「我が忠誠は、『姫様にのみ』に向けられている。

前回お前を殺したのは王命だったが、それが姫様の為になると思つてのこと。

そしてお前を信じ切れなかった己の弱さが招いた結果だ」

「……」

俺は黙って、彼女の言葉を噛み締めた。

俺が何も言わないのを見て、彼女は溜息を吐いた。

「その為なら、何でも協力する。

だがそれすべて姫様の為。ステラの事は、そつとしておいてやれよ」

どうやら、彼女にとってステラのことはよほど触れられたくないことらしかった。

生憎その理由は皆目見当もつかないが。

「……貴人として、王族に忠誠を捧げるのは当然のこと。

しかし、ソフィア殿は何故にそこまで姫様を慕うのですか?」

「そ、それは……」

「ああ、いえ、それ以上結構」

俺はこれ以上、これについては何も聞かないことにした。

だって、俺はソフィア殿があんな可憐な乙女のような表情をしているのを初めて見たのだから。

§ § §

俺は姫様からパンの受け取りを頼まれ、ステラの元へと向かった。

「はい、これ。姫様によろしくね」

裏口からパンの入ったバスケットを受け取ると、俺はそろそろ頃合いかと思つて話を切り出してみた。

「ステラ。少し、尋ねてもよろしいですか？」

「うふふ、敬語のアラン君ってなんだか可笑しいね」

俺はステラの独特なペースに頭を掻いた。

「毒見の問題もある。何故に姫様がお前の店のパンを御口に召されるようになったのだ？」

俺は心底心配そうに彼女に尋ねた。

「えー、うちのパンに毒が入っているって言いたいのか？」

「違う!! 姫様の身分からして仕方がないことなのだ!!」

むーっとむくれるステラに、俺は慌てて弁明をした。

「ふふッ、大丈夫だよ、わかってるって」

慌てる俺を見てステラはくすくすと笑った。

「お貴族様用の“ケーキ”には、異物が混入しないように細心の注意を払っているから。」

何か問題があったら、うちの店は簡単に潰されちゃうし」

彼女は真剣な表情で言った。

言われるまでも無く、それは当然の心構えだった。

貴族相手に商売をして、何か不備があったら庶民の責任が問われる。

不条理だが、そういうものだ。

「そんなに心配なら、今度うちでパンを作るところ見学でもする？」  
「そこまで言うことなら……」

俺はこれ以上は踏み込めないと判断して、ここは引くことにした。  
焦ってはならない。

だが女神さまによる逆行は今回ともう一度だけなのだ。

最後の一度は確信を得る為の保険として残しておきたいので、なるべく今回で何かしらイリーナ殿の時のように真実に至る物証を得たいものだ。

そう思っているうちに、十五歳になってしまった。

ステラのガードが思った以上に硬かったのだ。

これはマズい。今回は二度目なのだ。

『ワガママ姫がイリーナ殿に殺されるのは決まっている』。

タイムリミットはそう長くはない。

だが一つ、わかったことが有る。

『確実に、ステラは何かを隠している』。

姫様との馴れ初めもそうだが、彼女の姫様との接点が見当たらないのだ。

俺は手段を変えることにした。

「アランさん、こちらが報告書になります」

俺は冒険者ギルドで、受付から身辺調査の資料を受け取った。

俺はこの王都を根城にする冒険者に、ステラの身辺調査を依頼した。

勿論、貴族の権威を利用して極秘にだ。

依頼は受理され、王都出身の冒険者パーティが聞き込みなどに当たってくれたようだ。

その結果、驚きの情報が手に入った。

「ステラが、元孤児だった？」

俺は自室で資料を読み込み、その情報に驚きを禁じ得なかった。

曰く、ステラとパン屋の親父さんは血の繋がりが存在しなかった。

ステラの素性を辿ると、一つの孤児院に行き当たるそうだった。その孤児院の院長に聞き込みをしたところ、パン屋の親父さんの店からパンをくすねたことが切っ掛けでステラを彼は引き取ったそうなの。

当時、パン屋の親父さんも妻を亡くしたばかりで子供もおらず、寂しかったのかもしれない。

だが、それでもステラとの姫様の繋がりが見えてこなかった。

産まれは間違いなく王族の姫様。

孤児出身のパン屋の看板娘。

どうしても、その繋がりが見えてこない。

そして、ソフィア殿のあの態度。

分からない。

まるで、『推理の材料は全て出揃っている』かのようなのに、答えがまるで不透明なのだ。

「かああッ!!」

俺の思考は、裂帛の気合の籠った一撃によって現実に取り戻された。

「アラン、何を迷っている。迷いが剣に出ているぞ」

「申し訳ありません、父上」

「そんな調子で、親衛隊が勤まるとでも思っているのか!!」

俺は慌てて模擬剣を構えなおした。

「アラン、何を迷っているのだ」

稽古を終え、父上は手ぬぐいで汗を拭うと俺に話しかけていた。

「私は今、難題に直面しているのです。」

その解決の糸口が、見えているのに攻めあぐねている状況なのですよ」

「そうか、それがあえて何なのか、尋ねることはしまい」



父上は理解のある御方だ。

あえて俺の問題に踏み入ろうとはしなかった。

「今まで言わなかったが、お前を養子に取ったのは、夢に出た女神の啓示であった」

「存じております」

「……そうか」

思えば俺は、少しヤケクソ気味だったのかもしれない。

いい加減、いつまでも自立できない子供のように父上の元で修行し、無垢な子供と偽っていることに疲れたのかもしれない。

それでも父上は、俺の事を気味悪がることなく本当の息子としていつだって可愛がってくれた。

何度も何度も、死ぬ運命と分かかっていて見捨ててきた薄情な息子だと言うのに。

「独りで出来ぬことなら、友を頼るといい。

私とバルハルトも、そうやって幾度も窮地を乗り越えて来た」

「そう、ですか」

……友、か。

俺は女神の試練を果たすために、独りで何度も逆行を繰り返した。事情を知る仲間だと思っていたソフィア殿には斬り殺され、何度も共に戦ったイリーナ殿は今回憎悪に駆られている。

俺はこの世の無情を嘆くように、合同教会のアンズ様の神像に祈りを捧げた。

アンズ様は何も言わない。

これくらいの苦難は、超えて当然だと思っただろうか。

「——まったく、見てもらえないな」

その声に、俺は思わず振り返った。

そんな馬鹿な、と思わずにはいられなかった。

「イリーナ殿？」

「そう、私だよ」

信じられなかった。

俺の前に現れたのは、イリーナだった。

だが以前、この二度目で見た憎悪や狂気の片鱗が見えず、どこか悟り切ったような表情で俺を見ていた。

間違いなく彼女は、六度の試練の果てにあの女神さまの祭壇にて同士討ちの経験を経た彼女だった。

「■■■■様は、なぜあなたを?!」

「よく聞け、アラン。私に与えられた自由は限られている」

彼女は報復の女神の神像の前にて跪いて、祈りの態勢のまま俺に語り掛ける。

「今回、『私が姫様を殺すことは決まっている』。

その事実を上手く使え。私が出ることは、それだけだ」

それだけ言って、彼女は顔を上げた。

その彼女の手元には、今まで存在しないはずだった呪印が現れていた。

報復の女神が、彼女の復讐心を認めたのだ。

「……二日後、例のパン屋の裏口。夜にだ」

俺はそれだけ口にして、彼女の協力に感謝することにした。

「姫様、慰撫訪問となればしばらく王都には帰ってこれないでしょう」

既に姫様の依頼で、訪問の護衛は赤鷲騎士団に手配している。

これでイリーナ殿は故郷の村の窮地に行くことは不可能になった。

「出立までに、ステラのところからパンを貰ってきましようか?」

「からん、からん」

「……いえ、あの子にはしばらく会えないから、私が直接挨拶をしに行くわ」

その姫様の言葉を聞いて、俺は賭けに勝ったのを悟った。

俺はソフィア殿と共に、姫様に侍って夜に王都のパン屋へと向かう。

「ステラ、これから私は各地へと慰撫と戦意高揚の為に赴きます。

貴女のところのパンをしばらく食べられないのは残念です」

「そうですか、どうかお気を付けて」

姫様とステラは、ぎゅつとお互いに抱きしめ合う。

その時だった。

「ッ、何者だ!!」

気配察知に優れたソフィア殿が、いち早く気づいた。

俺は反応できなかつた——振りをして、驚き棒立ちになった。

「くそッ」

襲撃者の凶刃は、俺をかばったソフィア殿が受ける羽目になった。

直後、俺は動揺する素振りを見せて、彼女に殴られ昏倒したように見せかけた。

その後の流れは、あの時の野营地とほとんど同じだった。

報復の呪印を示したイリーナ殿が、動揺した姫様を罵りながら斬り殺し、毒を呷って自害した。

ステラの悲鳴が、夜の王都に響き渡った。

騒ぎはすぐに起こり、衛兵たちが集まり始めた。

衛兵たちは安心してしているステラを介抱し、事情を聴こうと詰め所へと連れて行った。

俺はどさくさに紛れて姿を隠し、一旦離れて被害者が姫様だと明かし、親衛隊の身分を利用し捜査と偽ってパン屋の中へと踏み入った。

俺が現場から消えていたことは、すぐに分かるはずだ。

時間は、少ない。

だが、イリーナ殿がくれたこの僅かな時間に、俺は意味が有ると感じていた。

「何か、何か、二人の繋がりを知る為の何かを見つけねば!!」

俺はステラの部屋に入り、中を検分した。

何一つ、怪しいものなどは見当たらなかった。

次第に、俺の心に焦りが生まれてくる。

彼女の部屋に、不審なモノなど何一つなかったのだ。

日記の一つでも付けてくれれば良かったのだが、庶民でそんなことをする人間は稀である。

棚にある読み物は、いつもステラが付けている帳簿くらいなものだった。

からん、からん

「……えッ」

棚を漁った拍子に帳簿の一冊が床に落ちた。

その際に偶然、帳簿が開かれた。

そしてその中身を見て、俺は絶句した。

「そんな、なぜステラがこれを……」

やがて俺は、今まで繋がらなかった姫様とステラの関係が点と点で繋がって行くのを感じ取っていた。

「そうか、そう言うことだったのか!!」

唐突に、俺は前回ソフィア殿が言っていた言葉を思い出した。

『あの女神は人々の認識を弄れるのだろうか？』

だったら、姫様が前世で何者であろうが、今生では姫様は姫様だ。そこを問うのに、いったい何の意味が有る？

誰も異常を異常と認識できないんだからな』

『そしてそれを異常と言い張るのは、お前だけだ』

「ソフィア殿……あなたは知ってしまったんですね」

彼女は知ってしまったのだ。

俺よりもずっと先に、この世界で歪められた真実を。

「我が女神 ■■■■ よ。俺が今回、ここで出来ることはもうありません」

俺のその言葉と同時に、俺は引つ張り上げられるような感覚に襲われる。

意識が沈んでいき、目を覚ますと俺はアンズ様の前へと戻ってこれていた。

「どうして、私が彼女の認識を弄れなかったか、これで分かったでしょう?」

アンズ様が俺に語り掛ける。

「奇跡だ……。彼女は俺たちよりもよほど」

「同感だよ」

俺の横に並び、イリーナ殿が同意を示した。

ソフィア殿の忠誠と愛は、全能の女神の力にさえ打ち勝ったのだ。

「イリーナ殿、協力感謝いたします」

「あまりいい気分ではなかったがな。」

女神よ、一つ聞きたい。多少の筋道の変化はどのように反映されるのだ？」

俺よりも賢い彼女は、アンス様に尋ねた。

「基本的に、後付けが優先されますね。」

でも一つの過去はそれだけで完結されているので」

アンス様は超常の知識を披露する。

俺には全く理解の及ばない話だ。

「あのパン屋の娘が心配なのですよね？」

安心してください、これが時間の改変などの面白いところですね。」

『全ての時間軸はあらかじめ改変前であろうと、改変後が適用されて進むのです』。

つまり、三度目の逆行の世界は、先ほど二度目の世界の改変が適用されて進んでいたのです」

つまり、彼女のトラウマの数は変わりません、とアンス様は語る。

「それって、全く安心できませんよ……」

結局イリーナ殿は、ステラの目の前で人を殺したと言う結果が以降全てで適用されていると言うことになってしまっているのである。

「おっと、流石に今のはしゃべりすぎましたかね？」

「お戯れを。私は殆ど、ステラに対して確信を得ています。」

後はそれを、いかにして彼女の口から聞き出すかになりますか……」

俺はどうやって、あの硬いパンのように口の硬いステラから姫様の事について聞き出すか。

「だったら、次は今までとは違う立場を用意してあげますよ」

アンス様はどこか意地悪く笑って、天秤に神賽を乗せた。

ダイスの目は、赤い眼のような円だった。

## Ωの目

「それでは、審判を始めましょうか」

アンス様は天秤の支柱を手にして掲げ、そう宣言した。  
俺は三度、彼女の元へと戻って来た。

姫様に関する全てを知って。

「起きなさい、レナスティイ姫」

女神の呼びかけに、骸となつて青ざめていた姫様に生気が蘇る。

やがて、うつすらと彼女は目を開け、ハツとしてから起き上がり周囲を見渡す。

「め、女神様。これはいったいどういうことですか？」

姫様は状況を確認する。

イリーナ殿と、かつて仲間だった残り二人の遺骸。

「アラン、どうして貴方まで!?!」

彼女は困惑の極みに有った。

それもそうだろう。命を落としたと思つたら、生き返つてこの場に居ないはずの俺が居るのだから。

「それに、ここはツ!?!」

「あ、ここですか？」

いい加減、あの薄暗い遺跡の奥というのもあれですので、こここの管理人に言つて場所を移させてもらいました」

アンス様の言う通り、俺たちは彼女の御力である場所に移動していた。

「見覚えがあるでしょうか？」

それとも、幾度もの繰り返しで忘れてしまいましたか？」

にやにや、と意地悪くアンス様がそう言った。

「姫様、お初に御目に掛かります」

俺は姫様に向けて、頭を下げた。

それもそうだろう。だってこの世界では、俺と彼女は初対面なのだから。

「あ……」

それに気づいた彼女は硬直してしまった。

「いえ、久しぶりと言った方が正しいでしょうか？」

そして俺は、彼女の偽りの全てを剥ぎ取る言葉を口にした。

——なあ、ステラ。

§ § §

随分と懐かしい場所に、戻ってきてしまった。

実際にその目で見るまで、俺は記憶の底からこの場所の事を思い出せなかった。

「都立孤児院……」

昔、俺が冒険者になる前に世話になっていた場所だった。

両親を事故で亡くした俺は、年齢もあつて遺産の手続きが終わるまでこの孤児院に居たのだ。

その期間は短かったが、親戚にたかられて減っていく遺産を院長先生は可能な限り守ってくれた覚えがあつた。

もはや、その院長先生の顔すらも覚えていない。

「よく来たねえ、辛かっただろう？」

そうだった、この年老いた老婆が院長先生だった。

「お世話になります」

救貧院を始めとした、貧困救済を目的とした施設は王都には幾つもあるが、まともに機能しているという噂は聞かない。

この院長先生が一人で切り盛りしている孤児院は、それに比べればまだまともな所だった。

「みんな、今日から新しい仲間が入るよ。

ほら、アラン。ご挨拶しな」

院長先生に連れられ、孤児院に住む孤児たちに俺を紹介し始めた。

「よろしくお願ひします」



俺が頭を下げて一礼し、顔を上げると何人もの子供たちに交じって見知った顔があった。

「なん、で……」

俺の顔を見て驚く、ステラの顔がそこにあった。

十歳と言うのは、孤児たちの中でも年長の部類だ。

だから必然的に俺はステラと一緒に年少の子供たちの面倒を見る羽目になる。

「ステラ、どうかしたの？」

「……うん、何でもない」

有り余る元気を使い果たした子供たちを寝かし付けた後、洗濯物をする為に彼女と一緒に外でタライに溜めた水で衣服の汚れを洗っていると、俺は視線に気づいて彼女に視線を向けた。

ステラは何かを言いたげにしていたが、首を横に振った。

「二人とも、ちよつといいかい」

二人で洗濯をしていると、院長先生がやってきた。

「ちよつと買い物頼まれてくれないかい？」

余った分は二人のお小遣いにしていいからさ」

「はい」

俺はこの孤児院に来てすぐにしつかり者だと印象付けられ、このような雑用を手伝わせてもらっている。

それにしても、お小遣いをくれるとは。孤児院の経営はあまり良くないであろうに。

それでも、独りで子供がお金を持って出歩くのは危ないからステラも一緒に行かせるのは妥当な判断だろう。

「ステラ、行こう」

「う、うん」

買い物の品を院長先生から確認すると、俺は彼女を促して一緒に町中へと繰り出す。

「……………」

目的の品を買い終えると、ある場所の前にてステラが足を止めた。俺はその視線を追う。

そこは、パン屋だった。

丁度焼き立てのパンが焼きあがる時間で、中年のオバサンが店頭に立って客の呼び込みをしている。

「お腹空いたの？」

俺はステラに尋ねた。

「……ううん、違うの」

彼女は悲しそうな表情をしていた。

今にも泣きだしそうで、肩は小さく震えていた。

「アラン君」

そして彼女は、俺に向かい合って何かを決意したように俺を呼んだ。

「なんででしょうか、——レナスティ姫」

俺は機先を制するために、彼女の名前を口にした。

俺とステラの間が、時が止まったかのように固まる。

王都の喧騒が、どこか遠くにあるような錯覚に陥る。

「なんだ、全部知ってたんだ。

道理で、どこか変だと思ってたんだ」

ステラは年相応の子供の仮面を脱ぎ捨て、諦めたようにそう言った。

「あなたも、私と同じなんだね。アラン君」

「事情は大分異なるでしょうがね」

俺も子供らしさの擬態を捨て、彼女にそう言った。

「酷いことをするなあ、あの女神様。

お義父さんの奥さんを生き返らせられるなら、最初からそうしてくれれば良かったのに」

それは自分の居場所を失ったことに対する悲しみと、愛する義父に不幸が起こらずに済んだことに対する安堵が入り混じった複雑な感

情だった。

「場所、変えようか」

俺は彼女の提案に頷いた。

そして背を向け歩き出す彼女に、付いて行く。

「ここならいいか」

そう言つて、路地の端へと歩み寄つて、塀の縁に座つて彼女は俺に  
向き直る。

「どうして、私がレナスティだつてわかつたの？」

「帳簿ですよ」

俺の答えに、ああ、と彼女は納得の溜息を吐いた。

「あなたの付ける帳簿には、宮廷で使用される筆記が使われていま  
した。

多少の読み書き程度しか教わらない孤児院で、しかも周回が始まっ  
てすぐにパン屋の親父さんに引き取られるあなたに、庶民の文字を学  
ぶ時間は無い」

「……一つだけ言い訳させてもらうと、私はとつくに普通の書体を書  
けるよ？」

でもついつい書きなれた書体で書いちゃうんだ。お義父さんも、あ  
んまり文字を読める人じゃないし」

ステラは肩を竦めてそう言った。

「それで、貴女が貴族階級の教育を受けた者だと理解しました。

では、それはいつでしょう？ 俺はその時、思い当たつたのです。

かつて、我が天秤の女神が仰つていたのです」

『私がこの世界で出来ることは、この世界の限りあるリソースをやり  
繰りして物事を釣り合うようにすることぐらいですかね』、と。

「つまり、初めから存在しない席を創ることはできない。

お姫様に成りたい、という願いを我が神が叶えるには、別の誰かか  
らその席を譲ってもらうほかないのです」

俺の推理を聞いて、ステラは溜息を吐いて、正解、と呟いた。

「そう。私が、かつてこの国の第一王女であったレナスティ・マリナ・ヒルデンです」

彼女は胸に手を当て、孤児とは思えない気品のある仕草で一礼をした。

それが、本当の彼女の正体だった。

ソフィア殿の、本来の忠誠が向けられる先の御方だった。

「尤も、その肩書は今なんの意味も持ちませんけれどね」

それもそうであろう。

今の彼女は真正正銘の、雑種犬だ。

「アラン君、それを暴いたところで、あなたに何の益があるのですか？」

彼女は俺の両目に視線を合わせて真意を問うた。

「……今の姫様が、世界を救う為に魔王軍と戦っているのは知っていますね？」

「ええ、最初の方はともかく、今の彼女は武芸に秀でていいるわけではない私に代わり立派に戦っていると聞きます」

それを聞いて、俺はそこも歪められていたのか、と悟った。

本物のレナスティ姫は、剣技に優れていなかった。

今の姫様に合わせて、その評判が移し変わったのだろう。

よくよく考えてみると、ただの政略結婚の道具であるはずの姫様の評判に武芸の腕があるのがおかしいのだ。

「……諦めるんです」

「え？」

「俺は未来から、女神さまに遣わされて以前の世界を行き来しています。」

姫様たちは、試練が難しすぎるからと投げだし、女神さまに文句を言いに行った拳句に仲間割れをして殺し合います」

「……」

ステラは目を見開き両手に手を当て、上品に絶句していた。

「そんな、バカな……」

「我が天秤の女神は、そのことに大層お怒りでおいでです。

その無様の清算の為に、私は遣わされている」

自分で口にして、溜息を禁じ得なかった。

我ながら、よくもまあこんな徒労に奔走しているものである。

「魔王軍より世界を救うには、姫様を始めとした四人の英雄の活躍が必要不可欠だと我が女神は仰いました。

このままでは、世界は滅び去ります」

俺の告げる事実には、彼女は耐えきれなかったのだろう。

「あ、姫様!？」

彼女は青い顔になってふらりと体を傾けた。

俺は慌てて彼女の体を支えた。

「わ、私が、あんな誘惑に乗ったから……」

彼女は何やら後悔の念を口に漏らしていた。

「ありがとう……これは、私の罪でもあるのですね」

「罪だなんて、そんな」

「良いのです。私は貴方に協力いたします。

あのソフィアも、手足のように使って貰って構いません」

何とか態勢を整えた彼女は、改めて俺にそう告げた。

「やはり、ソフィア殿は自力で貴女の事に気づいたのですね」

「ええ、信じられないことでした。

彼女も私の帳簿を見ただけで、私の正体を見破りました。

本当に、本当に驚きました……」

万感を噛み締めるように、彼女はそう口にした。

「あの娘とは、赤ん坊の頃から一緒だったのです。

何をするのも一緒に、本当の姉妹のように育ったのですよ。

そして、今の私となり、彼女を失ったことだけが最大の後悔でした」

「だけど、あの人は気づいた。本当の忠誠を捧げる相手に」

「私に何かにはもつたいないほどの、得難い忠臣ですよ。彼女は」

まったくです、と俺もそれには全面的に同意を返した。

道理で、今の姫様に対して辛辣だったくせに、その忠義に欠片も嘘が無かったわけである。

きっとソフィア殿には、この世の真実と虚像がモノクロに見えたに違いない。

「それで、私は何をすればいいでしょうか」

「いえ、今のお話を聞いただけで、必要な情報は出揃いました。

後は時が来れば、審判の時は訪れるでしょう」

俺の言葉に、わかりました、とステラは頷いた。

§  
§  
§

「と、言ったことがあります」

わざわざ俺が説明するまでも無く、アンズ様の魔法により虚空にその時の光景が映像となつて映し出されていた。

「我が使徒は、見事私の与えた難題の一つを乗り越えました。

その事実を以つて、彼女を裁定なさい」

アンズ様は女神らしい威光を放つて、俺にそう告げる。

「姫様」

俺は、彼女の前に立つ。

ひッ、と彼女は後退った。

「あなたは自ら望んで責任のある立場になった。

必要に迫られたとはいえ王宮で実権を得たと言うのに、なぜあんなところで仲間割れした挙句に実際に死んでしまったのですか!？」

俺はボロボロになった仮面を引きはがすように、俺は彼女に訴えた。

「貴女は俺の憧れだったのに!!」

俺だけじゃない、あんたは父上や他の人たちの期待をも投げ捨てた

!!」

「だって、私は……」

「あんたが望んだことだろう!？」

俺は自分の感情を抑えられなかった。

多くの人々が魔王軍の脅威に脅かされ、各国連合軍も連敗を重ねる中で彼女は国民の希望だった。

絶望の闇の中で、この人は一条の光の元に咲く白百合の花だった。

「……私が、私が悪いって言うの？」

それでも、糾弾を受けた姫様は認められなかったようだった。

「私はちゃんと努力したものだ!!」

嫌なお勉強もお稽古も頑張って耐えたし、本当は戦いたくなんてなかった!!

お城で優雅な生活をしておいしい食べ物を食べて、それを夢見ちゃダメだって言うの!?

貧しさやひもじい思いをするのが嫌だって言うのはそんなに悪いことなの!?

それなのに、私以外が戦えない状況に何度も陥って、仕方なく私が戦うしかなかったのよ!!

それだけなのにみんなが周りで勝手に持ち上げ始めたんじゃない!!

ねえ、普通に考えてお姫様が前線で指揮を執って自ら戦うわけじゃない!!

そんなこと私がいつ望んだって言うの!?! 誰がこんな延々と戦い続けるしかない地獄を望んだって言うの!?!

ねえ、女神様、私がいつそんなことをあなたに頼んだって言うの!!」それは、「姫様」がずっと隠していた本音だった。

「もう、もうッ、嫌だ!! 嫌だッ!!」

私はもう疲れたのッ、十分耐えたのッ!!  
なんでみんな私に責任を押し付けるのよ、そんなに生まれが大事だって言うの!?!

じゃあ私たちが味わった貧困も押し付けさせてよ、それもできないのに偉そうにふんぞり返らないでよ!!

どうせ、貧しさになんて耐えられないんだからッ!!」  
彼女は頭上のティアラを床に叩きつけて叫んだ。

「レナ……」

その姿を見て、痛ましそうにイリーナは目を逸らした。

彼女もまた、姫様の苦しみの全てを理解できてはいなかったのだ。

「こんな地獄から解放されたくて、仲間を剣を向けようとしたのはそりやあ罪でしょうよ!!」

私はもう嫌だからねッ、もう絶対にあんな化け物どもと戦ったりしないから!!」

瘡癩に身を任せて泣き叫ぶ姫様に、ついに堪忍袋の緒が切れた方がいた。

「あなたの罪?」

アンズ様だった。

「あなたの罪は、別に仲間を殺したことじゃありませんよ。」

あなたの罪は自分を偽った挙句に逃げ出そうとしたこと」

「ッ——!?!」

彼女は笑みを浮かべたまま、物理的な圧力が掛かるほどの威圧感を放っていた。

「そして、私に願っておきながら、それを取り消すなんて真似をしたこと。」

……あのねえ、神を馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ」

明らかに、イリーナ殿の時とは対応が違っていた。

自分の身勝手さのままに叫ぶ彼女に比べれば、確かにイリーナ殿は彼女に気に入られていたのだろう。

「我が使徒よ、裁定を」

そしてこれ以上、アンズ様はその見苦しい姿を見るつもりは無いようだった。

「姫様、貴女に罰を申し伝えます」

俺はその神意を代行し、罰を告げる。

「あんたは、俺たちに希望を見せた責任を取ってもらわないといけな

い。  
それが出来ないのなら、最初から王族になりたいなんて言うんじやねえッ!!」

散々彼女のワガママに付き合わされた鬱憤も混じっていたのは、流石に否定できない。

それでも俺は、もう一度彼女に立ってほしかった。



「……お願いです、姫様。」

俺にとつての姫様は、貴女だけなんです」

床に崩れ落ちて泣き崩れる姫様に、俺は縫りついて懇願するほか無かった。

「なんで、なんでえ、なんであなたまでそんなこというのお」

姫様は子供ののように泣きじやくった。

剣を握らせればどんな敵だって斬り倒せるはずの彼女が、全ての虚飾を投げ捨てて泣いていた。

それから少しこの空間に、ただただ姫様の泣き声だけが鳴り響いていた。

「——女神様」

すると、この施設の管理人がドアを開けて入って来た。

「院長」

俺はその姿を認めて、そう呟いた。

「……え」

そして、泣いていた姫様が顔を上げると、絶句した。

「なんで、あなたが……」

「姫様。王族は貧しさに耐えられるはずがないと仰いましたよね」

俺は立ち上がり、院長を見やった。

「彼女は、見事この孤児院を立て直して見せましたよ」

そこに居たのは、ステラだった。

彼女は自分の周回の出発点に過ぎなかったこの場所を、彼女は自分の居場所にして見せたのだ。

「女神様」

彼女は改めて、アンズ様に向き直った。

「彼女の罪は、本来は王族の責務から逃げた私のものです。」

「この子に罪ありき、と仰るのならば、それは私も同罪でしょう」

「……ふーん」

「どうか、罰を与えるのなら私にお与えください」

ステラはそう言って、腰を折って深々と頭を下げた。

「ダメです」

しかしアンズ様は両腕を交差させてそれを拒否した。

「私にとって何が罰で罪なのか、私が決めます。」

あなたはただ巻き込まれ、それがたまたまあなたの利益に繋がっただけのこと。

飽くまで、私を怒らせたのはそっちの馬鹿者なんですから」

「そんな……」

「じゃあ、こうしましょうか？」

何とか彼女を庇おうとするステラに、アンズ様はにつこりと笑ってこう言った。

「私は彼女を今すぐ赦しても良い。」

その代わり私は帰ります。顔も見たくないんで」

「そこまで、貴女様はお怒りなのです……」

まさにこれが、女神を怒らせると言うことだった。

アンズ様の行う仕打ちは、過酷で地獄のような道筋を与えるものだ。

だが彼女は気分を損ねたのなら、別にすぐに神々の世界へ帰っても良いのだ。

こうして彼女が慈悲を見せているのは、単に人間の感情に理解があると云うだけのことだった。

「なんで、なんでそんなことを言うのお……」

お前が罰を受けねばこの世界は滅ぶと言われたに等しい彼女は、全てを拒絶するかのように膝を抱えて顔を埋めた。

「私はもう、世界がどうか、責任がどうか、そういうのが疲れただけなのに……」

姫様は完全に心折れていた。

……無理も無い。

あの五度目の、邪悪の女神の加護を受けた魔王の力は絶大だった。世界を滅ぼせると言われても領けてしまうほどだった。

あの威容を目にして、挫けない方がまともではないだろう。

それを抜きにしても、姫様は十分努力したと言うのは本当だった。

姫様たちが諸侯や各国をまとめなければ、魔王軍に戦いを挑む以前の問題なのだから。

敵は、この世界の戦力の総量を上回る魔の軍勢。

であれば、この世界の総力を結集せねば相手にもなるまい。

「どうしても、嫌だど？」

「これ以上、何もしたくない」

「そうですか、それじゃあ仕方ありません」

「マズい、と俺は思った。」

今、アンズ様に帰られては『この世界が終わって』しまう。

俺は何とか話題を逸らそうと思いを巡らせたのだが。

やはり、と言うか……。

女神の行いと言うのは、時に人間の想像を遥かに上回るものであった。

「おーい、リ्यूちゃん!!」

アンズ様は口元に両手を添えて、そんな言葉を発した。

「——そんな軽い口調で呼ばれても困るのだが」

その瞬間、室内に闇が溢れた。

そしてそれが一つに収束し、人の形を模した靄が現れた。

「あ、あ、ああ……」

そのおぞましい姿に、初見のはずのステラは腰を抜かして床に尻もちを着いた。

「そ、その闇は、魔王の……!!」

そして姫様も、その力の根源が何なのか理解してしまった。

「邪悪の女神よ、あなたのとここの業務は罪人の罪の清算もやってましたよね？」

そこでこの娘の性根を叩きなおしてあげてください♪」

恐らくアンズ様は、この世で想像できる限りのもつとも最悪で残酷な仕打ちを選んでいった。

「……ふん、まあいい。この世界も、もう既に『私の管轄』だ」

闇の手が、姫様に迫る。

逃げることはできない。

嗚呼、この偉大なる邪悪と悪逆の女神から、どうやって逃げると言うのだ。

「あ……か……」

だから姫様も、恐怖に駆られたままその魔手が自分に迫るのをただ震えて待つことしかできなかった。

「待ってくれ!!」

逃げることはできない。

だが、その前に躍り出ることぐらいはできた。

「俺が、姫様の代わりに罪を清算する!!」

この方はこの世界に必要な人なんだ、お願いです。偉大なる女神よ!!」

それでも俺が出来たことと言えば、彼女の前に跪いて、懇願することぐらいだったが。

「——うぬぼれるな。お前が誰かの罪を肩代わりするだど?」

闇の手が、俺の体を包む。

「お前はこの者の罪を暴くために、何をした?」

自らの目的の為に他者を陥れ、心に傷を負わせた。

それを棚に上げて、その傲慢。赦し難し!!」

全てを見抜くような赤い双眸が、俺の罪を暴き立てる。

「これも連れて行く。良いな、二代目?」

「うーん、……面白そうだから、オツケー!!」

俺のアンズ様に向けた継るような視線は、彼女の許可の前には無意味だった。

「ああ、全部で六回でお願いしますね。

こちららも話の都合と言うものがありますから」

「……はあ、承知した」

そして、邪悪の女神の化身は俺と姫様を掴んで霧散した。

その後には、俺も、姫様も、そこには存在しなかった。

「最後にチャンスを与えるつもりですか？

意外ですね、いい加減愛想が尽きたものかと」

「ああ、姉さん」

全ての時間が止まったその場所で、天秤の女神の前に更なる超常の存在が舞い降りた。

「これがチャンスを与えたように思えるんですか？

リユーちゃんの浄罪は私の与える試練なんかよりもずっと酷いですよ。」

もしそれを乗り越えられたのなら、まあ赦してあげてもいいかな、って程度です」

「あの神は悪趣味ですからね」

天秤の女神の前に降り立った、もう一柱の女神は自身の権能を用いてその結果を見通した。

「あ、結果は教えないでくださいよ、姉さん!!

先にどうなるか分っちゃったらダイスを振る意味が無いですからね!!」

「まったく、この娘は」

でもまあ、とあらゆる結果を見通す観測の女神はこれで良かったのだと思っただ。

「彼女の業務に支障がきたす方が問題でしょう。」

貴方にオモチャにされるより、彼女の管理下の方がよほどまとものだ」

あの邪悪の女神にとって一番迷惑なのは、この幼い女神にこの盤上を叩き壊されることなのである。

もしこの女神が癩癩むすめを起してこの世界の全てを叩き壊せば、そこに待っているのは滅びよりもなお酷い『消滅』だ。

そして彼女はそれを度々やらかしている。

ハッキリ言って、現地人にとって『邪悪の女神などよりよほどこの幼い女神の方が危険』なのである。

「彼女の業務を邪魔して、『文明』の方からクレームが来ても知りま

せんからね」

「私、あの人キラーイ」

「まあそうでしょうけど」

両者の因縁を把握しているこの女神は溜息を吐いた。

「あまり師匠を困らせないでくださいね。とばつちりを食らうのはいいつだつて私なんですから」

そう言つて、もう一人の女神はこの世界から退散した。

「わかつてますよーだ、ぶーぶー!!」

天秤の女神は、遠ざかっていく姉貴分の気配にそんな非難の声を挙げるのだった。

「……………じゃあ、そう言うわけで、これからしばらくはあつちに茶々入れる感じにするから、私の出番は無くならないよ!!」

自由気ままな女神は、”あなた”に満面の笑みでそう言った。

どこかで、邪悪の女神の溜息が聞こえた気がした。

## 姫様と従者

「女神様、お二人はどうなってしまったのですか？」

邪悪の女神に連れ去られた消えた二人を呆然と見つめていたステラが我に返り、彼女は壇上に座る天秤の女神に問う。

「うーん、では経過を見ましようか」

女神アンズは指を鳴らした。

虚空に映像が投影される。

『ようこそ、愚かな犯罪者諸君。』

ここは至高なる“文明”の女神こと、メアリース様の管理する訓練用世界である』

その魔法で映し出されたのは、軍服のような格好をした厳つい顔の男が壇上から整列された人々を見下ろしている光景だった。

『お前たちはメアリース様及び、その盟友たる偉大なるリエーサセツタ様の管轄下にて罪を犯した罪人である!!』

この世界は、そんなお前たちを女神様がたに使い潰していただけのようにする為の専用施設だ!!』

お前たちは、お二方の資産である!!』

特にメアリース様は表記上の数値が増えることに喜びを見出す御方!!』

お前たちはメアリース様の喜びの為に存在しているに過ぎない!!』

分かるか、お前たちは数字の“1”なのだ!! 今のままでは生産性も皆無な書面のシミでしかない!!』

そのあまりにも理解の超えた言葉に、それを見ていたステラもイリーナもぼかんとなってしまった。

『至高なるメアリース様は無駄を何よりも嫌う御方である!!』

お前たちは今のままでは生きていくだけで資源を食い潰す不良債権に過ぎない!!』

数字の“1”でしかない貴様らは、すぐにマイナスとなる存在しない方が良い紙屑なのだ!!

——そこのお前!!』

厳つい男が、囚人服を着て並ばされている無精ひげの肥満体系の中年男の胸倉をつかんだ。

『貴様はなんでこの世界に送り込まれた!!』

『お、親の脛を齧っていたからですう』

『ほう、ニートか。ニートはメアリース様が嫌悪なされる社会のゴミの一つだ!!』

いったい何十年親に縋って生きて来た。 言え!!』

『さ、三十五年です!!』

『三十五年か、お前は既に数字の1ですらない虚数の存在か!!』

ではお前のあだ名は今日から虚数君だ、嬉しいかこの生きた廃棄物め!!』

『はいッ、嬉しいです!!』

『これから口を開くたび、“”を付ける虚数君。そして最後にはメアリース様を称えろ!!』

貴様のような虚数存在がこれまで生きてこれたのは、至高なるメアリース様が齎した文明の恩恵なのだからな!!』

『—はい!!—メアリース様万歳!!』

厳つい男は散々罵倒した中年男性から手を放すと、鋭い目つきのまま他の囚人たちを見渡した。

『偉大なるお二方の恩寵の元に産まれたお前たちは、ただ生きているだけでその恩恵を受けている!!』

お前たちの口にする水も、食べ物も、身に纏う衣服も、言葉を始めた知恵も、お前たちのようなシミを股座から垂れ流した両親も、足で踏みしめる大地も呼吸する空気さえも、かの御二方に与えられたものに過ぎない!!

であれば、それをただただ浪費する以上の罪などあろうか!!』

男の言葉に囚人たちが射すくめられる。

『私はお前たちの管理官であり、私の仕事は貴様らのような不良債権



を債権処理することだ!!

そして真つ当な資産となつて利益を生み出す社会の歯車にし、メアリース様の頬を綻ばせる為の預金通帳の残高にすることである!!  
お前たちの存在意義はそれだけなのだ!!

分かつたら返事をしろ、書類のシミども!!』

『はいッ、メアリース様万歳!!』

彼の言葉に、囚人たちはヤケクソのように叫んでいた。

その中にはアランとレナスティ姫も混じっていた。

「あはははは!!」

それを見て、この女神はお腹を抱えて大笑いしていた。

「……………これが罰なのですか?」

映像の中ではまるで軍学校のような訓練の光景が繰り広げられている。

それはもう徹底的にしごかれている。

「まさか」

ひとしきり笑い終わると、女神アンズは真顔になつてイリーナに否定して見せた。

「パン屋に派遣されるのに、パンの作り方も知らないと何もできないでしょう?」

あの効率厨の女神は自身の箱庭で一氣に教育して、適性を見て罪人を適地に送り出すんです」

「あれで、ですか?」

軍事訓練に理解のあるイリーナと違って、ステラはとても信じられない物を見るようであった。

「邪悪の女神とはまた別の御方なんですか?」

「ええ、共同統治って奴ですか? お互いの得意分野を生かしてお互いの無いところを補っているとか。

この二柱つの統治下で、片方の名前だけ聞くなつてことはありませんね」

ちなみに、と女神アンズが前置きし。

「この世界が滅ぼされた後、多分この世界もあんな感じに二柱つを称え

る為だけの世界に作り替えられるでしょうね。

それはそれで幸せかもしれません。あの自己顕示欲の女神の支配下に、飢えや病気は存在しませんから」

それは天秤を象徴にする女神の発言とは思えない私情の混じった言葉だった。

『貴様らの価値は今生だけでなく、来世にも及ぶ!!』

メアリース様達に役に立てば立つほど、来世において転生する際に特典が付与される!!』

才能、家柄、容姿、人間関係!! 文明の女神の名において全ての成功が約束されるのだ!!』

だが今のお前たちが訪れる来世は最底辺の労働階級のみが送られる世界への転生である!!』

そうなると這いあがるのは難しい、延々と魂を労働にのみ酷使される運命が待っているのだ!!』

それが至高なるメアリース様達への恩寵に報いぬ者の末路である!!』

映像では未だに厳つい管理官が訓練を施されている囚人たちに次々と激しい言葉を言い放っている。

「彼女らの元で、家畜の幸せで良いと言うのなら。」

ちよつとでもあの自意識過剰女神の真似をしようと思った自分が馬鹿らしいですよ」

イリーナは、なんだかアンズ様と似たような事をしてるな、と思つたらこつちが本家大本であつたらしかつた。

「……あの、いったいどんな因縁があるのかは分かりませんが。」

もしかして、女神様はあちらの女神が気に入らないから私たちの世界に介入なされているのですか?」

「えッ、そんなことありませんよ?」

建前はちゃんとこの世界の人々が可哀そうに思つての事ですし?」

あの至高（笑）のクソ女神が嫌いとかそんなことないですよ?」

女神アンズはステラから視線を逸らした。

目は口程に物を言うとは言うが、目も口もこれ以上ないほど物を言っていた。

「私はあの二柱りを邪魔したことなんて無いですし？」

クレームが通算五万件を突破したぐらいから数えてませんから、実質、ゼロです!!」

「邪魔しまくってるんですね!!」

ついにこの女神は悪意を隠さなくなった。

どれだけ執拗に妨害しているんだ、とイリーナは溜息を吐いた。

そして悲しいことに、その妨害によつてこの世界は水際を保つていくのだった。

その事実には彼女は情けなくなってきたのである。

「いや誰だつて、生きてままだらばらに解剖されそうになったら嫌いにもなるでしょう？」

それともあのディストピアメイカーの家畜に成りたいですか？」

「いや、あれは流石に……」

イリーナは今も訓練の光景を映し出されている魔法映像を見やる。

『1, 2, 3, メアリース様万歳!!』

『1, 2, 3, メアリース様万歳!!』

『1, 2, 3, メアリース様万歳!!』

『どうしたシミども、虚数とその予備軍の分際で数字を3まで数えるとは甚だしいぞ!!』

『1, 2, 3, メアリース様万歳!!』

『1, 2, 3, メアリース様万歳!!』

『1, 2, 3, メアリース様万歳!!』

『そうだ不良債権ども!! もっと喜んで声を出してかの御方を称えろ!!』

囚人たちは長距離マラソンをさせられながら、厳つい管理官に叱咤されている。

「あの、その、二人が無事なのはわかったので、これはもう良いです」  
これ以上見ていたら毒されると思ったのか、ステラが俯いてそう口

にした。

結果的にだが、ステラのこの判断はこの場に居る人間の誰にとつても救いであった。

「そうですか？ まあ、これからもっと酷い目に合うので、見ない方が良いかもですねー」

これはこれで精神的に十分酷い目に遭っているような気もするが、イリーナは口には出さなかった。

「せんせー、ソフィアお姉ちゃんが来たよー」

「はーい、今行くね」

子供たちを死体が安置されているこの部屋に入れるわけにもいかないのです。ステラは自分からドアノブへと手を掛ける。

「イリーナさん、やはり妹さんには会わないのですか？」

そこで彼女は振り返り、イリーナに問うた。

「……今更、どんな顔をして会えと言うんだ」

「そうですか。ですが、残された時間は少なそうですよ」

ステラは返事を聞かずに、廊下へと出た。

「姫様……」

「ソフィア!？」

玄関で待っていたソフィアは、泥だらけで幾つもの戦傷を負っていた。

その痛ましい姿に、彼女は思わず駆け寄った。

「連合軍は壊走いたしました。」

今は各地の生き残りが、孤軍奮闘するばかりです。

時期にこの王都にも、魔王軍の軍勢が押し寄せることでしょう」

「しゃべらないでツ!! 誰か、薬箱を!!」

ステラはソフィアの容態を見て怖がっている子供たちにそれを頼んだ。

「はい、先生。薬です!!」

「ありがとう!!」

薬箱を受け取ったステラは、中から治癒用ポーションや消毒液を

使って彼女の治療を試み始めた。

「姫様、お逃げください……。」

もはや王国も風前の灯火でございます」

「逃げる？ 一体どこにですか？」

魔王軍はこの世界そのものを滅ぼそうとしていると言うのに」

それに、とステラは首を振って続けた。

「私は今、ただのステラです。」

この孤児院の責任者なのですから、子供たちを置いてはいけません」

「ああ、姫様……。」

その決意に満ちた表情を、何よりも尊くまぶしいものを見上げるようにソフィアは微笑んだ。

「であれば、最期まであなた様の御側に侍ることをお許しください……。」

「願っても無いことです」

ステラはどうかソフィアの治療を終えることが出来た。

後は彼女の体力が回復すれば、また無事に戦うこともできるだろう。

とりあえずステラは、彼女を今は使っていない食堂に案内した。

「どうぞ、ソフィア。お茶でも飲んで。安い茶葉だから、口に合わないかもしれないけど」

「と、とんでもありません!!」

それに姫様に給仕の真似事をさせるなどと、従者失格であります!!」

体力を失い、疲労していたソフィアは椅子に座ったままテーブルにもたれ掛かり、ステラにお茶を振舞われる寸前までそれに気づかなかったようだった。

「ねえソフィア。もう私たちにしがらみなんて何一つ無いのよ。」

私は関係を失ってしまったと思ったあなたが私に気づいてくれたことが本当に嬉しかった。

今の私はただの孤児院の経営者。それ以上でもそれ以下でもない」

「姫様……」

ソフィアの手を取り、目を見て話すステラに彼女は感涙を流した。「う、ううう、辛かったです。あんなワガママ女の世話をするのは」そして次にやってきたのは、感情の決壊だった。

五度の死を超え、死闘を経験し、六度目の絶望が目の前に迫っている。

これで泣くなと言う方が無情だろう。

「そんなこと言わないで。あの子も、もう十分耐えたわ。」

私が同じ目に遭えば、投げ出さないなんて言えないもの」

「そんなことは……」

「アレは何度目だったかしら。」

あの子が王族の責務に耐えられなくなって、私に泣きついてきて大喧嘩になったわね」

「……覚えています。確か三度目だったかと」

「そう、あの時あの子はこう言ったわ」

『お願い、私のお父さんを返して、姫様ツ!!』

「本当に、身勝手な女です。」

貧しい生活が嫌で家を出て行つたくせに、いざ手元から離れると返してとほごく」

ソフィアはありつただけの嫌悪と侮蔑をもつて吐き捨てた。

パン屋は重労働な割に儲かる仕事ではない。嫌になって逃げだすのなら、それは自業自得だと彼女は思っていた。

「なら私も同じね。」

今回の私は、お義父さんの奥さんが亡くならず養子になることも無かった。

何度あの店に行つて、あの人の奥さんにその人を返してと言いたかったことか」

「そんな、姫様……」

「私とあの子は、お互いに大事な人を奪っていたのよ」

そう語るステラの瞳には、一つの悟りの境地があった。

「これはかつての王族としてではなく、境遇を分け合った友人として

だけど。

もし、あの子があの子の闇の先から帰ってこないのなら、この私は滅びを受け入れようと思うの」

「ですが、姫様!!」

「なぜあなたも、あの子も、あんなに苦しまないといけないの？」

アラン君も、必死に女神さまの試練に打ち勝とうとしていただけなのに。

その結果がどうしようもないと言うのなら、それは仕方が無いわ。人柱を建てて全ての責任を押し付けて救われる世界なら、それはもうとつくに滅んでいるのと同じだもの」

奇しくも、このステラの言葉は核心を突いていた。

惜しむらくはそれに気づける人間が誰も居なかったことであつたが。

「……不躰ですが、最期に教えて貰ってもよろしいでしょうか」

「何かしら、ソフィア」

「何ゆえにあの女と立場を交換したのですか？」

それはずっと、ソフィアが心の内に秘めて言葉に出来なかつた問いだった。

「ああ、私はただ、お城の中に縛られない自由な生活をしてみたかっただけなの。

自由に街を歩き回って、食べたい物を食べて、好きな人を愛して、たくさんの友達と一緒に生きたかっただけなのよ」

それは本当にささやかな願いだった。

今となつては、城の中の生活が懐かしく思えるほどパン屋の娘として彼女は過ごしたが。

「今の孤児院の生活もそう。

大変だけど、沢山の子供たちと一緒に苦楽を共にできた。

アラン君が冒険者としての稼ぎを入れてくれたり、戦災孤児を助けてここに送り届けてくれたりもしてくれたわ。

私はもう満足できた。十分すぎるほどに。

だからあの子の代わりに、自分の責務から逃げた責任を負おうとし

たわ」

でもダメだった、とステラは溜息を吐いた。

「もう本当に、今度こそこの世界も終わりかもしれないわね」

遠い目をする彼女を見て、ソフィアは思わず拳を強く握ることしかできなかった。

§ § §

六度目の滅びが差し迫るかの世界より、時は遡る。

まだ一度目の、まだこの世界に破滅の脅威が降り立つなど誰も想像をしていなかった頃。

空の天蓋を突き破り、災厄がこの円状の大地の端に舞い降りる。

——其は、魔王なり。

邪悪の女神の神託を受け、この世界を滅ぼすために遣わされた神の使徒であった。

魔王は四人の忠実な配下を将に、魔の軍勢を率いてこの世界の蹂躪を始めた。

これはその、直前の話である。

「嗚呼、なんと哀れな事であろうか」

この世界に降臨した人の形をした竜としか表現しえない、魔王が嘆きの声を上げた。

ここは魔王城。

至高なる文明の女神の奇跡を行使できる神官たちの御業によって、一日も掛からずに建造されたこの世界を破滅させるための橋頭保である。

「この世界の人間どもは、我らが御二方の恩寵を知らない」

魔王は玉座にて、最初に呼び寄せた手勢たちに語り掛ける。

「この世界には極まった技術を見渡す文明の女神たるメアリース様が齎して下さる恩寵が無い。

この世界には心に芽吹くあらゆる悪行や悪逆の心を赦して下さる



大いなる母たるリエーサセツタ様の愛が存在しない」

魔王は両手を広げ、この愛と文明無き世界を嘆いた。

この世界で神の名を口に出せることこそが、魔王がこの世界の法則から逸脱している存在である証左だった。

「この世界は、無味乾燥である」

それが、この世界に遣わされた魔王の偽りない本心だった。

「――全てを蹂躪せよ」

魔王は、たった一つにして唯一の命令を全軍に下す。

「全ての邪悪と悪逆を用い、神より授かった知恵を以つてこの世界を滅ぼし尽くせ。」

お前たちの行いによって死に絶えた魂たちは全て、我らが母が慰撫して下さる。

そして来世にて、飢えも病の苦しみも無い豊かな生活が約束されるのだ」

それは信仰などという曖昧なモノではなく、ただの純然たる事実だった。

ここにいる異形たちの全てが、その恩寵の元にこれまで過ごしてきた。

数多の世界から二柱の女神を崇拜する人間とそれ以外の種族の中から、女神の齎す平和な世界では満足できないどうしようもない連中が選りすぐられて邪悪の女神の尖兵として働くことになる。

だからどいつもこいつも、魔王の手勢は邪悪そのものだった。

思いつく限りの欲望と邪悪の限りを女神に許された、煮詰められた悪の軍勢が彼らだった。

彼らのモチベーションは極めて高い。

この世界の住人に何をしようとも、それは全てが偉大なる女神に捧げる供物となるのだから。

必要悪として彼らを赦すことも、邪悪の女神の偉大なる権能のひとつだった。

「我が神により与えられし、四人の将たちよ」

魔王は、魔の軍勢たちの誰よりも彼に近い位置で跪いている四人に

声を掛けた。

「確か、この世界出身の者がいると聞いている。

それは誰であるか？」

「私でございませす、魔王様」

顔を上げたのは、ダークエルフの偉丈夫だった。

「汝にとって、この世界は如何なるものや？」

「魔王様の仰る通り、偉大なる愛も恩寵も無い砂漠の如き全てに見放された大地でございませす。

今すぐにも、御二柱の偉大さを知らしめるべきかと」

「では、お前の働きに期待しているぞ。

—— 魔人将アーランドよ」

魔王の言葉に、ダークエルフは腰に帯びた魔剣を頭上に掲げた。

「全ては、大いなる御二柱の為に!!」

……彼は帰って来た。

異世界にて転生を経て異形に成り果て、その罪を贖うために。

そして、『魔人将アーランドが、英雄ギルバードを殺す』と言う過程を踏みしめる為に。

#### キャラクターシート

名前：レナスティ・マリーナ・ヒルデン

種族：人間 性別：女性 年齢：19歳

出身：ヒルデン王国

クラス：スラツシャー／アタッカー

信仰・対抗：剣神／風神

#### 経歴

- ・生まれが高貴な身分である。(王族を選択)
- ・許嫁が居る。
- ・身分違いの友人がいる。

### 第三章 背理の聖女 女神フェイズ：魔王軍

魔王軍には四人の将が居り、四つの軍団によって構成されている。

魔獣将率いる、魔獣軍団。

魔人将率いる、人類種部隊。

魔導将率いる、魔法部隊。

魔造将率いる、後方支援部隊。

魔王軍の戦略は、実にシンプルだ。

攻撃目標を決めて、あとは各々好き勝手に攻撃する。以上だ。

だから魔王軍内での連携なんてほぼ無いに等しい。

将が率いる部隊の中でさえ、統率が取れていない場合さえあるのだ。

仮にも軍隊を名乗ってにおいて、それがなぜ許されるのか？

理由の一つとして、最終的に全てを滅ぼすから細かいことは問題にすらならない。

そして、もう一つは魔王軍の戦力の消耗が度外視されているからだ。

なぜなら、この世界を侵略（もはや侵略とさえ呼べないかもしれないが）する際の戦闘で命を落としても、彼らは別の世界で再び復活して戦うことが出来るからである。

基本的に女神の尖兵は寿命以外では来世が来ない。

戦闘員の育成はコストが掛かるので、資産を再利用しようと言う女神様の粋な計らいである。

彼らは思う存分、まさに果てるまで好き勝手殺し合いを堪能できると言うわけである。

そして俺、魔人将としての仕事はと言うと、そんな彼らを率いて前線で戦うことではなかった。

人間の将軍がそうであるように、彼らは前線で自ら剣を取ることな

どまらず無い。

俺の仕事は中間管理職。将と呼ばれてもやることは所詮他の誰かでも良い仕事だった。

「総員、整列!!」

俺の号令に、百を超える魔の軍勢が並び立つ。

俺の前に並ぶのは、人間とは似ても似つかないヒト型の悪夢どもだ。

ゴブリン、コボルト、リザードマン、トロール、オーガ、ミノタウロス、サイクロプス、獣人、有翼種、エルフ各種族、鬼人、等々。と、まさに亜人の見本市だった。

この世界にも彼らは存在するが、人類が覇権を握っているために少数民族である。

いやそもそも、魔物扱いされている種族も少ない。

「おい、そこのお前」

俺は彼らの装備の最終確認の為に見回って、有ってはならない物を手をしている人狼がそこに居た。

「へい、大将。何か問題でも?」

「お前は従軍は初めてか?」

その手に持っている銃はレギュレーション違反だ」

俺の言葉に、えっ、と驚いたようにその人狼は手元のライフル銃に視線を落とした。

「これ、ダメなんですかい?」

「ダメだ。この世界の文明レベルでは銃器の持ち込みは禁止されている」

「……そりゃあ、参りましたなあ」

俺の注意を受けた人狼はポリポリと毛深い頬を掻いた。

「こいつでこの世界の人間どもを的にしたかったんですがねえ」

「これは一時没収だ。従軍が終わり次第、担当の部署にて回収するように」

「分かりやした、代わりの武器は支給されるので?」

「ああ、クロスボウぐらいならあったはずだ」

「じゃあそれをお願いしやす。それで女神様に人間の首のトロフィーを捧げやす」

彼からライフル銃を受け取り、俺の説明に納得した人狼はにっこりと笑って頭を下げた。

「……お前は、なぜこの部隊に？」

「そりゃあ、普通の獲物で満足できなくなったからでさあ。」

二十人ばかり森に迷い込んだ人間を追いかけまわして撃ち殺しやしたかねえ」

べろり、と舌で口を舐めて、その時の甘美な感覚を思い出しているのか人狼は恍惚の笑みでそう言った。

この部隊は、リーパー隊。

俺の管理する部隊の中でも、特に快樂殺人鬼ばかりが集められた外道の中の外道どもである。

「てつきり地獄に墜とされるもんかと思ってたら、流石はかの偉大なる邪悪の女神様!!」

あつしの腕を買ってくださいって、未開の地の人間どもを好きにだけ撃ち殺して良いと仰ってくれたんでさあ!!」

げはげは、と興奮して醜悪な笑い声を上げる人を食うオオカミ。

それに釣られたのか、周囲の面々も呼応するように笑いだした。

ここに居るのはどいつもこいつも、誰かの命を踏みじらなければ満足できない狂人どもである。

こんな連中でも、何とかとハサミは使いようと言うわけだ。

「静まれッ」

だが俺がそう告げると、彼らは一斉に黙り込んだ。

「お前たちがそういう性質なのは理解している。」

だが、この魔王軍の規律を預かる者として、これだけは言っておく。軍務規定違反者には、この魔剣にて処断が許されている。

そうなれば、貴様らに次は無い。魂ごと引き裂かれ、消滅する」

俺は剣の柄に手を掛け、この殺人鬼部隊の面々に告げる。

「忘れるなよ、お前たちのような破綻者が許されるのは女神の慈悲があつてこそ。」

全ての邪悪はかの御方の元に管理されていなければならない。  
例えばお前たちの刃が味方に向けられた時、その慈悲も失われると  
知れ」

彼らは黙りこくって、一様に頷いた。

こいつらだって、これより後が無いことぐらい分かっているのだ。  
偉大なる二柱の女神の統治は、徹底的な住み分けによって成り立っ  
ている。

思想が違う者、人種が違う者、文化が違う者、それらを何十段階に  
も分けて管理され、争いごとを排除しているのだ。

この部隊は、その中でも最底辺よりやや上と言う位置づけだ。  
こいつらは地獄に墜とされる価値も無い、更生の余地なしと判断さ  
れたクズどもなのである。

「我らが神がお前たちに期待しているのは、その攻撃性のみだ。

お前たちを罪人として殺すのは容易いが、それでは投資分が回収で  
きない。せいぜい来世でも同じように殺しの限りを尽くせる程度に  
は、戦場で活躍することだ」

俺はそれだけ釘を刺して置く。

「さて、堅苦しい話はここまでにしようか。

この世界は大体が人間なので間違って味方を攻撃することもある  
まい。

では、皆の衆!! 存分に、邪悪の限りを尽くすのだ」

彼らは俺の切り替えの早さに若干戸惑ったが、すぐにでも欲望を滾  
らせて事前に通達していた攻撃目標へと殺到する。

彼らは楽々と攻撃目標の村を制圧した。

その後は、彼らの「お楽しみ」の時間である。

「げひゃ、げひゃ、げひゃ!!」

抵抗できない女子供の両手両足を順番に踏みつぶして、うめき声を  
上げる彼女らを笑いながら殺すサイクロプスが目に入る。

「俺とゲームしようや、今からお前たちを逃がしてやる。

俺が100数えたら追いかけるから、それで逃げきれたら見逃して  
やる」

先ほどの人狼が村の男たちを集めて、楽しそうにゲームのルールを告げている。

「ぐちゃぐちゃ、あははは!! ベちゃってなった!!」

上空数百メートルから人間を落として遊んでいるハーピーが無邪気な声を上げている。

「てめえ笑ったよな、俺を見てゴ布林だと馬鹿にしたよなあ!!」

「どうだ雑魚だと確信した奴に黽られてる気分はよお!!」

冒険者らしき女性が首を絞められながらゴ布林に凌辱の限りを尽くされている。

「おーい、こつちに妊婦がいるぞ」

「あ、ずりいな」

「ははは、俺の獲物だぜ」

鬼達が妊婦から胎児を生きたまま引きずり出して喰らっている。

「あ、將軍じゃないすか。」

將軍もエルフ種なんですから弓の腕を見せてくださいよ」

見目麗しいエルフの弓兵たちが村人をハリネズミのように矢の的にしてオモチヤにしている。

この有様を見れば、俺が初戦にてわざわざこいつらの戦いぶりを視察にきた理由も分かるものだろう。

彼らが正真正銘の人間だったとしても、魔の軍勢であると称されるであろう悪逆非道ぶりであった。

「生憎と、俺は弓の腕がからっきしでな」

「はー、そんなんで同族にモテるんすか?」

俺は彼女の横を過ぎ去って、他の連中を見回って行く。

少々遊びが過ぎるが、こいつらが戦力としては使い物になることは分かった。

俺が命令して村にたどり着くまでの短時間で、こいつらは制圧まで終えていたのだから。

流星は数多の世界から選りすぐられたクズどもだった。

並大抵のクズでは地獄に墜とされるが、流星は地獄でさえ受け取り拒否されたクズの中のクズ達である。

自分たちがどう思われようかなんて、まるで気にしてさえない。「まったく、この連中を処分するより有効活用しようとする御方たちの気が知れない」

俺は溜息を吐きつつ、懐中時計で時刻を確認する。

「『戦闘行為』は規定時刻までに終わらせ、次の攻撃目標の攻略に移れ」

俺はそれだけ命令を下すと、魔王城へと帰還することにした。

「……………」

と、まあこんな連中だから、壊滅したという報告が来ても全く心が痛まなかった。

「リーパー隊の穴埋めは増援部隊を申請しておくか」

そして連中程度、幾らでも補充が利く。

御二柱が管理する世界は、千や二千程度では無いのだから。

常に侵略する相手の全力と同等の数をぶつけ続ける。

そうやって息切れした相手を殺し尽くす。

死に絶えたくなければ、自分たちの価値を死力で示すしかない。

それが邪悪の女神の一握りの慈悲なのだ。

俺は追加の増援を申請すべく、書類を魔王城内にある部署へと運ぶ。

書類運びくらい部下に任せても良いが、俺は確認しなければならぬいことがあるのだ。

「魔造将殿に取次願いたい」

俺は担当部署にて働いている人型ゴーレムに告げた。

「ご用件は何でしょうか？」

「機密性の高い案件である為、この場では申し伝えられない」

「かしこまりました。では奥へとどうぞ」

俺はスタンプで押したように同じ顔のゴーレム人形が業務を遂行している脇を通り抜け、彼女らの責任者の元へと向かった。

「魔人将殿、それで機密性の高い用件とは何でしょうか」

かくして、奥の部屋で俺を待ち受けていたのもゴーレムと同じ顔を



した女性だった。

これぐらいで驚いていては文明の女神の管理する世界では生きていけない。

彼女こそ、魔造将。文明の女神の化身にして現身であるホムンクルスだ。かの女神の管理世界では、この顔を見れば一発で役人と分かるようになってる。

「■■■■様にお話ししたき儀がございます」

「分かりました。本体へと繋がります」

彼女は事務的な言葉で俺に答えると、目を閉じた。

「……何かしら、我らが眷属アーランドよ」

そして恐れ多いことに、極めて簡単に我が目の前に至高なる文明の女神が降霊なされた。

かの女神も、その使徒たる役人たちと同じ顔をしていると言う。

いや、容姿や体重までもが魔術的に同一であり、無数に同一個体として一つの法則と化している。

彼女ら全てが女神の化身であり、女神と魔術的に同一の存在なのである。

それこそ文明という呼び名より、管理外世界の神々の間では、無限の女神として悪名が通っているほどだと言う。

だから至高なる文明の女神メアリースは、非常にフットワークが軽い。

近所の役所で他愛もない相談にも乗ってくれくらいである。

「わざわざ貴女様に申し伝える我が身の愚かさをお許してください。

私の経歴はご存じのとおりであると存じますが」

「当然よ、私は全てを把握している。

あの忌々しい天秤メスガキについての事でしょう？」

「はい……」

メアリース様とアンズ様の確執はそれはもう有名で、アンズ様がちよっかいを出したら全世界でニュースになる。

そして、今朝の新聞によると両者の諍いで資源世界が一つ爆散したらしい。

「今更私が申しあげるのはどうかと思いますが、貴女様はかの天秤の女神の影響を排除なさらないので?」

「あれの運命操作は私の管轄外だから」

「ああ、左様で」

この御方に管轄外、と口に出されれば融通が利かないことは常識である。

「それをいいことに、好き勝手されている自覚はあるけどね」

端正な顔立ちを歪めて、女神様は不愉快を示す。

「あちらが女神としての領分を超えない限り、必要な経費よ。」

私としても、ボードゲームで妨害マスが無いのはゲームの単調性を招くから」

我らの生活をボードゲーム呼ばわりされては顔も顰めたくなくなるが、この御方は大体がこんな調子である。

「それにアレにやり返してもして、アレの伴侶を刺激したくない」

「■■■■様の伴侶ですか?」

それは俺も初耳だった。あの女神ひとに伴侶が居るとは。

「そう、神と言う枠組みを超えた三柱の中でも主権を有するあの方。」

あの方が人間だった頃から、その異名は暴君として知られていたから」

「暴君……考えたくはありませんね」

「今は腑抜けになったけどね。信者も一人も居ないし。」

まあそれも神としての正しい在り方なのかもしれないけど」

万能にして無限を体現するこの御方にして、決して敵対したくない相手と言うのがその暴君であるらしい。

そんなのが伴侶であるとすれば、それはもう好き勝手できるだろう。

なにせ、この傍若無人で傲岸不遜のトラブルメーカーで通っているこの御方にさえ恐れられているのだから。

「であれば、我が既知の出来事については」

「好きにすればいい。それくらいの融通が利かないほど、世界は脆くは無いわ」

何なら試してみればいいわ、と挑発的な笑みさえ浮かべられた。

「分かりました。全ては貴女様の御心のままに」

「貴方も、楽しみなさい。それが文明を謳歌するということよ」

俺が頭を下げるとそのようなお言葉を下さり、急速にかの御方の気配が遠ざかっていく。

「ハイ!!」

そして顔を上げると、事務机の上に天秤と神賽を持つ女神が座っていた。

「……お久しぶりですね、■■■様」

「おや、恨み言の一つでも言われると思ったのですけど、普通に未だ敬意を向けてくれるんですね」

ちよつと意外そうに、前世ぶりの再会をしたアンズ様はそう言った。

俺は魔造将殿を見やる。

氷のように動かない。時間が止まっている。

「貴女様を軽んじるとどうなるか、今まさにかの御方にご教授戴いたところですから」

「私はいんまり堅苦しいのは嫌いですけどねー」

手のひらのダイスを弄びながら、気まぐれな女神はそう語る。

「それで、今更私に何の用ですか」

「それは勿論、私の試練の続きですよ。」

まさか転生したぐらいで、私の影響から逃れられるとでも?」

その言葉は、まさに暴君の伴侶に相応しい言い方だった。

「勘弁していただきたい。今の私の仕事は、この世界を滅ぼすことですよ」

「そうそう、どうせ最終的に全部滅ぼすんだから、結局あなたの立場は居ても居なくても良いままで変わらないんですよね」

無邪気に棘のあることを仰るアンズ様。

俺はその切れ味の良い言葉に二の句が継げなかった。

「あなたの仕事は、リニューちゃんたちの業務の一環。」

私にそれを口出す権利はありません」

それが、かの御方の言うところの女神としての領分であるらしかった。

「まあ、それはそれ、これはこれ」

彼女は見えない箱を右から左へと置く仕草を見せた。

「あなただって本当は、この世界に滅んでほしくないんでしょう？」

「……」

凶星だった。

「あなたは人間の心を維持したまま亜人種へと転生した。

そして、この世界に派遣された。そうでなければ罰になりませんか  
らね」

これがかの邪悪の女神の悪趣味なところであった。

相手に精神的な苦痛を味わわせることを彼女は好む傾向にあるのだ。

「貴女も、あのクソ女神の相手は大変でしょう？」

ぽんぽん、とアンズ様はかの御方の化身の頭を叩く。

俺は時間が止まって動かない魔造将殿の眼球だけがギョロリと彼女を睨んでいるのを見てしまった。

「まあ、至高なるかの御方は御方で良いところがありますから……」

俺はなるべく本心を言いながら、精一杯のフォローをする。

「えーと、どれどれ。」

『本誌の調査によると、今年の偉大なる女神リエーサセツタ様の支持率は83%を記録した。

至高なるメアリース様の支持率がかの御方と比べて二割切るのは実に167期振りであり——』……ぷぷツ」

「止めて差し上げてください」

あの御方はそれをずつと気にしているんだから!!

「やーい、不人気〜♪ 万年不人気〜♪」

ザーコ、ザコザコ、支持率ザーコ♪ やーい敗北者〜♪」

そしてこの女神は睨まれているのを分かったうえで煽っている。

今しがた読み上げた新聞をひらひらと手で振っている。

「まあ真面目な話、あなたとこっちの世界のあなたは同じ魂を有する

だけの別人。

決して同一人物と判断することはできません。

これが存在の同一性を利用して無限性を獲得したのと真逆でね」  
アンズ様は魔造将殿に肘を乗せて頬杖を突きながらそう言った。

「あなたが何をしたところで、こっちのあなたに影響は出ませんよ。

言いませんでしたか？ 『過去の改変を前提に世界は進む』と」

「それでは、全部後出しじゃんけんではありませんか」

『そのルールを決めたのは私じゃないので』

つまりは管轄外、と言うことだ。それは『神にとってどうしようもない』、と言うことを意味することを俺は重々承知である。

「そう言うわけで、女神チャレンジの続きをレッツゴーです!!」

「やらない、なんて選択肢は無いですか」

「当然でしょう。残り二人のどちらでもいいので、何を私に願ひ、どのように裁定するか考えておいてください。

これは私のワガママだけではなく、私を怒らせた連中にしかるべき報いを与える為です」

その結果として世界が救われるかもしれない。ただそれだけのことだった。

「……わかりました」

「それに、今のあなたの立場でないと見えてこない物もあるでしょう」

「それはどういう意味ですか?」

「うふふ、何でしょうねえ?」

アンズ様は小首を可愛らしく傾げて、初めから居なかったかのように消え失せた。

「はあ、魔造将殿、周辺の地形の詳細を見せて貰ってよろしいか」

「どうぞ。あと、増援は問題なく受理しました」

俺は彼女のその言葉を受けて部屋を出る。

ゴーレム人形から詳細な地図を受け取り、指令室にて地図を広げる。

「一番近い国は、聖光法国か」

そこは光の神を崇める宗教国家だ。

奇しくも、あの四人の内一人である聖女クリスティーナが在籍する  
国家であった。

## 第六階層

俺は指令室から出ると、壊滅したリーパー隊の生き残りの元へと赴いた。

「生き残りはこれだけか」

既に魔造将旗下の救護部隊によって治療を受けていた彼らを見渡し、俺はそう呟いた。

百名は優に超えていた彼らは、三十ほどに数を減らしていた。

戦略的に壊滅と称しても十分な被害だろう。

「リリウム、被害状況を報告しろ」

「はいはい」

俺は先にここに遣わせておいた副官に明確な被害状況を尋ねた。

「リーパー隊所属の108名の内、生き残りは32名だよ」

「そうか、既に増援は要請済みだ。」

「お前はそれと合流して部隊の再編成に努めろ」

「はい、りよーかーい!!」

と、元氣よく俺に返事しながら彼女は俺にしだれ掛かってくる。

「仕事中だ。離れろ」

「別にいいじゃん。どうせ大した仕事は無いんだし」

「偉大なるかの御方に課された任務だぞ」

「適当に相手に味方をぶつけるだけじゃない」

リリウムは熱っぽい視線を向けてくる。

彼女の体臭から放たれる甘い香りが情欲を誘ってくる。

リリウムは俺の副官にして、サキュバス族の王族に産まれたかつてのレナスティ姫だった。

王族と言ってもサキュバス族は生殖活動が活発なので、序列は千番以降という末端の末席に過ぎないが。

彼女は異種族に転生しても、お姫様に成りたいと言う願いに縛られている。

「それでも、だ」

俺は変わり果てた彼女を押しつけて念を押す。

彼女の末路に思うところもあるし、剣を捨てたことを残念にも思っている。

だからと言って、彼女の感情をやすやすと受け入れるわけにはいかなかった。

「攻略に失敗した都市の詳細な情報を教えてくれ」

「はい」

リリウムは俺の言葉に、頭上の花びらを弄りながら頷いた。

ちなみに、彼女の種族はサキユバスだが、人間にも人種があるように、サキユバスにも人種がある。

悪魔としての性質が強い種や、人間と大差ない種、そして彼女のようになりアードのような植物の性質が強い種族も居る。

彼女の頭上に髪飾りのように咲いている白い百合の花は、彼女の体の一部なのだ。

「……なるほど、わかった。

適度に消耗を繰り返させた後、次の進路を定めるとしようか」

俺はこのまま波状攻撃で彼らが壊滅した都市を落とせると踏んだ。そしてそのように命令を下す。

これが俺の仕事だ。リリウムの言ったように、大した仕事ではない。

彼女がやる気を出せないのも当然と言うものだ。……かつての自分の故郷を攻めていると言うのに、どうでも良さそうだった。

「ちよつと將軍閣下に具申申し上げる」

俺が彼女の態度に感傷を抱いていると、負傷者のリーパー隊の中から手を上げて俺に話しかける者がいた。

「なんだ、言ってみろ」

俺は彼に発言を許した。

二足歩行の犬のような種族、コボルトの男だった。

「將軍閣下は、ゲームセンターに行っただけはありますか？」

「下らない雑談なら後にしろ」

「真面目な話ですよ。教えてください」



俺は彼の妙な威圧感に思わず、いいや、と答えてしまった。

「では格闘ゲームのアーケード版とかご存じではない？」

あれって相手に負けると、コインを入れてコンテニュー出来るんですよ。

俺なんてついつい熱中しちまって、気づけば沢山コインを使っちゃうんですわ」

「……何が言いたい？」

「おや、お分かりになりませんか？」

最終的に勝てるからと言って、無意味にコインを投入するのは馬鹿馬鹿しいと言ってるんですよ」

そのコボルトは、俺に対して笑みを浮かべているがその下にある侮蔑の感情を隠そうともしていなかった。

「貴様ツ、不敬よ」

俺を遠回しに侮辱した彼を、リリウムが殺意を向けた。

「へえ、不敬ねえ。將軍閣下は至高なるかの女神様の恩寵の元で生れ育つておいでなのに、出来て当たり前のことをなさらないって相手に敬意を向けるって言うのがおかしいのでは？」

女神様に頂いた知恵を無駄にする方が、よっぽど不敬ってもんじゃありませんか？」

俺は怒るリリウムの前に出て、彼の前に出た。

「では、お前なら先ほど攻略に失敗した都市を攻略できると？」

「あの程度の都市、ここににいる面子だけでも十分でしょう？」

コボルトは自信満々に俺より有能であることを豪語する。

「そこまで言うのなら、お前のステータスを開示しろ。」

お前の能力次第では、お前に次の攻略作戦の全権をやってもいい」  
「どうぞ、やってみてください」

確認を取って、俺は彼にステータスを表示する魔法を行使した。

余り慣れないのだが、世界によってはこのステータス画面とやらは身分証明にも使われる重要な要素であるらしい。

特に“レベル制”を取っている世界は、鍛錬によって上昇するレベルによって上下するステータスやスキル習得が何よりも重要視され

るらしい。

それによると、この俺のかつての故郷であるこの世界は「スキル制」と分類されるらしいが。

ここで問題になるのは、このステータス画面とやらは当人の個人情報を超えて非常に赤裸々に網羅していることだった。

表示画面によっては性交渉の回数まで表記されているほどだ。

これを勝手に盗み見ることはプライバシーの侵害に当たり、裁判沙汰になる。

俺は彼の技能画面だけを確認し、思わず唖った。

「指揮官適性：S―」

そう記載されていたのだ。

ちなみに俺の指揮官適性はC。一般的にどの技能もB判定もあれば十分に仕事を任せられる才覚の持ち主とされる。

マイナスがついているのは気になるが、S判定はかなりの名将の素質であると言える。その素質を開花できるかどうかは別だが。

そして適性が低くてもしっかりと仕事をしている者を俺は何人も知っている。

「……お前、いったい何をしてこの部隊に来たんだ？」

「將軍閣下は部下の経歴や能力、人格を詳しく把握せずに傘下に置いておられるので。」

彼のその言葉は、揶揄と言うより不思議な物を見るような物言いだった。

「リリウム、彼の資料を」

「はい」

彼女は手元の部隊員名簿から彼の経歴書を取って俺に渡した。

そして、その内容を見て俺は目を疑う。

彼の犯罪経歴は、戦争犯罪、大量殺戮、最終的な殺傷人数四桁という常軌を逸したモノだった。

何よりも恐ろしいのが、彼の前世とは俺と同じ人間と言うことであつた。

彼の前世は、この世界と同じように女神の神託を受けた魔王によつ

て滅ぼされた。

しかし、彼とその部下は最後の最後まで抵抗し、最後の一人になるまで魔王軍と戦い続けた。

この男は、名も無き英雄だった。

尤も、英雄の末期は惨めなものと決まっている。

彼は過酷すぎる戦いを忘れられず、今生でも傭兵稼業で殺しの限りを尽くした。

それこそ、負けない為ならそれは決して勝つ為とイコールではない。どんな手段も躊躇わないほどだった。

「惨めでしょう?」

今生が犬畜生の俺に相応しい来歴だ」

俺と一緒に資料を見ていたリリウムが目を見開いているのを見て、彼は苦笑を浮かべる。

「……いいだろう、次回の攻撃はお前に全て任せる。

リーパー隊の手勢のみで、あの町を攻略せしめよ」

「ははあ、將軍閣下の御心のままに」

俺の下知に、コボルトは慇懃に一礼を返した。

そして彼は、味方に一人の犠牲も無く町を陥落させた。

その手法は、単純にして残虐だった。

「お前たちは観客だ。これから行われるショーを宣伝してくれれば、生きてこの場から逃がしてやる」

彼は行商人などを襲って、これを捕縛した。

そして、リーパー隊は彼らを連れて町の前に陣取り、弓などの射程外から捕縛した内の一人を見せつけるように惨殺した。

城壁に守られた町に、彼らからリリスされた行商人たちが逃げ込んだが、これも彼の計算の内だった。

彼らには、リーパー隊からメッセージを町の人々に伝える役目があった。

『これより毎夜ごとに、町の人間を連れ去る。

一日ごとに一人ずつ数を増やし、その最期を知らしめたあと御返し

致す。

これを止めたくば、町の門全てを解放し我々に降伏せよ』

そして彼らは、それを実行した。

初日は、子供が門前にて切り刻まれて放置されていた。

二日目には親子が雑巾のように搦じ切られ、ハーピーとサイクロプスによって町の中へ投げ返された。

三日目になると、町の危機を知らせようと幾人もの伝令が走ったが、その全てをリーパー隊は処理した。

四日目には冒険者や兵士が打って出てきたが、彼らを待ち受けていたのは他の村々で捕まえて来た大勢の捕虜だった。

それらが彼らに助けを求め、混乱した時に「仕込み」が発動する。

捕虜たちには、人体を魔獣に変異させる秘薬が投与されており、町の戦力は彼らの腹の中に納まった。

五日目には、町中に侵入し食料や水源などを破壊。

そのついでとばかりに、町の精神的支柱である教会の中で司祭たちの人間の物とは思えない惨殺死体を作って逃げ帰る。

町を恐怖のどん底に陥れたところで、リーパー隊を率いるコボルトは宣言する。

降伏するならこれ以上町の人間に危害は加えない、と。

意外なことに、彼は俺が要請しておいた増援と共に占領した後、降伏した町に住人に危害を加えなかった。

それ以上に意外なのは、リーパー隊の面々が彼に従ったことだろう。

俺は正直、あの根っからの殺人鬼連中が彼に従うとは思えなかったのだが、そう思うのは俺に求心力が無いからであろう。

「隊長、こんなことってないよな……」

俺が占領した町に入って彼を労いに向かうと、彼は既に同僚たちから隊長と認められていた。

「見てくれよ、こいつら。まるで野蛮人じゃないか」

「そうだな」

ゴボルトの彼とリーパー隊のゴブリンが冒険者ギルドで町の残存戦力について調査しているようなのだが。

二人はこの世界のゴブリンのスケッチを冒険者に描かせていたらしかった。

「俺は今でこそこの部隊でボロみたいなの恰好で戦ってるが、こうなる前はスーツを着て会社勤めだったんだぜ？」

なのにこの差は何なんだ。この世界の同族たちは、ぎゃつぎゃつて鳴くぐらいしか出来ない害獣扱いらしいじゃないか!!」

リーパー隊のゴブリンは心の底から悲しんで涙を流していた。

こんなことを言っているが、こいつは強姦殺人の常習犯である。

「俺たちのご先祖様は、それはもうこの世界の連中と大差なかったらしい。

だが今の俺たちは、女神様の元で知恵を授かり、寿命も大幅に延びて無駄に数を増やす必要もなくなった!!

体も大きくなって、人間種の一員として女神様の名の下に認められたの!!」

なお、このゴブリンはその恩恵を与っていないながら重犯罪に走っている。

殺人鬼と言うのは外面がまともに見えると言うのは本当なのかもしれないなかった。

「分かるよ、悲しいよな。だからこそ、この世界を滅ぼして彼らも救ってやるのだ。」

俺もその為に力を尽くそう」

「ううう、隊長。俺、頑張るよ。」

この世界の同胞の地位向上の為に、至高なる女神様の名の下にこの世界を滅ぼしてやるんだ」

二人は肩を組み合って、苦しみを分かち合っていた。

「おや、將軍閣下。こんなところにご足労いただき……」

「挨拶はいい、此度の働き、大儀であった」

俺の労いに、彼は頭を下げるばかりであった。

「町の住人は殺してはいないようだが？」

「それは前例を作る為ですよ」

俺の疑問に、彼は当然のように答えた。

「これから、町をまた攻めることもあるでしょう。」

その際に、この町は降伏したから自分たちもそうすれば助かると思わせることができる。

この町の住人を使って、別の町へと逃げて来たって口実で内部工作だってできる」

つらつらと彼の口から策略が溢れるように語られる。

これではつきりしたが、このコボルトは俺などよりずっと将器がある。

作戦を決行できる判断力や実行力だけでなく、部下に対するカリスマ、そして何より非道な作戦を躊躇わず実行できる冷徹さと戦略眼。

俺はこの人材を一兵員として使い潰すのは躊躇われた。

「お前、名前は？」

「はい。管理番号は——」

「違うぞ、俺はお前の名前を聞いているんだ」

俺の言葉に、彼は目を見開いて驚いた後、もう一度頭を下げた。

彼の今世は住人を数字で管理する世界に在籍していたのだから、俺の問いは驚いたことだろう。

「前世では恐れ多くも部隊章がリングゴだったもので、アップルマン林檎男」と

「リングゴか。至高なる御方の象徴の一つだな」

リングゴに絡みつく尾を噛むへビが、メアリース様の紋章なのだ。

「では、リーパー隊の黒百合の紋章に林檎の花を書き加えて新たな部隊章とし、正式にお前を隊長として任命する。」

その働きを以って、かの御方たちへの恩寵の報いとせよ」

「その任、謹んで請け負わせて頂きます」

俺は彼に背を向けると、町の責任者を呼ぶように命じて、町の外に待機してある本陣へと戻った。

「ねえアーランド。あなたは不思議に思わなかったの？」

俺が本陣に戻ると、リリウムが頭の花弁をいじくりながら退屈そうに言ってきた。

「何がだ？」

「魔王軍の戦略って、正直雑じゃない？」

でも、私たちの前世が戦った魔王軍ってものすごく近代的な戦術を駆使してたわよね？」

「言われてみれば……」

俺は記憶の奥底にしまっている前世の記憶を呼び起こした。

確かに、魔王軍は空挺部隊や兵員輸送などの概念がこの世界の文化レベルとは一線を画していた。

「多分、それあのゴボルトの所為だと思うわよ」

「……」

リリウムの指摘に、俺は押し黙った。

巡り巡って、その指示を出した俺の所為と言うことでもある。

「いったいどこまでが、私たちに課された罰なんでしょね？」

俺は彼女に何も言うことはできなかった。

§

§

§

最初のあの町を占領したという結果は、魔物の活発化という事象から魔王軍の存在へと認知された。

俺はかつての自分が何をしているかや、年号などを把握して正確に時期を把握すると俺は次の行動に移った。

そして俺は愕然とした。

『聖女クリステイーンが存在しない』、だと？

「はい、占領した三つの都市全てから調査した結果、聖女の称号を持つ聖職者は現在存在しないことが判明しました」

俺は魔造将殿の言葉に耳を疑った。

彼女は占領した町の管理を受け持っている。

『女神の使徒たる彼女の言葉に間違いは無い』のだ。

「それと、クリステイーンと言う名前は这个世界ではかなりポピュラーで、類似を含めてあの三つの都市だけで74名存在します。

年齢層を二十代前後に絞ると、26名ほどになりますね」

「……」

俺は混乱のあまり、頭の中の整理が付かなかった。

「……何か問題でもありましたか？」

「いや、気にしないでくれ。俺の用事に手間取らせて申し訳ない」

「仕事ですから」

彼女は事務的にそう返した。

「占領した町での抵抗はどうだ？」

「一般人の多くは改宗し従属を誓っています。

もう既に、こちらと同等の教育も始めています」

そうか、と俺は頷いた。

最終的に全部この世界を滅ぼす予定だから、別にその過程で捕虜を取らないわけでもないし町を破壊しつくすと言うわけでもない。

我らの御二柱に従属と忠誠を誓うのなら、生きたまま別の世界で生きることも許されるのだ。

そう、誰もが死に耐えられるわけではないのだから。

「教会に立てこもっている神官たちも居ると聞くが？」

「信仰もまた文化、文明の女神たる我が主は恭順を示せばそれすらも許すでしょう。」

その為に住人たちに説得をさせています」

そこがメアリース様の寛容なところだ。

敵対者には一切合切容赦しないが、恭順を示せば信仰の保護すらもする。

……まあ、メアリース様のその美点が生かされることはあまりないそうだが。

では最初に世界全体に降伏勧告でもすればいいと思うだろうが、如何に文化の違いが隔絶していても人は簡単には領けない。

そもそも、この侵攻はリエーサセツタ様の管轄だ。

メアリース様は物資や人員、後方支援などで手助けをしているに過ぎない。

まあそれに、言いたくは無いがメアリース様が交渉事で成功したと言うニュースは聞いたことが無い。



交渉のテーブルについた神々を悉く激怒させるその姿は芸術的でさえあるらしい。

……あの御方は盟友たるリエーサセツタ様以外のあらゆる神々から嫌われているらしいからなあ。

メアリース様が交渉事で相手を怒らせる確率は100%、全面戦争になって相手ごと滅ぼす確率は150%だなんて、なんかのスラングになってた覚えがある。

偉大な女神であることは間違いないはずなのだが……。

そして、まあ結局、聖光法国を攻め落としてかつての故郷ヒルデン王国に攻め込んでも聖女の姿は影も形も現れなかった。

「あの女の事なんて、別にいいじゃない」

俺がそのことを気にしていると、リリウムが俺の腕に自身の体を絡めながらそう言った。

彼女は自分のサキュバスとしての性質を毛嫌いしているゆえに普段は厚着をしているが、種族柄その体つきは厚着程度ではむしろ情欲を誘うスパイスにしか見えないだろう。

「リリウム、お前はかつての仲間について何か知っているのだろうか?」

「はわあ〜、どうでもいいじゃん、そんなこと」

俺の問いに、リリウムは欠伸をしながら答えた。

「どうせこれから全部、全部なくなっちゃうんだし」

リリウムは唇の片方を釣り上げて、引きつるように笑っていた。

その表情に、俺は彼女の胸中も複雑なものがあるのを感じ取った。

「私に全部の責任を押し付ける世界なんて、御二柱によって滅ぼされてしまえばいい」

「リリウム……」

「ねえ、そんなにあの酷い女神様の試練が大事?」

もう私たちには関係の無いことでしょうか?」

このつまらない仕事を終えたら、一緒に裕福な世界に移り住んで一緒にパン屋でもやって暮らしましょうよ」

彼女は俺にすがるように、訴えてくる。

「だが、あの天秤の女神様は転生した程度で自分から逃れられると思うなど仰った。

これはお前の為でもあるんだぞ、リリウム」

「そんなの知らない!!」

あなたは私だけを見てればいいの!!

どうしてそんなこと言うの!?!」

彼女がこのように俺に固執するのは、おそらく望郷の念が未だ彼女にあるからだ。

新しい立場、新しい地位、新しい豊かな生活。

その全て、彼女がかつて欲したモノ全てを得てなお彼女は満たされない。

それがまるで、かのアンズ様の呪いのように。

「それに、ステラはどうする?」

彼女は最後までお前を心配していた友人だったのだろうか?」

「はッ」

その時初めて、リリウムは嘲笑を浮かべた。

「あなたは覚えていないんでしょうね!!」

かつての私たちがあの女神に願う以前、私はあの孤児院に居た頃にあなたと一緒に過ごしたことを!!

短い間だったけど、一緒にチャンバラとかして遊んだわよね!!

あなた、男のくせに私に打ちのめされて泣いてたっけ?」

「……………」

まったく覚えていなかったが、思い出したくも無い記憶だった。

「そんなに弱つちいくせに、冒険者になるからって孤児院を一人出ていくんだもの!!

私は心配したのよ、ずっと、ずっと!!

だからパン屋に引き取られた後、その生活が嫌になった後にあなたを探して冒険者になったのよ!!」

「……………なんだって?」

それは、初耳だった。

「くすくす、私その後で知ったの。」

『あなたの冒険者タグを持ち帰ったパーティが居た』ってギルドの受付が言っていたわ」

「……………ッ」

俺は言葉が出なかった。

つまり、前世の俺は…………。

『私たちが願わなければ、あなたはどこかで魔物の餌になって死んで終わってたッ!!』

そう、だったのか…………。

そのこと自体に、不思議は無かった。疑問も抱かなかった。所詮三流冒険者なんて、その程度の存在だ。

「今度は、私がそうならないように守ってあげる!!」

もう姫様なんて立場もいらぬし、私を必要とする者も居ない!! どうせ願うなら、最初からあの御二方にしておけば良かった!!」  
リリウムはこの世の全てを皮肉るように自虐的に笑っていた。

その笑い声も、次第に消えていく。

「…………だからお願い、あなたは私を必要として」

ぎゅっ、と俺の服の袖をつかんで、彼女は小さく俺に懇願した。

…………俺は黙って彼女を抱きしめた。

それでもしなければ、俺はこの残酷な女神の罰を耐えることが出来なかったのだ。

数年の戦いを経て、滅亡の時は訪れる。

「ここが水際だ!! 魔王軍をここで押しとどめるぞ!!」

我がかつての故郷にて、最後の抵抗をする部隊が俺の陣頭指揮を執る部隊の前に現れた。

「ソフィア殿…………」

…………そうか、俺は彼女も殺す羽目になるのか。

そう言えばいつか彼女は言っていたではないか。自分は魔人将と戦ったと。

「ひ、めさま…………」

俺はなるべく苦痛を与えないように、一撃で彼女を斬り殺した。これにて、この周辺の制圧は完了した。

他の将たちも、ヒルデン王国を呑み込めんと破竹の勢いで戦いを進めている。

その過程で、父上も……ギルバード卿も戦死したと言う。

俺がその手に掛けなかったことを残念に思うべきか、喜ぶべきなのかは分からなかった。

ただ、いつか父を超えるべきだとは思っていた。

それがこんな機会で、このような形になるうとは思わなかったが。

この世界の主だった戦力を壊滅させ、リエーサセツタ様がもうこの世界に抵抗する勢力は無いと判断したその時。

——魔王様が、真の姿を以って、この世界を破壊し尽くした。

俺はあと五度、これを繰り返さなければならぬ。

この戦いの記憶を持って行けるのは、魔王様含めて極少数だ。

俺はこの胸に抱いた疑問を抱えながら、次の並行世界を滅ぼすべく逆行する。

——即ち、聖女クリステインはいつたどこに消えたのか、と。きいい、と天秤がどこかで傾くような音が聞こえた気がした。

## 幕間 傲慢の箱庭

どことも知れぬ、虚無の空間。  
どこが上下で、どこが左右か。

果てさえあるのか、時間の概念さえあるのか分からないこの場所。  
そこで天秤の女神はこたつに入ってせんべいをバリバリ食べながら虚空に投影されている映像を見ていた。

「あッ」

彼女は思わず、食べかけのせんべいを取り落とす。

彼女が見ているのは、前話のラスト。

丁度、アーランドが砦に攻め入りかつての己を斬り殺している場面だ。

彼女は気づいてしまった。それが間違いであることに

「よいしょ、っと」

彼女は天秤をこたつの上に置くと、グラグラと左右の皿が揺れているその両方を手に持って水平を保ち始めた。

すると、彼女の見ていた光景が書き換わる。

前話の最後の場面が、かつての自分ではなくソフィアと対峙するアーランドへと修正される。

「ふー、危ない危ない。」

こんなところで私の権限使わせないでほしいな!!前話のラストを一部修正しました。 by 作者」

問題を修正し終わると、彼女は腕を組んでぶんぶん怒り始めた。

「さて、私のこんなつまらない業務だけじゃあ味気ないので、彼が魔王軍に参入するまでの経緯でも一緒に見ましようか?」

女神は「あなた」にそう語り掛けると、虚空の映像に向けて指をスライドさせる。

場面が変わる。

彼女も気を取り直して、こたつでぬくぬくし始めた。

最初に、俺は目を覚ますと見知らぬ男女に抱かれていた。すぐに俺は気づいた。俺は赤子になっているのだと。

「なあお前、この子、泣かないぞ?」

「あなた、もしかしてこの子、泣かずギフテッドじゃないか?」

「では、長老に報告するがよからう」

年老いた産婆が、驚き戸惑う男女に助言する。

彼女の助言に、二人も頷いた。

そして俺は、長老と呼ばれる老人に引き合わせられることになる。

俺は両親から彼に引き渡されると、彼は大真面目に赤子である俺に語り始めた。

「意識がハッキリしているのなら、聞くがいい。

お前は泣かず……つまり、前世の記憶を持って産まれた存在だ。

そう言った者は問題を起こすことがままある。故に、この儂がある程度の年齢まで育てることになる」

俺は困惑していた。

俺が赤ん坊であることは、ある程度予測できたことだった。

だが、転生先の両親やこの老人は異種族——ダークエルフだったのだ。

そう、俺はまさかのダークエルフとして第二の生を受けたのである。

「この世界の管理番号は……いや、そんなことを知る必要もあるまいか。」

我々はこの世界を、IFスロウラと呼んでおる」

「あいえふスロウラ?」

「スロウラと呼ばれる世界は他にもある故にな。

これと区別する故に、管理番号の頭二つの文字を取ってこう呼んでいる」

俺の質問に、長老はよどみなく答えてくれた。

俺はこの世界のこの村に生まれ、六年が経った頃、長老から本格的にこの世界について教わる機会が訪れた。

「我々は、所謂ナチュラリストと呼ばれる集団であり、この世界とは我々のような存在の為に女神メアリース様が用意して下さった箱庭なのだ」

「ナチュラリスト？」

「元々は自然愛好家と言った意味合いの言葉であったそうだが、我々はメアリース様の齎す文明の恩恵から離れ、自分たちの力のみで生活することを選んだ者たちなのだ」

「自ら、神の恩恵を拒んだのですか!？」

俺は長老の話に驚いて聞き返した。

「拒んだ、と言うのは違うな。」

深刻な病や飢饉が発生した時はメアリース様に救いをお頼み申す。

我々エルフ種のような機械に肌の合わぬ種族や、かの御方の恩恵に全て頼るのは違うという考えの持ち主がこの世界にやってくる」

「なるほど……」

確かにこの村やその周囲は、森ばかりだ。

エルフ種が暮らす世界には打って付けであろう。

「勿論、それだけではないがな。」

お前は前世は人間だそうだが、お前のような泣かずの子は前世との種族の違いに悩まされることがしばしば起こりうる。

それ故に問題を起こさぬように、この世界はそう言った者を受け入れたりもしているのだ」

「俺がこの世界に生まれたのはそれ故にと？」

「いや、どちらかと言えば産まれた後に来る場合が多いな。」

お前の場合は、おそらく女神様の配慮であろうが」

……多分、長老の言う通りだろう。

俺はあの頭がおかしくなりそうな訓練の後、メアリース様にお目通りが叶った。

そして気づけば、赤子になって今この場に居る。

「この世界の住人は、誰もが争いごとや文明社会での喧騒から離れ、静

かに暮らすことだけが望みなのだ。

我々以外にもハイエルフの村や人間の集落も存在するが、上手くやれておるよ」

長老の言葉に、俺も頷く。

この村に度々人間族の商人が物々交換に訪れたりしているのを知っている。

ご近所の狩人のおじさんは、エルフと獲物を分け合ったと言ってウサギをくれたこともあった。

危険な魔物や隣人も居ない。

退屈だが静かで誰もが心優しい穏やかな世界がここだった。

「そしてお前も来年になれば一度この世界唯一の都会に赴き、そこで最低限の教育を受けるのが習わしである。

この世界、この村に産まれたからと言って、その生き方まで我々と同じになる必要は無いのでな」

長老の話では、その教育とは必ず受けなければならない義務教育と  
言うものらしい。

「それにしても、我ら一族がエルフの純血種と諍いがないと言うのは驚きです。

一般的にお互いが不倶戴天の敵同士だという印象がありましたから」

「儂は長いことこの世界で管理人の一人としてこの村を任されておるが、そう言った確執が起こらないでもない。

そういう場合は、メアリース様の役人に言って仲裁してもらおうこと  
になっている」

長老は見ての通り出歩くのに杖を必要とするかなりの高齢だ。

俺の狭い見識でも、長命なエルフ種と言うのは若々しい見た目のイ  
メージしかない。

この老人はいったいどれだけの年月を生きて来たのだろうか。

何度もアンズ様の御力で人生を繰り返した俺でも想像がつか  
なかった。



§ § §

都会、と聞くと俺は王都を想像する。

整備された道や街並みと言った景観、大勢の人が行き交う活気ある通り。

広場では旅芸人の一座が芸や踊りを披露し、露店が並び呼び子の威勢のいい声が飛び交うものだった。

俺が来た都会は、想像とは違った。

四角い流線形の鉄の箱に車輪を付けた乗り物が行き交い、建物は見上げるほど高く規則正しく並んでいる。

人は乗り物が行き交う道の脇を縫うように歩きながら、手元の端末を凝視したり耳に当てたりしていた。

道の脇にある小さな商店に入れば、食料品から雑誌、日用品まで見たことのないほどの品揃えを誇っており、氷菓まで販売していた。

「嫌よねー、都会って。」

「どうして人間って機械が大好きなのかしら」

「それでもこの都市の機械って、かなりノスタルジックなモノで固めてるらしいよ。」

文化の保存って言っても、わざわざこの世界でやらなくてもいいよね」

ホントホント、と俺と一緒に馬車でやってきたエルフの女子たちの言葉が俺の耳から耳へと過ぎ去っていく。

「あなたもしかして、都会は初めて？」

俺が呆然と街並みを見ているのを見て、馬車の対面に座っていた少女が言った。

頭上に大きな白い花を戴く、厚着をした精霊種のような少女だった。

花の精霊の系譜なのか、甘い匂いがこっちまで漂ってくる。

「メアリース様は住人に娯楽を与えることにとっても力を入れているそうよ。」

こんな森だらけの世界に不釣り合いな機械の町があるのもその一

環なんだって」

白く四角い建材の建物の群れを見ながら、彼女は言った。

「何だか神というより、ただの統治者のようだ」

古来の支配者は、パンと娯楽を施し住人から支持を受けていたと言  
う。

女神メアリースもやっていることは同じのようだ。

「かつて滅んだ文明の保存なんて、私たちの近くでやらないでほしい  
わ」

彼女もエルフと同じようなことを言っている。

まるでゴミの埋め立て地が近くにあるみたいな態度だった。

確かに俺も、この町に強烈な違和感や無意識レベルの忌避感を抱い  
てしまう。

俺はなぜエルフ種がどこの世界でも森の奥で引きこもって過ごし  
ているのか疑問だったが、肌身で理解した。

この金属の町が、本能で受け付けないのだ。

エルフ種は精霊の末裔であると、長老から教わった。

自然と真反対であるこの機械の町は、俺に流れる血そのものから合  
われないのだ。

「この町で、俺は勉学を身につけないといけないのか」

いつしか俺の口から陰鬱な言葉が出ていた。

「あなたも、義務教育なの？」

ああ、この馬車に乗る者は全員そうか」

彼女もそれに思い当たったのか、独りで納得がいったように頷い  
た。

「お互いに、この町の便利さに染まらないようにしたいわね」

その彼女の言葉が、呪縛のように俺の胸の中に残った。

俺は学友となった彼女たちと共に、都会の学校で数年を過ごした。

都会は何もかもが便利だった。

電気と言う機械を動かす力に、水道がどこにでも通っている。

歩けば五分もせずに食料品を売る商店を見つけられるし、娯楽はど

れも目移りするほど膨大だった。

だからだろうか、都会にはエルフ種らしさを忘れて人間と一緒に過ごしている同族たちが散見された。

この都会に住む誰もが豊かさを享受し、誰もが飢えの苦しみも病の恐怖も抱いていなかった。

——ここは楽園だ。誰もが奪い合う必要も無い、争いも無い。必要なものは何でも手に入る。だから誰もが他者に親切にできる余裕がある。

だが、なぜだろうな。俺は少しだけそれが寂しく思えたのだ。

俺が同胞たちの村へ帰った時、情報を受け取る為の端末だけを手元に残し後は全て処分した。

ニユース情報は必要だと思い手元に残したが、ふとこれが便利さに毒されると言うことかと思いついて苦笑した。

長老たちが敢えて不便な生活に身を落とす理由が良くわかる。

この便利さを知って、元の生活に戻るのは耐え難いだろう。

そうした幼少期を過ごし、俺は二十歳を超えた頃から早くも大人として村の一員になった。

ダークエルフの寿命からすれば、二十歳なんて鼻たれ小僧みたくものだが、俺は泣かずの転生者<sup>ギフト</sup>。

普通の子供のように扱うことはできないと言うのだ。

そして俺の仕事はと言うと、村の治安を守る自警団だった。

エルフ種は伝統芸能として弓術を長い年月をかけて熟達するものらしいのだが、俺の出来ることと言えば剣を振るくらいのものだ。

弓の扱いが出来ない俺に狩人は出来ないので、うつつつけの仕事だろう。

まあ自警団と言っても、この村は村民が助け合って生きているので力仕事を手伝ったりと言ったような便利屋扱いの用件が多かったが。それでも俺は充実した平和な生活を過ごしていた。

とは言え、どんな世界のどんな場所でも、不心得者と言うのは出てくるものである。

それは、ある村の祭りの日だった。

排他的とまでは言わないが、普段同族ぐらいしか見かけないこの村で他所の人間やエルフが出入りする忙しい一日だ。

俺も自警団の一員として警備に参加していた。

この日ばかりは、普段は入れないダークエルフの里に観光客が大勢出入りする。

都会の人間は物珍しそうに今日の為に用意された工芸品などを見て回ったり、異文化を楽しんでいる。

そんな雰囲気の水を差すように、それは起こったのである。

「なぜですか、リリウム姫!!」

大して広くも無いこの村で、騒ぎが起こればすぐに分かる。

どうやら、祭りに来ていたリリウムが人間の男に絡まれているようだった。

「どうした、リリウム。何か問題でもあったのか?」

俺は絡まれている彼女と人間の間に入って、彼女に尋ねた。

リリウムとはあの時馬車で相乗りした時に学友になって以来の知り合いだった。

王族の末席だと言うのも、在学中に聞いた覚えがある。

彼女は森の奥にある湖畔に一人屋敷を構えているらしい。

使用人は居ると言う話だったが、別にいつも連れ歩いているわけではないらしい。

「アーランド、ちょうどよかった。

いい加減、うんざりしてたのよ」

彼女はそう言っ、俺を盾にするように前に押し出した。

「いったい何事だ?」

「お、俺はただ、彼女を誘ってこの退屈な世界からもっと楽しい世界に行こうと言っただけで……」

「要するに、ただのナンパか」

それで揉めるとは、どれだけしつこかったのだろうか。

「彼女はこの世界で静かな生活をお望みだ。

あまりしつこいと、今後森に出入り禁止にするぞ」

「何でお前にそんなことがわかるんだよ!!」

俺が警告を発すると、男はなぜか激昂してそう言い放った。

「こんな何も無い森の中で何の変化もなく過ごして、何が楽しいんだよ!!」

これは話の通じない手合いか、と俺は判断して自警団の同僚に目配せした。

同僚は小さく頷くと、遠巻きに俺たちの様子を見ている野次馬の中から立ち去った。

「娯楽なら、都会でも十分溢れているだろう」

「それじゃあ足りないんだよ!!」

俺はもつともつと、俺を必要とする場所で活躍したいんだ!!

だって言うのに、俺が送り込まれたのはこんな辺境のド田舎だツ!!」

俺は彼が何を言っているのかわからなかった。

少なくとも俺はメアリース様にお目通り叶ったあの時、どんな世界に転生したいか要望を尋ねられた。

彼は望みどおりにこの世界に産まれたのではないのか？

「お前は望んでこの世界に産まれたのではないのか？」

「こんな何も無いド田舎だと知ってたら、俺は来なかったよ!!」

この世界は何にも問題が起らないし、ドラゴンみたいな化け物も居ないじゃないか!!」

彼の主張に、野次馬も俺たちも首を傾げた。

この世界に危険な生物なんているわけがないのに。

「俺は、俺の活躍できる場所が欲しいんだよ!!」

その為のスローライフが出来る世界のはずなのに、ここでの俺のやれることなんて力仕事ぐらいじゃないか!!」

「お前は何か根本的に勘違いしていないか？」

どうにも彼と話がかみ合っていない気がするのは俺だけだろうか。

「件の騒ぎはここですか」

俺たちが困惑していると、この村の住人で唯一ダークエルフではない存在がやってきた。

村の役所に詰める、役人。無限に存在する女神様の化身の一人だ。

「女神様!!」

彼は、役人に詰め寄った。

「この世界は俺の活躍できる世界じゃないんですか!？」

これじゃあ折角レベル99まで上げたステータスの持ち腐れじゃないですか!!」

彼の主張は俺たちにはわからなかったが、女神の化身たる役人には分かるようだった。

「確かあなたは、自分が活躍できるスローライフを望みましたね。

十分あなたはこの世界に貢献できているではありませんか」

「違う、違うんですよ!!」

俺はもつと、平和な村に襲ってくるドラゴンとか退治したかったんです!!

前世で得たカンストスキルを駆使して次々に問題を華麗に解決とかしたかったんです!!

なのにこの世界にはそう言った問題なんて起こりやしない!!」

「当然でしょう、だってここは管理された世界なんですから」

役人の返答は無情だった。

「この村などに訪れる飢餓や大雨と言った水害、その他考えられる限りの問題はただの“イベント”にすぎません。

死傷者が出ない程度に調整されているに決まっているじゃないですか」

それらすべてが制御可能だからこそ管理されている、と彼女は言えるのだ。

「そう言った活躍の場が望みなら、最初からそう言えばよかったのでは?」

「そこは神様なんだから察してくれてもいいだろ!？」

普通自分の欲望を赤裸々に語るバカはいないだろうが!!」

「あなたには論理的な正当性が見受けられません」

「ああもう、話にならない!!」

そして彼は、こちらに向き直った。

「姫様!! 俺ならあなたを幸せにしてあげれます!!」

だから一緒に違う世界に行きましょう!」

「ふざけないで!!」

リリウムの返事は当然のモノだった。

「あなたは別に私でなくても、誰だっていいんでしょ？」

お姫様なら私の上に何百人も姉がいるからそこから好きなものを選びたいじゃない!!」

彼女の率直な言葉は、凶星を突いたのか彼の自尊心を大きく傷つけたようだった。

「この女ッ」

彼が激情に身を任せようとしたその時、俺は腰の木剣の柄に手を掛けた。

「ぬッ」

しかし、俺の腰のベルトには何もなかった。

だが次の瞬間、俺は見てしまった。

リリウムが俺から抜き取った木剣を男に突き付けていたのを。

その瞬間、俺は雷に打たれたような感覚に襲われた。

「んなッ、俺が、反応できなかった!」

「レベル制の人たちって、ステータスとかスキル頼りで技量が追いついていないことが多いらしいけど、あなたもそうみたいね。

そんなんじゃない、望みの世界で活躍できたかどうか」

リリウムの表情には隠し切れない嘲笑が浮かんでいた。

「なッ、なッ、な……」

「そこまで不満ならば、リコール致しましょう。

あなたの不満については学習いたしました」

屈辱のあまり固まってしまった男に、役人が声を掛ける。

「今すぐ、レベル上限999999999で延々と敵と困難が襲い掛かり続ける世界にご案内しますね」

「えッ、ちょっと待ってください!!」

「作ってみたは良いのですが、あまりにも不人気な場所なのか一人も希望者がいなかったので廃棄予定だったので、これで予算も無

駄にならずに済みます」

男がこの世界から音もなく消え去り、役人は満足げに頷くと役所へ戻って行った。

やれやれ、と野次馬が立ち去って行く。

「素直に沢山の女の子を侍らせて褒められたり持ち上げられたらいつて言っておけばよかったのに」

ふん、と鼻を鳴らすとリリウムはくるりと切っ先を下にして俺に木剣を突き出してきた。

「はい、これ返すわ」

俺は思わず、剣の柄ごと彼女の手を握り締めた。

「えッ、なに?」

「姿かたちが他の誰であろうとも、その太刀筋を俺だけは見まごうことはありません。」

——あなたなのでしよう、レナスティ姫?」

俺の言葉に、彼女は目を見開く。

「……アランなの?」

俺は強く頷いた。

彼女の瞳から不意に涙が零れた。

「もう、二度と会えないかと……」

そして彼女は、その場で泣き崩れてしまった。

これが、彼女との再会だった。

姫様……リリウムは孤独だった。

サキユバス族の王族に生まれ、泣かずとして気を遣われて生きていたと言う。

彼女の産まれた一族には成人の際に誰か男を誘惑してくる風習が有るそうなのだが、文化の押しつけと言うのはハラスメント行為に当たるとかでそれを拒否することも可能であった。

彼女としてそんな風習に参加するのは嫌だったそうだが、もっと嫌だったのは彼女の周囲がそれを拒否するだろうとあたりを付けていたことらしい。



彼女の周囲は、彼女が王族として末端だからと言っていい加減に扱ったわけではない。

だが彼女の孤独を理解した者は誰も居なかった。

役人曰く、前世の記憶の保持は要望の多い有り触れた特典だと言  
う。

だが転生先との種族に馴染めず、孤立しトラブルを起こすケースも  
多いそうだ。

それこそ、この世界のような箱庭が用意されるくらいには。

俺もこの世界の両親とは、特別険悪でも無いがどこか他人行儀に接  
している。

自分の子供が別の誰かだったとしたら、それは恐怖に値するだろ  
う。

お腹を痛めた子供を苦楽と共に成長を見守りたかったはずだ。

今の俺の両親は、新しい子供を作って幸せに過ごしている。

繁殖力の低いダークエルフがすぐに子宝に恵まれたのは偶然では  
あるまい。

俺は嫌でも理解させられた。

この世界で生きると言うことが、かの至高なる文明の女神の下で生  
きると言うことが。

俺の人生のすべては、本当に何もかもが女神に与えられたものに過  
ぎないのだ、と。

「だが、それが本当に悪いことであろうか？」

俺は胸に燻った疑問を、長老にぶつけた。

「我々はメアリース様に管理されて生きておる。

だがそれは偶々我々にも見えると言うだけで、かの御方の影響下以  
外の世界でも同じことかもしれんぞ」

「それは……」

それを言ってしまったら、おしまいであろう。

人間は所詮、運命に弄ばれる枝葉に過ぎないと言うことなのだか  
ら。

「ふむ」

長老は、村で数少ない機械であるブラウン管テレビのスイッチを入れた。

画面の中では、メアリース様が他の世界の神々と交渉している様子が中継され放送されていた。

『あなた達のような杜撰な管理しかできない連中にこの世界は任せられないわね。』

私がきつちり運営して管理してあげるから、私に主権を差し出しなさい』

この言葉に対し、交渉相手の神は激怒。

『羽虫の如き人間上がりの分際で、我々に全てを差し出せと言うのか。』

貴様こそ、我々の役に立てばそれでいいのだ』

相手は嵐の神らしく、その気性は荒い。

明らかに神選ミスだが、恐らく元の世界で地位があるのだろう。

『私たち人類が羽虫なら、あなた達は単細胞生物よ。』

自身の権能に甘え、事業拡大もしなければ環境の改善もしないし、

自身の拡張性も全くない。

自身が神として永遠に存在できると思っている。これだから自然

神は嫌なのよ』

この後は、もはや交渉事とは思えないどちらが先に手を出したかの

醜い罵り合いが始まった。

すごいなあ、と俺は思った。

これを自分の眷属たちに放送してしまえるかの御方の神経が。

「アーランドよ、この二柱はどっちに非が有ると思う？」

「どちらにも問題しかないように思えますが」

俺の返答に、長老は頷いた。

「だが、考えてもみよ。嵐の神が心穏やかで労わりや優しさに溢れているべきだろうか？

例えば地母神に母性が存在しないと言うのは、おかしいとは思えぬか？」

確かに、長老の言う通りかもしれない。

気性の荒くない嵐の神など、それはどこかおかしいのだろう。

「メアリース様も同じことよ。」

かの御方の司るは文明そのもの。

人類の文明とは、人類の傲慢そのものではないか？

人類種が自然に対して行って行ったことこそ、かの御方の象徴する文明のあり方そのもの」

まあ尤も、と長老は目を逸らした。

「メアリース様は元々人間であらせられた頃からあんな感じの性格であつたようだが」

「……」

果たしてそれは、卵が先か鶏が先かと言う話に近かつた。

「メアリース様の自著伝の一つに、かの御方は自らの神の名を今のモノに定めたと言う話がある。」

「メアリース」と言う言葉は幾らか訛った呼び名だが、本来は人間の傲慢などを揶揄する意味合いであつたらしい。

自らそれを名乗る傲慢さが、かの御方の性質を如実に表している」  
ある意味では、メアリース様を始めとした神々は我ら人類種よりも不自由なのだ。

彼女らは自分の性質から、逃れることはできないのだから。

そう、例えば運命の女神が気まぐれであらなければならぬように。

メアリース様が私たちに全てを与えようとするのも、彼女の性質である人類種の傲慢さ故なのだ。

それを悪とするのは、あまりにも主観的で一方的な物の見方と言うことなのだろう。

俺はこのように長老というダークエルフの賢者の教えを受けながらこの村で生活を続けていた。

そしてある日、俺宛に赤い封筒が届いた。

それは、女神の勅命であり、魔王軍への従軍を要請するものであつた。

俺は感じていた。

あの時、かの邪悪の女神がお怒りになった我が傲慢さのつけを支払う時が来たと言うことを。

## 第五階層

一度目の終末を目にした俺は、二度目の世界へと魔人将として戻って来た。

「では、各々の将は以前と同じようにこの世界を攻略すると言うことでよろしいですか、魔王様」

一度目の記憶を持ちこせるのは、魔王様と俺たち四人の将のみだ。ちなみに俺たちの総称は「魔将」である。

その魔将四人が今回の方針についての会議を行い、代表して俺が魔王様の意向を尋ねた。

「うん、ああ、よきに計らえ」

魔王様は退屈そうに玉座に座したまま頷いた。

それを確認すると、俺たちは各々の仕事へと戻った。

会議が終わり、俺が最初にしたことはと言うと。

「リーパー隊諸君、お前たちに伝えたいことが有る」

まずリーパー隊を招集することだった。

こいつらの認識は、この世界で戦うことは初めてのことだ。

俺は見知らぬ上司であり、何を言われるか不安そうにしていた。

「まずは、これを見ろ」

俺はペン状の機械を掲げた。

彼らは釣られるようにそれを見上げた。

その直後、ペン先からフラッシュが発生し、彼らを照らした。

これが何を意味するのか、それは単純だった。

「諸君、おかえり。よく前の世界では最期まで戦い抜いた」

俺の言葉に困惑しつつも、彼らの胸中には納得が生まれていることだろう。

このペン状の装置は彼らの魂に作用し、失われた記憶を蘇らせる効果があるらしいのだ。

俺は使ったことが無いのでそれがどういうものなのかわからないが。

「本来、記憶の持越しは我ら魔将四人と魔王様のみである。

だが、魔王様を始めとした各魔将の方々はお前たちの活躍を評価しておいでだ。

このような格別の配慮を賜ったからには、此度も戦いにて自分たちの価値を示せ」

俺は必要なことを述べると、一人のコボルトに視線を向ける。

「アップルマン」

「はッ、ここに」

「再びお前にはリーパー隊の隊長を任ずる。

更に俺の受け持つ部隊から、三つの隊をお前の指揮下に加える」

「ご過分な期待に沿えるよう、粉骨碎身の限りを尽くさせていただきます」

こいつの場合、本当に骨が粉になり身が砕けても戦いそうだから困るのだ。

「隊長、流石ですね!! また人間どもが苦痛に歪む姿が見れるなんて!!」

「お、俺、いたぶりたかった女の子がいたんだ!!」

「俺も俺も!! あの時のいい具合のガキをまたぐちやぐちやにできるとはな!!」

俺は彼らに背を向け、立ち去ることにした。

俺の背後では、アップルマンを慕うリーパー隊の面々が彼を祝福していた。

「ありがとう、俺の無限に続く闘争に付き従ってくれる同胞たちよ!!

地獄の果てにしか居場所のない我が家族たちよ!!

此度の戦争も、邪知暴虐の限りを尽くして蹂躪しようではないか!!」

彼らのいる部屋の扉を閉める。

分厚い扉越しにも、彼らの歓声が聞こえてくる。

俺はこのような滅びに向かう世界だからこそ救われる彼らのことを、もしかしたらどこかで羨んでいるのかもしれない。

§ § §

「リリウム、居るのか？」

俺は先ほどのリーパー隊の召集の場に居なかったりリリウムが気になって彼女に割り当てられた兵舎の一室を訪ねていた。

「……アーランド？」

部屋から顔を出した彼女は、どこか憔悴していた。

「リリウム、どうした。体調が優れないのか？」

「だって当然じゃないの。またあんなものを見たんだから……」

「あんなもの？」

俺は彼女が何を指してそれを言っているのか、まるで分らなかった。

「貴方も見たでしょう？」

魔王様が、この世界を滅ぼすあの瞬間を」

それを聞いて、俺は目を見開き驚いた。

「なぜだ、リリウム。」

前回の記憶を引き継げるのは魔王様と四人の魔将のみのはずだが  
!？」

驚くことに、リリウムは前回のあの最期の光景を覚えていたのだ。

「——それはなぜか？」

その理由は分かりきってることでしょう？」

その声が聞こえた瞬間、世界から風が止まる。

音が消え、色は失われ、物事の歩みは停滞する。

「当然、私のサービスでーす!!」

天秤の女神アンズライールが現れたからだだった。

「貴女も彼から聞いたでしょう？」

転生したぐらいで私の影響から逃れられると思っ  
て

そう、彼女の仕業だと、分かりきったことだった。

「な、なんで、私はもう、関係無いじゃない!!」

「関係無い？ 確かにそうかもしれない。」

もうあなたは同じ魂を持った別人ですし」

アンズ様は悲鳴じみた叫びを上げるリリウムに、一定の理解を示した。

「——でも関係無いかどうかを決めるのは、私ですよ？」

無論それは、示しただけ、だった。

「私は赦さない、と決めました」

女神の怒りは全く以って収まってなどいない。

「これから何十回、何百回転生しようとも、あなたは憧れのお姫様のまま!!」

ありとあらゆるお姫様の末路を、何度も何度も何度も記憶を保持したまま狂うことなく延々とずっとずっとずっととずっとと、どれだけ嫌になっても続けさせてあげる」

俺はその威圧感に恐怖し、声すら出せなかった。

彼女は笑顔なのに、魂が凍り付くような気分させられる。

「ほら、嬉しいでしょう？」

女神の両手が、震えながら涙を流すリリウムの頬に添えられる。

そしてその細い指で口元を左右に引っ張り、彼女を無理やり笑顔にした。

「次はどんなお姫様が良い？」

産まれた時から老いて死ぬまでずっと暗い塔で幽閉されるなんてどう？

あなたが絶対に好きにならない男の人の許嫁に産まれるとか良いじゃない？

それとも革命を起こされて拷問に末に処刑されるとかのが良い？」

アンズ様は本当に、これっぽっちも、ほんの僅かでさえ、彼女を赦すつもりはなかった。

「お……」

「ん〜？」

「お許し下さい……」

彼女から辛うじて零れた言葉がそれだった。



神ならぬ俺にも、この先の未来が予測できてしまう。

リリウムが何を言おうとも、アンズ様を激怒させる未来しか見えな  
いのだ。

だが、救いの手とは時に予想外のところから差し伸べられることも  
あるらしい。

「はあ……」

時が止まったこの世界に、深いため息が聞こえた。

「そのくらいにしておけ、二代目」

二人の足元に、闇が噴き出る。

アンズ様がその場から離れると、両者の間に入るように邪悪の女神  
が姿を現した。

「なぜですか、リユーちゃん。

それは私を怒らせた。信じがたいぐらいの馬鹿さ加減で」

「それについては同情するがな。

だが、そう言うものだろう人間の愚かさとは」

俺は不思議な物を見るように、彼女らを見ていた。

それはまるで、リエーサセツタ様がリリウムを庇ったように見えた  
からだ。

いや、真実庇つたのだろう。なぜなら――。

「貴女はその馬鹿を庇うのですか？」

「言っただろう、二代目。」

もう『この世界は私の管轄だ』と」

闇に浮かぶ赤い双眸が、天秤の女神を見据える。

「お前がこの私に二人を預けた時点で、この二人は我が権能の下に私  
に罰せられ、――そして赦される」

恐怖しか抱かないその恐ろしい手が、リリウムの頬を撫で涙を拭つ  
た。

「我が権能が及ぶところは、無自覚の行いによって課される罪に対す  
る処罰と救済にもある。」

その罪が何であろうと、その罪を誰が決めようと、我が庇護下にあ

る者を罰するのと赦すのは私の仕事だ」

偉大なる邪悪の女神は淡々と不機嫌そうなアンズ様に告げる。

「お前たちの身内同士での取り決めは、お前たちで好きにすればいい。だが、それ以上は私が許さない。我が権能によつて悪は赦され、悪によつて傷ついた者は癒される。」

それを邪魔することは、我が盟友とて犯し難い禁忌である」

俺はこの邪悪を司る女神が、なぜ無数の世界にて崇拝されているのかを理解させられた。

俺は今、奇跡を見たのだ。

「うーん……でもでも!!」

「以前に、ヒトを救いたいと私を頼ってきたお前が今の己の姿を見ればどう映るか、わからないわけでもあるまい。」

それとも、その駄々っ子の如き無様な喚き声を以つて、  
“あの御方に泣き付き失望でも買うか?”

その言葉が決定打となった。

両手をばたばたさせていたアンズ様は、しゅんと肩を落とした。

「いやだ、あの人には嫌われたくない」

「ならば、いい加減に弁えるがいい。」

今のお前は我らが共に嫌う自然神の振る舞いそのもの。

……だが運命を司るお前に、その性質に寄るなど言うのは酷だと思  
うがな」

「むう」

ここに至つて完全に、アンズ様は矛を収めていた。

俺もリリウムも、彼女の威圧感から解放されてへたりと床に座り込んでいた。

「わかった、今回はリユーちゃんに免じて彼女の件だけはなあなあで済ませてあげる。」

でも私を怒らせた事実は変わらない。私に願った事実は消えない。

それをよく理解した上で、三人目の裁定を楽しみにしていますね」

それだけを俺たちに告げて、アンズ様はフツと消え去った。

「あ、あ、ありがとうございます……ありがとうございます!!」

リリウムは跪いて、何度もリエーサセツタ様に感謝を捧げていた。「こんなことを言うのは変であろうが、あまり彼女を嫌ってやらないでくれ。」

あれがお前たちを私の下に差し出したのも、振り上げたこぶしの落としどころを見つける為であろう。

「それでも仲裁には慣れているからな」

それはそうだろうな、と俺は思った。

メアリース様が交渉相手を激怒させ、リエーサセツタ様がヒートアップする両者を宥めるまでが様式美と化しているのだから。

なお、その努力が実ることは滅多にない模様。

「あれは私が人間だった頃から知っている。」

信じられないかもしれないが、あれはどこにでもいる普通の感性を持った心優しい少女だったのだ。

偉業を成し、神域へ至る資格さえ無ければあの虚しい姿を見ずに済んだのだが」

「偉業ですか。ただの普通の少女が」

「ああ偉業だとも。人の身にして魔導を窮め、誰もが平伏するしかない全能の神の如き『暴君』を鎮めることが出来たのは彼女だけだったのだからな」

メアリース様だけでなく、リエーサセツタ様さえ実感を籠った口調で語られる知る者も居ないアンズ様の逸話。

「お前たちは知る由もないだろうが、我が盟友があれを攫って『あの御方』の逆鱗に触れた時はこの世の終わりを悟ったものだ」

それと共に語られる、『暴君』の恐ろしさ。

この世に終わりを齎そうとしているこの方がそれを言うのは皮肉なのだろうか。

「あれの知り合いとして、あれの遊びに付き合っただけのお前たちのゲームに助言をしてやろう。」

どうしても糸口が掴めぬなら、我が神官を頼ることだ」

リエーサセツタ様は俺たちに神託を齎すと、虚空へと霧散し消えてしまった。

§ § §

「さて、この魔王軍でかの御方の神官と言えばあの人しかいないが  
幸い、俺には当てがある。

恐らく協力もしてくれるだろう。

「それでリリウム、お前はどうする?」

「……行くしかないじゃない」

流石のリリウムも、アンズ様の脅かしは効いたらしかった。

彼女は赤くなった目元を拭くと、立ち上がった。

「でも、私にできることなんて何も無いと思うけどね」

「やはり聖女様について、教えてくれないのか?」

「はッ、あいつが聖女様ねえ」

リリウムはどこか嘲笑うように吐き捨てた。

「私はいつが何を願ったか知ってるけど、正直『私と大差ないくだら  
ない願い』よ。

でも具体的には、あなたが自分で探すんでしょ?」

どうやら、俺が彼女に聞く限り聖女様の人物像は俺の想像とは大分  
違いそうだった。

「それもそうか」

仮にこの場で彼女からその願いを聞き出したとして、それですべて  
解決とはいかない。

それだけでは不十分だからだ。

「ハッキリ言つて、『私があいつと協力し出したのは四度目ぐらいか  
ら』よ。

それまで活動する国も違つたし、何をしていたかもどんな立場かも  
知らないわ」

「そう言えば、俺は聖女様について何も知らないな」

俺がうる覚えなものもあるが、あの四人が各国連合軍の旗印となり、  
俺がその連合軍に編成されて以降しか聖女様の話を知らないのだ。

ただ、戦場で広域に影響を及ぼす治癒魔法を扱えるとか、そう言う

戦力的なことしかわからない。

「とりあえず、せつかくのあの御方のご厚意だ。

あの人に尋ねてみるとするか」

と言うわけで、俺たちは件の神官の下へと向かった。

「私にご用とは、いったい何事でしょうか魔人将殿。

もしや先ほどの会議では話せない内容でしょうか？」

俺が尋ねたのは、魔王城に勤務する四人の魔将の一人。

御二柱の大神官にして、強大な魔法使いたる魔導将殿だった。

「実は——」

俺は彼に包み隠さず事情を説明した。

御二柱の神官は、女神様に認められた者にしか成れない榮譽ある職業だ。

神職は政治には関われないと言う大原則があるが、社会的信用は辺境世界の下手な管理者よりもある。

その中でも大神官は、徳の有る者しか成れない多くの尊敬を受ける地位である。

そんな彼がなぜ魔王軍の魔将として働いているのかは、俺は知らない。

「……なるほど、それはお辛かったですよね」

そして彼は俺たちの苦難に同情を示した。

「この世界を救う女神と、我らの御二柱との間で板挟みになるというのは複雑なものがあるでしょう」

「ええ、正直この世界には滅んでほしくないとは思いますが」

それが職務上許されないことだとしても、俺は懺悔するかのように彼に己の心境を告白していた。

「現実的な話をするなら、この世界に滅ぼすには惜しい文化や観光資源があるのならば偉大なる御方が滅亡を思い止まって下さることもあります」

「それは、ですが……」

「ええ、正直数多の世界を見て来た私の目から見て、この世界に滅亡を

躊躇う文化や観光資源があるようには見えませんね」

魔導将殿の言葉に、俺は落胆すらできなかった。

この世界に希少価値なんてものがあるのなら、前回である一度目の時点で考慮されているはずなのだ。

「そしてもう一つ、現地の住人が魔王様に打ち勝ち、その成果を以って彼ら自身の価値を証明すること。」

私は魔王軍に従軍すること二十回ほどですが、それを成しえた世界には遭遇できませんでしたね」

「二十回ですか……」

その事実にも、俺は戦慄した。

恐らく、彼の従軍にこの世界についての前回は“一回”にカウントされないだろう。

俺たちで言うところの六種類のこの世界を滅ぼして、ようやく彼は“一回”なのだ。

俺は信じられない物を見るような目で、この人間を見た。

「ですがまあ、言いにくいのですが、実のところ“今回”はこの世界の住人にとってチャンスでしょうな」

彼はこほんと咳払いをして、こう続けた。

「なにせ、今回の魔王様は大変お若く未熟であらせられるので……」

「そうなんですか……」

正直俺はあまり魔王様の事はよく知らない。

だが、魔導将殿曰く、あれで若く未熟なのだと言う。

「ええ、魔王としての責務は、今回が初めてとのことですよ」  
「なるほど」

実際、この世界の住人は四度目に魔王に打ち勝った。

薄氷の上の勝利だったが、絶対に不可能と言う試練ではなかったのだ。

「あれで、若くて未熟……」

そして実際に間近で斬り合っただろうリリウムはショックを受けていた。

世界を滅ぼせるだけの力を持ちながら、魔導将殿の評価は低い。

「まあ、魔王様の能力を含めて試練には丁度いい塩梅なのでしょう。かの御方の慈悲とは言え、個人的にこの遊び心には賛同しかねますな」

得の高い神官である彼でさえ、現地人の苦痛を長引かせることは快く思っていないようだった。

「大神官たる貴方様が、御二柱の方針に反対なのですか？」

「当たり前でしょう。いくらやらなければならぬとは言え、どれだけの人間が恐怖と苦痛のまま命を落とすとお思いで？」

偉大なるかの御方が慰めてくださるとは言え、その事実は消えないのです。

「いったい何の為に人権が存在すると言うのか」

魔導将殿は心底現状を嘆かれていた。

そのことに、俺は驚愕を隠し切れない。

「どうかしましたか？」

「いえ、大神官とあろう御方が、そのように仰るとは」

「私たちは御二柱に全てを与えられて生きています。

その中には、私たちの自由意思さえも存在します。

与えられた範囲とは言え、こればかりは御二柱にも犯し難い最後の自己を証明する領域。

どのような思想や環境を選び、自分の物とするかは自分で決めるのです」

魔導将殿は、確固たる意志を持った人間だった。

これまでの会話だけで、思わず尊敬の念を抱いてしまえる程に。

「あの、じゃあ、質問なんですけど。」

あのリーパー隊のようなクス連中をどうしてさっさと元の世界で処罰しないんですか？」

こんな機会でもないと大神官様に話を伺うことなんて無いだろうからか、リリウムも彼に尋ねた。

「それに関しては、魔導将殿あたりに尋ねれば、かの至高なる御方が直接教授下さるだろうが……あの方は物事をオブラートに包んで話すと言うことをなさらないからな」

御二柱に仕える大神官にもこの言われようであった。

「知っておられるか？」

人間には全体で2%ほどの割合で、殺人に対して忌避感を抱かない者が生まれるそうです。

では彼らが仮に殺人を犯し、偶然捜査の手から逃れ、罪悪感を抱かず生きることが赦されないことでしょうか？

ある世界の法律では、殺人事件にも時効が存在し、時効まで罪悪感に苛まれるのは実刑を受けると同じくらいの苦しみであるとされています。

そうなると、罪悪感を抱かない殺人者は罰を受けていないことになりますね」

彼のお話に、俺はリーパー隊の面々の顔を思い浮かべる。

あいつらが今更罪悪感を抱くなんて、微塵も想像できない。

「殺人と言う犯罪は別として、罪悪感を持たないのは悪でしょうか？」

罪の意識が無いのは邪悪でしょうか？

一般的に我々の常識と比べて、特異に産まれただけの彼らがそのまま差別されるのは野蛮です。

区別されるべきかもしれませんが、それを望まない者もいる」

それは当然の話かもしれない。

そういう区別を受けると住居が移動になり、生活のランクが下がり不便が増えたりもする。

本当の自分を隠して生きることなど、誰でもしていることだ。

「リーパー隊の面々は、犯罪を犯したという一点では擁護するつもりも起こりませんが、殺人に悦楽を感じると言う生来の性根を持って産まれたということだけは同情に値します。

そして彼らに居場所を与え、曲がりなりにも赦しを与えるのも邪悪の女神たるかの御方の権能にして、慈愛であるのです」

それはまさしく、俺たちが先ほど受けたリエーサセツタ様の偉大な慈悲の心であった。

「さて、かの御方は私がお二人の御力になれると仰ったそうですが、今



のところ協力できそうなことはありませんね」

「そうですか」

折角の神託も、今はあまり意味をなさないようだった。

「そう言えば、あなたのところのリーパー隊の隊長殿から協力要請が来しました。」

前の世界で活用した戦略を取りたいと、私の方は全然かまいませんよとお伝えください」

「え、ああ、そうですか。分かりました」

とりあえず、言われた通り俺は今の仕事をこなすことにした。

§ § §

戦況は進み、魔導将殿率いる魔法部隊は聖光法国の主要都市のひとつを前に敵軍と睨み合っていた。

この時点で魔王軍の脅威は人類に知れ渡り、我らの快進撃に法国も大部隊で迎え撃つ。

この国での決戦が始まろうとしていた。

「——まず初めに、天より一条の雷火がありけり」

魔導将殿の詠唱がにらみ合いを続ける戦場に響き渡る。

「我らヒトは洞窟に隠れ住み、夜の暗闇を恐れ、他の獣に怯える矮小な存在に過ぎなかった」

大軍の目の前で堂々と詠唱をしている彼の邪魔をしようと、敵国の兵団が歩を進める。

無数の矢が降り注ぐが、こちらは魔法によって防壁が展開されており、全てが地に落ちる。

「我ら、天より与えられた雷火を手に取り、夜の暗闇を暴き、獣の脅威を払い、知恵を手にした。」

この炎こそ、文明の起こり。この炎こそ、我らへの恩寵!!」

魔導将殿が、彼の旗下である魔法使いたちが、たいまつに火を付け、掲げた。

彼らの足元の魔法陣が、輝き始めた。

「今こそ、我らに与えられし恩寵を運び、文明の光無き人々を照らさんとする!!」

さあ、光無き人々よ、獣に怯え、夜の闇と寒さに震える人々よ!!

——今こそ、文明開化の時である!!」

魔導将殿たちがゆつくりと、浮かび上がる。

否、彼らは地面から出て来た。何かによってせりあがっているのだ。

地面から、魔法陣から現れたそれは、やがて地面から離れて空へと浮かび上がる。

「それ」は、文化を伝えるという巨大な黒い船だった。

伝承曰く、邪悪の女神は人間だった頃に召喚魔術を極め、巨大な龍を召喚し使役したと言う。

故にかの女神を信仰する者は、召喚魔法に関する知識と才能のポーンスを受けられるのだ。

大神官たる魔導将殿ほどにもなると、数百人を輸送できる空飛ぶ船を召喚することぐらい難しくはないのである。

巨大な黒い船は敵軍を悠々と飛び越し、敵の主要都市の真上へと陣取った。

そして、あらかじめ搭載されていたリーパー隊を始めとした俺の部隊たちが町中へと降下していく。

都市は黒い船に威圧され、兵員が侵入されたことで投降した。

それは賢明な判断だったであろう。船には無数の砲台が搭載され、眼下に向けられていたのだから。

このように最小限の被害で、魔導将殿はこの世界最大の宗教国家を陥落させた。

俺が思うに、俺が聖女様の話をあまり知らなかったのは、魔王軍がいつも最初に聖光法国に進軍するからなのでは、と思いついた。

多分次回も最初にこの国に攻めるだろう。

そして一国を落とせば、常にこの世界の全戦力を少し上回り続ける魔王軍にとって残りは消化試合である。

女神様の指示で敢えて残りの国の連合軍の結成を待ったりもするので、最終的にはこの世界を滅ぼすのは数年を要することになる。

その間、この国を拠点として整備する仕事も出てくる。

そこで俺はようやく、待ちに待った存在と出会うことになる。

「魔人将殿、あなたがこの世界を惜しむ理由が私にもわかる。」

この世界は信仰に対して柔軟で、私たちの齎す文化にももう既に適応し始めている」

そのように魔導将殿に言われたのは、聖光法国を落としてすぐだった。

「彼らの教育を担当するのは、魔造将殿でしたか？」

「ええ、ですが特に熱心な者たちには私から直接指導しようかと思えます」

「すごい力の入れようですね」

「それだけの才覚の持ち主が私の下で修業したいと申し出て来たのです」

魔導将殿はとても嬉しそうに、彼女を紹介してくれた。

「どうも、ご紹介に預かりました私はクリスティーン・オルデンと申します。」

師匠の下で偉大な女神様から齎される恩寵を他のこの世界の皆さんにも伝えられるように頑張りたいと思います!!」

そう、彼女こそが俺が探し求めていた聖女だったのだ。

俺は訳が分からないまま仕事をこなし続け、無事この世界も魔王様の手によって滅び去る光景を最期に見るのであった。

## 第四階層

俺は、前回魔導将殿に弟子入りしていたクリスティーンについて考えを巡らせていた。

俺の知る彼女の名声は聖女としてのモノだった。

そんな彼女がなぜ、魔王軍の幹部の弟子になったのだろうか。

「魔人将アーランド」

俺は名を呼ばれて顔を上げる。

「はッ、何でございますか?」

他の魔将達との会議の席で、彼らの視線が集まる中、魔王様は俺にこう言った。

「個人的な話がある。会議が終わったら、ここに残れ」

「了解しました」

俺は彼に頭を下げた。

はて、俺に話とは何であろうか。

「取り留めのない会議が終わり、俺は一人玉座に退屈そうに座っている魔王様の前に残った。」

「この世界は、無味乾燥である」

跪く俺に、魔王様はお声を投げかける。

「会議中の上の空とは、そこまでこの世界の攻略は退屈か?」

「恐縮です」

どうやら、会議中に考え事をしていたことはバレていたらしい。

普通にお叱りの言葉を貰ってしまった。

「別に咎めているわけではない」

しかし、次に頂いた言葉は意外な言葉だった。

「所詮お前も、我が母の遊戯に付き合わされている一人だ」

「遊戯などと。偉大なるかの御方は勤めを果たしているだけでしょう?」

「その勤めの意義を知らぬ身でよく言える」

俺は魔王様の言葉に口を噤んだ。

それを知っているのは、この魔王様ぐらいであろうに。

「火が燃え移ることに、理由など必要ありませんまい」

「その火に意思があり、その所業に納得してはいなくせによく言えたものだ。」

我が母は人間の意思や可能性を愛しておられる。

一息にこの世界を滅ぼさない理由はそれだ。だが、結局のところその可能性とやらを示せるのはほんの一握りに限られるだろう。

そんな少数の為に、我らは多大なコストと時間を割いている」

魔王様は、リエーサセツタ様が偉大であるが故に、その偉大過ぎる愛に嘆いていた。

「こんな塵芥の如き世界など、さっさと滅ぼしてテーマパークなり保護区画なりにすれば良いのだ」

「テーマパークは流石にちよつと……」

俺も思わず本音が漏れてしまった。

だが、俺より先に本音を零した魔王様は溜息を吐いた。

「魔王などと言う、ただ椅子に座るだけの職務も流石に飽いた」

それは、愚痴だった。

絶対強者たる魔王様の本音だった。

「所詮この職務も、お前たち部下も、我らが母に与えられた物に過ぎない。」

この私に対する崇敬などお前たちには無いのは分かりきっている。私などただの案山子で十分なのだ」

「そのようなことは……。」

魔王様の御力は偉大ではありませんか」

「それすらも、所詮は与えられた物に過ぎない」

彼は目を閉じて、退屈そうに言った。

「全ての栄光が約束され、成功だけの人生と言うのも退屈なだけだ」

何を贅沢な、と俺は思わず口に出そうになった。

魔王様は数多の人間以外の異種族の頂点、龍人だ。

しかも彼は、リエーサセツタ様が使役した巨龍と交わって産まれた子供の子孫、神の直系を脈々と受け継ぐ特別な一族なのである。

故に魔王。半神半龍の神の依り代。女神の血族。

産まれた時から全てにおいて成功している勝ち組の中の勝ち組であり、俺が愛読しているニユースサイトの成りたい来世の種族ランキングでは殿堂入りして投票すらできないほど文句無しの最強種族だ。龍人を主人公とした創作物は定番であり、彼らが主人公でなくてもその仲間には誰か一人は居るのが定番である。

物語で敵で登場すると、如何なるチート能力を以ってしても勝負に成らないくらい最強無敵。それが魔王様の一族なのだ。

故に我らにとつて、魔王様は肉を持って生きる神そのものである。リエーサセツタ様がその御力を振るうのに必要な依り代に最も適した自分の子孫であり、かの御方の代行者なのだから。

「前世の私がどれだけメアリース様に貢献したかは知らないが、せつかく誰もが羨む出生であろうとやっていることが弱い者いじめではな」

本当に贅沢な悩みだった。

魔導将殿が彼を若く未熟と言った理由が少しだけ分かった気がした。

「……そうだ、魔人将アーランドよ。

退屈しのぎにお前がこれだと言う勇者を連れてくるのだ。

古典に習い、それを持って我が無聊の慰めとしよう」

「その、よろしいのですか?」

「ああ。興が乗れば、お前にも褒美を賜す」

との事であった。

折角なので、俺は早速魔王様の要望に応えることにした。

「ねえ、アーランド。なんで私を魔王様の御前に呼んだのよ」

その辺を歩いていたりリウムを捉まえ、俺は彼女を玉座の間へと連れて来た。

困惑している彼女は小声でそんなことを言ってくる。

「アーランドよ、そやつは我が軍の者ではないか」

「左様です。ですが、この者は私と同じ、かつてはこの世界出身で有った存在です。」

私が覚えている限り、彼女を超える剣の才能を持つ者は居なかったか」と

「ちよつと、アーランド!？」

俺に連れてこられたリリウムが更に困惑して声を上げる。

「ほう」

魔王様が、玉座から立ち上がる。

そして異空間にあるアイテムボックスから武骨な剣を取り出すと、それをリリウムの前に放り投げた。

「取るがいい」

魔王様は無言を言わさぬ様子で、そう言った。

リリウムは俺に抗議することも忘れ、威圧感に耐えるように足元の剣を拾った。

「そして、私を楽しませろ」

その日、人類との戦いとは全く関係なく、魔王城は半壊した。

そしてその日のうちに何事も無く再建された。

ちなみに、なぜか俺はその場に居合わせたからかりリウムと一緒に魔王様と刃を交える羽目になった。

全ての技能適正がAを超えていると噂される魔王様は本当に強かった。

§ § §

「もう、信じられないんだけど!!」

「悪かったってば」

俺はリリウムの機嫌を取っていた。

「今の私のステータス、前世よりも貧弱なのよ!？」

それで魔王様と戦わせるとか、いったいどういうつもりなの!？」

「だって、魔王様がお暇だと仰るから」

「それで私は死にかけたんだけど!!」

「死ぬとか、それこそ今更じゃないか」

お互いに何度も死を超え、魔王様の滅びを目にしてきた身である。

特に最近はそのあたり麻痺してきたように思える。

「それよりも、やはりお前は剣を握っている方が美しい。」

魔人将の地位もお前の方がふさわしかったはずだ」

「……それに関しては、もう終わった話でしょう」

魔王様と言う理不尽の権化との戦いとは言え、俺は彼女と再び肩を並べられて楽しかった。

そして、その機会が訪れることが殆どないことが悲しかった。

俺と彼女が従軍する際に、どちらが魔人将になるか決めることになった。

なぜこのような幹部という立場で送り出されたかと言うと、俺たち二人は罪人として御二柱の下へとやってきたが、『それまで私たちは御二柱の庇護を受けていなかった』。

あの訓練施設で訓練を共にした連中と違い、我らには負債が無かったのだ。

だから実力と経験を加味して、魔王軍の魔将とその副官と言う待遇で従軍できたと言うわけだ。

結局、リリウムが魔人将という立場を拒否し、俺がその地位を引き受けることになった。

「本当に勿体無い話だ。剣術適正Sのステータスが泣くぞ」

「だって今生の私も剣士とかじゃないもの」

つーん、と彼女は不機嫌そうに顔を背けてそう言った。

「……あのさ、さっきの話は本当なの？」

「なにがだ？」

リリウムは半壊し風通しが良くなった魔王城を見やる。

既に補修工事が魔造将殿の指揮の下、ゴーレム部隊が着々と行っていた。

「さっき、魔王様に言った言葉よ」

「……ああ、当然だろう」

『なかなか暇は潰せたが、所詮は身内同士の戯れだな。

もつと精強なる勇者に心当たりは無いのか？』



『……一人、俺の知る限り比類なき英雄に心当たりがあります』

『では、それを連れて参れ。それを倒せば、我が母もこの世界を見限ろう』

『ですが、それだけは出来ませぬ』

『ほう、なぜだ？』

『あの男は、父は、私の獲物だからです』

「あなた、師匠と本当に殺し合うつもりなの？」

「今生では無関係なくせに、まだあの人を師と呼んでくれるのか？」

俺が揶揄するようにそう言うと、彼女はバツが悪そうに視線を逸らした。

「……未練よ。結局あの人とは喧嘩別ればっかりだったから」

「思い返すに、喧嘩にすら至っていないかったと思うが」

「うるさいわね!! それよりも、私を魔王様に差し出したこと許して無いからね!!」

でも私は優しいから、適当な町を占領した後デートしてくれるなら許してあげる」

「はいはい」

俺はその後、しばらく彼女の機嫌が回復するまで付き合ってた。

……昔読んだ童話に、天上の神の化身が地上で怪我をして、優しくしてくれた狩人の青年にお礼として嫁ごうとする話を思い出した。

結局狩人の青年はそれを断った。怒った神の化身は天上へと帰ってしまったという話だ。

俺はその青年がなぜ世にも美しい神の化身と夫婦になる機会を断ったのか、今ならなんとなく理解できた。

俺にとつて神像も同然だった姫様が、俺の近くで侍って媚びてくる有様はいかんともし難かった。

長寿故に性的欲求の少ないダークエルフでなかったら、とつくに彼女の色香に負けていたかもしれない。そう考える自分が嫌だった。

そして、あらかた城内の修復がその日のうちに終了し、未だ俺にし

だれ掛かってくるリリウムに辟易していた頃だった。

「魔人将殿、外部からの使い魔が魔将のいずれかに面会の許可を求めてやってまいりました。」

あの、いかがいたしましょうか？」

「なに？」

俺は魔王城の門番がやってきて伝えに来た要件に、眉を顰めた。

今現在、魔王軍は魔王城で準備段階にある。

つまり外部、人類側が我々を認知しているはずが無いのである。

「俺が対応しよう、そやつにも直接門前へ来るように伝えるがいい」

「はッ、了解しました」

門番は俺に敬礼すると、速足で持ち場に戻って行った。

「この時期に外部からの接触だと？」

一体どういうことだ？」

「そう？ 私は何となく想像ついちゃったなあ」

俺の腕を両腕で絡めとり、肩口に頬を当てるリリウムがそんなことを言う。

「なんだって？」

「まあ、行けば分かるでしょ」

「ならば、せめて副官らしい体裁は保て。」

今のところは、客人が相手なのだからな」

「はいはい」

そして俺が門へと出向き、現れた人物に目を見開いた。

「あら、魔人将様ですか。」

わざわざ私めの為に呼びつけてしまって申し訳ありません」

門の外から現れたのは、クリスティーンだったのだ。

彼女はたった独りで、この世界の最果てへとやってきていた。

「私は忙しそうなら他の方と申したのですが、やはり我が師は今ご多忙なんでしょうか？」

「いや、偶々近くに居て連絡を受け取ったのが私と言うだけの事だ」

「あ、そうだったんですか。」

では、我が師にお目通りを願いたく存じます。

「問題ありませんでしようか？」

「いや、問題などあるわけがない。すぐに案内する」

俺は思考がまとまらない中で、とりあえず事務的な対応をすることになった。

「お久しぶりです、我が師よ。私の事は覚えておいででしょうか」

「勿論だとも、我が愛弟子よ。」

此度は自ら魔王城の門を叩くとは、殊勝な心掛けです」

魔導将殿の下に彼女を案内すると、彼は満面の笑みでクリスティンを受け入れた。

「あの、魔導将殿、よろしいのですか？」

俺は具体的に何が悪いとかどうか考える余裕も無かったが、彼は大きく頷いた。

「自ら学びたいと言う者に、至高の御方は平等に機会をお与え下さります。」

そして向上心が有るのならより高度な教育が施されるべきでしょう」

魔導将殿は実に嬉しそうにそう仰った。

「案内して下さりありがとうございます、魔人将殿」

「ああ、気にするな」

俺はクリスティンにそう言って、その場を後にした。

「……」

「……どうということだ」

「どうということも何もないでしょ」

俺の中で、一つの答えが出ている。

だが、それをどうしようもなく認めたくなかったのだ。

「これではまるで、自分から売り込みに来ているようではないか!!」

「それ以外に何に見えたの？」

俺は自分の口から、その決定的な事実を言い出せなかった。

「我が身可愛さに、あの女は魔王軍に媚を売ってるんですよ。」

『あの女は、この世界の裏切者だってことでしょうね』

リリウムはかつての仲間を辛辣に評価した。

「こんなことをしてたなんて、知らなかったわ」

そして彼女の言葉には、若干の失望が混じった複雑そうな感情が見え隠れしていた。

クリステイーンは姫様やステラ達同様、記憶の引継ぎをしている人間の筈だ。

故に一度目の蹂躪を見て、二度目で戦力差を理解しこちらに服従し、三度目は自ら売り込みに来た。

そう考えるのが妥当で、自然だった。

『だが、『彼女は次回以降この世界の側として戦っている』

それはなぜだろうか？

「こちら側の戦力を把握する為のスパイをしていると言うのはどうだろうか？」

「それなら前回で既に結果は出てるはずでしょう？」

こちらの戦力は無尽蔵。偵察するのも馬鹿らしい数の暴力による波状攻撃だって」

俺の思考の逃げ道を、リリウムが塞いでいく。

「では逆に問うが、なぜ彼女は次回以降魔王軍と全面戦争をするんだ？」

「私を知るわけないじゃない。

そう言えば、前回も今回も、イリーナがあいつを探してたけど見つからなかったみたいなこと言ってた覚えがあるけど、こういうことだったのね」

俺よりずっと面識のあるリリウムは、ある種の納得をしているようだった。

「ああ、そう言えば……」

「どうした？」

「四度目以降のクリスは『何だかすごく必死だった』ような……」

「必死だった？」

なぜ魔王軍から離れ、必死になって戦う理由が出来たのだろうか。

いずれにしても、三度目である今回でそれが明らかになるのである。

そしてそれを知る機会は思いのほか、すぐに訪れることになった。

からん、からん

どこかで、サイコロが転がる音が聞こえた気がした。

§

§

§

「魔人将殿」

いよいよ魔王軍の進撃準備が始まった頃、魔導将殿がクリスティーンを引きつれ俺に話しかけて来た。

「はい、何でしょう」

「私の仕事は前回で見せたので、此度は魔人将殿の仕事ぶりを彼女に見せてほしいのです」

「それは構わないのですが」

「よろしく願います」

俺としては、彼女の事を知るまたと無い機会だった。

礼儀正しく頭を下げる彼女を見て、俺はあることを思いついた。

「聞けば、彼女は魔導将殿の自慢の弟子であるとか」

「ははは。目を掛けているのは事実ですが、そちらで特別扱いする必要はありませんよ」

「恐縮です」

それぞれの反応を示す師弟に、俺はこう言った。

「実は、魔王様にこの世界の優れた才覚を持つ勇者を探し連れて来いという命令を拝命致しまして」

「えッ」

俺の言葉に、クリスティーンが思わずと言った様子で顔を上げる。

「ははあ、あの気難しい魔王様ですか」

「彼女なら、魔王様の御眼鏡に叶うかもしれません」

いずれ聖女としてこの世界で名を轟かす彼女には、その資格がある

ように思えた。

俺は単なる仕事としてそれを思いついたに過ぎなかったが、リリウムは俺の横で口元を抑えて笑っている。

「素晴らしい。是非とも魔王様との拝謁を済ませておくといい。」

この間のような事も、流石に彼女相手にはするまいであろうし」と、魔導将殿の快諾を得て俺は彼女を魔王様へ謁見させることにした。

「あ、あの、本当に、私如きが魔王様に謁見などしても、よろしいのでしょうか?」

魔導将殿から別れ、俺たちに付いてくるクリステインが怯えた様子そのままそう言った。

その表情には、全力でお断りしたいと雄弁に記されていた。

「必要ならば物乞いに扮した賢者の下にも足を運ぶのが王の器である。」

ならば、この世界で有数の才能を持つお前に会うことに魔王様が躊躇うことなどあるまい」

俺は当然のようにそう答える。隣でリリウムが声を押し殺して笑っている。

クリステインが恨めしそうに彼女を見ていた。

「魔人将アーランドよ。」

私は勇者を連れて来いと言ったはずだ」

そしてクリステインを玉座の間に連れて行くと、魔王様は溜息と共にこう言った。

「誰が私の好みの相手を連れて来いと言った?」

「……はい?」

龍人の表情は、正直分かりにくい。

だが、そんな俺でも魔王様が実に愉悦の混じった笑みを浮かべているのが分かってしまった。

「その女よ、名は何という?」

「は、はい、クリステイン・オルデンと申します!!」

「ほう、クリステイーンか。」

面白い、苦しゅうないぞ。近くによるがいい」

突然の展開に、俺とリリウムも顔を見合わせる。

ガチガチに緊張しているクリステイーンが、足を纏れさせながらも魔王様の下へと招かれ近づいていく。

それはまるで、龍に捧げられる生贄か何かに見えた。

そしてそれは実のところ、割と正しかった。

「クリステイーンよ、我が妃となるがよい。」

さすれば、この世界の半分をお前にやろう」

この時俺は、クリステイーンを魔王様に差し出すのが一番穏便に丸く収まる手段なのでは、と思案してしまった。

魔王様はこの世界を滅ぼし尽くした後、この世界の管理人になるとなっている。

それはうちの村の長老のような一区画の管理者などではない、世界の王としての最上位の支配者として、だ。

その魔王様の妃ならば、世界の半分の管理を任すことなど別に不思議な事ではない。

それどころか、この世界をこの世界のまま維持したいと希望すればそれが通るかもしれない。なかった。

クリステイーンは今まさに、この世界を救うかもしれない聖女に成ろうとしていた。

それも俺たちが予想もしない形で。

だが、当のクリステイーンは涙目のまま後退った。

魔王様に恐怖し、震え、怯えていた。

まあ無理も無い話だ。魔王様はその気になれば、この世界を木っ端微塵にすることなど容易いものだから。

その光景を二度も目にした記憶にある彼女からすれば、魔王様は恐怖の対象でしか無いはずであった。

「どうした、なぜ怯える。なぜ恐れる。」

これは、『お前が望んだこと』であろうっ？」

その魔王様の言葉に、俺はハツとした。

この状況が、彼女の望んだことだと？

——どこかで、天秤の女神の無邪気な笑い声が聞こえた気がした。

「そ、そんな、とんでもありません!!」

私如きが魔王様になどと吊り合おうはずがありませんわ!!

魔王様もお戯れが過ぎますです!!」

「そうか。だが私は全ての成功が約束されている神の依り代にして、女神の代行者。」

その私が妃にすると決めたことは、どのような過程を経ようとそうなるのだ」

魔王様は嗤う。

まるで目の前に、水面で溺れまいともがく虫を見つけたかのよう

に。  
「——お前はもう、私の物なのだ」

すう、と魔王様の鱗に覆われた手が伸び、クリステインの顎に触れる。

「し、失礼します!!」

クリステインは逃げ出すように、いやただ本当に逃げ出して玉座の間から退出していった。

「……まさか、こんな辺境の無味乾燥な世界で、欲しい物が見つかるとはな」

玉座に頬杖を突いて、魔王様はくつくつと笑う。

「これは面白い余興になりそうぞ」

我が将よ、褒美を取らそうぞ」

そう言つて、魔王様は虚空からアイテムボックスを開いて、〃それを俺に差し出した。

俺は、〃それ〃に目を見開いて驚いた。リリウムも同じだった。

「これは龍魂の宝珠と言う。

使い方次第では、大抵の物事をどうにかしてしまえる力が有る。

お前の好きに使えばいい」

それは、あの天秤の女神をこの世界に呼び寄せた、全ての元凶たる



マジックアイテムであった。

## 幕間 龍魂の宝珠

俺たちは玉座の間を出ると、自分たちが下賜された代物の「重さ」にため息が漏れた。

「とんでもない物を下賜されてしまったわね」

「それを言うなら、お前だってあの時渡された剣を下賜されただろう」

俺は現実逃避をするように話題を逸らした。

俺が言ったのは、リリウムを魔王様の御前に連れて行った時に彼から渡されたあの剣の事だった。

仮にも女神様の末裔の持ち物だ。刀工技術に優れた世界にて屈指の名工が打った業物に違いないはずだ。

あの時無造作に投げ渡されたあの剣よりも優れた刀剣は多分この世界を見渡しても見当たらないであろう。

都会に居た頃、学友と話を合わせる為にやっていた携帯ゲームのRPGで、なぜラスダンで最強装備が手に入るのかと疑問に思ったことがあるが、まさかその理由を肌身で経験する羽目になろうとは。

「だけどそれは私が貰った物と比べ物にならないでしょ」

リリウムは俺の手元にある宝玉に手を翳して、鑑定魔法を唱えた。高位のマジックアイテムには偽装や防護の魔法が掛かっていることも多いが、そんなこともなくすんなりと情報が開示された。

名称：龍魂の宝珠

レアリティ：レジェンド級

種別：ワールドユニークアイテム

解説：

ひとつの「世界そのもの」の魂を球体の形に押し固めて安定させた物体。世界の魂、宇宙の寿命を物質化した物。

ビックバン級のエネルギーを有しており、惑星のテラフォーミングから恒常的な世界間航路の確立等の幅広い用途で使用される。

※使用には両女神の承認またはクラスA以上のクリアランス三名以上の許可が必要。

以下、無断使用時の罰則及び使用方法について。

.....

.....

.....

「.....」

「.....」

「わあ、ワールドユニークアイテムなんて存在を初めて知ったわー」

一緒に情報を見たリリウムが遠い目になった。

そりゃあワールドでユニークなアイテムだろう。この宝玉はちよつとシャレにならないレベルの劇物だった。

こんなとんでもないアイテムなら、アンズ様を呼べるのも不思議ではない。

「と、とにかく、魔造将殿に報告だ!!」

もはやこんなトンデモアイテムは俺たちの手に負える代物ではなかった。

俺たちは大急ぎで魔造将殿の下へと駆け込んだ。

「話は分かったわ」

当然、対応はメアリース様が直接してくださいました。

「即座に回収、と言いたいところだけど、その為の手続きが面倒なのよねえ。」

それ、第一級の危険物だから移送するだけで周辺世界から苦情がくるのよ」

メアリース様が乗り気でないとは、すぐわかってしまった。

「何を勘違いしたのか、それを使って私と言う存在を消そうと画策したテロリスト集団が昔居ただけれど。」

笑っちゃうと思わない？ たかだか搾りかすの世界一つ程度のエネルギーをぶつけた程度で私を殺そうだなんて。」

私にとっては爆竹の一発程度に過ぎないけど、それでも被害は甚大でね。

よその神々との協定で、移送にも気を遣わないといけなくなったの」

誰だか知らないが馬鹿なことを仕出かしたおかげで、この危険物を女神様に返却するという選択が取れないようだった。

「……手続きの完了までの概算が出たわ。

およそ三十年は掛かるわね。それまでそちらで保管しておいて。

ちよつとくらいなら内在エネルギーを使っちゃっても目を瞑るから」

しかも何だか使用許可まで下りてしまった。

この事務的なのかいいい加減なのか偶にわからないところがメアリース様節なのである。

「——とのことです。

よろしければ、保管はこちらで致しましょうか？」

「お願いします……」

恐らく魔王様はこのような対応がされることを理解したうえで、この宝珠を俺たちに渡したのだろう。

多分俺たちがどのように工夫しようとも使いきれないだけのエネルギーがそこにはある。

多分、一生分（ダークエルフ換算）の電気代やエネルギー代にも困らないだろう。

学友が好きだった機動ロボの動力炉にすればどんなパフォーマンスを発揮するのだろうか。

と言った思考で現実逃避をしながら、俺は宝珠を魔造将殿に預けてそれから逃げるように去って行った。

§ § §

さて、クリステインを魔導将殿から預かった手前、真面目に仕事をしなくてはならない。

「魔王様の事は、魔導将殿に話したのか？」

俺は道中彼女に尋ねた。

「師は喜んでくださいました。」

魔王様の妻として相応しい教育を授けてくださるとも」

「そうか」

クリステイーンの表情は優れない。

自分の師が頼れないことを悟り、次にどうするか必死に思考を巡らせているのがよくわかってしまった。

「やはり、嫌か」

「私めには魔王様のご寵愛は過分に過ぎますので……」

魔導将殿は喜ぶのは当然だろう。

自分の弟子が魔王様の妃として見初められたとあらば、その彼女の教育をすることを含めてこんなに嬉しいことはないだろう。

「言い難いのであれば、俺から魔導将殿に話して共に魔王様に取り成そう。」

そうすれば、話を聞いてくださるやもしれん」

「いえ、流石にそこまでご迷惑をお掛けできません」

そう言ってから、クリステイーンの表情が曇められた。

俺に取り成してもらおうのを断つたのを後悔しているのかもしれない。

「魔王様の妃に成れば、恐らく何もかもほしい物が得られるだろう。」

魔王様は恐ろしく思えるだろうが、あの方は孤独なのだ。それを前が癒して差し上げるのならばそれは俺も嬉しい」

「……」

クリステイーンは何も言わなかった。

やがて、進行準備が終えられたリーパー隊の下へと辿り着く。

事前の準備等はリリウムがやってくれたようだ。

「アップルマン」

「はッ、ハッハッ」

俺の呼びかけに、一人のコボルトが前に出た。

「此度の進撃は俺も同行することになる。

隣に居るのはクリステイーン。魔王様御自ら妃にすると見定めた者だ。

彼女に経験を積ませるために彼女も連れて行く故、これまで通り指揮は任せる」

「それは分かりましたが、我らの部隊でいいので？」

アップルマンは気を遣うようにクリステイーンの様子を窺う。

「構わない。魔王の妃になる者が、お前たちの起こす惨劇から目を逸らすことは適わない」

「そう言うことなら、こちらも遠慮なく」

「よろしくお願いします」

彼女も、アップルマンに頭を下げた。

そして彼女はすぐにでも後悔しただろう。

彼らの行く先々で目撃することになる、地獄を。

.....  
.....  
.....

「おのれ、この呪われた肌色め!!」

俺に罵声を投げかけるのは、この世界の住人であるエルフ達だった。

「こちらは恭順の道を示した。

それを無視して攻撃してきたのはそちらだ」

俺は草木を払うように魔剣を薙ぐ。

それだけで四方八方から飛んでくる矢が力を失う。

今の射撃で位置が割れたエルフの弓兵の下へと、リーパー隊の面々が殺到する。

肉が引き裂かれる音、血が噴き出る音がエルフの住む森に響き渡る。

悲鳴、悲鳴、断末魔の絶叫。

俺はゆつくりと森林を進んでいくと、奥にあるエルフの集落は既に彼らによつて制圧済みであった。

「流石の手際だな。アップルマン」

「まあ、ここはこれで三度目ですからなあ。」

これで手間取るなら俺がぶち殺してますよ」

彼がそう言う間にも、集落の住人たちが広場に集められていく。

「貴様がこの化け物どもを従えているのか、呪われた肌色めが!!」

集落の長老らしい老人が、怒りの形相で俺を睨んでくる。

殺しますか、と視線でアップルマンが問うてくるが、それには及ばない。

「我らは事前に恭順の道を示したはずだ。」

魔王様に服従し、我らの女神に頭を垂れるならば生かしてやると」

「誰が貴様のような呪われた種族に従うものか!!」

彼らの敵愾心は尋常では無かった。

人間の高名な哲学者も、肌の黒い人種は同じ人間とは思えないという言葉を残している。

多くの場合、エルフ種は遺伝子的にその起源は同じであり、それはこの世界でも変わらないはずだ。所詮は生きた環境の違いでしかないというのに。

「だそうだが？ お前たちはどう思う？」

俺はリーパー隊において三割の人数を占めるエルフ達に声を掛ける。

「肌の色より、もっと大事なことがあるつすよ。 将軍」

小隊長として同胞のエルフ達を率いる彼女が、縛られているエルフ達の前に躍り出る。

「男か、女か、だ」

小隊長が片手を上げ、下ろした。

彼女の部下であるエルフ達が、鉈を手に集落の女たちにそれを振り上げる。

「ま、待って、私たち同胞でしょ、どうして——」

集落の女エルフ達の頭蓋に、鉈が振り下ろされた。

その決定的な瞬間を、俺の側に控えているクリステインは目を逸らした。

「な、なぜ……」

女ばかりを的確に殺していくリーパー隊のエルフ達。

その所業に、集落の長老も戦慄する。

「あたしらの一族はエルフ種でも特殊らしくて、産まれる子供全員が必ず女なんすよ」

小隊長エルフが鉞を手に、笑顔で語り掛ける。

「だから、他の部族から男を奪って血を絶やさずに繋いでいた。

そして用済みになった男は殺す。その血肉を食らい、糧として」

その恐るべき習性から、彼女らは元の世界で『蠅螂』の一族と恐れられていた。

メアリース様の庇護の元に有ってもその習慣を止めることが出来ず、こうしてリーパー隊の一員として働いている。

「族長、その老いぼれはいらないでしょ」

「それもそうすね」

人食い部族の長が、目の前の老人に鉞を振り上げた。

血しぶきが、地面を染める。

「俺、エルフでもあいつらだけは無理だわ」

返り血を浴びながら嬉々として女と老人に鉞を振り下ろすエルフ達に、リーパー隊のゴブリンがぼやいてトロールやオークが神妙に頷く。

「隊長!! 今度もこいつらをくれるんですよね!!」

返り血で頬を染めた小隊長が、アツプルマンに振り返って言った。

「もうヤツてるじゃねえか。」

「はあ、好きにしろ」

「あ、死体は貰ってもよろしいですか?」

「作戦に使う分は残して置けよ」

リーパー隊所属のネクロマンサーであるオークの呪術師がそれを聞いて、笑顔で死体を引き取りに行った。

「將軍、食材も手に入ったので宴の用意をしますが、一緒にしますか?」



「俺はいらん」

「そうすか、でも隊長は食べますよね？」

「今日も殺した相手に感謝を捧げて供養しましょう」

「それが彼女らの文化で、習慣だった。」

「ああ、そうだな。頼む」

頷いたアップルマンを信じられない物を見るように、クリステイーンが見ていた。

「蠟螂」の部族の宴から離れた位置で、俺たちは普通の食事を取ることになった。

リーパー隊の面々には彼女らの食事を共にする者も居るのだから恐ろしい。

俺は空き家になった家を借りて次の攻撃目標の算段を立てていると、外からこんな声が聞こえた。

「隊長さん、どうして彼女らと一緒に食事を？」

「あいつらを理解するにはそれが一番だからな。」

よく言うだろ、知らない部族と仲良くなるには出された食べ物を一緒に食べることでって」

その声は、クリステイーンとアップルマンのモノだった。

「だが、なぜそんなことを問うんだ？」

「私には、あなたが他の人たちと違って人殺しを楽しんでるようには思えないんです」

「当然だ、これは仕事だ。俺は仕事に私情は挟まない。」

そして仕事仲間があいつらと言うだけの話だ」

彼の返答は思いのほか淡泊だった。

「仕事だから、どんなことも出来るんですか？」

「いいや、俺は戦場でしか生きれない性質でな。」

戦争と言うのは綺麗ごとじゃない。物理的にも汚いしな。

だがこの苦しみや痛みだけが、俺が俺たらしめるんだ」

「……戦場での殺人やトラウマは、かの邪悪の女神様が癒して下さいと、師匠に教わったのですが」

「そうだな。実に慈悲深いことだ。

だが必要無かった。俺は、俺の持つ悲しみや生の苦しみは俺だけの物なのだ!!

たとえばそれが女神だろうと、くれてやる謂れはない!!」

彼女には、あのコボルトが狂っているように見えたのかもしれない。

事実として、奴は狂っているのだろう。戦場でしか生を感じられないとはそう言うことだ。

あの異常者だらけの集団の中で、彼は比較的まともに見える。だが本当にそうだろうか。

狂気の中で、正気を求めて生き足掻くことは正常なのだろうか。

ならば、何度もこの世界を行き来している俺もまた、十分に狂っているのだろう。

§ § §

どことも知れぬ虚無の果て、そこに浮かぶ四角い箱のようなモノが存在していた。

内部は映画館のような場所になっており、スクリーンの前には無数の観客席が並んでいる。

その中心の席に、ポップコーンを片手に天秤の女神が座ってスクリーンに座って上映されている映像を見ていた。

「人は生きる為に、時として悪を成さねばならない時があります」

そこには、魔導将が占領した町の住人たちに神官として路上で説法を行っていた。

「例えば、路上生活者が食べ物求めてパン屋から盗んだり、職場で上司の暴言を吐かれ人格まで否定され激高し刃物を手に取ったり、戦場で上官の理不尽な命令に耐えきれずその背を撃ったり」

魔導将は次々と事例を提示していく。

その後ろでは、クリステイーンも無表情で控えていた。

「その罪を、偉大なる邪悪の女神様は赦して下さる。

そして理不尽な悪の被害に遭った者やその家族も、その痛みを慰撫し蛮行に及んだ者を罰して下さる。

これらすべてはかの御方の大いなる愛ゆえの御業である」

ハッキリ言つて邪悪を司る女神など、外聞が悪いどころではない。邪悪の女神なんだから、さぞ邪悪な女神なのだろうと誰もが思うことだろう。

しかしかの女神は誰よりも慈悲深く、そして厳格だ。

「では人が悪を成すのは、なぜか？

生来の物を除いて、多くの場合それは環境に依るものばかりです。

かの御方に唯一並び立つ、至高なる文明の女神様はそれらの全ての改善をしてくださるのだ。

病む者も飢える者も無くなり、衣服を与えられ、誰もが寝床を手にする。

職にあぶれる者は居なくなり、学ぶ機会が平等に訪れ、その貢献に応じて来世さえも保証される」

邪悪を赦す女神と、文明を齎す女神の恩寵によつて、人々は平和を教授できる。

そしてそれは実際にこの説法を聞いている人々にも及んでいる。

食料の配給が始まり、進んだ学術を学ぶ機会を設け、診療所はいつでも無料で開放されている。

きつと今頃、文明の女神には住人たちの満足度やら幸福度やらのパラメーターが上昇しているのが見えていることだろう。

戯れに、天秤の女神はポップコーンの中からサイコロを取り出し、投げやりに投じた。

館内の床や壁がサイコロを弾き、やがて止まり二の目が出た。

二の目は、バッドイベントだ。

その時、民衆の合間から石が投じられ、魔導将の額に当たった。

「この人間の裏切者!!」

俺は騙されないぞッ!!」

石を投げたのは、年若い少年だった。

彼は涙を堪え、憎しみを以って魔導将を睨んでいた。

「お前たちの所為で、父さんは死んだんだ!!」

ほかの誰もが騙されても、俺は信じないぞ!!」

そこに居た誰もが、この少年は殺されると思った。

クリステインもそう思ったし、この感情に身を任せた愚かなことをした少年に強張った表情を向けた。

「少年よ……」

額から流れる血を拭い、彼は少年の元へと歩み寄る。

「これは賢くない。私たちが受け入れられないのなら、まず力を蓄えねばならない。

今は屈辱を噛み締めながら、多くを学びなさい。

そして感情ではなく理性で判断できるようになつてから、二度とこのような蛮行が起きないようにするにはどうすればいいか考え、行動に移すのです」

彼は少年に視線を合わせ、そのように諭した。

「ちえ、いい部下を持つてるな」

期待外れの結果に、幼い女神は口を尖らせた。

彼女が指を振るうと、リモコンが出てきてスキップボタンを押した。

場面が次に移る。

「師匠、何故あの少年を許したのですか？」

クリステインが魔導将に尋ねた。

魔王軍は恭順を示した相手には寛容だが、敵対した者には容赦しない。

まさに彼らが拝する女神達のように。

「やはり、まだ我らの考えを受け入れるのは難しいですか？」

「いえ、私はもうかの御二柱の神官です」

それを聞いて、彼は頷く。

「悪逆もまた、かの偉大なる御方が司るモノ。

我らが心底受け入れられないのならば、反逆すればいい。それによつて生じた痛みもまたかの御方が癒してください」

「よくわかりません。文明の女神様は教育にも力を入れているのでしよう？」

ならばなぜ、その段階から反逆の目を摘み取らないのですか？」

クリステイーンの言葉は尤もだった。

「至高なるかの御方は、向上心に溢れる方なのです。

無数の世界を支配下に置いて、満足なされない。

故にこそ、自らのなすべきことの全てを正しいと口を揃えられては困るのです。

まあ、満場一致のパラドックスという奴ですな」

「パラドックス……？」

「全ての者の意見が一致するのは、かえつて信頼性が損なわれている状態を指すのです。

だから反対意見を言ってもいい。それ相応の覚悟があるなら、反逆すればいい」

それが我らに与えられた自由意思なのだ、と魔導将は語る。

「……師匠は、何故に魔王軍に？」

「過分な願いをかの御二柱に願った結果ですよ」

見た目はただの若い人間に過ぎない彼は、どこか年老いた老人のように儂く笑った。

「ええ、浅ましく、愚かな願いでした」

己の師の表情を、クリステイーンは複雑そうに見ていた。

「貴女も、もし御二柱に願う機会があったのならば、身の程を弁えて口にしなさい」

「……分かりました」

苦みがあった。

もう取り返しのつかないことを願った後なのだから。

そしてクリステイーンが彼ののような敵としか言えない魔王軍の幹部に教えを乞うているのも、偶然ではなかった。

全知全能たる天秤の女神の、皮肉さを込めた粋な計らいだった。

天秤の女神はリモコンのボタンを押した。  
場面が次に移る。

そこは魔王城。玉座の間だった。

「誰の許しを得て私を見ている」

スクリーンの画面越しに、天秤の女神と魔王の視線が交わった。

「……いや、いい。どうせ退屈していたところだ。話し相手にでもなれ」

「こほん、ちよつとモノログを入れるので少々お待ちを」

魔王は産まれながら超常の存在である。

そして認識の外からの存在から接触を受けるというのも慣れていた。

「どうぞ」

「……ふん、そちらも随分と退屈なようだ。

そして退屈者を覗き見とは、随分物好きなことだ」

「あなただって、あの子を妃にしようなんて随分とモノ好きじゃないですか」

「趣味が悪い、とでも？」

アレの性根ぐらい一目でわかったとも」

魔王は虚空に語り掛ける。

「重要なのは、この私自ら手にした否か、だ。

これでも相手には困らない立場でな。だが私に届けられる女に、アレは決して含まれないだろう。

いつでも食べられる美食よりも、辺境でしか味わえない珍味もまた一興なのだ」

おっと、これは照れ隠しでしょうか？

それとも本心？

「ふん。どうせ、アレと引き合わせたのもそちらの采配であろう？

アレについて調べさせたが、偽装情報しか出なかった。

だが、感謝しておいてやろう」

「彼女を簡単に御せるとお思いで？」

「分かりきっていることを尋ねるのが、そちらの作法なのか？」

魔王は嗜虐の笑みを浮かべた。

「差し出される贄は、どうせなら生きのいいじゃじゃ馬の方が組み伏せ甲斐があるというものだ」

魔王の千里眼には、魔王城の宝物庫にて保管されている龍魂の宝珠を目にする姿が見えていた。

これにて、布石は整った。

「なぜ、我が母が人間を慈しむのか少しばかり理解できたような気がするぞ」

魔王の低い笑い声が、しばらくの間玉座の間に響いていた。

「さて」

テレビの電源を落とすように、スクリーンの映像が途切れる。

彼女はリモコンの電源ボタンを押したのだ。

「次は見ものですよ。なにせ人間を舐め腐ったトカゲ男の鼻つ柱が叩き折られるわけですから」

そう言っつて、彼女はリモコンを床に叩き落した。

プラスチックが割れ、砕け、部品がバラバラになる。

しかしそれは初めから存在していなかったかのように、霧散する。

「ええ、本当に。知っていても、笑っちゃうほどムカつく話ですけどね」

彼女の苛立ちを示すように、映画館は渦巻いて消え失せる。

虚無に浮かぶ彼女は、指を鳴らした。

「全ての偽装を解きました。

彼女を言い表すには、そうしないとネタバレになるので」

最後に彼女は「あなた」にそう言っつて、かき消えた。

虚無の場所に、再び静寂が訪れた。

### 第三階層

「やってくれたな、あの女」

俺は会議の席での報告を聞いてそうぼやいた。  
クリスティーナが宝物庫を荒らして逃げたのだと言うのだ。

「更に、資料室の方もやられました」

正直ここまでやるとは驚きです」

魔造将殿が被害をまとめた資料を魔将たちに配る。

その被害状況に、各々顔を顰めた。

侵攻に影響を及ぼすのは確実だった。

「で、これを成したのが貴様の弟子とのことだが。

これはどう落とし前を付けるつもりだ？」

魔獣将殿が鋭い視線を魔導将殿に向ける。

彼女は将と言うより、看守や調教師と言った風情のデーモン種だ。

魔獣の使役に長けており、その任を請け負っている。

「落とし前、ですか。」

悪逆は我らが女神様がお認めになっておられること。

彼女は自らの責任において、それを実行したまです」

「そうだな。」

だが監督責任つてもものは生じるだろう？

ヒトの味を覚えた獣は殺すしかない。それと同じだ」

魔獣将殿の指摘に、彼は分かっていますと頷いた。

「弟子の不始末は我が不始末。」

必ず彼女は私が討ち果たしましょう」

「魔導将殿……」

俺は彼が不憫で仕方がなかった。

「そう責めてやるな」

「魔王様……」

魔王様の発言に、視線が集中する。

「勝って当然のゲームに面白みなどない。」



ちやうど暇潰しに指し手が欲しいと思っていたところだ。それに、我らが母はこの世界の全力をお望みだ。事実クリステイーンは我が期待に応えている」  
そうなのである。

俺はクリステイーンの足跡を部下に探らせた。

すると彼女は、この世界には存在しないはずの大砲や金属加工技術、農耕や食料事情の改善などを提案し、実行。

その功績を以って、『聖女』の称号を得ていたのである。  
開いた口が塞がらないとはこのことだった。

あの女は、寄りにもよって以前の世界で魔王軍がやっていた施策をそっくりそのまま運用し、その功績を掠め取ってやがったのである。

勿論、このことはこの場で報告済みだ。

魔導将殿の心境はその表情からは推し量れない。

「わかりました。全ては魔王様のご随意に。

必要ならば、我らの部隊も戦力に計上して構いません」

魔造将殿の対応はいつも通り淡々としていた。

「破壊工作に対する復旧もすでに完了しています。

焼失した資料もすべて私の頭にインプットされています。全てが問題ありません」

魔王軍を本当に機能不全にしたいのなら、魔造将殿をどうにかしなければならぬ。

それをしなかったのは、あの女の甘さなのか、油断なのか。

「では、各々励めよ」

魔王様の御言葉に、俺たちは頭を下げるほかなかった。

「魔導将殿、よろしいですか」

会議が終わり、各々が持ち場に戻ろうとした時だった。

魔造将殿が彼を引き留めたのだ。

「この書類を、彼女に渡してくれませんか？」

そう言っつて、茶封筒を彼に渡した。

「……中を改めても？」

「どうぞ、あなたにはその権利がある」

彼女に確認を取り、魔導将殿は茶封筒の中の書類を取り出した。そして、すぐに目を見開いた。

「これは、なッ、なんということだッ!？」

それまでずっと平静を保っていた魔導将殿が、動揺しておられた。「大いなる御二柱よ!! これも我が方に与えられた試練だと仰るのですか!!」

その上で嘆き、悲しんでいた。

魔王城の床に膝を突いて、涙を流していた。

「どちらかと言うと、彼女がひねくれていたのが原因かと。

身から出た錆、というには少々酷な話ですが」

「おいおい、察するにあいつを本当に殺せるのか？」

魔獣将殿が腕を組んで彼に尋ねた。

「逆だッ!!」

だが、魔導将殿は声を張り上げこう宣言した。

「何が何でも、一刻も早く我が弟子を殺さなければ!!」

——でなければ、『彼女が余りにも救われない!!』

その決意に満ちた言葉に、俺だけでなく魔獣将殿も面を食らった。

「頼む、皆さん。私に力を貸してくれ……」

その上で彼は俺たちに頭を下げた。

魔王城の廊下に、静寂が訪れる。

「我が主上に、ミスリルゴーレム兵五百体を要請しましょう」

真っ先に助け舟を出したのは、魔造将殿だった。

ミスリルゴーレムなど、一体だけでもこの世界の通常戦力ではまとも破壊することは困難な兵力である。それを五百。

「承認完了。要請は受諾されました。

あとは適時召喚術にて用兵してください」

「かたじけない」

「この件は我が主上も憐れんでおられますから」

更に頭を深く下げる魔導将殿に、魔造将殿はそう言った。

「はあ、じゃあこっちも中級竜種を十体にワイバーン部隊を貸してや

るよ」

形振り構わず頼られて、極まりが悪いのか魔獣将殿もそう約束した。

「事情は分かりませんが、そこまで仰るのなら私が前線にて直接指揮を執って戦いましょう。」

用兵術に長けた我が部下と合わせて、十の部隊と共に」

俺はいったい何が彼をそこまでさせるのか、探る意味合いを含めてそのように申し出た。

「……皆さん、本当にありがとうございます」

俺たちに感謝の言葉を口にする彼には悪いが、俺の視線は彼の持つ茶封筒に向けられていた。

そして、俺は尋ねた。

「いったいそれが、あのクリスティーンにいったいどんな関係があるのか、と。」

§ § §

二柱の治める数多の世界の内、比較的文明水準が高いとある世界。

その大都市のひとつに、古風なコロッセオのような建物が存在していた。

内部はドーム状の空間になっており、その中は外見からは想像がでないほどハイテクな機械によって施設が稼働している。

この施設で行われているのは、剣闘士による殺し合いとかではなかった。

そんな文明水準が低い野蛮な行為ではない。

だがある意味では、そこで行われているのはそれよりもずっと悪趣味な代物だった。

「ポップコーンを一つ」

「はーよ」

その施設の売店でお菓子を買っているのは、天秤の女神だった。

それを受け取ると、彼女は熱狂している観客席の方へと赴く。数千もの多くの観客が、オンラインではその何十倍にもなる人数が、その中心にある巨大な立体モニターを凝視している。

「さあ、今回のカードはこちら!!」

魔王一族が率いる魔将が一人、魔人将アールランドとその配下のリーパー隊!!

リーパー隊はどいつもこいつもイカレたネームド連中ばかりだ!!

対するは、現地人の勇者一行!! その編成は盾職、剣士、魔法使い、僧侶とバランスがよい編成だあ!!」

モニターの中では、今まさにアールランド達とあの四人が戦場で出会い、激突する寸前だった。

「相変わらず悪趣味だなあ」

文明の女神メアリースは正直邪悪の女神リエーサセツタの回りくどい世界侵攻を非効率的だと思っている。

だがそれでも、彼女の管轄は管轄。非効率なりに最大限有効活用しようということだ。

どうせだから生の殺し合いを見世物にしよう、と娯楽の多様性を求める彼女は遠い辺境の異世界で行われている戦争を生中継しているのである。

こんなことをやってるから支持率が低いんだ、と天秤の女神は思っている。

「戦力比から算出されるオッズはこれだ!!」

皆さん、お手元の端末から掛け金をご入力ください!!

受付時間はもうすぐ終了ですよ!!」

実況席の司会が、観客たちに呼びかける。

「偶数なら魔王軍、奇数なら勇者一行」

天秤の女神は親指でダイスを頭上に弾いた。

地面に落ちる前にそれを手に取ると、手のひらには四の目が。

「よし、魔王軍に300口!!」

ギャンブルに興じる彼女は、何の他意も無く掛け金を入力した。

ちなみに、6：4の割合で魔王軍が人気だった。

「いけ、我が元使徒アーランド!!」

勝って私のお小遣いを増やすのです!!」

遙か遠い悪趣味な饗宴の会場にて、彼女は有難迷惑な声援を送っていた。

……

……

……

魔王軍と各国連合軍の戦いは、熾烈を極めた。

今回、連合軍の動きが異様に速かった。

俺たち魔王軍はいつも通り聖光法国に攻め入った。

俺たちはその時点で激しい抵抗を予想されたが、思いのほか制圧はあっさりと行けた。

各都市の防備が増えた程度で、歩く攻城兵器と言える巨大なミスリルゴーレムを止めることは適わない。

だが、半分ほど都市を制圧した頃、既に聖女としての名声を得ていたクリスティーンの仕事が発動した。

即ち、この世界を滅ぼそうとする邪悪な魔王の到来、という予言をあらかじめ発していたのだ。

彼女は自分の出身国を半ば生贄にするような形で、各国の団結を呼びかけた。

それには姫様やイリーナ殿たちも協力していたのだろう、今までよきずつと早い抵抗がなされた。

だが、それだけだった。

戦火はどんどんと広がっていく。

魔王軍にこの世界に対する配慮は無い。

守りの薄い都市や村々を襲わせ、とにかく国力にダメージを与えるように広く薄く散発的に攻撃を繰り返す。

このままでは真綿で首を絞めるように、削り殺されるだけと悟った

連合軍は全ての戦力を結集し、魔王城に強行進軍し決戦を挑むことになる。

そして、彼女たちが現れた。

「どうやら、もう逃げ回るのは止めたらしいな」

俺は自分が率いる軍団の前線にて、勇者たちを待ち受けていた。

背後に付き従う各国連合軍の軍勢たちの先頭に、彼女たちは居た。

「魔人将アーランド!!」

貴様の暴虐もこれまでだ!!」

全身に甲冑を纏う騎士イリーナ・バルハルト。

「私たちが受けた苦しみ、今こそ清算してもらいます!!」

剣の切っ先をこちらに向けるレナスティ姫。

「これ以上、あなた達の好きにはさせない!!」

稀代の魔法使いたる、アリサ・クローネン。

「私たちが邪悪を払う光となりましょう!!」

そして、聖女クリステーション。

あの時、あの遺跡にて、殺し合い、骸を晒した四人が生きたまま俺の前に現れたのだ。

「くくく……」

「何がおかしい!!」

思わず笑いが漏れた俺に、イリーナ殿が激高する。

「いや、失礼した。私もどうしてかわからない。

だが、お前たちを見ていると、なぜか笑いがこみ上げてな……」

それはこの四人の結末を知っているが故の失笑だったのか。

彼女たち四人の為に、徒労を繰り返している己への自嘲だったのか。

「魔王様はこの先でお前たちをお待ちだ。

だが、かの御方が出る幕はない。この私が、この余興に幕を下ろすのだからな!!」

我ながら、堂に入った役者振りだった。

「そう、この魔人将アーランドと、この魔剣エグゼキューターが!!」  
俺は魔剣を振り上げ、号令を下した。

ターン1。

「我が軍勢よ、前へ!!」

俺の呼びかけに、屈強な亜人種が前に出る。

トロール、サイクロプス、オーガや鬼人たちが一斉に襲い掛かる!!

それだけでたった四人を轢き殺すのに十分な戦力に思えた。

「ふん!!」

イリーナ殿が盾を剣で打ち鳴らす。

たったそれだけで、彼女の存在感が増し、無視できなくなる。

視線が移る一瞬の隙に、姫様が前に躍り出る。

一瞬だった。その手足の動きや、影すらも認知できないほど素早く、彼らは一刀の下に切り伏せられた。

「弓兵、魔術師、一斉射撃!!」

俺に代わり、アップルマンが指示を飛ばす。

エルフ種たちの精霊の加護が乗った正確な射撃が豪雨のように降り注ぐ。

リーパー隊の数少ない魔法使いたちが、爆炎の魔法を放った。

「プロテクションフィールド!!」

クリステインが魔法の防壁を展開する。

いい読みだった。今の攻撃は後方の味方を巻き込むつもりだった。

「ファイヤーボール!!」

アリサの呪文が、こちらの攻撃に紛れて降り注ぐ。

その魔法は基本的な攻撃魔法に過ぎないが、強大な術者が使えば流星群のように連発出来る。

手加減も可能で、汎用性に優れている。

「彼岸より舞い戻れ、我が戦友たち!!」

こちらのネクロマンサーの呪術により、姫様によって殺された前衛たちが起き上がる。

彼らは肉の壁となって火球の流星群を受け止めた。

ターン2。

「魔の花よ、大地に咲き誇れ!!」

リリウムが衣服を脱ぎ捨て、煽情的な刺青が施された肢体を晒す。精神をかき乱す甘い匂いが、戦場に広がり始めた。

「次弾装填急げ!! よし、撃て!!」

アップルマンの的確な指示により、準備段階が短縮され後衛が容赦のない矢と魔法を浴びせかける。

「マジックバリア!!」

連続で強力な魔法は連発できない。

今度はアリサが守りにスイッチし、全体攻撃を防いだ。

「光の神の加護であれ!!」

聖女の祈りが、彼女らの前に立ちふさがっていたアンデッドの肉壁を塵へと帰した。

「はああああ!!」

邪魔が居なくなったレナスティ姫が前に飛び出す。

「カースドミスト!!」

ずっと彼女の行動を警戒していた俺が、呪文で妨害を試みる。

「ちツ、見えない!!」

視力を奪う呪われた霧が彼女を包み、攻撃の空振りを誘う。そんな彼女の間隙を守るように、イリーナ殿が前に出た。

ターン3。

「眠りの息吹よ、心を絡めとる根よ!!」

相手の行動力を削ぐ支援をリリウムは続けている。

「陣形は守りを重視!!」

護衛は將軍を死守せよ!!」

同じ指示は連続で使えないのはアップルマンも同じ。

彼は俺の周囲の護衛を前に動かした。

「クリステイーン、レナの解呪を!!」



「いえ、支援を!! ここで勝負を決めるわ!!」

状態異常をバラまき、堅実に追い詰めてくる我が軍勢を前に、レナスティ姫がイリーナ殿を遮ってそう言った。

「……分かった、光の加護よ!!」

「ああもう、失敗しないでよ。ファイアエンチャット!!」

二つの魔法の加護が、姫様の剣に宿った!!

それはまさに、勇者の輝きだった。

「消え失せろ、邪魔者ども!!」

姫様の一閃により、視界が業火に染まる。

極まった剣技と魔法の合わせ技により、俺たちの軍勢はこの時点で半壊していた。

俺の護衛達は勿論、リリウムも、アツプルマンもたった一撃で倒れた。

「……こうなれば」

彼女たちは、たった四人で俺の軍勢を打ち破った。

剣士としてではなく、将として戦い負けた。

ならば、俺のすべきことはあと一つ。

俺は一瞬で距離を詰めた。

きつと姫様がそれを見て居れば、驚愕したかもしれない。

敵の筈の俺が、自分と同じ技を使えるはずが無いのだから。

「ん、なッ」

俺の標的は、クリステインだった。

「これは魔導将殿からだ」

俺は無駄と分かっているながらも、魔剣の力を解放する。

魂を切り裂き、消滅させる魔剣エグゼキューターの力を。

「我が手向けを受け取れ!!」

俺は渾身の力で、魔剣を振り下ろした。

無論、それは適わなかったが。

「うっ、く……しい」

俺は最期の瞬間、レナスティ姫の一撃をその目に焼き付けて絶命した。

§ § §

「あのですねー、なんで負けちゃうんです?」

俺は目を覚まして一番に、アンズ様にそう言われてしまった。

「はあ、大損しちゃった」

そして何やら彼女は不機嫌そうだった。

「あの、あの場で俺が負けることは確定していたのでは?」

「ええまあ、『それはそう』なんですけど」

アンズ様は戦場に不釣り合いな格好で、死体に溢れた戦場を歩き進む。

「ちようど、見所ですよ。来ますか?」

「……はい」

俺は彼女に付いて行くほかなかった。

次の一步を踏み出した時、俺は魔王城に居た。

彼女はどんと前に進む。その先は、玉座の間だった。

「ほら、ちようどいいところでしょう?」

女神様に促され、俺が見たのは魔王様がレナスティ姫の一撃で倒れたところだった。

「みご、と……だ」

魔王様はどこか満足げに、玉座に倒れられた。

周囲は殆どがボロボロに壊れ、戦いの激しさを物語っていた。

「みなさん、よく頑張りましたねー!!」

そして四人を横切って、彼女らの前に立ったアンズ様は笑顔でそう言った。

「さあ、私の試練を超えたあなた達に、ご褒美を上げましょう!!」

「あの……女神様、そのことなのですが」

「はい?」

疲れ果てた四人だったが、代表してイリーナ殿が口にした。

「『もう一度、やり直させてもらえませんか?』」

「ええ？」

「魔王軍との戦いで、この世界は疲弊してしまいました。」

「このまま復興するにしても、その為の資源は限られてしまう」

「では、この世界の復興を願えばいいじゃないですか」

「失ったのはモノだけではありません。ヒトもなのです!!」

イリーナ殿は気づいているだろうか。

笑顔だったアンズ様が、真顔になっていることを。

「もう一度、もう一度機会があれば、私たちはもっと死者を減らせるはずです!!」

懸命に訴えるイリーナ殿だが、多分本音はこうだろう。

自分の生きた村が滅んだまま終わりがたくない、と。

俺は覚えている。今度も彼女の産まれた村を蹂躪したことを。

「……わかりました、良いでしょう。」

では、試練を継続とさせてもらいます」

彼女たちは気づいているだろうか、アンズ様はこう言ったのだ。

——試練の達成を取り消す、と

そして、彼女たちの言動に怒りを示したのは彼女だけでは無かった。

「もう一度、やり直したい、だど？」

止まった世界、未来の無いこの世界に、呪詛のような声が震えた。

「この私を下す名誉を与っていないながら、それを投げ捨てる、だど？」

その声は、玉座から聞こえた。

「——赦せぬ」

力なく玉座に横たわっていた魔王様の目に、邪悪な光が宿った。

「私だけではない、この世界の人間に与えられた我が母の慈悲さえも、この世界の連中は投げ打ったのだ!!」

止まった世界が震える。

この未来の無い世界が、怯えている。

彼女たちは勘違いしていた。

「もう一度やり直せば、同じようにこの私に勝てるとう？」

ならば、その思い上がり<sup>あ</sup>を正さねばなるまい」

ゲームには必ず、ゲームマスター<sup>あ</sup>がいる、と言うことを。

その相手を蔑ろにして、相手の怒りを買わない理由などあろうか。

「では、次からは一切合切容赦なく、この世界を徹底的に滅ぼしてくれよう。」

……どうやら我が母も、それをお望みのようだ」

あの四人は、龍の逆鱗に触れたのだ。

## 第二階層

「全てを蹂躪せよ」

魔王様は開口一番に俺たち魔将にそう告げた。

「一片の容赦もなく、手加減などなく、ことごとくを死滅させよ」

この御方のこの命令だけで、その意図を汲むのは十分だった。

「それが、我が神、我が母の望みである」

そして、それ以上の理由も無かった。

「魔王様、何故あれほどお怒りなんだ？」

俺たちが玉座の間から退出すると、少し怯えたように魔獣将殿が口を開いた。

「この世界の者たちが我らが主上がたの慈悲を蔑ろにしたからです」  
淡泊に魔造将殿が答えた。

「ああ……」

それは哀れな事だ、だが同情も出来んな」

言葉の通り、魔獣将殿は哀れみに満ちた表情を浮かべた。

魔王様がゲームマスターなら、我らが御二柱はルールブックそのものの。

そこに記されているすべての救済措置を投げ捨てれば、待っているのは破滅だけだ。

「それより、魔導将殿。

クリステインの件はどうでしたか？」

先ほどから魔導将殿の表情が硬く優れない。

彼女の身を起ころうとしていることについて、前回彼自身が直接話すと彼女らに対峙したはずだった。

彼は、力なく首を左右に振るだけだった。

「弟子が可愛いのはわかるがよ……」

魔獣将殿が髪の毛をがしがしと掻きながら決まりの悪そうにこう言った。

「——諦める。偉大なる我らの母の手を振り払った。

逝き行く先は……」

それ以上は、彼女も口には出せなかった。

まるで学生時代に授業で見た、幼児向けのからくり装置の連鎖によつて球が転がり落ちるように、クリステインは目を覆いたくなるような破滅に向かっているのだ。

まるでそれが、彼女に与えられるべき罰であるかのように。

「まだ、最期のチャンスがありますよ」

しかし、神の現身たる魔造将殿が最後の、本当に最後の救いの道を示した。

「魔造将殿、それは……」

「丁度、頃合いです。会いに行きましょう」

彼女の言葉に、俺たち魔将は顔を見合わせた。

……

……

……

「無い、クソツ、どこにも無いッ」

魔王城の宝物庫の中から、物音が聞こえる。

「お探しの物はこれでしょうか？」

宝物庫の扉を開け、魔造将殿が告げた。

「ッ、あんたは!?!」

宝物庫に忍び込んでいた賊が振り返り、龍魂の宝珠を手にする彼女を見て目を見開いた。

いや、目を見開き驚いたのは俺たちも同じだった。

宝物庫の中に居たのは、当然クリステインだった。

魔王様との戦いの切り札になる、至宝を奪い取りに来たのだろう。だが俺たちを驚かせたのは、その装いだった。

動きやすさを重視した薄着に皮の胸当て、いつもは下ろされていた長い金髪は束ねられ、赤いバンダナを頭部に巻いていた。

そこに居たのは、聖女らしい法衣を身に着けたクリステイーンは居なかった。

「転職<sup>リビルド</sup>リビルド：TRPGにおいて、主にプレイヤーのキャラのスキルを（ゲームシステムやGMの許可により）再構築することを指す。か」俺はすぐに彼女の転身振りに察しがついた。

この世界はスキル制だ。

故に、この世界の神に祈ればいくらかの代償を用いることで、これまで自身が獲得したスキルを白紙に戻し、別の職業で培ったモノとしてくださることが出来る。

それが、転職<sup>リビルド</sup>だ。

正真正銘、今の彼女は神官ではなく、盗賊<sup>シーフ</sup>なのだろう。

しかも、聖女として培った技能に並ぶほどの凄腕であることは、前回と今日の前にいることが証明している。

誰にでもどんな職業も熟達できる素晴らしい制度に思えるが、これにはリスクが伴う。

例えば、それは俺たちのステータスに適性があるように、当人に不適合な職業にリビルドしてしまうと、その才能の限界値以上のスキルは消失してしまう。

そしてリビルドの儀式を行う教会も、あまりにも簡単にそれが出来てしまうのは問題だと決して代償は安くないように設定されている。

まあ尤も、その元締め<sup>の</sup>聖女であるクリステイーンにはそれは無いも同然かもしれないが。

「クリステイーン、あなたは我らが御二柱を蔑ろにしたと言うのは本当ですか？」

驚き硬直した両者で、初めに口を開いたのは魔導将殿だった。

「は、し、師匠、何のことです……？」

「自覚が無いのですか？」

あなたはとんでもないことを仕出かしているんですよ!!」

「しよ、しょうがねーだろ、師匠!!」

その球っころがないと、オレたちの勝ち目がないんだからよ!!」俺はまた別の意味で衝撃を受けた。

楚々とした聖女らしい彼女が、それこそスラム育ちのような荒っぽい口調でそう弁明したのだから。

勿論、リビルドによって性格が変わるとかそんなことはない。

『これが、彼女の本性なのだ』ろう。

「違う、そうではないのです!!」

「オレだってこんな馬鹿な真似したくはなかったよ!!」

でも、あの三人がもう一度戦うって言うから……前回の奴だって私は嫌だったんだ!!」

状況が状況だけに、彼女は魔王城の宝物庫荒らしを咎められていると勘違いしているようだった。

「だって魔王様に逆らうとか頭悪いじゃん!!」

しかも今度は犠牲を減らすとか息巻いてるしき!!

あいつら、せっかくギャンブルに勝ったのに更に更に掛け金を上乘せしようとしている間抜けだよ!!」

「間抜けなら、私らの目の前にも居るな」

魔獣将殿が目を細めながら、必死に無様な弁明を繰り返すクリステインに言った。

「あー、えーと、適当なところでこっちに寝返るから、許してくれない?」

彼女は媚びるような弱弱しい声で、こちらにそう言った。

俺は、いろいろな意味で声が出なかった。

「ならば、魔王様に釈明し、后としての役目を果たすと誓うのです。

いいですか、『魔王様に御赦しを願う以外に、貴女が救われる方法は無い』のです」

魔導将殿が必死に、気迫に満ちた口調で迫った。

「……ああー、その、師匠。それだけは御免なんだわ」  
「なぜです!?!」

バツが悪そうに視線を逸らすクリステインに、魔導将殿は問う。

「オレ、今じゃいいとこの神官の家の出っことになってるけど、元々は育ちが悪いんだわ。」



そこで、いろんな見たくない物を見たのさ。

だからオレは、決めたんだ。『絶対に食いつばぐれないほどの地位が欲しい』って」

今この窮地において、己の師にそれを告げるのはやはり思うところがあるのか。

「だから俺は、他人に依存しないと成立しない地位なんて要らない。

魔王の情婦になんてなれないよ、師匠」

「……それが、あなたの自由意思だというのなら」

彼女に授けた教えが、彼女を破滅に導いていることに魔導将殿は涙していた。

「話は終わりましたね。

魔王様はあなた達にゲームのルールを告げるように、仰っていました」

「ゲームのルール？」

「今からこの宝珠を、この世界のどこかに隠します。

これを見つけられるのならば、あなた方はこれを使用してもいい、とのことですよ」

「おい、ちよつと待て!!」

「ゲームスタート」

クリスティーンの焦りなど無視して、魔造将殿は手にした宝珠をどこかに転送した。

「さて、お帰り下さい。

魔王様は貴女の采配を楽しみにしておられます」

「ああ、やつぱり、あんな野郎の嫁なんてなるもんじゃないな!!」

その意地の悪さに、クリスティーンが吐き捨てるようにそう言った。

「あ、でも、流石に今回はダメだったらいい加減あいつらも諦めるだろうから、その時は師匠、オレのこと魔王様に口利きをお願いな!!」

最後にそんな都合の良いことだけ言い残して、ばびゅんと風のようにクリスティーンは宝物庫から去って行った。

俺は終始、彼女の言動に呆気に取られていた。

さて、一切の容赦をするなどという下知を受けて、いったいどのような戦略を取るだろうか？

ミスリルゴーレムで蹂躪する？

更なる波状攻撃によって攻め落とす？

邪悪で悪辣な戦法を用いる？

圧倒的な魔法によって蹂躪する？

どれも違う。

俺は思い知った。ことごとくを死滅させるというのが、どういふことか。

耳障りな虫の羽音が、戦場に……いや、これはもはや戦いでは無かった。

密集し、黒い塊としか見えない虫の群れが、黒い雲が下りるかのよう  
に攻撃目標の町に下りる。

一時間後、そこにあつたのは塩の山だけだった。

我らが至高なる文明の女神が遣わす、侵略兵器。

その名も、塩蝗。

作物や建物、人や動物を無差別に食い散らかし、塩を分泌して去つて行く。

何もかもが食い尽くされ、土地さえも塩害によって死んでいく。

世界を滅ぼすことなど、魔王様のような強大な力や俺たちのような  
軍事力など非効率的だとしても言わんばかりの無慈悲な侵攻。

ローコストで際限無く、そして簡単に制御できる。まさに効率を極  
めた兵器がこの世界を白い野原に変えていく。

俺たちは一国ずつを前回まで攻めていたが、今回は三国同時の侵攻  
と相成った。

魔王軍には多くの制約があるが、塩蝗はその制約の裏を掻くような、

レギュレーションに違反しないまさに裏技のような代物らしかった。ちよつとした品種改良で作成でき、寿命も設定できる。幾らでも増やせるし、その侵略性は無類のものだった。魔王様は本気で、今度こそ容赦なくこの世界を滅ぼし尽くすつもりであった。

「……………」

「不満か、アップルマン」

これでは戦略もあつたものではない。

彼の不満は目に見えていた。

「いえ、個人的に虫は好かないだけです。生理的に無理なんです」

「……………そうか」

単純に好悪の問題らしかった。

「この方面は塩蝗に任せ、我らは別方面を攻める」

そして俺たちが担当し攻略するのは、ヒルデン王国。

我が祖国だった。

塩蝗は効率的に、国家に甚大な被害を与えていく。

いつそ美しいほどに、機能的に。

俺は将、故にその報告を聞いた時、飛び出すように現場に向かった。

「はあ、はあ、魔物どもめ、この先に、我が祖国にこれ以上踏み入れさせはせんぞ!!」

王国軍が出張つて来たから、塩蝗をぶつけた。

それだけで無残にも王国軍は壊乱した。無理も無い。

その残党狩りにて、しんがりを務めたのがかつての父——ギルバード伯爵だった。

彼の率いる部隊はほぼ全滅。

たったひとりで、俺たちの軍勢を押し留めていた。

そして、俺がその現場にたどり着いた時、彼は満身創痍の死に体だった。

「我こそは魔王軍魔人将アーランド。」

王国の将とお見受けする」

「……」

俺が敵味方の死体が散らばるこの場に訪れたことは、彼にも不可解だっただろう。

「その剣技の冴え、敬意に値する。」

我が魔剣の業によって介錯しよう」

「ほざけ、侵略者めが!!」

勝負は、一瞬だった。それで十分だった。

「か、はッ」

致命傷を負った我が父が、死体に埋まった大地に膝を突いた。

「貴公、もしや……」

満身創痍だからと言って、あまりにもあつさりしすぎていた。

「ああ、剣は、剣はどこだ……」

彼は死に際まで剣を握り、落とした剣を探そうとしていた。

「……父上」

俺は魔法を唱え、声を変えて死の淵に居る劍聖に語り掛けた。

「……アラン、アランなのか？ なぜきたのだ……」

父はもう既に、いやとつくに目が見えなかったのだ。

「味方の増援が来ました。」

私も共に馳せ参じ、魔王軍を撃退しました」

「ああ、そうなのか。すまない、後を任せてしまおう……」

俺の部下たちも、このやり取りに口を挟むことはなかった。

俺はリリウムに目配せした。

彼女は両手を握り締めていたが、やがて父の元で膝を突き手を取った。

「ほら、姫様も来てくださっています、安心して後はお任せください」

「……ああ、本当だ。でも姫様、修行を怠りましたね」

リリウムは師の最期の言葉を聞き入れていた。

「このような……柔らかい姫様の手は、貴女様の幼い頃のことを、思い……出……し」

すると、父の手がリリウムの手からすり抜けた。

そして、この世界でも屈指の剣聖は事切れた。

「我が神、我が女神、偉大なる邪悪の女神よ。

これが、これが俺に与えられる罰なのか!!」

己の父を埋葬し、俺は荒れていた。

「俺は父を超えることすら許されず、あんな弱々しい最期を見せつけさせるためにこんな……」

「アーランド」

だが、胸中を吐き出す俺に、リリウムはぴしやりと言った。

「あの人の最期を、弱々しいなんて言わないで。

あの人は戦士として戦い、そして誇りある死を遂げた。それだけのことよ」

「……くそッ、くそくそくそッ」

俺は何もかも思い通りにならない人生に、激情を持って余すほかなかった。

「くそッ、くそッ」

俺は泣いていた。今生で初めて。

泣かずのアーランドが、泣いていた。

「泣かないで。もうすぐ、もうすぐこの苦痛も終わるから」

リリウムは俺が落ち着くまでずっと、俺を抱きしめて慰めてくれていた。

§  
§  
§

俺は今日ほど、自分の弱さが嫌になる日を忘れない。

「おのれ、魔人将アーランド!!」

我が父の仇め!!」

目の前に躍り出たかつての自分と対峙することになったのだから。

我が父を埋葬し、その先にある国境の砦を攻めることになった。

そこに配属されていたのが、かつての自分。

余りにも弱すぎる、見るに堪えない自分だった。

「失せろ、未熟者」

俺は勇んで前に出て来た自分を、魔剣にて串刺しにした。かつての自分は断末魔さえ上げることができず、一撃で絶命した。

「大分、死人が増えましたねー」

砦の兵力を一掃し、占拠し戦後処理を行っていた時だった。

「アンズ様」

書類仕事をしていた俺の前に、幼い見た目の女神が舞い降りた。

「いったい如何なるご用向きでしょうか」

「いえいえ、ただの雑談ですよー」

彼女は少女らしく悪戯っぽく笑いながら俺の前に立った。

「アンズ様、クリステイーンについてはもうよろしいのでは？」

「よろしい、とは？」

「彼女はもう十分に惨すぎる罰を受ける。」

「これ以上私たちがどうするかなんてする余地も無く」

「それはたしかにそうですね」

アンズ様はこくりと頷いた。

「私個人としては、彼女の事は嫌いじゃないですよ。」

その手段はどうあれ、自ら自立しようとしている。

「ずっと『あの人』に甘えている私からすれば尊敬に値します」

「では」

「でもだからこそ、手段を問わない理由にはなりませんよね？」

俺は口を噤まざるをえなかった。

「私は試練を課しただけ。」

ドツボにハマって行ったのは彼女の行いの所為。

それによって受ける罰は、私ではなく彼女自身のもものでは？」

それは正論だった。否定することが出来ないほどに。

「それに彼女は、いくつも、何度も、最悪の結果から逃れる選択肢を与えられた。」

私だってあまりにも可哀そうだから手助けしたんですよ？

でも、その全てを振り払い、無視したのは彼女です」

『絶対に食いつぶれないほどの地位が欲しい』、か」

「ええ、『それが彼女の願い』。でも彼女が願うには、少しばかり不相応だったみたいね」

そう、全ては彼女の我が強過ぎたのが悪いのだ。

「ところで、そろそろ各国連合軍が結成されますよ。」

実のところ今回はそのシステムメツセージをお届けに来たのです」  
私ってば親切、とウインクしているアンズ様に、俺は立ち上がった。

「そんな、連合軍結成はもつと先では!?!」

「私はちゃんと言いましたよ。『私はリソースをやりくりすることしか出来ない』って。」

つまりこれは、私でなくても、この世界の法則としてそびえたっているわけです」

「仰る意味が分からないのですが」

「つまり、この世界が滅亡するまでの死者の総量はあらかじめ決まっているのです。」

しかるに、『死者の数が増えればそれだけイベントが前倒しになる』  
と言うことですねー」

俺はその言葉に、背筋に寒気を覚えた。

「要するに、魔王様が俺たちに容赦のない殺戮を命じているのは」

「そう、シミュレーションゲームで言うならターン制限をきつくしているようなものですね。」

そしてそのタイムリミットは、もうほとんど残されていない」

アンズ様のお告げに、俺は動揺するほかなかった。

それはつまり、あと数年が有るはずだった俺の時間も残されていないのと同義だからだ。

「気づかなかった……姫様の時は、戦うので必死で」

イリーナ殿の時はこの時点で俺はとっくに死んでいたので、気づきようも無かった。

周回を重ねるごとに魔王軍が強くなるから、としか思っていなかったのだ。

「今から戻れば、決定的瞬間を目撃できるかもしれませんよ?」

くすり、とアンズ様は微笑んで消えて行つた。

「リリウム!!」

「はーい、どうしたの?」

「全軍反転、魔王城に戻るぞ!!」

「えッ、えッ、どういふこと?」

「説明は行軍中にする!!」

俺の予想が正しければ、これ以上戦うことに意味はない。

どうせ死者の数が決まっているのなら、これ以上の殺戮する理由は無かつた。

俺は魔王城に連合軍の電撃作戦が行われるだろう、と先読みしたという体で全軍を魔王城に戻すことにした。

§ § §

「……遅かつたか」

いや、遅かつたのではないだろう。

どうあがいても、俺がこの結末に介入することなどできないのだから。

俺は巨大な邪悪のオーラが火柱のように立ち上る魔王城を見上げ、全ての決戦が終わつたのを察した。

部下に怪我人の救護を命じ、俺は戦いが終わった玉座の間へと馳せ参じた。

「アーランドか、ちょうど良いところへ来たものだ」

玉座の間は、死屍累々だった。

姫様、イリーナ殿、アリサ殿、そしてソフィア殿達精鋭その全てが無残に死に絶えていた。

生きているのは、クリステインだけだった。

いや、今にも殺されそうになっている。

なぜなら彼女は、真の姿を見せた魔王様によつて全身を握りつぶさ



れようとしていたのだから。

まさに、真龍、神龍としか言い表せない、女神をその身に降ろした魔王様は、ヒト型から龍に近くなっていた。

だがその大きさはヒト型の数倍。玉座の間が狭苦しく感じるほどだ。

「こ、殺せツ……」

魔王様の腕の中で、クリステインが呻いた。

「ああ、すまなかった。我が妃に対する扱いでは無かったな」

そしてあっさりとして、魔王様は彼女を手放した。

「がッ、はあはあ」

盗賊から神官へとリビルドし直し、法衣を纏った彼女は息も絶え絶えに仲間の死体が転がる床に這いつくばった。

「私はお前を高く買っている。

お前は薄汚い盗賊にしておくには惜しい才覚の持ち主だ。

そしてそれを、この私に挑むことで証明して見せた。

故に、お前の口から返事を聞かせてほしい。

我が物に成れ、その代わりこの世界の半分をやろう」

巨体になった魔王様は、彼女を見降ろしそう告げた。

「くそ喰らえだ!! 誰があんたの嫁になんてなるか!!」

この状況で、そのような啖呵を切れる彼女の精神力はいつそ清々しかった。

「そうか。そうかそうか……」

しかし、魔王様はその返答に満足したように龍面に笑みを浮かべていた。

「魔造将」

「はッ、ハーンに」

玉座の間の影から、魔王様に呼ばれて魔造将殿が現れた。

「クリステインさん、我が主上から通達でございます」

彼女は、這いつくばるクリステインにも見えるように一枚の書類を差し出した。

「は……は!? な、なんだこれは!?」

そして、その内容を見ざるを得なかった彼女は、ただでさえ失せていた血の気が更に薄れて行った。

「この世界の通貨で、借金10兆だって!？」

……ああ、ついに知ってしまった。

「これが、これが私に!? なんの冗談だよ!？」

「冗談ではありません」

悲鳴じみた声を上げるクリステイーンに、魔導将殿は真顔で答えた。

「貴女がこの世界に我々に代わり齎した技術にはすべて、特許が有るのです。」

その使用料、使用範囲といった規模から算出して、責任者であるあなた個人に請求しているのです」

魔導将殿は、淡々と告げる。

クリステイーンの死刑宣告を。

「本来なら、これらは我が主上の庇護下にある者は無料で享受できるものです」

「な、ならどうして……」

「だって、あなた。改宗しなかったでしょう?」

何を言っているんだ、とでも言いたげに魔造将殿が小首を傾げる。

クリステイーンは啞然としたまま硬直していた。

『いえ、私はもうかの御二柱の神官です』

そんな真つ赤な嘘を、彼女が自分に師に言っていたことを当然ながら俺は知る由もない。

「あなたは我が主上の庇護を受け入れなかった。」

形だけの服従を誓い、もし魔王軍から助け出されたら何食わぬ顔で元の神の神官に戻ろうとしていた。

それを悪いとは言いませんが、デメリットを考慮するべきでしたね」

それだけを告げると、無情にも魔造将殿はその場を立ち去った。

俺は記憶に埋もれた、アンズ様の言葉を思い返していた。

『貴方達個人の“負債”に関しては私は関与できませんので、悪しからず』、と。

「我が妃になれば、この程度の借金など肩代わりしてやれたものを。

そうかそうか、嫌か……」

「ま、魔王様……ちよつと、ちよつと待ってください……」

「知っているか、クリステイーン。」

これほどまでの借金を背負ったお前は、もはや貴様個人の労働程度ではどうにもならん。

お前は死後、地獄へ行き魂の全てを浄化される過程を味わう地獄を経て、来世に至る」

地獄行き。それが、背理の聖女の末路だった。

「私の強い貴様にはふさわしかろう。

その強すぎる己の自我がやすりで削られるような苦痛を延々と味わい、自分が自分で無くなっていく過程を思い知りながら、来世で結ばれようぞ」

俺にはクリステイーンの心がポツキリと折れる音が聞こえた気がした。

「では、また次回でな。

……残り少ない今の自分を楽しむと良い」

絶望に満ちた表情のまま、クリステイーンは魔王様の手押しつぶされて即死した。

そしてそのまま、魔王様は自身の力の全てを解放した。

全てが滅びゆく。世界が壊れていく。

そうして、ようやく、最期の一回へと俺は流れ着くのだ。

## 第一階層

魔王軍として、六回目。

そして最後となる周回。

俺たち魔将は魔王様の命令によって、前回や前々回のように人類が魔王軍に対抗するべく活発に動いているか調べることになった。

その結果、あの四人の目立った活動は見られなかった。

姫様はソフィア殿を影武者に仕立て、イリーナ殿と共に祖国を  
奔。

クリステイーンは所在不明であり、アリサ殿はずっと連絡が取れないままだという。

恐らく、あの龍魂の宝珠を探しているのだろう。

あれを上手く使い、アンズ様を呼び出し願いを叶えて貰えば、この状況もひっくりかえせる。

アンズ様の言うところの、「全知全能」の力によって、全ての盤面が覆る。

クリステイーンも、己に課せられた借金をチャラに出来る。

彼女もそれを狙って今頃血眼になって探していることだろう。

それ以外に、彼女が助かる道はない。

それこそ、仲間を殺してでも手に入れたいであろう。

だが、俺はまだまだあのクリステイーンという女の底を全く理解出来ていなかった。

§ § §

対戦相手が居ないゲームにやる気など見出せない。

魔王様はあの四人が見当たらない時点で、最初のように俺たちに放任することにしたようだった。

それは、お気に入りであったクリステイーンに最期の時間を与える為の、彼なりの慈悲であったのかもしれない。

だが、クリステイーンという女は俺や、魔王様すら想像できないよ

うなぶつ飛んだ奴であつたのだ。

まず第一に。

「それで、今更この私にいったい何の用だ」

彼女は今まさに、魔王様に目通りを願い、謁見を果たしているという理解不能なメンタルをしていた。

玉座の間に魔将がそろい踏みし、その中に足を踏み入れるこの女の胆力とその胸中は全く想像できない。

「つまらない用件ならば、この場で残りの時間を散らしてやってもいいのだぞ」

恐らく、この場で彼女が命乞いでもしようものなら、その人生の終末を無様で終わらせる前に彼はそうしたのであろう。

「実は魔王様に御願いが有って参りました」

「ほう、言ってみろ、今更妃になりたい、は無しだぞ?」

その次の一言で、クリステインの行く末が決まる。

そして彼女が発した言葉はこれだった。

「——私をあなた様の右腕として雇ってください」

俺だけでなく、その言葉に魔将全員が啞然とした。

「な、無礼だぞ貴様!!」

自分が何を言っているのか分かっていいのか!?

お前は魔王様をコケにしたのだぞ!!」

魔獣将殿がその身勝手さに怒声を上げる。

「私の有用性は魔王様自身がご存じのはず。

私は妃にはなれませんが、右腕には成れます」

そう言つて、跪いて伏せていた顔を上げるクリステイン。

——信じられないことにこの女、まだ諦めていないツ!!

これほどまでに絶望的な状況において、地獄行きがほぼ確定していても、自らの窮地を自分の力でひっくり返そうとしている。

俺は畏怖を抱かざるを得なかった。

これがアンズ様が認め、魔王様でさえ魅入られたこの女の「本質」だった。

そして。

「——面白い」

それを見たかったとでも言うように、魔王様は笑っていた。

「では、忠誠を示してもらおう。」

我が神、我が母に、いったい何を捧げる?」

魔王様の問いに、彼女はこう言った。

「——邪悪を」

その瞳に宿るのは、いつそリーパー隊の連中に似て純粋だった。

「邪悪を、偉大なるかの御方に捧げます。」

あの球つころを使えば、世界を滅ぼすことが出来るんでしょう?

なら、この私が魔王様に代わってこの世界を滅ぼしてやりましよう」

その知性、その才能が、か細い最適解を手練り寄せる。

その才覚、その性根そのものが、邪悪。

彼女は根つからの悪党、ロゲック属性アライメントアライメント：秩序（ローフル）・混

沌（カオティック）・善（グッド）・悪（イビル）・中立（ニュートラル）・

光（ライト）・闇（ダーク）、などというように、キャラクターの性格

や価値観、所属グループなどを表す。Wikipeediaより抜粋。

「渾沌・悪より正確には、『中立』寄りであるが、主人公は主観的にそう判断した。だった。」

「こんな世界、一度ぶっ壊してみたかったんです」

どこか力なく笑う彼女は、やけっぱちになったようには見えない。

極めて理性的に判断し、そこには狂気も罪悪感も無かった。

俺は並み居るリーパー隊の連中を見て来たが、そこに所属する誰しもが恐れるに値しなかった。

例外が有るとすればアップルマンくらいだが、あれは敵にしなければ脅威になる人物ではない。

だがこの女は、いざとなったら自分の為に本当に何でもするという恐ろしさがあった。

と言うより、あの時、あの瞬間。

あの四人で殺し合いを演じたあの場所で、彼女はずっと、アンズ様

が急かす前から他の仲間たちから宝珠を奪い去る積りであったのだろう。

それを考えると、俺はゾツとした。この女、イカレてやがる。この女は、自分が爆発しない為に動き回る爆弾そのものだった。

「……我が母が、何故に人間を愛するか少しだけ理解できた気がするな」

そしてその答えに、魔王様は満足なされたようだった。

「では、お前に残された最期のチャンスを見事掴み取ってみせるがよい。

さすればこの私が、お前の全ての負債を帳消しにしてやろう」

これは魔王との契約。

クリステインはその言葉に、ゆつくりと頭を垂れた。

§ § §

「よかろう、これまでの忠節。大儀であった」

俺の願いは、実にあっさり魔王様に受け入れられた。

「本当に、よろしいのですか?」

「見極めは既に終了している。

我が母が本格的に並行世界を含めたこの世界軸を滅ぼすのも時間の問題だ。

クリステインがどのような結論を出すにしても、な。

であれば、己のかつての故郷ぐらい見て回りたいであろう?」

俺はそのお言葉に、ただただ頭を下げて感謝を示すほかなかった。

「もし、次があれば、再び魔王様の元で戦いとうございます」

俺は最大限の賛辞を述べると、魔王様は静かに笑みを浮かべた。

「そうですか、寂しくなります」

俺は他の三人の魔将にも、暇を頂いたことを告げた。

「ま、あとは私たちに任しておけよ。後は惰性で終わる仕事だしな」

余り接点は無かったが、魔獣将殿は俺と握手してそう言った。

「従軍期間中の給料は出身世界のダークエルフ自治区宛てでよろしかったですか？」

「はい、お願いします」

魔造将殿はいつも通り事務的だった。

彼女は役所に行けばいつでも会えるので、別れにはならないのかもしれない。

「魔人将殿、クリステイーンをお願いします」

「ええ、分かっています」

魔導将殿に頭を下げられ、俺は恐縮して頷いてしまった。

俺は居心地が悪くなって、挨拶もそこそこリーパー隊の連中の元へと向かった。

「そういうわけで、あとは任せてしまうことになる。悪いな」

「いえ、この程度の無茶振りであれば問題ないでしょう」

アップルマンにそう告げると、彼は名残惜しそうにそう答えた。

「不出来な上官で申し訳なかった」

「いえいえ、あなたは話の分かる方だった」

それだけで俺には十分やりやすい良い上司でしたよ」

「そうか、お前と言う戦友を得られたことだけでもこの戦いに従軍した意味が有ったよ」

「望外のお言葉です」

彼は軍帽を下ろして、頭を下げた。

そうしてすぐに、リーパー隊の面々に詰めかけられた。

こんな連中ではあったが、もう顔を見ないとなると一抹の寂しさと言うものが湧き出てくるものらしかった。

「ごめんなさい、私の為に」

そしてリリウムと共に魔王城を出た俺は、彼女にそんな言葉を言われてしまった。

「お前が謝る必要は無いさ」

事の発端は、最後に実家のパン屋のパンを食べたいと言ったりリリウ



ムの願いを叶えてやりたかったからだった。

そして俺も、この世界の風景をこの目に刻み付けておきたかったのだ。

そうして、俺たちは残された時間で各国を回った。

魔王軍の侵攻は緩やかで、もしかしたら俺たちの為に手心を加えてくれたのかもしれない。

お陰で、交通規制なども殆ど引つかからずに各国を回れた。

遠目にだが、アリサ殿を見かけたこともあった。

それでも戦火は徐々に拡大していき、ヒルデン王国に迫ろうとした頃合いに、俺たち二人は王都のあの孤児院へと戻った。

久しぶりに戻った孤児院は懐かしく、今の故郷スロウラに居た時間と従軍期間を足せば軽く五十年振りくらいであろうか。

「お兄さん、お姉さん、何か御用ですか？」

孤児院の前で俺たちが懐かしさに耽っていると、名前も忘れてしまった年長の子が遊びを中断してこちらにやってきて尋ねて来た。

「ああ、院長先生の知り合いなんだ。

アランと言えば分かってくれる。ほら、パンを買ってきたからみんなでお食べ」

「わあ、こんなにいっぱいのパン初めて見た!!」

ありがとうございます、今呼んできますね!!」

彼は目を輝かせて、バスケットいっぱいのパンを抱えて院内に駆けて行った。

「アラン君?! それに姫様も!!」

ステラが院内から現れると、目を見開いて驚いて見せた。

「もう戻って来れたの!?!」

「いやあ、体感時間で五十年ぐらい振りかな」

「そんなに……」

苦笑するリリウムの表情を見て、ステラは俺たちの苦難を察したようだった。

「とりあえず、中に入って。きっと女神様もお待ちよ」

「ああ、そうさせてもらおうよ」

俺が彼女に頷いて見せた時だった。

「待て!!」

その時だった、ほぼ満身創痍のソフィア殿が剣を抜いて玄関口から現れたのは。

「姫様、離れてください」

彼女は気づいていた。

俺たち二人が、幻術を用いて姿を変えていることを。

それが出来なければ、対暗殺の騎士など出来るはずが無いのだから。

「落ち着いてください、ソフィア殿!!」

俺は敢えて、幻術を解いた。

ステラが俺の見た目が変わったことに目を見開き、ソフィア殿は俺の正体に驚愕して後退る。

「ま、魔人将アーランド!!」

「そうです。俺はアーランドにして、アラン。

わかるでしょう、ソフィア殿。天秤の女神の御業を」

当然ながら、アンズ様はこの世界において知名度は皆無に等しい。

その存在を知っている者は限られる。

「ば、バカな!! じゃあ私はあの時に!!」

震えて、剣を落としてしまった彼女に俺は頷いてみせた。

「はッ、はははッ、因果応報とはこのことか!!」

お前を殺した私はッ、お前に殺し返されていたとは!!

このような喜劇がこの現実中存在していようとはなッ!!」

そんな常軌を逸した事実気づいてしまった彼女は、泣き笑いを浮かべながらその場にへたり込んだ。

「こんな、こんな惨いことがあつていいのか……」

彼女はそのまま顔を覆ってすすり泣いてしまった。

「何の騒ぎだ!!」

生憎と、孤児院の壁は薄い。

イリーナ殿が異常を察して飛び出てくるのは必然だった。

「はあ、もう一度説明よ。アラン」

「ああ……」

かつての仲間から警戒されてしまうこの状態に、俺は少し嫌になっ  
てしまった。

§ § §

俺たち二人は、例の部屋に行くと三人に己の身に起こった出来事を  
少しずつ話し始めた。

俺はダークエルフに生まれ、リリウムがサキュバス種の王族に産ま  
れたこと。

新たに生まれ育った世界で経験したことや、そこで見た神々の統  
治。

魔王軍に従軍し、この世界で多くの殺戮を繰り返したこと。

俺たちは何一つ隠さず話し、三人はそれを黙って聞いていた。

「……流石は邪悪の女神の所業と言ったところか」

ある種の感嘆と共に、イリーナは深いため息を吐いた。

「女神様、貴女はこうなることを全てご存じだったのですか？」

彼女は壇上に座って退屈そうに神賽を弄んでいるアンズ様に尋ね  
た。

「え？ 何ですか？」

私は天秤と神賽の女神ですよ？ サイコロを投げた結果をどうに  
かできる権限は無いのです。

二人をどう使うか決めたのは私じゃありませんし」

早く話が終わらないかな、と表情が物語っていたアンズ様が話しか  
けられハツとなってそう言い返した。

「止めるイリーナ。

女神様は時間を超越している存在だ。知った知らないに意味はな  
いだろう」

それが全知全能と言うものだ。

この超越者に、我々の理屈など意味の無いことだ。

「……だが、アラン」

「言いたいことが有るのは分かるわ、イリーナ。

でも結局は私が駄々をこねたのが悪いのよ。

私があの時ああしなければ、少なくともこんな形でみんなと再会はしなかったはずだわ」

リリウムがイリーナにそう告げる。

彼女の物言いは長い旅路を歩んで疲れ果てた旅人のようであった。

「それで、結局お二人は罪を贖えたのでしょうか？」

ずつと黙って話を聞いていたステラが根本的なことについて言及した。

「さあ、どうでしょうね？」

本来、罪とは現世なら現世で、死後は死後に裁かれるものです。

次に転生する際に、あのクソ女神に聞いてみたらどうです？」

結局は分からないということが、アンズ様によって教えられるのであった。

「さ、旧交を温め終えたのなら、三人目の裁定を始めましょうか」

パンツ、手を叩いてアンズ様は話を切り替える。

いよいよその時が来たか、と俺は意を決した。

「分かりました、クリステイーンを生き返らせてください」

「はい、それじゃあ、クリステイーン・オルデンよ。」

私の呼びかけに応じ、そして立ち上がりなさい」

アンズ様の御言葉により、奇跡が起こる。

「ん……あ？ あれ？」

背理の聖女、クリステイーンが死から蘇ったのだ。

「こ、ここはどこなのッ!？」

イリーナ!? 將軍閣下!? 何がどうなってるんです!？」

彼女は状況を把握できず、混乱していた。

「落ち着くんだ、クリス。」

「ここは安全な場所だ。そしてもう、我々に争う必要も無くなった」

「争う……? そうだ、あれだ、あの宝珠はどこに?」

「はあ」

イリーナに窘められても冷静さを失っているクリステイーンに呆れたアンズ様が、指を鳴らした。

「あ、か……」

アンズ様の魔法により金縛りに陥った彼女は、目の前に何が居るのか悟った。

「クリステイーン、少々時間を貰いますよ」

「しよ、將軍閣下が、なぜ」

「將軍職は辞しました。今はただのアーランドです」

アンズ様の存在を認識し、話しかけて来た俺に視線を映し、ようやく彼女は自らを落ち着かせようと勤め始めた。

「そして今は、この天秤の女神の使徒……その代行をすることになっています」

「じゃ、じゃああなたが私たちの願いを？」

「違います、かの御方はあなた達の犯した罪を裁定し、罰を与えよと仰せだ。

イリーナ殿と姫様の裁定は既に終わりました。次は貴女の番なので」

俺は淡々と、己の役割を彼女に告げた。

「それが終わり、ようやくスタートラインに戻ります。

あなたともう一人、その裁定が終わるともう一度だけチャンスを与えられるとのことだ」

「は……はッ、今更もう一度チャンスを貰ってどうなるんです？」

クリステイーンは暗い笑みを浮かべてそう言った。

「魔王は強大、魔王軍は無尽蔵。

それは誰よりもあなたが知ってるはずでしょう？」

「では、貴女は自分の罪と向き合うつもりは無い、と」

「だってもう、終わりじゃないですか」

彼女は囁く、全てを悟ったかのように。

「私は失敗した。あの御方も失望したでしょう。

この期に及んでごねてどうするのです。私は潔く地獄を観光してきますよ」

彼女はいつそ清々しいほど、手持ちが尽きたギャンブラーのようにこの世を去ろうとしていた。

「貴女は人生の負けを認めるのですか？」

「ふッ、——……だって仕方ねーだろ!!」

自嘲の笑みを浮かべた後、彼女は本性をむき出しにしてそう叫んだ。

「私は聖光法国のスラムで育った!!」

光の神のお膝元に近いところに居ながらも、その光が届かないゴミ溜めさ!!

毎日毎日盗みや詐欺で生計を立てながら、必死に貞操を守りながら生きるのがどれだけ難しいか分かるのかよ!!」

それが、彼女の原点だった。

「私は自分を売ることだけはしなかった!!」

それだけが私を私たらしめる唯一の誇りだった!!

なぜなら、私は才能に恵まれてる自覚があったからな!!

こんなゴミ溜めから抜け出せば、私は必ず成り上がれるって分かってた!!」

そして、彼女はそれを証明して見せた。

聖光法国にて聖女の地位を得て、周囲の信用を勝ち取った。

魔王軍の対処を一任できる立場まで得た。

彼女がいかにも有能かは、魔王様も認めるところであった。

「でもスラム育ちの身分証の無い私に、出来ることは限られてた。

最終的に冒険者なんてクソみたいな荒くれの一人として、スラムと同じことをしていた。

そんな私が、女神に願って今の生まれを手に入れてどうなった？

きちんとした家庭に生まれ、師に恵まれて教養を得て、聖女の地位を得てまでしたことは結局スラム時代と変わらない!!」

吐き捨てるように、彼女は変えられない自分を皮肉った。

「ゴミ溜め育ちでも、上流階級育ちでもどうせ最終的に同じなら、こんな世界に価値なんてねえよ。

この世で最も価値のあるのはオレなんだよ!! 断じて、こんな世界

認めねえ!!

ぶっ壊してやろう、つて考えて何が悪い!!」

まさにこの世界の命運を左右する能力を持った彼女の激情がそれだった。

「もう一度やり直してどうなる?」

また同じだよ!!　そういう風にできているのさ!!

お前たちもいい加減、思い知っただろ!!」

彼女の言葉は、真理を突いていた。

きつともう一度チャンスを得ても、彼女たちは失敗するだろう。

そう、何もかもが徒労なのだ。

「黙りなさい、裏切者!!」

これに激怒したのは、リリウムだった。

彼女は強烈な平手打ちをクリステインに見舞った。

「いてツ、何すんだよ、お前!!」

「私が誰か、わからないのクリス!!」

「ああツ!」

「私はレナスティよ。この姿はかの御二柱に頂いたものだわ」

「な、えツ、マジかよ」

そう、リリウムは知って居る。

この女がいかに、仲間を裏切っていたのかを。

「この嘘吐き、コウモリ女!!」

私たちの仲間の振りして、魔王軍にずっと尻尾振ってたのね!!」

「それは今のお前もそうじゃねえかよ!!」

クリステインの反撃が、リリウムに炸裂した。

二人はそのまま取っ組み合いを始めてしまった。

だが能力的にリリウムの方が上だったので、クリステインは胸倉をつかまれてしまった。

「なあ、オレがどうして失敗したかわかるか!!」

昔の馴染みの義理だってお前らに協力したからだよ!!

そうじゃなけりゃ、10兆なんて借金を背負うことも無かったんだからな!!

賭け事のやり方も知らない大馬鹿どもが、偶然大穴当てたくらいで調子乗りやがって!!

お前らが、お前らの所為なんだよ、この疫病神が!!」  
その言葉に、リリウムはひるんだ。

強張っていた表情のイリーナも硬直した。

「オレはずっと思ってた、仲間意識なんてくだらねえ!!

どうせ周囲はオレを裏切って、騙して、消えていく!!

オレはそういう場所で育った!!

お前らがオレをどう思ってたようが関係ねえ、結果的にお前らがオレの足を引つ張りやがったんだ!!」

結果論として、彼女の言葉は正しかった。

彼女が聖女として活動するのに、文明の女神の知恵を使わなければあのような転落は起きなかった。

「お前たちが魔王様に逆らおうなんて考えなかったら!!

オレが上手く魔王様に取り入って、この世界を平和にできたかもしれないなかったのによ!!

お前たちにわかるか、オレが育ったスラムが綺麗さっぱりあの御二柱の齎した魔王軍によって無くなったのを!!

なんで、なんでオレが住んでた時に来てくれなかったんだよって、何度思ったことか!!」

そこには、憎悪があった。

貧困に対する苦痛と憎しみがあった。

それを理解できるリリウムが、思わず手を緩めてしまった。

「それだけじゃねえ、こんなオレにも尊敬できる師匠が出来た。

だから一回だけで終わりにしようと思ってたのに、あんたらがやり直しをしようなんて言うから収まりがつかなくなっちゃったじゃないか!!

お陰で私はこれから地獄行きだよ!!

良かったな、クソみたいな裏切者が地獄へ行っ!!」

「そんな、私は、そこまで……」

「大好きだろ、私みたいな嫌な奴が落ちぶれて、心の中でざまあって笑



うのが大好きなんだ。それが人間って生き物だしなッ」

笑えよ、と言つてクリステイーンはリリウムを突き放す。

「はあ」

いい加減クリステイーンの主張に呆れたのか、アンズ様が溜息を吐いた。

「でも結局、貴女の凋落は自分一人しか信じなかったから招いた結果じゃないですか」

「違う!!」

「教会内で信用できる人物は幾らでもいたのに、あなたはあの『文明』から掠め取った知恵を全部自分の手柄にした。

そうでなければ、あなた個人に全部請求が行くことがありえないと思うのですけど?」

結局のところ、彼女は我が強過ぎた。

自分だけしか信じられなかった。

そして悲しいことに、彼女は有能過ぎた。何でも一人で出来るほどに。

「運命の行く先を観測するのは私の権能では無いですが、私にでもあなたの末路は分かります。

仮に魔王軍を撃退しても、適当なところであなたは周囲から孤立させられ、権力から遠ざけられる。

いずれにせよ、時間の問題だったのでは?」

アンズ様の的確な予測に、権力と言うものを良く知っているこの面々は渋い表情になった。

「はッ、なんだよそれ、道化じゃないか。

私はただの道化だったのかよ」

そう、それが彼女と言う聖女の正体だった。

都合の良い権力者たちの一時の生贄。

「貴女は幾つもの分岐点で、何度も自分本位な選択しかなかった。だからあなたは平気で嘘を吐けるし、簡単に裏切ることが出来る。

自分でもわかつてるじゃないですか。あなたがそうである限り、行き付く先は同じだと」

アング様の言葉に、彼女は膝を突いてうなだれてしまった。

「聖女クリステイーン。あなたに罰を申し渡します」

俺の言葉に、彼女は顔を上げてうつろな目を俺に向けた。

「あなたが自分の師を尊敬できたように、貴女を友人だと思っている人たちを信じてくれませんか？」

「……オレの力が必要だつてのかよ」

「貴女が居ないとダメなんですよ、いえ、貴女たち全員がいないと」

俺が後ろの面々に振り向くと、彼女たちは頷いた。

「……………少しだけ、時間をくれ」

全てを失った彼女は、か細い声でそれだけを口にした。

## 探偵不在、犯人の犯行自白

「さて、と。」

彼女が悩んでいる間の時間も無駄なので、さっさと次へ行きましたよ  
う」

クリスティーンへの裁定が終わり、アンズ様は俺にそう言った。

「最後は、アリサ殿ですか」

当然ながら、俺はクリスティーン同様アリサ殿をよく知らない。

活動している国もこれまでずっと俺の行動範囲と重ならなかった  
からである。

「彼女はいったいどういう人物なんだ？」

俺はとりあえず知り合いに尋ねてみた。

「研究趣味の、変人ってほどではないか」

「クリス程は性格が尖がってないわね」

「おい、聞こえてるぞ」

イリーナ殿とリリウムはそのように最後の仲間を評した。

「私としては、もう十分あなた達で楽しんだんで彼女にはあまり期待  
をしていないんですよねー。」

構成的にはスタンダードな性格の人間が最後になるのはいただけ  
ないと思いますけど」

そしてアンズ様は相変わらず歯に衣着せぬ物言いをなさった。

「彼女の場合、探偵小説の解決編とかそういうものになりそうで——」

「それならば、私もそろそろ意趣返しの一つでもさせてもらおうか」

俺たちはギョツとした。

まるでそこに当然のように暗がりが存在するように、黒い靄がヒト  
型を模っていた。

邪悪と悪逆の女神リエーサセツタ。

「ではこういうのはどうだ。」

探偵役不在のまま、犯人が勝手にすべての犯行動機を自白するとい  
うのは「は」

「リユーちゃん、そういうの白けるからやめてくれませんか？」

「私はお前と違って暇ではない。仕事を済ませよう」

赤い瞳が、こちらを一瞥した。

たったそれだけで、ただの人類に過ぎない俺たちは硬直するほかなかった。

「これでは話もしずらかろう」

私たちが慄いているのを見て、彼女はスツと手を振った。

黒いヒト型にしか見えない濃密な闇が、晴れた。

昏い闇を纏っていたのは、——どこにでも居そうな女性だった。

美人ではないが、愛嬌のある顔立ち。

アンズ様のように顔は平たくないし、髪の色も珍しくない茶髪だ。

その辺の人混みに紛れれば見失うような平凡な容姿。

だが、その瞳だけは深淵に繋がるような底なしの赤い奈落だった。

美しい瞳の女性を、吸い込まれそうな、と表現することが有る。

その眼の奥は、文字通り果てしない最果てだった。

「まず、クリステイーン・オルデン」

「は、はいッ!？」

まさか名指しで呼ばれるとは思わず、クリステイーンが上ずった声を漏らす。

「我が盟友には話を付けておいた。

お前の借金は私が帳消しにしておいた。

「次回」からは我が息子の右腕として、相応しい地位を与えるので

励め」

「え……あの、お言葉ですが、私は失敗したのでは？」

クリステイーンがおずおずと尋ねた。

その表情には都合がよすぎで微塵も信用できないと書いてあった。

「客観的に見てそうだろうな。だが決めるのは私だ。

私はお前にたかだか10兆程度のはした金より価値が有ると判断した。

お前は我が使徒として召し上げ、これから先の「伐採」にも役立つもらう」

ハッキリ言って、これは大躍進である。

この世界は滅ぼすが、彼女は直属の部下にすると宣言したのだ。  
この女神様はこの世界一つよりも、クリスティーンの方が価値があると判断したのである。

「はい、これでああなたの『絶対に食いつぱぐれない地位に成りたい』という願いは完遂ですね。ぱちぱち」

アンズ様は自分で手を叩いてつまらなそうにそう言った。

「あの、何故にクリスティーンをお気に召したのですか？」

俺は納得がいつていなさそうだったので、邪悪の女神に尋ねた。

「私と、我が盟友の統治はトライ&エラーの繰り返しである。

以前、一つの世界を全て完全に、本当に徹底的に支配し、完璧な平和を齎したことが有るのだが」

そこで、くすり、とこの邪悪を司る女神は思い出し笑いをした。

「思想も完全にコントロールしていたんだがな。

——……木っ端みじんになった」

「え？」

「たった一人、自分の生きる世界に疑問を抱いた。

そしてそいつはこう思った。この世界を台無しにしてやりたいな、と」

その物言いは、まるで新雪の庭を踏み荒らしたい、とでも言うような軽さだった。

「それを実行し、爆弾で一緒になって世界ごと爆散したそいつに私は喝采を送った。

やはり人間と言う生き物は悪が無ければ生きていく輝きが無い」

その所業を赦した時の奴の表情も見ものだったぞ、と彼女は笑っていた。

……俺はずっと、この御方の慈悲深い側面も見て来たつもりだった。

だがアンズ様の言う通り、この御方は仕事面はともかくその性格は邪悪そのものだった。

「もしお前が、我が子に宣言した通りこの世界を爆散させていたのなら

ら、来世は我が娘にでもしてやろうと思ったのだがな。

お前は人間だった頃の私に似ている。この世界における我が同位体かと思つたほどに」

「きよ、恐縮です」

クリステイーンは思つた以上に彼女に気に入られていた。

「お前たちも、見所はある。

その気があるのならついでに我が元に来ることを許そう」

「お断りだッ」

イリーナ殿が即座に啖呵を切つた。

「この世界に魔王軍を齎し、我らの平穩を乱した貴女に何故に下ると思ふのだ!!」

「くッ」

彼女の言葉に、昏い瞳の女神は思わず口元に手をやった。

「くふふふ、あはははははは!!」

そしてこらえ切れないと言つた風に、邪悪の女神は笑い声を上げた。

ただそれだけで周囲に不幸を呼び寄せるような、不吉な笑い声だつた。

「なあ、女騎士よ。——『悪』とはなんだ?」

唐突に笑いを収めた彼女が、イリーナ殿に問う。

「哲学ですか?」

邪悪を司る貴女が、それを問うのですか?」

「早く答えなさい」

「……一般的に、善なる行いに反することだ。

規範や秩序にそぐわぬ行為を言うのでしよう」

「実に模範解答だ。素晴らしい」

イリーナ殿は思わず不安を抱いて、周囲の面々に視線を向ける。

口を挟む度胸の無い面々も、似たような様子だ。

「では、邪悪を司るこの私が眞理を告げよう。

——『悪』とは人そのものなのだ」

邪悪の女神の答えとは、ある意味では単純な言葉だつた。

「それはあまりにも陳腐な答えなのでは？」

思わず、と言った風にソフィア殿が言葉を漏らした。

「そうではない。悪、とは人間が存在し、その価値観から生じるものだ。」

ヒトはその社会性から、それに迎合できない者を排除する生物だ。

故に、他ならぬ『私が人間出身の神なのはそのため』なのだ」

彼女は人間ゆえに悪であり、悪ゆえに人間の女神であるのだ。

だから自然界に悪は存在しない。そこに人間性は介在しない。

「ところで」

それを踏まえた上で、実に楽しそうに邪悪の御方は笑っていた。

「悪が人間性なら、秩序もまた人間性であるな。」

この世界の主神と言える光の神もまた、秩序を司っているそうだな」

俺は彼女が何が言いたいのか一瞬分からなかった。

「止める!!」

イリーナ殿が身震いして叫んだ。

まるでその先を聞きたくないと言っても言いたげに。

「光という自然現象に、人間性は存在しない。」

ただ眩しいだけの存在に、秩序に干渉する権限など無い。

——もう、分かるだろう？」

母性の籠った慈愛に満ちた言葉を、哀れな子供たちに掛ける。

この世界の、余りにも残酷な真実を。

「——この世界の神々は、創作物に過ぎないのだ」

この世界は、神々の卓上。

「ああ……」

がくツ、とイリーナ殿が膝を突いた。

俺も、リリウムも、ステラも、ソフィア殿も、クリステイーンも。

その現実を、すぐには受け入れられなかった。

「例えば騎士神の逸話など分かりやすい作り話だ。」

大多数が屈強な騎士の偶像が、少女であってなるものか」

「……なら、ならば!!」

この世界に齎されている神々の恩恵はどうなる!!

私たちはずっと、神々の恩恵を受けて生きて来たんだぞ!!」

イリーナ殿の叫びに、無情なる女神は彼女に歩み寄る。

そしてその懐に手を入れると、それを取り出した。

「それは……」

「私は一般的に邪悪と悪逆を司っているが、世界によって解釈の違いが生じ、別のものを司っていることになっている」

女神はイリーナ殿から引き抜いたそれと、別の手に現れたそれを比べるように彼女に示して置いた。

ここで、ネタばらし。

「ある世界では私は呪詛と復讐を司っているとして、これと同じ紋章が使われている」

優しげに、女神はイリーナ殿の肩を叩いた。

「だから私は、貴女の所業を赦しましょう」

彼女の目の前に置かれた紋章は、寸分変わらず同じだった。

「管理下って、そう言うことだったんですね」

全てを悟ったステラが諦念に満ちた溜息を吐いた。

初めから、そう、初めから——。

この世界は『かの御二柱によって運営されていた』のだ。

この世界に齎されていた神々の恩恵とは、かの御二柱の御力に過ぎなかったのだ。

だから魔王軍は別世界の侵略者ですらなかったのだ。

そもそも、この世界は彼女の所有物なのだから。

……全ては最初から徒労に過ぎないのだ。

「この世界の運営権を委任されたのは、お前たちが生まれるよりずっと前だ。

私たちにとっては数百年程度前の話だがな」

それはちやうど、対抗神の制度が出来た頃だろう。

その時文字通り、世界の法則が変わったのだ。



「ははは、なんだそれ。」

私は初めからあんたの神官だったのに、あんたを信仰してないって言われたのかよ!!」

クリステインが渴いた笑いを浮かべながらそう言った。

他にどんな表情を浮かべればいいかわからないようだった。

「委任、されたということは、この世界に居た元々の運営者は……?」

「これ以上傷つきたくないならやめた方がいいですよー」

ぼそつとアンズ様が声を漏らした。さすがにこれ以上は不憫だと思っただのかもしれない。

俺も先ほどから言葉が出ない状態が続いていた。

「私も、これ以上お前たちの尊厳を汚すつもりは無い。」

だがこれで、二代目よ。お前のお遊びは終わりだ」

呆然自失状態の俺たち全員を見渡して、邪悪の女神はそう言った。

「え、やーです」

だが、アンズ様は無邪気にそう答えた。

「二代目」

「そう、二代目。私はあの人の、『暴君』の二代目。」

ここでゲームを下りるって言うなら」

諫めるような言葉に対し、アンズ様は笑みを浮かべて続けた。

「――全部全部、台無しにしてやります」

最悪な脅し文句だった。

その所業、まさしく暴君の如し。

「見極めは終了している。」

もはや逆転の目は無い」

『ルールに沿えば』、ね」

ここで初めて。

邪悪の女神は心底嫌そうな表情をした。

「私はこの卓上に遊びに来た最後の客ですよ。」

運営なら最後の最後まで、持て成してくださいよ」

「……ならば、最後まで足掻いて見せろ」

闇を纏い風にさらされるようにこの世界の天上へおわす御方は消

え去った。

「それじゃあ、気を取り直していきましょう!!」

「この雰囲気をよく言えますね」

俺は掠れた声でそう言った。

今この時ぐらい、アンズ様も空気を読んでほしかった。

「でも時間は刻一刻と過ぎていきますよ。」

こうしてボーっとしていている時間なんてありませんけど、いいんですか?」

そう言われても、俺以外の全員が言葉を失っているのだ。

「分かってはいたけど、あの御方があれほどの神だったとはね」

リリウムもショックを受けて部屋の隅に座り込んでいた。

「まあ、一つの世界は樹木に例えられるんですね。この世界にも世界樹とかありますし。」

その樹木がある庭を管理するアパートの住人をあなた達の信じていた神々とするなら、リユーちゃんは領主とかそういうレベルですか?」

アパートの管理人や町長を通り越して、領主。

かの御二柱は我々の想像を遥かに超えた次元の存在らしかった。

「まあ、その例えで言うなら私は王女様ですけどね!!」

「それを言うなら王妃では?」

「女の子はいつでもプリンセスに憧れるから良いんです!!」

リリウムにあんな試練を課した当人がこんな物言いであった。

「だからもつとちやほやしてもいいんですよ? よ?」

でも確かにリエーサセツタ様が気に掛けるだけの御方ではあるよ  
うだった。

尤も、単純に偉いとかそういう話ではなさそうだったが。

「それより、今更私の試練から降りるなんて許しませんよ」

「……その試練の果てに、意味はあるのですか?」

イリーナ殿がすぎるように顔を上げた。

「この世界に、私たちが信じていたモノ全てに価値が無いと教えられ

てなお……」

「でもあなた達は生きていないじゃないですか」

アンズ様は何を言っているんだとでも言いたげに、そう言った。  
「生きているんですから、最期まで生き足掻きなさい。」

それが私の知る人間なのですよ」

実に女神らしい、アンズ様の叱咤だった。

とても正しく、こちらの事情を全く考慮していないが。

「……わかりました。」

俺をアリサ殿のところへ送ってください」

俺の言葉に、他の面々が力なく顔を上げる。

「この世界の何もかもが嘘だとしても、俺は生きています。」

ここまで来たら意地です。今更諦めるなんてできない」

俺は理解した。

この戦いは初めから、世界の命運を掛けた戦いなどではなかった。

これはゲーム。

神々の卓上で行われる、お遊戯に過ぎなかった。

あの御二柱はこの世界のルールブックそのもので、魔王様がゲーム  
マスターだというのなら。

ここまでコケにされ、簡単に勝てると思われるのは癪に障る。

「では、彼女と共に最後の勝ち筋を探して見せなさい」

アンズ様はとても無邪気に笑って、頷いた。

その言葉と共に、俺の意識は薄れていく。

さあ、行こうか。詰みの盤面をひっくり返し、あの御二柱に目に物  
を見せてやるのだ!!

キャラクターシート

名前：クリステイーン・オルデン

種族：人間      性別：女性      年齢：19歳

出身：

クラス：プリースト

信仰・対抗：光の神・魔術神

経歴

- ・スラム育ちである。
- ・あなたは天才である。スキル【天才】を獲得。
- ・自己中心的である。

## 幕間のお話

### “暴君”の神話

「まったく、あの女神には困らされる」

儂い抵抗を行っていている人間たちを失意のどん底に突き落とした邪悪の女神リエーサセツタは卓上世界から上位の次元へと帰還した。

「……我が盟友よ、何の用だ」

そこは、風光明媚な庭園だった。

人間が想像する楽園のように美しく、光に溢れている。

尤も、これは“私達”で言うところのVR空間のようなものだった。

そもそも女神リエーサセツタは物理的な肉体を超越した、概念が意識を持った法則そのもの。

地上やこの空間での彼女は、意思疎通を円滑に行うためのインターフェイス——化身アバターに過ぎないのだ。

木々が植えられ、花々が咲き乱れる花壇の中心、そこにもう一柱の化身アバターが待ち受けていた。

文明の女神メアリースだった。

彼女は白亜のテーブルを前に白亜の椅子に腰かけ、優雅にハーブティーを嗜んでいた。

「先の件、私はまだ納得していないんだけど」

女神リエーサセツタが対面に座ると、彼女は口を開いた。

「10兆の件か」

「そう、アレの裁可は私の領分でしよう？」

私の物を横取りした相手を、私の作った地獄へ叩き落す。それは私の仕事だわ。

私が嫌いなものは知ってるでしょ、そう横領よ」

文明の女神はティーカップを持ったまま腕を組んで不機嫌を露わにした。

「どうせ与える物を別の誰かがやっただけでしょう。

実質的な損失は差し引きゼロでしょうに。

借金もどうせ、地獄に墜とすのだから回収するつもりも無かったくせに」

しかしこの邪悪の女神は淡々と反論を述べた。

この手の論議は飽きるほど繰り返した。

二柱の統治はトライ&エラーであり、ケースバイケース。

その都度、両者の意思のすり合わせが行われるのは必然であった。

「額の問題じゃないわ。」

これは私のメンツの問題よ」

「それは誰に誇示するメンツですか？

私達の評判なんてとつくに地の底じゃないですか」

あなたらしくもない、と冷静に切り返すリエーサセツタに、メアリースは押し黙る。

「貴女は大多数の人間を救い、私はそこから取り零れた人間を救う。

アレは明らかに私の管轄でしょう？」

「理屈の上ではそうだけど」

理屈ではなく、感情で納得していない。

だから彼女はわざわざ一度終わった話を蒸し返しているのだ。

「貴女が納得していないのは、あの娘が原因でしょう？」

「……………」

無言は肯定だった。

彼女とあの奔放な天秤の女神とは一言では言い表せない因縁があった。

「私が勢力の拡大に余念が無い理由は分かっているわよね」

彼女の言葉に、リエーサセツタは「またか」と溜息を吐いた。

「その姿勢は感心しますが、いい加減無駄だと理解したらどうですか？」

「悪いけど、私は“人間”の女神よ。」

「この目的を失った瞬間が、私の“死”よ」

そうですか、とりエーサセツタは何億回も繰り返したやり取りをいつも通り締めくくった。

「そう、——私は『暴君』を討つ」

それは野望だった。

それは挑戦だった。

それは嫉妬だった。

それは、不可能だった。

この文明の女神が『暴君』に挑むこと354回。

その度に彼女の統治する世界に甚大な被害が生じ、その度に再スタートを余儀なくされている。

勝率はゼロ。どんなに運命を弄っても、無い物は増やせない。

『暴君』とは神々の中でもそれだけ特別な存在だった。

それでもなお挑むのは、彼女が『人間』ゆえの愚かさだった。

自らを至高と定義する文明の女神は、自分より『上』が居るのが心底許せない。

故に下克上を狙い、策謀を巡らし、戦略を練り、他の神々にもとばかりをまき散らしながら勝利を目指す。

そして万が一にも無い勝利を得たところで、待っているのは神々の領域の消滅という結果だけだと推測されている。

神域屈指のトラブルメーカーが、このメアリースという女神だった。

「いい加減に分かりなさいよ。

そんなんだから、あの娘にちよつかい出されるのよ」

「……………」

例えば絶対に負けるはずが無いと分かっている相手とは言え、飽きることなく殺意を向けられれば不愉快にも感じるだろう。

『暴君』当人には毛ほども相手にされていないが、その伴侶は違った。

彼女は自らの権能が許す範囲で、この二柱を邪魔し続けている。

彼女は二人の立場を『領主』と例えたが、言うなれば神々の領域は数多の領主による群雄割拠の状態にある。

にもかかわらず、この二柱の領域に自ら足を突っ込む神は居ない。なぜなら、誰もこの群雄割拠を放置している。『暴君』に関わりたくないからだ。

『暴君』の逸話は、神々の間においても『神話』だった。

「私が、自らを邪悪を司るモノだと認識した時、我々の神域は自然神が牛耳っていました」

女神リエーサセツタはその当時の頃を思い起こす。

神々の間でも、気の遠くなるような昔の話だ。

「この次元、私達が座す神々の席はあらかじめ決まっていた。

火を司るなら火の神の席、土を司るなら土の神の席。

そしていつしか、神々は意思を持つようになった。最初に意思に目覚めたのは自然神たちだった」

だから彼女が神と自覚し、意思に目覚めた時、古参の神々がこの『森』と言うべき無数の世界の束を牛耳っていた。

だが、いつまで経つても、神々の王たる『全知全能』の席に座する神格は目覚めなかった。

神々はいったいどんな存在がその席に座するのか、戦々恐々と永い時間を待っていた。

そして、それは唐突に訪れた。

邪悪の女神リエーサセツタが目覚め、それほど時が経たぬ頃だった。

——『暴君』が、突如として君臨したのだった。

彼は、人間だった。

その姿、その存在が見知った存在だったことに、リエーサセツタはある意味で納得した。

全知全能などと言う夢想は、人間が形作った物である。

故にその席に座る神格は、人間であるべきだったのだろう。

「だからあの御方がその席に座った時の自然神どもの怒りようは滑稽



でしたよ」

自然そのものである自然神たちにとって、人間なんて生き物は数多の羽虫の一種類に過ぎない。

だからそんな虫けらが自分たちの上に居ることを、彼らは認められなかった。

そうして、「暴君」をその座から引きずり降ろそうと数多の神々が戦いを挑んだ。

結果としてそれは、戦いにすらならなかった訳だが。

「暴君」は手にした権能を試すかのように、自らに挑む神々を消し飛ばした。

神域の神々に死の概念は無いので、人格の喪失が事実上の「死」である。

自然神達は人格を消滅させられ、数十億年単位で休眠を余儀なくされたのだ。

それ以降、「暴君」は自分の意思でその力を振るったことは無いという。

「貴女に分かるかしら。」

神域に至ったと思ったらあの御方が自分を高みから見下ろしているという恐ろしさを」

女神メアリースの表情には、恐怖が張り付いている。

かの「暴君」の逸話は人間だった頃から枚挙にいとまがない。

そして彼女が人間だった頃、比較的「暴君」に近い位置に居た。

「暴君」の最初の弟子にして今も彼が侍ることを許している観測の女神とは、この女神メアリースの魔術の師なのである。

つまり彼女は「暴君」の孫弟子に当たるちなみに文明の女神にとって、天秤の女神は叔母弟子に当たる。

天秤の女神を含めたこの五柱は、奇妙なことに同じ世界で同じ時代を過ごしたという繋がりがあるのであった簡易人物相関図：師弟関係で「天秤」↑「暴君」↓「観測」↓「文明」となる。「邪悪」は完全に他人。

「……あなた達の師弟関係は愉快でしたね」

くすくす、と邪悪を司るにふさわしい笑みを浮かべる女神リエーサセツタ。

「貴女の師は……あの邪龍だっただけ？」

恨めしそうに彼女を見やる女神メアリースは、遙か昔の記憶を掘り起こした。

「ええ、私が初めて召喚した相手でした」

そして愛した相手だった。

彼女にとつて、自分の従者にして、父親代わりにして、師でもあり、導き手であった。

邪悪の女神は懐古する。

己の原点を。産まれた時から悪と定められた人生を。

§ § §

今更ながら、リエーサセツタと言う名前は彼女の本名だった。

大分訛っているが、彼女は正しい名前を公言出来るほどの魔術の使い手だった。

彼女の生まれは平凡だった。

ただ、両親は魔法使いではあったが、それだけであつた。

そのまま生きていれば、彼女は自分が女神と気づかず、一生を終えられただろう。

だが彼女を憎悪に駆り立てた事件が起こった。

彼女の生まれた町が、襲われたのである。

皆殺しだった。彼女だけが生き残った。

いや、女神の同位体にして、その神格を目覚めさせる人格となった彼女の才能が死を許さなかった。

彼女は産まれて初めて、命の危機に召喚魔術を試みた。

そうして召喚されたのが、伝承ではとつくに討伐されたはずの邪龍だった。

彼女は死さえ超越して、誰かを召喚できた。後になって思い返せ

ば、この時から彼女は女神の権能の片鱗を扱えたのだろう。

邪龍は、彼女を蹂躪しようとした全てを殺し尽くした。

そうして生き残った彼女に、悪の道を教えた。

それから死ぬまですっと、彼女は復讐に生きた。

彼女の町を襲ったのは、その世界で最大の宗教の騎士たちだった。

彼女はいったい如何なる理由で住んでいた町ごと滅ぼされたのか、最後まで知ることはなかった。

だが唯一神を崇める彼らの横暴さと悪辣さはもはや周知の事実で、その教えにある慈愛や友愛など欠片も存在しなかった。

どうせ適当な理由で異端にでも認定されたのだろう。

いずれにせよ、理由なんてどうでも良かったのだ。

やられたから、気が済むまでやり返す。

故に、彼女の生涯は悪逆に満ちていた。

唯一神を崇めている、というだけで幾つもの町を悪魔の軍勢に襲わせ、邪悪の限りを尽くした。

彼女の召喚する悪魔たちは彼女に忠実だった。

数千の悪魔を役するその姿は、人類の敵そのものだった。

いつしか彼女は、“生きた災厄”として認定されるまでになった。

そんな頃だったか、人間だった頃のメアリスと出会ったのは。

最初は二人とも、お互いを利用するつもりだった。

だが話してみると、お互いに自分に無いものを持っていた。そして

気が合った。

二人でなら何でもできたし、誰も止められなかった。そう思っていた。

二人は最期までやりたい放題をして、ついには古の魔王を召喚して

世界を混乱に陥れた。

悪逆非道の道程で数多の偉業を成し遂げ、二人は死後に神域へと足を踏み入れることとなった。

神の御座にて自らが邪悪を司るモノだと気づいた彼女は、自分に跪

いている無数の悪魔たちを見下ろしていた。

彼らは人間だった頃、彼女が使役した悪魔たちだった。

彼らは気づいていたのだ。自分が何に使役されていたのかを。

そして彼女は天上の御座から知った。

——自分を不幸に陥れた連中が信じる神など、どこにも居ないということを。

落胆と共に、自らの権能を用いて片手間に生まれ育った世界を滅ぼし、彼女は自らの神としての役割を受け入れるのだった。

「あの頃は、楽しかったなあ」

女神メアリースは、当時を青春でも思い出すかのように笑みを浮かべてた。

「あの頃はまだまだ知らないことが沢山あって、やりたいことも沢山あったわ。

でも今も今で悪くない。新しい目標も出来たしね」

「その敷居が高すぎることを自覚してくださいよ」

何だかんだで、二柱は今も一緒に居る。

不思議なことに彼女たちは一度も喧嘩したことは無かった。

これから永遠に近い年月も共に苦楽を共にするのだ。

——なぜなら、二人は掛け替えのない親友なのだから。

そして、今。二柱の友情が試される事態が巻き起こった。

風光明媚な楽園が、突如として暗雲に覆われる。

大地が割れ、風が吹き荒れる。

二柱は、げツ、と表情を顰めた。

全ては遅かった。

「やあ」

それは、小さな扉を大型車両が突き破ってくるような滅茶苦茶な破壊そのものだった。

空間が膨張し、引き裂かれ、楽園の大地は残らず捲れ上がる。

この終末のような光景は、ただ一步、こちらに踏み入っただけに過ぎない。

「あいつが、迷惑かけてるみたいだね」  
存在の規模が、格が違いすぎる。

二柱は洪水の中を立つことを強いらられるようなプレッシャーの中に居た。

「別に僕に気を遣わなくてもいいんだよ。

ムカついたなら、引つ叩いてやればいい」

その重圧を発しているのは、小さな、背の低い少年だった。  
見た目だけなら、幼い天秤の女神と吊り合う年齢に見えた。

だが両者を並べて、お似合いのカップルですね、と微笑まし気に見える存在は果たして居るのだろうか。

「暴君……ッ」

二柱の思考は、なぜ、の一言だった。

自分の領域に引きこもることしかしない彼が、観測の女神を伴って顕現したのである。

「師匠、やはり私を遣わせれば良かったのでは？」

彼に待る、観測の女神が気を遣ったのだが。

「僕に意見するの？」

「いッ、いえ」

その視線が、彼女に突き刺さる。

彼女の存在そのものにさえダメージが生じるような、反論を封じる一瞥だった。

「孫弟子、お前だ。お前に用件があった」

あった。そう、過去形だった。

「この世界だよ」

「暴君」が指差す先に、無が存在していた。

かつて何か存在していた名残すらも無く、そこには何もなかった。  
それこそ、こうして指摘されなければ、そこに何かあったのかも気づけないほどに。

「えッ」

女神メアリースは慌ててログを取り寄せた。

不自然な数字の動きがあった。高度な文明が存在していたその数値が、全てゼロになっていた。

「この連中、僕の存在に気づいたんだ」

それだけで、この小さな少年に見えるだけの暴虐の化身がなぜ怒っているのを察した。

「そして崇めた。後は分かるな？」

「お許しください、監督不行き届きでした」

この期に及んでプライドが邪魔して黙っている盟友の前に出で、女神リエーサセツタが謝罪をした。

「ダメだ、責任を取れ」

冷徹な視線が、二柱を見下ろす。

「まあまあ、師匠。この程度で目くじらを立てても——」

場を取り成そうとした観測の女神が余計な口を開いた直後、彼女は数百年ほど口を開けなくなった。

「……」

観測の女神は、格の上ではこの二柱と同格だった。

だがこの子供の癩癩の前には何もかもが無意味だった。

「僕は人間と言う生き物が嫌いだ。

前にも言った気がするけど、人間だった頃僕を崇めた連中が実に醜悪極まりない連中だったんだ。

僕の名前で好き勝手しやがってさ。僕はこんな存在になったことを今まで一度も嬉しいとは思わなかったけど、その事実をアカシックレコードから消し去れたことが唯一喜ばしい出来事だった」

それが事実か、確認する術は無い。

なぜなら目の前の存在は、〃全知全能〃なのだから。

全知全能と言う人間の夢が幼稚なら、それを体現する存在もまた暴力を振るう理由が幼稚だった。

だが彼にとって、ただそれだけが我慢ならなかった。

「だから、僕を崇める連中は例外なく消し去ると決めた。

そしてお前はそれを許したな」

文明の女神が挑んでも歯牙にも掛けないのに、気に入らないことが起こったら即座に罰する。

理不尽だった。

暴虐であった。

まさに、暴君であった。

「お前しばらく、眠ってるよ」

『暴君』が、片手を振り上げた。

神を数十億年単位で行動不能にさせる一撃が、彼女の管理下の世界を巻き添えにして振り下ろされる——!!

「じーッ」

寸前で、彼は伴侶の視線に気づいた。

「……なんだよ」

不機嫌そうに、彼は伴侶に目を向けた。

助かった、と今まさに暴虐に晒されようとした二柱は思った。

「いいえー、あなたが不必要に酷いことをするところを見ていようかなーって思っただけです」

この世で、この神域で、あらゆる神々の中で唯一、この『暴君』の暴虐を止めることができる女神がこの現場に間に合った。

「どうしたんです、あなたが嫌いな人間らしいところを見せてくださいよ。」

ほら、どうぞ。みっともない八つ当たりをしてみてください」

「……はあ、僕が悪かったよ」

彼はバツが悪そうにそう言つて、踵を返した。

黙らされて悶絶している観測の女神を引きずり、自分の領域へと帰って行った。

「……盟友よ、一定以上の文明レベルに達した世界は間引く手はずだったのでは？」

女神リエーサセツタの咎めるような視線が、盟友に突き刺さる。

「だ、だって、すごく生産効率が美しい世界に育ったんだもん!!」

「それでどれだけ損失を被るところだったと思っているんですか!!」  
「もうちよつと眺めたら滅ぼすつもりだったわよ!!」

言い訳ばかりをする女神メアリースに、女神リエーサセツタはカチンと来た。

「まあまあ二人とも」

言い争いを始める二柱を、女神アンズライールは間に入って諫めるのだった。

こうして、突然巻き起こった数多の終末は未然に防がれたのだった。



たった一つの冴えたやり方

「おい、とりあえず酒と出せるメニュー全部出してくれ」

王都の酒場はがらんとしていた。

客はというと、オレたちぐらい。

そうして出て来た料理は、乾いた肉詰めと野菜の酢漬け、そして蒸かしたジャガイモくらいだった。

「王都の酒場で出てくるメシがこれか。

いよいよ、この世界も終わりに近づいているってわけだ」

オレは酒を呷りながら、この国の現状を推察する。

これで六度目だ。慣れたもんだぜ。

「どうしたよ、二人とも。

カネなんて持ってもしやーねえし、さっさと使っちゃまおうぜ」

オレと同じ席には、レナスティとイリーナも居る。

二人はまださっきの女神様の御言葉を引きずっているようだった。

「いつまで落ち込んでんだよお前ら」

オレはフォークで肉詰めを齧りながら二人に言った。

「……お前はいつも切り替えが早すぎる。

この世界に神は居ないと聞いて、何とも思わないのか」

じろり、と恨めし気にこちらを睨むイリーナ。

「何言ってるんだよ、神ならいるじゃねえか。最初から。

ごく単純に、その事実を知らなかったただけだろ」

オレは鼻で笑った。くだらない感傷だ。

「笑っちゃもうようなことじゃねえか。

オレははなつからこの世界はゴミだと思ってた。

それをこの世界を管理する御方が事実だと仰った。

むしろ良かっただろ、こんな世界に守ろうと思えるものなんて無かったんだ」

「クリス、それは言い過ぎよ」

ちまちまと酢漬けを食べているレナスティがボソツと言った。

「お前は嬉しそうだな。」

仮にも光の神の神官だったくせに。

邪悪の女神の元に行くのがそんなに誇らしいか」

「だってこの世界がゴミだって証明されたんだぜ。」

私達が何をしようとも、何もかもが上手くいかなかったのも、全部が全部このクソみてえな世界の所為だ。

それが今度こそ跡形も無く消えるんだ。私の手でやれなかったことが悔しいぐらいだぜ!!」

「キ、サ、マツ!!」

「なんだ、もう一回殺し合うかい?」

殺気をむき出しにするイリーナと、テーブル越しに顔を突き合わせオレは煽り続けた。

「あの女神様がどうやってオレらを生き返らせたと思う?」

たぶん別の誰かが変わりに死んでくれたからだろうぜ。

この世界はそういう辻褃合わせで出来ている」

世界の仕組みは複雑で、難解にできているものだと思っていた。

だが、所詮は足し引きの問題に過ぎなかったんだ。

素晴らしいじゃないか!! 所詮は程度の低いオモチャだったわけだ!!

「あーあ、最初から御二柱がこの世界で信仰されてればよかったのに。」

そうでなきゃ、居もしない連中を崇めることもなかったのによ」

無駄な時間を過ごしたもんだぜ、とオレは本音を漏らした。

この世界のどいつもこいつも馬鹿ばかりだ。オレがスラムに居た時からずっと、あの坊主どもは石ころをありがたがっていたわけだ。

イリーナは拳を握り締めたまま、だけどすぐに力無く椅子に腰を下ろした。

「……お前などに、親しい誰かを守りたいという気持ちなど分かるわけなどなかったか」

「今更でしょ、そんなこと」

失望を滲ませたままの彼女に、レナスティが言った。

「こうして、ゆっくりみんなで食事を取るなんていつ以来だったかし

ら」

そしてそんなことを言うような空気でもないのに、こいつは気だるげにそう呟く。

「アリサが居ないぜ」

「あの子は一人が好きだったでしょ」

その言葉に、オレは思わず笑ってしまった。

「何がおかしいの」

「お前、よくそれであいつの仲間面出来てたな」

なんて馬鹿馬鹿しい。

この世は滅ぶべくして滅ぶんだ。女神様や、魔王様の所為でもなく。

そんな事実が最高に嬉しい。

「それで、勝算はあるのかよ」

オレは酒を注文し終わると、二人に尋ねた。

「まあ尤も、これ以上やる気が起きるならな」

「……お前はどうするつもりだ」

「最後のバカ騒ぎだ。内容によっちゃ付き合ってもいい」

「もうあなたにとっては何の意味の無い行動になると思うけど」

イリーナが思案するように黙り、レナスティが代わりにオレに問う。

「なあ、オレたち四人はこうなっちまう前は冒険者をしてたよな。

だが、冒険者なんてのは盗賊よりマシ程度の荒くれ者。

その違いは、その差はなんだ？」

オレは二人に問いかけた。

イリーナは宿屋の娘、レナスティはパン屋の家出娘、オレはスラム産まれで、アリサは落ちこぼれの学徒だった。

そんなオレたちが、なぜ冒険者をしていたのか？

「冒険者の仕事なんて、雑用か盗掘なもんだ。

だが上手いことすれば名を上げられる。

——そう、夢があったんだよ」

例えば太古のドラゴンが蘇りそれを討伐したり、封印された大悪魔

を倒したり。

遺跡からとんでもないお宝を見つけたりできれば、産まれなんて関係無く羨ましがられるわけだ。

「お前らのことは仕事仲間としては認めてたぜ。

くだらねえことで笑い合ったり、バカ騒ぎしたりな、悪くはなかった。

……ああ、お前らとつるものは楽しかったんだよ」

本当なら適当なところで切り捨てるつもりだった。

いい感じのお宝を手に入れた時、難しい討伐依頼をこなした時。

こいつらを踏み台にすることなんて、いつだってできた。

だが気づいたら、最低ランクの冒険者の頃からいつも同じメンツだった。

「オレは誰も信じないし、信用しない。

だがお前らの仕事の腕は頼りになった。それで、最後の仕事はどうするよ」

オレはこいつらのことを仲間だなんて慣れ合いをするつもりはない。

仕事の報酬はいつだって等分だった。

「最後に分け合う報酬は、オレらを舐めてる女神様の悔し顔でどうだ？」

オレは、誰かに与えられる御身分なんてまっぴらだ。

「あの女神様に、配下にしてやる、じゃなくて、配下にさせてくださいって言わせてやるのよ」

オレは、誰にも依存なんてしない。

オレが欲しい物は俺が自分で手にする。

オレの意思は最後まで、オレのものなのだ。

「オレはいつだって、自分の力で道を切り開いてきた。私はその才能が有った。

そしてポケットに一枚金貨が残ってた。もう一度博打で遊ぶくらい許されるだろ」

「きつとあなたはその才覚なんて無くても、あの邪悪の女神様から認

められていたわよ」

どこか呆れたようにレナスティはそう言った。

「……私は考えたんだ」

ずっと強張ったままの表情のイリーナが言った。

「世界を救いたいと考えた。でもそれは間違いだった。

私達が世界を救うことなどできない。私達には世界を救うことなど、傲慢だった」

そう答えるイリーナは、だが少しも諦めるなんて顔には書いていなかった。

「どうする、私達のブレイン」

いつだって物事の道筋を考えるのはイリーナだった。

女神様は、少しばかり目が無いらしい。こいつが、見所があるなんて程度ではないのだから。

「……………」  
そして彼女は答えた。実にシンプルな、盤面をひっくり返す逆転の一手を。

「……そりやあまあ、可能か？」

可能か不可能かで言うなら、言葉の上なら可能だった。

「理屈の上ではね。でも実質不可能じゃない」

レナスティの言葉は尤もだった。

イリーナの策は理想論だった。綺麗ごとをそのまま実現するような方法だった。

だが実現するなら、『この世界の人間すべてを丸ごと死なせずに済むかもしれない』極論染みた方法でもあった。

だからこそ、不可能に近いのだ。

「出来るさ、私達なら」

しかし、イリーナは不敵に笑った。

「レナの言っていたことが本当なら、あるモノが必要となる」

「私の？」

「ああ、そのためには魔王城にもう一度乗り込む必要がある」  
オレはレナスティと顔を見合わせた。

「アリサが目覚めた後、魔王城に乗り込む。

そして例のモノを奪い取り、各国で仕込みを行う」

言葉にすればシンプルだ。

オレたちはともすれば、一度も戦わず全てを終えられる。

まさに横紙破り和マンチの言ったもん勝ち。

詰みの盤面を、盤面ごとひっくり返して滅茶苦茶にしてしまう、あの意味最悪のやり口だった。

「お前は、どれだけはその賭けに乗ると思う？」

「乗るさ。誰もが。なぜなら、誰しもが死に耐えられるわけじゃない」

イリーナは確信を得ているようだった。

オレも、レナスティも、その意見には賛成だった。

「その後、ダメ押しに私たちが各国の首脳陣に働きかければ終わりだ」

イリーナによる、世界を救う浅知恵だった。

いや、逆だ。世界以外を救うルール違反すれすれの方法だった。

「どうです、女神様。サイコロを投げるのにふさわしい賭けでしょう？」

オレたちの席にいつの間にか座っていた女神様に、イリーナが目を向けた。

「いやあ、まさかそう来るとは……」

これには天秤の女神も、唸っていた。

「そうなっちゃうと、私があなた達に与える報酬も必要なくなりませんか？」

「女神様」

イリーナは居住まいを正してこう言った。

「それでよかったです。初めから、そうするべきでした。

私達に、貴女様が齎す救いは分不相応でした」

「それは違うでしょう」

指でサイコロを弄る女神は、小さく首を振った。

「あなただがこの手段を取ることが出来たのは、あなただがこの瞬間まで生き足掻いた結果です。

そうでなければ、ここまで必要な情報は出揃わなかった」

それは一種の慰めに近かった。

オレたちを散々振り回した女神が、慈愛の笑みを浮かべていた。「私としては、それを実行させること自体がリユーちゃんへの不義理みたいなものなんですよねー。」

まあ結果が出て、何かしら不都合が有ったらその時は私達がその権能を以て修正しましょうか」

「そのサイコロを振らないんですか？」

「まさか、私にサイコロを振らせない方法を選んだのは貴女でしょう？」

イリーナの挑発染みた言葉に、くすり、と天秤の女神は笑った。

「でもまだ、私は何度もサイコロを振らないといけないんですよ。」

時間を超越しているというのは、少々ややこしいものでして」

スツと彼女は神賽をテーブルの中心に置いた。

「あとは我が使徒の働き次第と言ったところでしょうね」

オレたちは、テーブルの上に置かれた賽の目を覗き込む。

サイコロは、六の目を示していた。

## 第四章 魔法の到達者 人間道

さて、俺もこの逆行には慣れたものだと思ったが、今回ばかりは少し驚いた。

「アイオン、今日はいよいよ国立魔法学院への入学の日ですね」  
身支度を整えていた俺に、今生の母親が言った。

そう、此度の俺は名門貴族の子息だった。

気が付けば彼らの息子としての人生が予習済みであり、明日にはこの国の最高学府へと入学が決まっていた。

ここは魔法帝国。

魔法使いの育成に力を入れたこの世界の先進国にして軍事国家。

魔王が現れなければ、周辺諸国とバチバチに睨み合っていた侵略国家でもある。

そして、俺が歩んだと思われる人生から記憶を掘り返せば、主席での入学が決まっていたはずだった。

俺はこのような立場を得て、少し困惑したが納得もした。

魔王軍時代に、アリサ殿の身辺情報は調査済みだった。

魔法帝国出身であり、国立魔法学院を首席で卒業したエリート。

だが今回、主席で入学したのは俺だった。

勿論、主席と言う立場が永遠では無いことぐらいは俺も知っている。

彼女は努力型の魔法使いであり、才能に物を言わせるタイプでは無いのを知っている。

努力だけで、あの才能の塊みたいな三人と共に魔王討伐を成し遂げた。

だから俺はちゃんと彼女と話すのが楽しみではあった。

俺には才能なんて無かったし、何十年分を努力して姫様に追いつけるのがやっとだった。



だからアリサ殿には心の奥底では応援をしていた。  
それが俺の身勝手な幻想だと知ったのは、すぐの事だった。

§ § §

魔法学院はこの国の最高学府だけあって、まるで城のような立派な建物であった。

警備も厳重であり、国がいかにかこの学校に力を入れているのかわかる。

入学初日、学帽とローブを来た大勢の魔法使いの卵が、城砦を思わせる城門を通り中へと歩いていく。

その多くが自分たちの新しい生活に期待と不安が入りみだり、希望を抱いていた。

私は新入学生代表として、全校生徒の前で挨拶を行った。

こう言つてはなんだが、將軍職を経験しておいてよかった。

大勢の前で話すことなど、アランの人生にはなかったからだ。

俺は生徒たちへの挨拶をしながら、壇上からアリサ殿を探した。

……いた。

彼女も入学していた。

学帽を被り、やや大きめのローブを纏つて講堂の端でこちらを見ていた。

——まるで、『自分が取り返しをつかないことをしてしまったことに気づいた』かのような、目を見開いた表情で。

俺と彼女とが目が合うと、アリサ殿は露骨に視線を逸らした。

俺は一瞬、言葉に詰まった。

ほんの少し、講堂がざわつくが俺は気にせず挨拶を続けた。

俺の挨拶が終わり、俺は席に戻った。

それにしても、校長先生の話が長いというのはどの世界でも同じようだった。

俺がこの王立魔法学院に入学してすぐに感じたことは一つ。

「……国立の教育機関がこの程度、か」

俺はダークエルフだった時に受けた教育がいかに高度で洗練されたものであるのか理解してしまった。

教育者は一般的に聖職者と表現される。

人を導き教える職業を神官などを聖職者と称されるが、教員が同じように呼ばれるのはその世界の文化的な要素に過ぎない。

だが、文明の女神の統治下にある学校の教師は、一人残らず聖職者——神官だった。

文明とは教育があつてこそ。

故に、かの女神は教育者と言う職業に厳格な制限を設けているのだ。

俺が聞いたところ、ダークエルフの頃に話を聞いた先生によると、神官の中から十分な経験と実績がある人間を厳選し、その人格も考慮される。

文字通り、教員は神に仕える神聖な職業だったのだ。

だから俺がかつて通っていた学校では、学校の歴史という授業でイジメや教員によるイジメの見て見ぬ振り、パワハラやセクハラが存在していたと習ったことが有る。

そう、文明の女神の管理下において、それらはとつくに撲滅していたのである。

だからそれを目の前で見てしまうと、思わず嫌悪感に顔を顰めた。

「お前さあ、あまり調子に乗るなよ」

「前々から気に入らなかつたんだよなお前」

アリサ殿が、校内の人気の無い場所で複数人に絡まれていた。

「す、すみません」

そこには、魔王軍に毅然と立ち向かい、その強大な魔法でその軍勢を薙ぎ払った勇者の一人とはとても思えない弱々しい少女がいた。

だが、それも仕方がないだろう。

彼女は、あの四人の中で一番若い。

今の彼女は、12才の少女に過ぎないのだ。

「お前さ、入学式の時にアイオンさんを睨んでただろ？」

「庶民の分際で、対抗意識でも出ちゃったわけ？ あはは、ありえないんだけど!!」

そして情けないことに、彼女に絡んでいるのは俺と同じ上級学部の連中だった。

この学校は露骨に格差がある。

貴族や名門の子息が通う上級学部と、一般人が通う通常学部だ。

勿論待遇は全然違う。上級学部にとって、通常学部は下僕扱いだ。所詮、上級学部と言っても貴族の子息による高級サロンに過ぎない。

彼らにとってこの学校とは人脈を築くための手段の一つでしかないのだ。

そして軍事国家であるこの国において、通常学部を卒業したところで待っているのは一兵卒として戦場に送り込まれるだけ。

強国だが、格差が激しい。

それがこの魔法帝国と言う国だった。

「お前たち、そんなところで何をしている」

俺は見てられずに、彼らに声を掛けた。

「あ、アイオンさん。聞いてくださいよ、こいつ生意気なんですよ」

「そうですよ、ちよつと魔法の成績が良いからって私ら見下しているです!!」

彼らは、恐らくありもしないことを俺に訴え始めた。

アリサ殿も俺の登場に怯え、震えていた。

「庶民に絡むのが、貴族の仕事か？」

だが俺は、彼らの思惑には乗らない。

「貴族とは上手く庶民を使う存在であって、痛めつける存在ではない。私は私に貢献してくれる庶民を手厚く遇する。」

そして、逆に言えば――」

俺は彼らを睨みつけた。

「下の者を叩くことでしか自尊心を保てない無能は、同じ貴族であろうと不必要なのだ」

魔法帝国は格差社会だが、実力主義だ。

下の者でも実力が有れば成り上がれる。

尤も、それは針に糸を通すような狭き門に過ぎないが。

「分かったのならお前たちも自己の研鑽に励むことだな」

俺の言葉に、アリサ殿に絡んでいた連中はそそくさと退散した。

彼らは上級学部と言っても、所詮は下級貴族。

俺の生まれという事になっていく名門貴族の家に比べれば、吹けば飛ぶような木っ端に過ぎなかった。

「大丈夫だったか？」

俺は馬鹿どもが退散したのを見届けると、アリサ殿に声を掛けた。

「あ、ありがとうございます……貴族様」

彼女は俺に助けられたという事が信じられないとでもいうような表情で俺を見ていたが、すぐに我に返って俺に礼を言った。

「気にすることは無い。

次から、お前が面倒に絡まれた時は私に言うといい。

お前のような人材を失うのは、帝国の損失だ」

お世辞では無かった。

彼女の協力無くしては、この帝国どころか世界が危ういのだ。

「ありがとうございます、本当に、ありがとうございます……」

「感謝は言葉でなく、国家に貢献という形で示せ」

「は、はい!!」

アリサ殿は何度も頭を下げて、俺に感謝してくれた。

まるで彼女の行く末を知っているから、俺の中にそれを利用したかのような罪悪感が芽生えた。

俺は、ちゃんとこの国の貴族らしく振舞えたであろうか。

いや、もしかしたら貴族としては、あの木っ端連中の方が正しいのかも知れない。

この国では、誰かを蹴落とさなければ這い上がれないのだから。

そして何より滑稽なのは、この最高学府の新生において最も高い地位に居る俺ですら、居ても居なくても良いという立場に過ぎないという事だった。

もしかしたら、俺はただ、彼女のような人間に感謝されただけ

だったのかもしれない。

俺は傲慢だな、と自分に芽生えた浅はかさと愚かしさを振り切つて次の授業へと向かった。

§ § §

王立魔法学院は俺にとって程度が低い教育機関だったが、それでも楽しいことは存在した。

俺は魔法についてダークエルフ時代からの経験でここの学生たちよりアドバンテージがあった。

そもそも魔法そのものさえ、俺が学んだものより劣っている。

俺が主席の地位を維持することはそれほど難しいことでは無かった。

そうになると、思いのほか周囲から頼られてしまう。

学園祭を始めとしたイベントや、行事などの仕切りを頼まれる。

上級学部の連中が全員あのアリサ殿に絡んでいたような奴らばかりではない。

俺なんかを慕ってくれる同級生や、学年が上がった時は後輩も出来た。

俺は、名門貴族を演じるほかなかった。

彼らに失望されるという恐怖は耐え難かったのだ。

なるほど、姫様が逃げ出したくもなる。むしろよくあれだけ耐えた物だと自分の立場になると感心してしまう。

自然と俺は生徒会役員になり、上級生になった頃にはいつの間にか周囲から担がれ、生徒会長になっていた。

それが、アリサ殿に関われないことだと分かっている、断れなかつた……。

俺は最初にアンズ様に逆行させて頂いた時に、あの砦を守った時から何も変わっていなかったのだ。

時折、俺は生徒たちに囲まれ歩いている最中に、アリサ殿が独りで見かけられる。

俺は彼女が成績の良い物静かな生徒、という評判しか聞かなかった。

まるで、彼女は息を殺して虫か何かのようにじっと学内に存在していた。

何か自主的に行動するわけでもなく、誰かと一緒に居ることも見たことが無い。

彼女を見守っているうちに、魔王軍の到来によって授業に軍事訓練が多くなった。

上級学部は軍学校で言うところの、士官候補の育成コースである。なので、俺は卒業が近くなると、戦いの雰囲気を感じるようになっていた。

「ふはははは!! 殺せ、殺せ魔獣ども!!」

そしてこの国の攻略担当は、魔獣将殿だった。

数多の魔獣を従え、魔法帝国の国土を蹂躪する。

国立魔法学院を卒業した俺たちは、即座に前線へと送られた。

それがどれだけこの国に逼迫した事態かを推し量るには十分であろう。

魔王軍によって、この国の部隊は連戦連敗。

単純な物量によって、優れたこの国の魔法使いたちが爪や牙で引き裂かれる。

俺は士官となり、かつての同級生たちを率いて戦った。

その中には、アリサ殿も居た。

俺は彼女を補佐官に任命し、帝国の為に戦った。

だが、それも終わりが近づいている。

「逃げろ、アリサ……」

度重なる連戦によって魔力切れの上疲労が溜まっている仲間たちが野営しているところを魔獣の奇襲を受けた。

魔獣たちは夜目が利き、何より人間よりずっと獰猛で強靱だ。

奇襲攻撃は彼らの十八番。警戒に立たせた仲間、音も無く食い殺

された。

「そんな、アイオン様……私一人で、逃げるなんて!!」

仲間の死を目にし、今まさに次々と殺されている状況で、敵の凶刃に掛って血を流し瀕死の俺が彼女に訴えた。

「よく聞くんだった!!」

俺は、俺に縫りついて涙を流す彼女に、言った。

「お前は、この世界の希望なんだ!!」

今は逃げる、逃げて逃げて、最後に勝つんだ!!」

俺は今、何を言っているのだろう。

大量に血を失って、自分が何を言っているのか自分で分からない。

「でも、でも!!」

「行くんだ、行くんだ!!」

俺は彼女を逃がそうと、必死で訴えかけた。

もう彼女の顔もぼやけて見えない。

「ご、ごめんなさい、みんな!! アイオンさんツ!!」

俺は彼女が離れていくのを感じ取り、地面に体を落とした。

「……ああ、この感覚、俺は本当に人間に戻れたのか」

ダークエルフの時はずっと勝ち戦ばかりだったからな。

この敗北感、無力さ、本当に、懐かしい……——。

……

……

……

「学園生活は楽しめましたか?」

目を覚ますと、孤児院のあの一室に戻っていた。

「アンズ様……申し訳ありません」

「何で謝るんです? 楽しかったでしょう?」

にこにここと笑みを浮かべているアンズ様が嫌味のような言葉を投げかける。

俺は罪悪感から顔を逸らした。

「楽しいわけがないでしょう。」

俺を慕って、俺を信じてくれた仲間たちは全員死んだ。

俺は間違ってた。俺は昔と何にも変わってない」

俺は、自分の愚かさが嫌になった。

何度繰り返し返しても、何度破滅を乗り越えても。

俺自身は、まったく成長していない。

「本当にそれは間違いでしょうか？」

「え？」

しかし、アンズ様は変わらぬ笑みで言う。

「ひとつ、助言をしましょう。」

今回ばかりは、あなたを送ったことは意味が有るのです」

「俺に、意味が？」

「ええ、それが何かを十分に考えながら、次へと行ってみましょー!!」

片腕を上げたアンズ様の掛け声と共に、俺は意識が急に沈んでいく。

俺が、行く意味、だつて？

俺は困惑しながら、次の世界へと逆行する。

次こそは、アリサ殿にあんな表情をさせない為に。



## 餓鬼道

「アイオン、今日はいよいよ国立魔法学院への入学の日ですね」

アイオンとなった俺は、前回のように身支度を整えていた。

学院の制服を纏い、俺はアンズ様に言われたことの意味を考えていた。

『俺を送ったこと自体に意味がある』おさらい・『』の内側の文章は真実である。とは何なのだろうか。

「今は考えても無意味なことか。

とりあえず、今回もアリサ殿に気に掛けつつ彼女の同行を探るとしよう」

俺は今度の方針を固めて、鏡の前でネクタイを締めた。

たった数年とは言え、一度経験した貴族というのは堅苦しい。

姫様が全てを投げ出そうとしたのも今なら理解できる。

やれ世間体だの、誇りだの、今生の両親は堅苦しい。

取り巻きも面倒な連中だったから、今度は家の利益以外で選ばねばなるまい。

俺は今生の両親に少しだけ謝りながら、実家を発った。

§ § §

魔法学院には通過儀礼のようなものがある。

個々の今の魔法力を図るための試験だ。

その内容とは、約三十メートルほど離れたところにある的に魔法を当てることだった。

正直、こんなことをしても全く当人の資質など図れない。

これがこの世界でも屈指の魔法学院のレベルだった。

はあ、ステータス画面で自分や他人の資質が一目瞭然だった頃に戻りたい。

あまりにも無駄が多くて、ため息が出るほどだ。そうしているうちに、俺の出番となった。

「ファイヤーボール!!」

手のひらサイズの火球が一直線に的に直撃する。

爆風がこちらまで木片を運んできた。

この程度、ダークエルフ時代に魔法の訓練もしたので造作も無かった。

だが、ここでは周囲からざわめきが立つほどに驚かれた。

今更ながらに思う。

魔王様、やっぱり最初から難易度調整ミスってますよ、と。

彼らが精強な魔王軍に全滅するのは当然すぎる結果なのだろう。

とは言え、今の俺が魔王様に具申することなどできないので、三年後の魔王軍侵略に合わせて彼らが使い物になるようにしなければならぬ。

俺の試験を終えて待機していると、アリサ殿がやってきた。

俺は前回、彼女の成績を見ている。

「マジックアロー!!」

結果は、魔法の矢が的のやや上を掠って行った。

前よりは多少よくなった、そのような感じだった。

これではいけない。

彼女にはもっと強くなって貰わねばならないのだ。

幸いにも、俺の脳内にはこの世界より進んだ魔法鍛錬の論理があった。

今回を含めてあと五度、前回から今回までの成長率では魔王に挑むなんて夢のまた夢だ。

とは言え、だ。

俺は四度目の世界で、凄まじい強さに成長した彼女を知っている。彼女がああなることは『確定事項なのだ』。

なぜならば、俺は居ても居なくても構わない立ち位置に存在している。

逆に言えば、俺が何をしようとも彼女の強さは揺るぎないと言え

る。

俺のやることは無駄かもしれない。  
それでも、俺はやらなければいけないのだ。  
俺は覚悟を新たに、決意したのだ。

俺は貴族らしい振る舞いをしつつ、前回の経験から取り巻きを厳選し、アリサ殿も庇護下に置くように機会を伺った。  
さて、どうしようか。

俺は上級学部。

アリサ殿は通常学部。

同じ学び舎で学んでいても、まるで生きている世界が違うかのようだ。

だから彼女に接近するチャンスは選ばねばならない。

「あ、あのッ」

だから俺は、最初困惑してしまった。

「この間の試験、私も見てました!!」

もしよければ、アイオン様に魔法の手ほどきをお願いできませんか  
!!」

「貴様、いきなり出てきてなんだ!!」

「そうだ、失礼だぞ!!」

俺の取り巻きたちがかなり立てる。

まあ、彼らの言うことは尤もである。貴族の立場云々を抜きにして  
も。

「よさないか、皆」

俺はみんなを宥めた。

「我らは学生なのだ、共に学び高め合うのが本文だ」

「しかし、アイオンさん、こいつは通常学部で……」

「私はそういうしがらみは好まない」

俺はそう言って、アリサ殿に手を差し出した。

「君の名前を覚えてほしい」

俺の言葉に彼女の瞳が若干揺れた。

彼女は前回の記憶があるので、当然今回の俺とは初対面だ。

俺も最初は心が痛んだが、もう慣れた。

「アリサ……アリサと言います」

「ではアリサ君、これから魔法詠唱の自主練をするから一緒に行こう」  
「は、はい!!」

だが俺はこの時、気づかなかった。

彼女の瞳が異様な輝きを帯びていたことに。

§ § §

「アイオン様、大変です!!」

俺の取り巻きにアリサ殿が加わり、皆に魔法の手ほどきをしてやりながら数日経ったある日のことだった。

「どうした、騒がしいぞ」

「それが、アリサの奴が決闘を申し込まれたらしくて……」

「決闘だ?!」

なんでそんなトラブルが起きたんだ!!

前はそんなこと無かったはずなのに。

アンズ様は何も言っていないかったが、俺が新聞などで調べた限り、『ここは二度目の世界のはず』だ。

「いったいどうしてそんなことになった!?!」

「それが、アリサがアイオン様に目を掛けられてるのが気に入らないらしく……」

俺にそのことを報告してくれた取り巻きは、アリサのことを心配そうにしていた。

彼女は努力家なので、その姿勢を見れば平民でも認めているのだろう。そう言う人物のみを前回の経験で選んだ。

「……止めねばなるまい」

「お供します」

俺は彼を伴って、件の現場へと向かった。

「何をしている、お前たち!!」

俺が現場にたどり着くと、中庭ほ広場でアリサと女子生徒が対峙していた。

「アイオン様!!」

「生徒同士の決闘は禁じられてるはずだぞ!!」

俺がなぜそんなことを知っているかというのと、決闘騒ぎは学院生活で度々起こるからである。

主な原因は男女の痴情の纏れである。

アリサ殿は俺の登場にびっくりと驚き体を震わせたが。

「アイオン様、この平民は我ら貴族を馬鹿にしたのです。」

これは身の程を弁えぬ愚か者への躰けなのです」

そんな馬鹿なことを言うのは誰かと思えば、前回で彼女をイジメていた女子生徒だった。

「わ、私は貴族の人たちを馬鹿になんてしてません!!」

「ふん、あなたなんかの言葉を、誰が信じると言うの」

貴族と平民、どちらの言葉が信用に値するかは言うまでもない。

もう既に勝ち誇っているそいつに、俺はこう言った。

「確かに、貴族と平民、どちらの言葉が信用するのは言うまでもない」

「そうでしょう、アイオン様」

「だが、それ以前に、この私が顔も知らぬ相手の言葉を鵜?みにする愚か者だと思われたのが業腹だ」

「ここで貴族の得意技、論点のすり替え!!」

「そ、そんな、アイオン様?!」

「これ以上この私の怒りを買う前に、私の視界から失せろ。」

「……貴様も、実家に呼び出されたくはあるまい?」

俺がそう言うと、女子生徒は顔を青くして逃げるように走り去った。

「お前たちも、勉強に励むべき学び舎でこのバカ騒ぎの見物とは暇なのだな。」

どれ、顔を覚えてやろうか」

俺の言葉に、決闘騒ぎに群がった野次馬どもが蜘蛛の子を散らすように退散した。

「アイコン様、私、私ツ!!」

アリサ殿は、恐怖と混乱からか涙を流してその場に崩れ落ちた。

「大丈夫か、アリサ君」

「……大丈夫です、大丈夫です、ごめんなさい」

「君が謝る必要は無い。」

だが、私が生徒会長に就任したあかつきには、徹底した意識改革が必要だな」

俺はそのように思案する。

生徒だけでなく、教師の方も抱き込む必要があるか。

たとえ、それが意味などなくても、最終的に死人の数は変わらなくても、俺はこうして生きている限り足掻かずにはいられないのだから。

§ § §

「何の意味も無かったですね」

「……」

俺は俺の持てる全力を尽くして、そして死んだ。

何一つ変えることなく、当然のように。

孤児院の教壇に腰かけるアンズ様は戻って来た俺に肩を竦めてみせた。

「まあ、試行錯誤するのは良いと思いますよ」

そんな中身のない慰めをする彼女だったが、落ち込んでいるのは俺だけではなかった。

「知らなかった、アリサの奴がこんな孤独な学生時代を送ってたなんて……」

真面目なイリーナ殿がへこんでいた。

前回戻って来た時は外出していたようだが、どうやら全員ここに戻って来たようだ。

「オレは結構新鮮だな、あいつはいつも強がってて弱みを見せないからな」

と、クリステイーンは意地悪く笑っていた。

「レナ、お前は何か言いたそうだな」

「別に何も」

なぜかリリウムの奴は不機嫌そうだった。

「三人は勿論アリサ殿が何を願ったのか、知っているんだよな」

「残念ながら、もう体感時間が何十年も昔なのでな」

「そうか？ オレは笑えたから覚えてるぜ」

クリステイーンの物言いに、イリーナ殿がきつと睨んだ。

「そんな言い方はないだろう!!」

「わかってないな、お前が覚えてないからこそ、あんな願いをしたんだアリサは」

急に真面目な表情で責めるようなことを言う彼女に、イリーナ殿は思わず口を噤んだ。

「レナ、君は覚えているのか？」

「……まあ、おぼろげにだけ」

「そうか……」

なんだか、彼女らの関係性が見える会話だった。

「アラン、君は頑張ったと思うぞ。」

私があんな学院にいたら、片っ端からあの貴族どもの性根を叩きなおしている」

ソフィア殿は腕を組みながらそう言った。

「軍隊からベテランの下士官を教官として誘致し、定期的に訓練できるように取り計らうのは良い案だったと思う。」

彼らには将来軍役に就く自覚が無いようだったからな」

「ええ、生徒の立場では限界を感じました」

とにかく俺は生徒たちが死なないように様々な手を尽くした。並行してアリサ殿も鍛え、強くなった。

だが……。

「次は三度目の世界に行くのですよね、アンズ様」

「そうですよー、ここで意外性を出してもしようがないですし」  
「……だからこそ分らない。」

四度目で魔王軍と戦ったアリサ殿は魔法使いとして世界最高レベルだった。

この時点での彼女は、その足元にも及んでない」

ハッキリ言って、アリサ殿は凡人だった。

リリウムやクリステインのような天賦の才の持ち主ではなく、イリーナ殿のように優れた資質をハイレベルに磨き上げた才人でもない。

誰もが努力の域でたどり着ける程度の、ありふれた才能でしかなかった。

そんな彼女が、あの戦いでは天才中の天才であるクリステインと並ぶほどの魔法の腕を見せた。

俺は全く、今の彼女がその領域に達する道筋が想像が付かないのだ。

「アラン君、ひとつつ良いかな」

「なんだ、ステラ」

「私はあの子が何を願ったのかは知らないけれど、あの子がなぜあんなに努力しているか、知るべきだと思うの」

「ステラ!!」

なぜか心苦しそうにしているステラに、リリウムが声を挙げた。

「あなたの気持ちも分かるけど、決着は後にすればいいと思うわ」

「だけど、だけど!!」

「それって、この世界が減ぶ前にしなければならなの?」

俺は二人の会話に付いて行けず、交互に両者の顔を見る他なかった。

「どうしたんだ、二人とも……」

俺の困惑に、他の女性陣たちもなぜか溜息を吐いた。

「お前には自覚は無いだろうが、アリサにとってお前はよりにもよってな人間なんだよ。」

まったく、アンズ様も性格が悪い」



「てへぺろ☆シ」

なぜかクリステイーンの言葉に、アンズ様が愛想笑いをした。

「……どういうこと何ですか?」

「とにかく!! 作戦タイム終了!!」

あなたはさつさと次へと行つてください!!」

アンズ様の指が鳴った。

急速に俺の意識が遠のいていく。

「ひとつ助言をするなら、あなたはあなたらしくすればいいと思いますよ。それじゃあ!!」

とにかく、俺は俺の出来ることをやるしかないらしい。

「さて、と」

彼を送り出したアンズは、止まった時の中でパチンと手を叩いた。

「あんな何も変えられない朴念仁の悪あがきなんてもう見飽きたでしょう?」

この章は解決編。そろそろ、彼女達がいかにして袋小路に追い込まれたのか見ていくべきでしょう」

彼女が指をくるくる回すと、今回の戦いで骸を晒した彼に縋りついて泣き叫ぶアリサの映像が虚空に映し出された。

「彼女は本当に、見るべきところも無い平凡でスタンダードな性格な人間です。

ですが、人間というのは良くも悪くも変わるもの。それが恋ならばなおのこと。

私のダーリンも、私とラブラブになって変わりましたしね!!」

くねくねと身をよじらせてのろける彼女は、一通り満足すると「あなた」に向き直った。

「まあ我ながら、罪深いことをしていると自覚はありますけれどね」

彼女は天秤を置いて、神賽を皿の上に投げた。

からん、からん、と転がったサイコロの目は“3”。

「ところで、解決編には探偵役が必要ですよね？」

探偵役には当然、助手が必要不可欠!!

いったいその役柄は、誰になるんでしょうね」

くすくす、と幼い女神は無邪気に笑い声を漏らすのだった。

## 畜生道

「あ”あ”あ”あ” あ” あ”あ”あ”あ”!!!」

絶叫が、響き渡る。

十二歳の少女の絶望が、魂からの叫びを引き起こした。

「アリサ、どうしたんだい!？」

「どこか体が悪いのかい!？」

娘の断末魔の如き叫びに、彼女の両親が駆け付けて来ました。

「私がッ、私が、私が失敗しなければ、私が、あの人を、私が、私が、お救いしなければッ!!」

泣き叫びながら、少女は狂ったようにベッドの上で暴れたのです。

しかし同時に彼女の思考はクリアで、ある種冷静でした。

「この私の、すべてを賭けても!!」

二度の絶望と挫折を目の当たりにした少女は、己の全てを燃やす猛毒に支配されていました。

それは歴史上多くの人間を狂わせた、恋と言う名の熱病でした。

§ § §

「これじゃダメだ。これも違う。」

こんなんじや、あの御方をお助けできない」

彼女は帝国の城内にある、禁書庫へ忍び込んでいました。

前回彼女はここに入ることを許された立場だったので、ここの封印を解除する術式を知っていたのです。

その中にある、数多の禁術書と魔導書。

多くの焚書された歴史書を投げ捨てながら、己が望む魔法が記された本を探し出すべく中を荒らしていました。乱暴ですね!!

「違う、違う、これじゃない!!」

無い、無い、どこにも無いッ、なんで無いの!!」

視野狭窄に陥りながらも、彼女は極限の集中力を発揮して次から次へと禁書を読み漁りました。

それでも、彼女が求めるモノは見つかりませんでした。

数多の本棚をひっくり倒し、読み捨てた本の山を幾つも作りながら、血眼になって探し出す。

魔王軍に相手にも勝てる、強大な魔法を。

そんな時でした。

彼女が揺らした本棚から、真っ黒な装丁の本が落ちたのは。

彼女は、その本から発せられる異様な魔力に気づいたようでした。

「なに、この本。今までこんな魔力は……」

それでも、彼女は魅入られるようにその黒い装丁の本に引き寄せられてしまいました。

そして、中を開くと血文字のように赤い文字でいくつかの魔法の工程が記されていた。

その内容とは。

「——悪魔召喚の魔法」

この世の者ではない存在を、呼ぶ魔法でした。

悪魔と呼ばれる存在は、この世界にも居ますが要するに一部の魔族のことです。

そこに記されていた知識は、そんな肉体に縛られているような下級の存在などでは断じてありませんでした。

完全なる上位存在、人間が逆立ちしても勝てない超常なる者の助力を得る為の魔法なのです。

そこに記された内容を、彼女はすぐに実行に移しました。

彼女は己の手首を刃物で切って、一心不乱に魔法陣を描きました。

血文字で描かれた魔法陣が完成すると、彼女は呪文を唱え始めたのです。

「私は基準である。其は道徳に非ず、されど正義である。

我が名は絶対悪。血文字の悪魔よ、我が声を聞き届けよ。聞き届け

よ」

彼女の詠唱が、朗々と室内に響き渡る。

そして、魔法陣が光り輝き始めました。

「我は求め訴えたり。さあ、我が声を聞き届けよ!!」

魔力の暴風が、吹き荒れる。

室内の本や調度品を吹き飛ばし、*“それ”*は魔法陣から現れた。

「貴方が、悪魔……?」

「そうだよ」

*“それ”*は、一見すると幼い子供のような姿をしていました。

黒い髪にローブを纏ったその少年は、ともすれば彼女のように魔法使いにも見える。

「僕は人呼んで、『赤い文字の悪魔』」

単純に『悪魔』とも、コレクターとも呼ばれるね」

「あなた、本当に悪魔なの?」

目の前に現れた存在に、彼女は訝しみました。

「階級は? どれだけの部下を持っているの?」

「君らに分かりやすく言うなら、階級は曹長。部下は百人くらいかな??」

彼女は質問の答えに首を傾げました。

「もしかして、あなたって下っ端?」

「そりゃあ魔神のお歴々方に比べれば新参者だよ」

僕は人間出身だから肩身も狭いし、出世もさせてくれて貰えないし。

でもこれぐらいの地位の方が逆にいいのさ。だって、君のような弱つちい奴でも呼び出せるんだからね」

彼の皮肉に、彼女はムツとしました。

「まあ僕程度でさえ、君の願いを叶えるには十分だ」

さあ、君はこの僕に何を願うんだい?」

『悪魔』は彼女に問いました。

「……私は、力が欲しい」

運命さえ変える、強大な力が」

「運命ねえ、そう言うのは僕に頼まない方がいいと思うけど」

ただ強い力が欲しいのなら、やりようはあるよ」

『悪魔』は顎に手を当てて首をひねりながらそう言った。

「本当なの!？」

「まあまあ、そう急かない急かない。」

僕はまだ注意事項や契約の書面とか確認してもらわないと」

彼は意外にも律儀に彼女を説き伏せました。

「それもそうね……」

「その前に、なんで君は力なんて求めるんだい？」

暴力なんて碌なモノじゃない。血の味を占めたらすぐにそれに頼るようになって、脳みそまでも暴力に支配される」

彼はある種軽蔑するように彼女を見ていた。

「それでも、私には必要なの」

「まあ、事情を話してよ。契約者が悪魔になんて頼らなければならぬ修羅場を聞くのがこの仕事の愉しみみたいなものだしね」

『悪魔』はその辺に横倒しになっていた椅子に座って、聞く姿勢を見せた。

彼女はその態度にむかつ腹が立ちましたが、他に頼れる者もないので渋々己の生い立ちを話し始めました。

「ふむふむ、なるほど」

『悪魔』は一通りの事情を聞き出すと。

「君って、弱っちいだけじゃなくてバカだね」

「あなたに何が分かるの!!」

「ああゴメン、訂正するよ。」

君だけじゃなくて、君たち四人全員救いがたい大マヌケで愚かしいほどバカなんだね!!」

煽られて激高する彼女に、『悪魔』は更に癩に障ることを言いました。

「そもそも、神様に頼るなんてどうかしてる。」

アレらは都合の良いときに利用してやるだけで、祈って願ってお頼み申すもんじゃないの。

君は人間なんだから、人間として頑張っとうしようもない時にお願いすれば良かったのに」

「それが、それが出来たら苦勞しないじゃない!!」

「まあわかるよ、せっかく神様をお願いが出来る機会があつたんだから。」

それに縋らないともったいないしね」

彼は椅子からひよいと立ち上がり、怒りに震え涙目になった彼女に手を差し出した。

「でも、君に関しては願って正解だったと思うよ。」

だって、君ってばチョロそうだし。変な男に騙されそうだし」

「悪かつたわね!!」

「とりあえず、これが注意事項だよ」

彼は書面を彼女に手渡しました。

そこにはこう書かれていました。

『我々は、契約外の事を行ったりはしません』

『我々は、契約の履行に際し、報酬を受け取るまで一切の危害を契約者に与えることは致しません』

『我々は契約者に嘘の情報を渡したり、故意に説明の必要を省いたり  
はしません』

『我々は契約の完遂を最後まで見届ける義務が発生します』

「いやに丁寧ね」

「営業努力と言ってほしいね。」

これでも僕は君たちに誠実で居ようとしているんだ。

問題無いなら、そこにサインして」

アリサは倒れた机を起こし、そこに書面を置いて自分の名前をサインしました。

これでこの書面は契約書となったのです。

「さて、力が欲しいんだってね。」

それも魔王を倒せるだけの力か……となると」

『悪魔』は契約書を受け取り、虚空に孔を開けてしまうと、そこから黄金の鍵のような物を引っ張って来た。

アリサは一目でそれが特異なマジックアイテムだと理解した。

「これはあらゆる鍵を開けることのできる『魔剣』だ。」

それは物理的なモノのみならず、精神や世界の壁と行ったモノも自在に開けられる。

まあ、今時の若者が大好きな拡大解釈次第でいろいろとできる代物だ」

「魔剣……？ 魔鍵ではなくて？」

彼らの言葉は日本語ではないので、その絶妙なニュアンスの違いに彼女は首を傾げました。

「君が教えて欲しいなら、契約に従い教えてあげるけど……説明が面倒くさいなあ、どうしても聞く？」

「必要か否かは私が決めるから」

「あつそ、じゃあまず——」

かくかくしかじか以下文字数。

「要するに、魂の宿った道具が死後に流れ着く場所からやってきたモノの総称が『魔剣』なんだね」

「まとめるのが上手いね。簡単に言えばそうだよ。」

「この世界の魔法は、この世界のルールに沿ったモノだ」

『悪魔』は地面に落ちていた魔導書を拾い上げ、その中身を広げてそう語った。

「ならば、この世界法則ルールブックに無い禁忌に触れるしかない。

これから君に教える魔法は、君を造った神々の許していない真の意味で禁術だ。

それ相応の危険がある。それでも、やるかい？」

『悪魔』は彼女に覚悟を問いました。

「私はあの人の為なら、神すら殺します!!」

「良いだろう、気に入った」

彼は黄金の鍵をスツとアリサに投げた。

彼女の胸に刺さるように見えたが、波紋が広がるように非物質的な接触で彼女の内側に入り込んでいく。

そして、鍵が独りで錠を開けるようにガチャリと、回った。

「さあ、受け取れ。」

それが契約の対価、君の『魔剣』だ」



アリスが胸から鍵を引き抜くと、紫色の小さな花を模ったブローチが現れました。

「これが、私の『魔剣』……」

「そうだ、君の魂の片割れだ。」

これは魂を持つ道具。これと君の魂が相互干渉を引き起こし、相乗的な魔力の増強を引き起こすだろう。

その力は、実に常人の十数倍の力を引き起こすはずだ」

「十数倍……ッ!!」

「まあ、その制御には繊細で高度な技術が必要だろうけど」

その時、彼は気づきました。

アリスが魔法の詠唱をしようとしていることに。

「あ、バカ——」

彼が止める間もなく、禁書庫は爆発で消し飛んだ。

§ § §

「は、はは、やった、やったわ!!」

これが、私の力なんだ、ちよつと下級魔法を唱えただけなのに!!」

煤だらけのアリスが、木っ端微塵に吹き飛んだ王城の一角を見て歓喜の声を挙げた。

「まったく!! 君は話に聞いた以上のバカだったわけだ!!」

殆ど自爆同然の魔法の発現から助けたのは『悪魔』でした。

「君はそれなりに熟達した魔法使いのはずだろ!!」

そんな君が低位の魔法の制御すらおぼつかなかった、その事実にい加減に気づけよ、この脳みそお花畑!!」

とは言え、魂の共振による魔力の増幅なんて、概要を教えられた程度ではできるモノではありません。

それはこれまでの彼女の努力の賜物でしょう。

「でもこれで、ようやく糸口が掴めた、これでやっと、あの人のお役に立てるんだ!!」

見た目相応にはしゃぐ少女を見ながら、『悪魔』はその胸に付けられ

たブローチを見ました。

「タツナミソウのブローチか。」

その花言葉は……。いったいどんな謂れの道具なんだろうね」

そう、タツナミソウの花言葉は、『私の命を捧げます』。

まさしく、彼女そのものと言えるでしょう。

§ § §

それ以来、彼女の特訓は始まりました。

禁忌の秘術の訓練故に、それは人知れず行うことになります。

「はあ、はあ、全然うまくいかないッ」

「そりゃあ危険だから禁術なんだよ」

制御に四苦八苦している彼女を欠伸混じりに見守っている『悪魔』はそのように述べました。

「あの時の騒ぎで忘れてたから言うけど、この契約の代償は覚えているよね?」

「え、そんなのあったっけ?」

「あるよ!! 無いと僕がタダ働きじゃん」

まったく、とイライラしている彼は呆れ顔でこう言いました。

「契約の代償ってなんですか?」

「普通最初にそれ聞くだろ。」

まあ僕は悪魔だからね。そっちのミスだから指摘しなかったけど」

これだから悪徳マスコットに騙される魔法少女が絶えないのでしょう。

だから私のような超絶美少女女神の甘言に乗ってしまうのです。

「まあ、定番として君の魂を貰おうって感じかな。」

魂だけ抜き取って、いろいろとイジメて苦悶の刺激が発する負のエネルギーをちゅーちゅーするのが悪魔の食事なわけ」

「悪魔って酷い生き物なのね」

「心配するなよ、お前も同じくらい酷い生き物だから。」

でもまあ、最初に言ったら。僕はコレクターって呼ばれてるとも」

『悪魔』は彼女の胸のブローチを指差した。

「僕はそれが欲しい」

「えッ」

アリサはとっさに両腕で胸を庇った。

「なんだよその仕草は!! お前自分に女性的魅力が有ると思ってるの?」

思い上がりも甚だしいんだけど、この精神年齢詐欺女

「何でそんな酷いこと言えるの!! この下っ端悪魔!!」

「僕が欲しいのはそれだよ、お前のそのブローチさ!!」

僕の趣味は人間観察と『魔剣』集めなの!!」

彼は鼻を鳴らして憤慨した様子だった。

「まあ必要無くなったら、それ貰うから。それが契約な」

「この子は私の半身も同じ、いったい何する気なの!?!」

「僕はコレクターだって言ってるだろ!!」

そんなランクの低いモノでこの僕が協力してやるんだから安いものだよ」

「誰のがランクの低いモノですって!!」

二人はこんな風に言い合いながらも、時間は残酷に過ぎていくわけです。

「私が、主席ですか……!?!」

「ああ、君の努力の賜物だよ」

アイオンが、アリサに微笑みました。

彼女は夢見心地でしばらくボーっとしていた。

「どんな気持ちだい、自分だけ周回してヌルゲーで頂点に立っつて」

二頭身のデフォルメされた『悪魔』が彼女の背中から出てきてそう言いました。

「……どうでもいいわ」

「ふーん」

「私の目的はあの人を救うことだもの」

キリツとした顔に戻った彼女を、『悪魔』は生暖かい眼で見ている。「ようやく、あの力の制御も掴みかけて来た。」

「この力が有れば、魔王軍とも戦えるはずよ!!」

「まあ、現時点でもこの世界で君が最強の魔法使いだとは思いうよ」アリサの会得した禁術は、この世界のルールではあり得ざる倍率の強化方法。まさにチートでした。

彼女程度の才能の持ち主でも、全力で魔法を撃てば都市国家ぐらいなら消し炭にできるでしょう。

そんな強力な魔法は、この世界にはありません。

彼女は今、最強の魔法使いになったのです。

「もうすぐ、魔王軍がやって来る。」

その戦いでアイオン様は死んでしまう。

私が、私が奴らを全部殺して、あの御方をお救いするんだ」

「……………」

『悪魔』は、そんな彼女を生暖かく見ていました。

さて、もう既に皆さまは知っているでしょうが、魔王軍との戦いは決して一人では勝てないように出来ています。

彼女が一人殺せるのなら、さらに一人補充するだけ。

これは彼女に対する試練ではなく、人類全体に課された試練なのですから。

そしてなにをしたところで、運命とは変わらない物なのです。

「あー、どこの魔王かと思ったら、あの二人組のどこかー。」

流星に僕も同情しちゃうよ。この世界の滅亡はほぼ決定事項なのか」

デフォルメ『悪魔』が嘆息しました。

無尽蔵と見まごう魔族の軍勢を塵に変えたアリサは、ただただ絶望感に打ちひしがれていました。

「どうして、どうしてなの、アイオン様……………」

黒焦げで誰か判別できない骸を抱え、彼女は涙を流していた。

「私は強くなれたのに、アイオン様が認めて下さるくらい強くなったのに!!」

純粋な思いの為なら、チートずるをしても良いのでしょうか？

善行の為なら犯罪を犯しても良い、そう考えて実行しても法に依って罰せられるのと変わらない。

世界の総量は変わらない。

彼女がどれだけ強くても、結局はそれを補填する何かが見れるだけなのです。

「君の心を徹底的に論破して砕くのは簡単だ。

でも僕個人としては、あの二人組は気に入らないんでね。

契約外の業務は出来ないけど、助言はしてあげよう」

「私は、私はどうすればいいの……?」

抜け殻のように意気消沈したアリサは、心ここにあらずと言った様子でした。

「君には仲間が居たんだろう?」

彼らを集めて、魔王を倒すんだ。彼が助かる術はそれしかないだろうね」

「魔王、魔王を倒せば、アイオン様は助かるのね?」

「勿論さ、だって神の決定を覆したんだから。」

それは君の意思が運命を超越したってことさ」

それは概ね正しく、概ね間違った言葉でした。

なにせ、彼女に試練を与えているのと、この世界住人全体に試練を与えているのは別々の存在なのですから。

「……なら、私は魔王にも挑むわ」

そして、彼女は決意しました。

己の全てを投げ打つ戦いに。

「僕も君の行く末を楽しみにしているよ。

どうせ、僕も暇だしね」

そして、彼女は残る全ての時間を使って、己の魔力の制御の訓練に当たってたのです。

今回、この世界が滅び去るまで、ずっと。

## 修羅道

「さて、今回の君の最終目標は魔王討伐だったね」  
「うん」

四度目の世界。

アリサがこの世界で意識が覚醒すると、程なくして『悪魔』が現れました。

家の中は彼女の両親が居ますので、早速場所を移して作戦会議です。

「あの三人が居る場所、見つけてくれた？」

「勿論。だよな？」

『悪魔』は視線を横に向けました。

そこには、ダークエルフの魔女が恭しく片膝をついていました。

彼女は百人近く居る『悪魔』の従僕です。

「当然です、我が主。

適当にヒトを操って探らせました」

「よし、所在は判明したようだし、手紙を送るべきだね。

内容は任せた。いいな？」

『悪魔』は更に視線を横に向けました。

そこに老紳士が腰を曲げて頭を下げていました。

彼もまた、『悪魔』の従僕です。

「イエス、マイマスター。

ですが三人のうち二人はかなり高貴な身分のようで、普通に手紙を届けるのは難しいかと」

「適当に侵入すればいいだろ」

「お忘れですか、我らは業務以外の事をするのは契約違反でございます」

「そうだった」

老紳士に諭され、『悪魔』はアリサに視線を戻しました。

「というわけで、君が何とかして届けな」

「本当に助言ぐらいしかしてくれないのね」

「三人の所在を探すだけでも裏技を使ったんだ。十分サービスが良い方だよ」

部下の手柄を自分の物のように言う彼にイラつとしながらも、アリサは頷くことにしておいたようです。

「マイマスター、具申申し上げます」

「なにさ、教授」

「見たところ彼女は魔法の扱いに熟達している様子。

僭越ながら、この私めが彼女を指導しましょうか」

「ああ、契約内容は力が欲しいだもんな。君が教えることは契約違反にはならないな」

「ええ、彼女の練度なら、空間転移ぐらいならすぐに会得できましよう」

老紳士の提案に、『悪魔』は頷いた。

「今更、誰かに魔法で教わることなんて……」

これでも彼女は体感時間で二十年以上魔法の修業をしています。

私に言わせればその程度はひよっこですが、この世界の基準ではまあまあベテランと言えるでしょう。

「ほほほ、まあそう仰らずに。己の知見を広めるのも勉強ですよ」

老紳士は彼女の言葉に気に障った様子も無く、微笑ましいものを見るようにしていました。

そして、一か月後。

「先生!! 見てください!!」

100km以上の転移に成功しました!!」

「ほっほっほ、若者は呑み込みがよろしいですな」

老紳士にアリサは懐いていた。

「もう教わることはない（キリッ」

って、言ってたのは誰だっけなあ〜」

「魔導の探求に終わりなんてないのよ」

『悪魔』の嫌味も何のその、アリサは彼の指導で格段に魔法の引き出しが多くなったようです。

たった一か月ですが、彼女は元々地力があっただけでなく努力家なので、瞬く間に彼の教えを吸収したようでした。

「いやはや、教え子が増えるのはいつになっても良いモノですな」  
「先生ってどうしてこんな奴の従者をしてるんですか？」

嬉しそうにしている老紳士に、アリサは横の嫌味な奴に意趣返しするようにそんなことを訊ねました。

「おや、魔導の探求の為に悪魔に教えを乞おうと思うのは魔術師としては当然ではありませんか？」

「それは、まあそうですね」

他ならない彼女もそうなのですから、彼の答えに歯切れの悪いモノ言いになりました。

ですが、彼女はあまり納得がいかなかったようです。

この老紳士は彼女に教えられるほどの、非常に高位の魔法使いでした。彼ほどの腕前の持ち主は、この世界では見当たらないことでしょう。

そんな人間が悪魔の従僕になっているのが、不思議でなりませんでした。

「あまり余計な詮索はしない方が良いでしょう」

「うッ」

二人の修業の様子を、遠巻きに見ていたダークエルフの魔女が口を挟んだ。

アリサは彼女の視線に怯みました。

この魔女も、卓越した強大な魔法使いです。アリサは絶対に戦いたくない、とお互いの力量差を悟りそう思っています。

「この世界の書式と文字は把握しておきました。」

ここに協力要請を乞う手紙を書きました。これを転移魔法で送ってください」

「分かりました」

老紳士から手紙を受け取り、アリサは魔法で手紙を転移させまし



た。

それから数か月、アリサを仲介して四人は手紙のやり取りをするようになりました。

「何だか事務的な内容ばかりだね。」

近状の報告も簡素だし。女同士の手紙のやり取りって、もつと何枚も下らない無駄話が増えるものじゃないの?」

学院の寮で、届いた手紙を検分している『悪魔』がそう言いました。

「別に……。私はみんなと仲がいいわけじゃないし」

「あれ、そうなんだ。」

君らは元冒険者なんだろう? ああいうのって連帯感が必要だったりするんだろ?」

「私は、あの三人のパーティに数合わせで入ったみたいなものだから。私は才能が無かったから、みんなに合わせるだけで精いっぱいだった」

言うまでもありませんが、冒険者のパーティにおいて魔法使いの役割は非常に重要です。

戦士職の方々にはできないダメージディールでもありますし、物理法則でどうにもならないことを魔法で味方を助けたりもできます。

彼女らのような精強なパーティでは、アリサのような凡人は浮いていたことでしょう。

「私、いつも失敗ばかりしてた。」

クリスの奴がいつも私に嫌味を言って、他の二人は庇ってくれたけど、惨めだった。

「何度も何度も、逃げたくなった……」

そしてもう、彼女はここにも逃げ場などないのです。

「ひとつだけ聞かせてよ。」

君はあの男を救って、どうしたいのかな?」

「え?」

『悪魔』の問いに、アリサは予想外の質問に素っ頓狂な声を上げました。

「え？ まさかお前、何も考えてないの？」

「だって、あの御方は私に、何もない私を救ってくれた。

私はあの御方のお役に立てればそれでいいの」

アリサの目は本気でした。そこには邪心も欲目もありませんでした。

『悪魔』はその態度に溜息を吐きます。

「ホント君は救いようのないバカだよ。

無償の愛なんて存在するとも？ 君も人間らしく、そいつの心が欲しいとか言ってみせろよ」

「だって、あの人は貴族で、私なんかと吊り合わないし……」

「まあそれもそうか。

それに位の高い貴族の子息なら、生まれながらの許嫁とかいるだろうし。

君の献身は奴に知られることなく終わるわけだ」

『悪魔』がやれやれと大げさに首を振って見せると、彼女は気の抜けた表情をしたまま胸に手を当てました。

「君が本当に奴を助けたいなら、僕に彼を助けるように契約すれば良かったんだ。

お前はそいつを助けたいんじゃないやなくて、そいつを助ける自分に酔ってるだけさ」

彼の言葉は本質を突いていましたが、これまで恋もしたことのない少女には刺激が強過ぎました。

「……どうして。アイコン様が誰かとご結婚なさると思ったら、私……」

彼女はぼろぼろと涙を流し始めました。

「苦しいよ、悲しいよお。なんでそんな酷いこと言うの。

私はただ、あの御方のお役に立てればよかったのに……」  
「なら覚えておくんだね。

それが人間の生きてる証だ。お前みたいなバカな小娘が、悟ったよ  
うなこと言うな」

俯いて泣いている彼女に、彼は容赦なく言葉を浴びせます。

「知らなければ、知らなければこんな思いしなくてもよかったのに」  
「そう思うなら、最初から誰かを好きになんてなるなよ」

「……………」

彼は慰めることも無く、彼女が泣き止むのを待ちました。

「私、決めた」

そうして、アリサは涙を拭うと意を決して顔を上げました。

「全てが終わったら、あのアイオン様に想いを伝える」

「そうかい。今からお前が玉砕するのが楽しみだよ」

「だからなんでそんな酷いこというのよ!!」

それから事態が動くまで、四年の時間が必要です。

§

§

§

対魔王の連合軍が結成され、遂にこの時四人は顔を合わせたので  
す。

「こうして、見慣れた顔が集まると感慨深いものがあるな」

イリーナは人払いを済ませた天幕で、そう独り言ちました。

「見慣れた顔？ 約一名ほど姿形まで変わってるじゃねえか」

「それはこっちの台詞よ、あなたが聖女って聞いた時は何の冗談かと思  
ったわ」

こちらではクリステインとレナスティ姫が軽口を叩き合ってた  
ました。

「……………」

そんな感動（笑）の再会の場で、アリサだけは若干俯いて黙って  
いました。

「魔王を倒せば、このいつ終わるとも知れない地獄も終わるのだら  
うか」

「そうね、こんなことならあんなこと願わなければ良かった」

そんな二人の弱気な態度に、クリステインは鼻を鳴らしました。

「少なくとも、魔王を倒せばこの世に魔物どもが溢れることは無くな  
るだろうよ。」

まったく、オレをこんな面倒に巻き込みやがって。

知らない顔じゃねえから仕方なく手を貸してやるけどよ」

そう言つて、彼女はアリサを見ました。

「お前、やれんのか？」

前よりちゃんと出来るようになったのかよ？」

「そ、それは……」

「クリスツ、そんな言い方はないだろう!!」

「そうよ。アリサの評判は聞いてるわ。」

努力の天才で、学院の麒麟児だつて」

クリスの言葉から、二人は庇つてくれています。

だけど、アリサは居心地が悪そうに俯いていました。

「……まあ、使えるならなんでもいいさ」

クリステイーンは心底面倒そうにそう言いました。

内心、魔王の嫁なんて御免被るし、と思つています。

「私、頑張ります」

彼女はか細い声で、そう言いました。

「アリサ君、軍議は終わったのかい？」

「はい、アイオン様。」

ですが私なんかアイオン様を差し置いて部隊長だなんて……」

「そう卑下することは無い。」

それに、私は部隊の管理の方が性に合っている。

これでも上に立つ器ではないと思つているんだ。私は」

天幕を出て、自国の軍隊の野営地に戻るとアリサは指示を飛ばして  
いるアイオンに報告に戻りました。

「国軍が本国防衛などと言いつつ、君にそんな重責を負  
わせずに済んだのだからね」

「いえ、結局は私もお飾りなので」

「自分を卑下するなと言つただろう。」

君は我が国の希望なのだからな」

「アイオン様……」

彼の励ましの言葉に、アリサは顔を上げて胸に手を当てます。たったそれだけの言葉に、彼女は勇気を貰えるのです。

「アイオン様、ひとつだけお願いをしてもいいですか？」

「なんだ、君の頼みなら可能な限り融通しよう」

「全てが終わったら、お伝えしたいことが有ります」

たったこれだけの言葉なのに、彼女は一世一代の告白でした。

「ああ、私も君に聞きたいことが有るんだ」

だと言うのに、この男は微塵も己が恋慕されているとは気づいていないのでした。

このじれったさにちよつかいを出さなかった私の自制心を褒めてほしいくらいです。

「見事な死亡フラグじゃないか」

必要事項を伝えて、彼女に割り当てられたテントに戻ると、『悪魔』が本を読んでいました。

「ど、どうしよう、私。」

アイオン様にあんなはしたないことを……!!」

「ダメだこりゃ」

顔を真っ赤にして身もだえているアリサに、彼も呆れ顔でした。

そうしているうちに、決戦の時はやってきました。

並み居る魔物どもをちぎっては投げ、ちぎっては投げ、リーパー隊も物ともせず、魔王城に突撃を敢行。

いよいよ、魔王と対峙すべくその最奥へと向かうところでした。

「アリサ」

「なに、これから大事な時なのよ、わかってるでしょ？」

二頭身のデフォルメ『悪魔』が、彼女の耳元で囁いた。

まるでこれを言うのが楽しみでならないとでも言うように笑いながら。

「アイオンが死んだよ」

彼女はその声に目を見開きました。

「……ねえ、みんな」

「どうした。アリサ？」

「何か問題でもあったのか？」

振り返る前衛の二人。

アリサは言いました。

「今度の戦いって、本当にいっぱい犠牲が出たよね。」

あのさ、もしもう一回チャンスがあるなら、皆を救えると思わない？」

それは、この戦いで家族を失ったイリーナには急所を抉る言葉でした。

「そうだな、もしチャンスがあるなら女神様に頼んでみるのも良いと思わないか？」

「私は……反対はしないわ」

「おい、マジかよお前ら」

クリステイーンの信じられないと言った態度は、イリーナが睨んで封殺しました。

「だよね、だよね!!」

実のところ、アリサの意見が通ったのはこれまでで初めてでした。だから、彼女は思いのほか舞い上がっていたのです。

「くくツ、今の提案は僕と君、どちらが悪魔らしかったのかなあ？」

『悪魔』はその人間らしい利己的な行動を可笑しそうに見ていました。

「それにしても、あいつらが願った女神ってのは君だったんだ」

「おひさー、元気してました？」

「なかなかアレな連中だったね。」

ホント女って生き物は感情で全てを狂わせるからバカバカしいよね」

「あーッ、今の発言は今コンプラ違反ですよ、炎上確定ですわね!!」

「悪魔が口が悪くて何が悪いのさ。」

おっと、君のダンナも女々しきは同じくらいだったっけ。それは配慮が足らなかつたよ」

「……ぶっ飛ばしますよ」

「あはは!! 人間だった頃の君に聞かせてやりたい言葉だね!!」

あのアリサの奴と大して変わらない、くだらないバカな女である君にねえ!!」

彼とは昔、そこそこ仲が良かったのですが、この人は神様が大嫌いなので今の私とは折り合いが悪いのです。

ちよつと残念。

「まあ、情けなさなら僕が居るのに気づいてるくせに顔も出さない情けないどころその女神も変わらないか。」

もしかしてアレかな、もう僕如きなんて構うなんて無駄なことではなつて事かな?」

相変わらず、全方位に敵を作るスタイルですねえ。

ほら、出てきちゃつた。

「くだらん、見逃してやっているのが分からないのか」

「挑発したらすぐ乗るの、本当に変わらないねえ。」

ああそうだった、神様つてのは変わることも出来ない憐れな存在だったね!!」

「それはお前も同じだろう、このクズ悪魔めが!!」

「まあまあ、二人とも、喧嘩はよしませうよ。そう言うのは生前で沢山やったでしょ?」

「……ふん、どうせ滅ぼす世界だ。お前の好きにすればいい」

私が二人を宥めると、リユーちゃんは帰ってしまいました。

「相変わらず、時と場合によつて対応を変える感情で動く主体性の無い奴。」

僕は違う。僕はお前とは違う意味で変わらない。

悪とは基準があつてこそ。そこに美学があつてこそ、人はそこに惹かれるんだ。

だから僕は絶対悪。変わることも無く、己を貫く者だ」

『悪魔』は楽しそうに笑っていました。

「また、もう一度見させてもらおうか。」

「お前の悔しがる顔をさッ!!」

本当に、この人はどこまでも邪悪じゆうだなあ。

………ええ、羨ましい限りです。

彼にはあと少しの間、探偵役を頑張ってもらいましょう。

あれ、言ってますでしたっけ？

誰も彼女が探偵役だなんて、言ってますからね!! ☆彡



## 天道

五度目のやり直し。

アリサは前回四人で決めた条約通りに、連絡を取り合おうと手紙でやり取りをし始めた。

「今度こそ、今度こそ、私はあの御方を救って見せる!!」

彼女の意気込みは今まで以上だった。

「いい加減に学習すればいいのに。馬鹿な奴だなあ」

「いきなり何よ」

「わからないのかい？」

これまで君は、アイオンの奴を何度も死なせた。

それに対する根本的な対策を取らないと意味が無いんじゃないの？」

要するに、である。

僕は彼女に善意で問題を提起した。

「君が目を離さなければ、奴の命を救うことはできるんじゃないかってことさ」

「……確かに、アイオン様が戦場に出なければ、戦死することもなくなるわね」

「そうさ、監禁まで行かなくても最低限軟禁してしまえば命は助かるだろ」

まあ、それは正真正銘このメンヘラ女がヤンデレメンヘラストーカー女にランクアップすることになるけど。

「だけど、そんなことしたってすぐ周りにバレるわ」

「少し頭を使えよ。」

魔王軍との初戦にでも敗走してみせて、二人きりになったら異空間にでも閉じ込めればいいじゃん。

魔王との戦いが終われば、解放する。前回は短期決戦だったし、健康を損なうほど長期間軟禁するわけでもない。

後からしれつと怪我してたから匿ってた、とでも言えば周り信じる  
だろ」

僕の案に、彼女は衝撃を受けた顔をしていた。

「だ、だけど……」

「まあ僕ならそうするって話だよ。」

これまで四回とも死んでる実績のあるやつだからね。

感情か、目的か、どちらを優先するかは君の勝手だよ」

仮にアリサが、奴に嫌われたくないってこの案を没にしても僕は別に構わない。

ただ、正攻法で奴を助けるのは不可能だろうと、僕は思っていた。

「……魔王を倒せても、あの御方が生きてないと意味が無い。

——私、やるよ」

「そうかい。まあ、君が忙しい間は僕が面倒を見てやるさ」

僕は彼女の覚悟を汲んで、優しさをみせてやった。

まあ面倒を見るのは僕じゃなくて、僕の部下だけだ。

「お願い。もう私は失敗するわけにはいかないの」

アリサは、どこか懇願するように、或いは自らに言い聞かせるようにそう言った。

§  
§  
§

かくして、アイオン拉致監禁作戦は成功した。

監禁場所はこの世界のどこでもない異空間の、僕の個人別荘を提供してやった。

魔王軍の動きが予想以上に早かった為、予定を繰り上げて連れてくる羽目になったけど。

「アリサ君、ここはどこだ？」

私をどこに連れて来たんだ？」

バカな女に騙されて連れて来られた間抜けな男は、見事完全な閉鎖空間へと閉じ込められた。

「アイオン様、ここなら安全ですから。」

魔王軍は私達が何とかします。

だから、だから魔王を倒すまで、ここで身を隠していてください」「何を言ってるんだ、君は!!」

私は貴族としての義務を果たさなければならぬんだぞ!!」

このマヌケは精一杯己の責務について主張していた。

だから、アリサはそれ相応の説得をしなければならぬと思ったようだった。

「アイオン様、聞いてください」

懇願するように、彼女は訴え始めた。

「信じられないかもしれないですけど、私はもう何度も同じ時間を繰り返しているんです」

「アリサ、君……」

「その度に、あなたから数えきれないほどの、多大な恩を受けました。だけど、私はそんなあなたを死なせてしまった。

それだけは、それだけは!! それだけは認められなかった!!」

血を吐くような叫び声だった。

彼女の気迫に、彼は圧倒されていた。

「私は、私は、そんな大層な人間ではない、ないのだよ、アリサ君……」  
そして彼からは絞り出すような声が漏れた。

「君は勘違いしているのだ……君は己の力で強くなれたじゃないか」

「違う!! 違うんです!!」

アリサは涙していた。

苦しみを堪えるように、顔を強張らせながら。

「私は、本当はどうしようもない落ちこぼれでした。

最初はそれが嫌で学院から逃げたんです。

冒険者なら、魔法使いは貴重だから重宝されると思って、それで……」

アリサの告白は、彼を神妙な表情で聞き始めた。

「でもダメだった!! 私はどんくさくて、いつもみんなの足を引っ張ってた!!」

いつもお情けで、皆の後ろをついて行った」

それはもはや、神への懺悔に似ていた。

「そして、これを見つけた。

この世ならざる、大いなる秘宝を」

彼女はどこかの遺跡から回収した宝珠を取り出した。

それを見て、彼は衝撃を受けたようだった。

「これを前にして現れた女神様に願いました。

—— 『私を理解してくれる人に出会いたい』と」

それはささやかで、同時に憐れな願いだった。

「そして時間と共に私が学院に戻った時、いつも私をイジメてた貴族の子弟が消えて、あなたが代わりにそこにいました。

私は恐怖しました。私が願ったせいで、一人の人間が消えてしまったのです……」

「アリサ殿……」

そして奇しくも、彼女の願いは叶おうとしていた。

今この時、彼女の罪の告白を受けて全てを知った男が誕生したのだから。

「だけど、今なら分かります!!」

貴方が、貴方様こそ女神様が私に遣わしてくれた神の遣いに違いありません!!

そんなあなた様を守るのが、今の私のやりたいことなんです!!」

ツブ、ははは!!

ああごめんごめん、馬鹿馬鹿しくて可笑しくて笑っちゃったよ。

本当に君は下らなくて愚かな女だよ、アリサ。

「ここに居れば、安全ですから」

そう言っつて、彼女は去って行った。

そして一人取り残される憐れな男。

ここは僕の別荘で、良い雰囲気ログハウスなんだけど、いかんせん次元の狭間に浮かんてるから景觀が悪い。

独りじゃ可哀想だから顔を見せてやろうか。

「やあ、災難だったね」

「子供……? いや誰だ、お前は!!」

「どうやら、見た目で人を判断するほどバカじゃないらしい。」

「僕は悪魔。人呼んで『赤い文字の悪魔』。」

「アリサは僕の契約者でね、アレの常軌を逸した力は僕の助力によるものだ」

「悪魔だつて？ 本物の悪魔なのか!？」

「神が居るなら悪魔も居るだろ、当然じゃないか」

「悪魔め、アリサ殿に何をしたツ!!」

「悪魔のすることなんていつだって変わらない。」

「営業して契約を取って、対価を受け取る。それだけのことだよ」

「そんな言葉で丸め込まれるものか!!」

「知ってるぞ、悪魔というのは悪辣で人間を陥れるのを好み、その魂の苦痛を糧として貪る化け物だとな!!」

「へえ?」

「僕は彼に近づいて、その顔を見上げた。」

「この世界において、悪魔の生態は解明されていないはずだ。」

「やはりお前は真つ当にこの時間を生きる存在じゃないな?」

「とりあえず確信を得た僕は、鎌をかけてみることにした。」

「すると、あの救済者気取りのアホ女神の手先だな?」

「ほら、やっぱり。顔に出てる。」

「わかりやすいな、こいつ。」

「あの女も酷いことをする。」

「アリサの願いを叶える為に差し向けられたのが、お前だ。」

「あいつはまんまとそれに引つかかった。」

「物語を彩るNPCとして死ぬことを運命づけられたお前に依存してしまふように仕向けられた」

「僕はあの女神のように全知でもなければ全能でもない。」

「だから知りうる情報から推察するほかない。」

「君は僕を悪魔だと罵ったけど、じゃあ君はどうなんだい?」

「彼女を騙して近づいて、苦しむだけ苦しませている」

「それは違う!! 俺は彼女を騙してなんてない!!」

「……まあ、君にも事情はあるんだろうさ。」

「だけど嘘は良くないよ。騙してない？ 騙しているとも!!」

「じゃあ何でさつき、彼女が全てを打ち明けた時に君は話さなかったんだい？」

悪魔は嘘を吐かない。その必要が無いからだ。

「嘘なんてモノは低俗な人間の精一杯の浅知恵に過ぎない。」

「なにより、僕の場合は嘘を吐いて騙すなんて、美学に反する。」

「そもそも人間なんて生き物は、騙すまでも無く勝手に墮ちるところまで墮ちる生き物だ。」

悪魔に頼ろうとする人間なんてなおのこと。

「君は彼女と対等なんだろ？ そう言っているのを僕は何度も聞いた。」

「だけど君は心の底ではそう思ってたんだろ？」

「くくくツ、なあアリサは飼うには良いペットだったろう？」

「お前に、お前に彼女の何が分かる!!」

「君こそ、彼女の何を知っている。」

まさか、あいつの言うことを全部真に受けたのかい？」

これは前言撤回をしないとね。

あんな女神の紹介した人材なんて、ろくな男じゃなかった。

「まあいいさ、神の手先なんてろくでもない。」

あの頭くるくるパーの勘違い女神なら尚更だし。

君は黙ってここでくつろいでいればいいさ」

「僕は部下たちを呼び出して、強張った表情になったこいつの監視を命じた。」

「どうせ考える時間は幾らでもあるんだ、好きなだけ悩めばいい。」

§ § §

「さて、語り手は神視点ことアンズちゃんに再びバトンタッチさせてもらいましよう。」

「仮にもここは彼の屋敷で、客が居る以上持て成さねばなりません。」

「君たちは依頼を請け負った仕事先のダンジョンにたどり着いた。」

入り口のマップはこれだ。さて、どうする?」

「探索値が一番高いのはアタシだから、アタシが一步前に出て索敵するよ」

カランコロン、ダイスが振られる。

「騎士見習いの少女は無謀にも一步踏み出した。

しかし、彼女は不運にも足元の罠に気づかなかった!!

仕掛けられたボウガンの矢が彼女を襲う。

奇襲扱いだから回避判定は出来ない。ダメージ判定だ」

「げっ、ボウガンのダメージ<sup>サイコロ五個</sup>って5?6じゃん!? ふざけんな!!」

「期待値で即死ですな」

「だからシーフを入れるべきだと言ったのです」

円卓を囲む四人が阿鼻叫喚している様を、『悪魔』はにやにや笑って見ている。

「赤錆さんの器用さは最高値だったから、シーフ無しでも行けると思ったんだけどなあ」

アイオンはすっかり彼らに打ち解けてテーブルゲームをしています。

彼と卓を囲むのは老紳士と、騎士服の男、そして従士の少女でした。

「んがー!! おいご主人、マスタースクリーンを見せろ!!」

「あんた絶対アドリブで罠を追加しただろ!!」

「あ、バレた? いやあお前なら引つかかかると思ってたよ」

「ふざけんなお前!! 道理で、このシナリオ前やったことあるから変だと思っただんだ!!」

従士の少女は『悪魔』の襟首をつかんでガクガクと揺さぶっていますが、彼はニヤニヤ変わらず笑っています。

「同じシナリオでも、回すメンバーによって展開が変わるのがTRPGの良いところだろ?」

「特定のプレイヤーに悪意がある不公平なゲームマスターが言うかこの野郎!!」

「判定そのものは平等だよ、勘違いしてもらっては困るな」

「んぎいいい!!」

「まあまあ」

アイオンにとってもこの光景はすっかり見慣れた光景でした。なにせ、この従士の少女は彼のお世話係。『悪魔』の暇潰しにいつも巻き込まれるのですから。

「とにかく、やり直しましょう。」

メンバーが一人欠けては始まりません」

「まあ、全ての障害を踏み越えて、武力に任せて攻略を行うのも乙なものです。今回は運が悪かったとしましょう」

老紳士と騎士が二人を諫めた。

「赤錆さんもそのくらいにして、そいつの悪ふざけは今に始まったことじゃないでしょう?」

アイオンはそんな風に言いながら、乱れた卓上のダイスや筆記用具を整え始めました。

赤錆、と呼ばれたのは従士の少女である。

ふんツ、と彼女は鼻を鳴らすと、自分の席に戻った。

「中途半端な重量の装備しか付けられないのが悪かったんだ。」

次はボウガンを喰らっても平気な重装備にしてやる!!」

「では今度は俺がシーフで作り直しますよ。」

ええと、名前はどのようなか。そろそろ名前のネタも尽きて来たな」

遊びにムキになっている赤錆を横目に、アイオンは新しいキャラシートを取り出しました。

さて、名前はどのようなか、と考えたところであの四人の顔が思い浮かびました。

「クリス、でいいか。性別は女性、と」

「……やっぱり、いいや。このキャラでもう一回やる」

アイオンがキャラクターの詳細を書き込んでいる最中、赤錆はそんなことを言い出しました。

「良いんですか、中途半端な性能ですよ、そのキャラ」

「だって、可哀想じゃないか。こいつはアタシの分身なんだぞ。」

「ここのキャラのシートを破いたら、こいつが生まれた意味は何



なんだよ」

そんな大げさな、とこの遊びに真剣になって感受性豊かな彼女の言動に苦笑するアイオン。

こんな善いヒトがなんで悪魔の従者なんかしているんだろうか、と思っている。

「それに失敗したからやり直すなんて、人生舐めてるよ。

でも死人は復活なんて、この時点じゃできないし……。

仕方ない、この子はまた別のシナリオで使う。今回のシナリオでは、ダンジョン内で合流するってことで新キャラ作るよ」

悪いけどちよつと待ってて、と周囲に断りを入れる少女に、皆は快諾しました。

彼の同僚の大人二人も、そんな彼女を温かく見守っているようでした。

「赤錆、別の持ちキャラを使っても構いませんよ?」

「え、教授、それはズルいよ。この間の連続シナリオのキャンペーンで最高レベルまで育ったのしかないし」

「おや、そうですか」

老紳士の提案に赤錆は首を振って遠慮しました。

「それにしても、キャンペーンごとに世界観の設定ってゲームマスターによって変わるじゃん?」

この間も出身国の王族がはっちゃけてたけど、公式設定じゃ凛とした女將軍らしいじゃないか。

そこで本来の設定の女將軍がシナリオに出てきたらどんな反応すればいいんだろうな!!」

所謂、TRPGあるあるで身内同士で盛り上がり始めた面々でしたが、アイオンはふと何かに気づいたように顔が強張りました。

「六種類の、世界?」

六回戻った、のではなく、六種類。

くそッ、俺はなんでそんな根本的なことに気づかなかったんだ!!」

アイオンは席を立ち上がり、卓上を見下ろしました。

それこそ、私達神々のように。

「おかしいじゃないか!! なんて同じ世界が六種類もあるのか!!」

「なんだ、今更気付いたのかい?」

『悪魔』はマスタースクリーンを折り畳み、笑いかけました。

「この世界の構造、そして本質に」

ニヤニヤと笑う『悪魔』に、アイオンは背筋が凍るような思いでした。

「でも一番重要なのは、それじゃない。

一番重要なモノが、この世界には欠けているんだ」

『悪魔』は己の従者たちと、彼を順番に見ました。

「ゲームの途中だけど、そろそろ行こうか」

この人間観察が趣味の『悪魔』は、彼が真実にいつ気づくのか試すように、特等席でそれを見ていたのです。

「なんだご主人、急に。まあ早く帰って来いよ。」

アイオンもな。夕食の準備しとくから」

なんにも知らされてない赤錆は、遊び道具をまとめながら二人にそう言ったのでした。

「どうして……」

死に揺蕩うアリサの意識が、覚醒しました。

暗闇に浮かぶ彼女を抱き抱える『悪魔』は、慈愛深く彼女を見降ろしていました。

「魔王があんなに強いだなんて、おかしい」

「おかしいことなんて、何一つも無いよ」

聞き分けの無い子供に諭すように、『悪魔』は言いました。

「——『君たちは、愛されていないんだから』」

悲しいことに、その残酷な真実を頭に入れる余裕は彼女には有りませんでした。

「もっと、もっと強くならないと!!」

じゃないと、あの人を助けられても意味が無い!!」

「そうだね、じゃあどうしようか?」

アリサは沈黙しました。

しばらく考えた後、彼女は胸元のブローチを見下ろしました。

「そうだ」

そして彼女は禁忌と呼ばれる秘術が、何故に禁忌なのか、その本質に触れようとしていました。

「あなたは言ったよね、これまでの私は、時間が戻っているわけじゃない、先生に習った並行世界の移動の概念に近いです」

この世界に、並行世界の概念なんてありません。

だって、彼らにそんな知識は必要無いのですから。だから、彼も気づくのにここまで掛ったのです。

「なら、出来るはず」

彼女は感覚を頼りに、引き寄せ始めました。

そう、既に滅んだ——己自身の魂を。

「協力して、みんな!!」

あなた達が、私であるならば!!」

滅びた世界の四人のアリサの魂が、集結していきました。

ヒトの生死を冒瀆するネクロマンシーよりも尚おぞましい、人間の根源を弄ぶ魔導の秘奥。

二の二乗、三の三乗、四の四乗、そして五の五乗。

魂宿るブローチを含めた、極限を超えた力がたった一人に集結していく。

そして彼女は、自身を神にも悪魔にも似た極地へと辿り着いたので

それを持って、魔王へ戦いを挑もうと生者の世界へ降り立とうとしました。

ですが。

「悪いけれど、その力はレギュレーション違反だわ」

そんな彼女の前に、全てを知るこの世界の管理者が現れたのです。

## 地獄道

「さて、最期の審判を始めましょうか」

運命の女神が、そう宣言した。

それはいつそのこと滑稽な物言いだったが、それを聞く人間たちは冗談では済まされなかった。

「その前に、アラン。」

アリサは何と出会った、そこで何を聞いたんだ」

「……………」

俺はイリーナ殿の言葉に答えられなかった。

それだけメアリース様が語った事実は残酷だったのだ。

「起きなさい、アリサ・クローネン」

俺たちの様子など気にすることなく、アンズ様は指を振るった。

たったそれだけで奇跡はなされた。

「…………え、あれ、私は…………」

致命傷を負ったはずのアリサ殿が、目を覚ました。

そして、目の前の強大な存在に目を見開く。

「また、私達を弄ぶつもりですか!!」

どうして、なんで神様はいつもいつもツ!!」

彼女は、生殺与奪が自分に無いことを悟ったのだ。

「アリサ殿」

「ま、魔人将がなんでツ」

「私だ。君なら分かるはずだ」

俺は彼女に呼びかけた。

驚く彼女は、すぐに俺の正体に気づいた。

「そんな、どうして、アイオン様がそんなお姿に!」

「…………話せば、長くなる」

本当に、本当に長く無意味な徒労の旅路を。

「ふッ、ふふッ、そういう『シナリオ』だったんですね」

全てに裏切られていたと知った少女は、泣きながら歪な笑みを浮かべた。

「『今回』で、私は各地を伝承を片っ端から当たりました。

どうして、どうして気づかなかったんだろう。あんな穴だらけの、嘘っぱちの偽りを!!」

俺が彼女を見かけたのは、恐らくその最中だったのだろう。

「もう嫌」

全てに絶望した彼女は、全てを諦め呪うほかなかった。

「——こんな世界、滅んじやえばいいんだ!!」

「アリサ」

生きること自体、苦悶と絶望に満ちた苦行と知った彼女に声を掛けたのは、イリーナ殿だった。

「殺し合いの後で馬鹿馬鹿しいと思うが、聞いてほしい」

「なに、なによッ」

「すまなかった。お前の孤独を理解してやれなくて」

彼女は頭を下げた。

彼女が冒険者なら、恐らくパーティの中心人物だったのだろう。

だとしたら、人間関係の不安要素に気づけなかった責任があるはずだ。

「私も、あなたがちよつと変わってるって思って、何も理解しようとしなかった。ごめん」

「……その姿、ステラなの?」

リリウムは苦々しい表情になって、イリーナ殿に続いた。

「よかったなアリサ、このアホ二人はようやくお前がボツチ女だって気づいたみたいだぜ」

「クリス……」

「笑えるだろ、お前みたいな根暗が私達に馴染めてるなんて、本気で思ってたんだぜ、ウケる」

二人と対照的に、クリステイーンは仲間全員を嘲笑っていた。

「……今更」

彼女達は本当の意味で分かり合えたはずなのに、それはアリサ殿の神経を逆撫でする結果に終わった。

「今更それがなんだっていいのよ!!」

私達がいっ、どこで友達になっただっていいの!?

謝られたってあなた達の自己満足じゃないツ!!

なに!?! じゃあ今から仲良しごっこでもしたいっての!!

そういうの迷惑なだけドツ、私の事を知ったからなんだっていうの、私が独りぼっちなのは変わらないじゃない!!

あなた達のそう言う無神経なところ、初めから大嫌いだった!!

お互いに理解し合えれば仲良くなれると思ってるの!!

私は最初から仕事だけの関係のつもりだった、それは今もこれからもずっと、全然ツ、変わらないから!!

私は、私はツ、ずっと独りだったんだから!!」

ただ言いたいことだけをまくし立てる、感情の発露。

支離滅裂にも聞こえる叫びは、彼女の魂からの叫びだった。

「……アリサ殿」

「近づかないでツ」

俺が声を掛けようとしても、逆効果だった。

「アリサ殿、女神メアリース様から何を聞いたか、話してくれるか?

それをみんな知りたがっている」

あの温厚で内向的な彼女が、ここまで錯乱してしまうような事実を彼女の口から言わせる鞭打ちに等しい行いを自覚しつつ、話を促した。

「……そんなに知りたいなら、教えてあげる」

ある種の自虐的な笑みを浮かべながら、アリサ殿は話し始めた。

§ § §

「あなたは……」

アリサ殿はもうひとつの神性と遭遇した。

「我が名はメアリース。文明の最果てを見渡す、人類文明の概念そのものだわ」

人形のように整った肢体と美貌を持つ女神が、彼女の前に降臨したのだ。

「どうして、どうして私の邪魔をするの!!」

「貴女の行使しようとした魔法の規模は、この私が規格しているこの世界のレギュレーションに違反するの。」

故に強制的に停止させてもらったの」

「何を言って……」

「端的に言うなら、この世界の管理者として、あなたの行おうとした危険行為を停止させた、というだけのことよ」

メアリース様は困惑する彼女に丁寧の説明を行った。

「管理者……? 神様だっというの!?!」

でも、あなたのような存在はどここの文献にも……」

「そんなはずはないわ。」

ちゃんとあなたの世界にも私の存在は記してあるわ。——ほら」

メアリース様は指を鳴らすと、この世界の成り立ちに関する文献を呼び寄せた。

そして、開かれたページにはこの世界の創世神話が書かれていた。

「……この世界の造物主は、この世界の完成を見届けるのと同時に立ち去った……」

「そう、それがこの私ってわけね」

その一文を読み上げたアリサ殿に、メアリース様は満足げに頷いた。

「立ち去ったはずの神様が、なぜ今になって……」

それに、管理者ならどうして魔王を放置するんですか!!」

「なぜって、この世界に魔王の派遣を要請したのがこの私だからに決まってるじゃない」

さも当たり前のように、メアリース様は答えた。

その答えに、アリサ殿は愕然とした様子だった。

「なんで、どうして……この世界を創ったはずのあなたが!!」

「……なんで、どうして？ いいえ、逆よ。」

この私が創造したから、この私が滅ぼすのよ。

——貴女はオモチャで遊んだ時、最後には片付けるでしょう？」  
それは、実にあんまりな例えだった。

「わ、私達を、オモチャだつて言うんですか!!」

「……下を見てみなさい」

メアリース様が指を振るうと、この次元の狭間の景色が変わった。

眼下には、円卓状のこの世界が広がっていた。

「この世界が、なんだつていうんですか!!」

「よく、見てみなさい」

眼下の大地が小さくなっていく、雲を突き抜け更に上から俯瞰すると、ようやくこの世界の実体が現れた。

「え……」

それは信じられない光景だった。

まったく同じ世界が無数あるのだから

「これは魔王が現れる前の、この世界の姿よ。」

この世界とは、この円卓状の大地の総体なのだわ」

だが、その大地が一つずつ破壊され、崩れ落ちる。

またひとつ、またひとつ、それが五つ。

「では、教えてあげましょうか。この世界が何のために存在したのかを」

破壊された大地が、巻き戻って行く。

この世界の真実の姿が、過去に遡って映し出された。

『ああ、残念だ。死んでしまったよ!!』

『また新しい駒を選ばなくてはな』

『くそッ、なんでそんな初っ端の冒険で死んでしまうんだ!!』

『やったぞ、私の駒がドラゴンを倒したぞ!!』

『なんてことだ、こんな偶然でドラマが起こるとは!!』

『これだからこの遊びはやめられないのだ』

円卓の大地を、囲んでいる巨人たちが人々の挙動に一喜一憂してい



た。

いや、違う。あれは巨人などではない。

「あれは、この遊戯盤の世界に訪れた神々よ」

「ゆうぎばん……？」

アリサ殿は震えながらメアリース様に問い返した。

まるで脳が理解を拒むように。

だが、メアリース様の語りは止まらない。残酷なこの世界の真実を。

「あなた達は、神々の娯楽の駒として創造された。

あなたはオモチャ扱いは嫌みたいだけど、そもそもオモチャなんだから仕方ないじゃない」

——この世界は、神々の卓上。

『人々を駒に見立て、その営みを娯楽として遊ぶ神々の遊戯盤だったのだ』

「あ、ああ……」

「そしてなぜ、この世界を滅ぼすのか、だったわね」

何かをするまでも無く、巨人の如き神々は消えていった。

「それは、『単純に飽きられたからよ』。

誰も遊ばないコンテンツのサーバーを、いつまでも維持するなんて資源の無駄じゃない」

「……私たちは、愛されてなかった」

「より正確に言うなら、愛されていた、のよ」

残酷な、無情な真実だった。

俺たちは、神々に捨てられた存在だったのだ。

「でも、他の神々が愛さなくなっても、あなた達を創造したこの私は違う。

あなた達は私の愛すべき『作品』なんだから」

メアリース様は女神の微笑みでアリサ殿に笑いかけた。

「私はちゃんと最初から、あなた達を人間として扱ったわ。

そして今、魔王の到来という最終段階へと至ったの」

そして、他の誰でもない、この女神こそが、誰よりも人々の営みを

愉しんでいた。

「魔王を打倒し、あなた達はその尊厳をこの私に示したその時、あなた達は駒ではなく人間として自己を確立するのよ」

大いなる人類の造物主は、どこまでも残酷にこう言った。

「だけどそれが出来ないのなら、この世界は存続する価値がないってことだわ」

これは養鶏場の卵と一緒だ。

規格に見合わない卵は選別され、価値無しとして分けられる。

メアリース様にとって、基準を満たした規格を持った存在のみが“人間”なのだ。

「私は人類文明そのもの。」

魔王に相対した貴女の働きは実にこの私を満足させたわ。

貴女は人類の価値と意気地を示したのよ。

あのメスガキの差し金というのは不満だけど、あなたはそれに耐えてここまで来た。

私はあなたの価値を認めましょう。最期まで、あなた達の行く末を見守らせてもらうわ」

メアリース様は惜しみない賞賛をアリサ殿に送った。

しかし、当人にはそれがまったく届いてはいない様子だったが。

「……私が、誰の差し金ですって……?」

「あなた達も会ったでしょう?」

貴女にはアンズライールと名乗ったはずでしょう?

——あいつこそが、この世界に訪れた最後のプレイヤーなのよ」

§ § §

全てを、アリサ殿は語り終えた。

ガタン、とそれを聞いたステラが崩れ落ちた。

「姫様!!」

すぐにソフィア殿が彼女を支えたが、彼女も表情は真っ青だった。それだけ、アリサ殿が語った真実は衝撃的だったのだ。

「この世界は、神々の遊戯盤、私達はその駒だって……」

「本当なのですか、女神様!!」

ソフィア殿がアンズ様に声を荒げながら問うた。

「私が言えることはひとつだけ。

ただのプレイヤーに運営のサービス終了の告知はどうにもできないと言うこと。

あなた方がこの世界を守りたいのなら、あのクソ女神にあなた達が惜しいと思わせなければならぬのです」

アンズ様は、意気消沈している四人組を見やる。

ようやく四人揃ったのに、これから世界を救う面々にはとても見えなかった。

「こんな無価値な世界、滅べばいいんだ!!」

泣きじゃくるアリサ殿は、子供のようにそう言った。

「私はもう、魔王となんて戦わない!!」

この世界が無価値だから滅ぼされるのなら、これ以上ないほど大歓迎だわ!!」

あんた達も、私をイジメた奴らも、全員無価値で消えていくんだから!!」

アリサ殿の泣き声が、昏い愉悦の笑い声に変わっていた。

「ねえ、アイオン様」

この世の全てを呪うような甘い声で、彼女は俺に語り掛けてきた。

「貴方も、この世界に価値が有ると思うの?」

「アリサ君……」

「あの時は申し訳ありませんでした。

もう私は何も望みません。ただできれば、最期はあなたの側に居させてください」

ひし、と彼女は俺に縋りつくように抱き着いて来た。

「分かってるだろう、アリサ君。

俺は最初から、アンズ様の命令で君に近づいたんだ」

「もう良いんです、どうでも。そんな細かいことなんて。

あなたは私を認めてくれたから。もうそれだけで私は……」

「……アリサ君」

もう彼女は、どうしようもないほど傷ついていた。

「アンズ様、俺には彼女を責めることなんて出来ません……」

「それがあなたの答えで良いんですか？」

アンズ様の最終確認。

俺はこの時、この世界と一時の感情を天秤に掛けようとしていた。

俺が頷こうとした、その時。

「——それは困る」

黒衣の、子供のような『悪魔』が現れたのだ。

「ラスト直前でリプレイTRPGにおいて、あるシナリオをプレイしたプレイヤー同士のやり取りなどを記録した単行本やプレイ動画等を指す。が途切れてたんじゃ興覚めだ。

お前がやらないのなら、僕が代わりにやろう。別に良いよな？」

「私は別に困らないので構わないですよ」

「そうかい、いい加減この馬鹿女に鬱憤が溜まってたところなんだ」

『悪魔』はそれだけアンズ様に聞くと、俺に縋りつくアリサ殿に向き直った。

「おい、救いようのない大馬鹿である我が契約者アリサ。

逃げ場が無くなって諦めるとか本当にどうしようもないな」

「おい、そんな言い方……」

「女の涙なんか尻込みする腰抜けは黙ってるよ」

『悪魔』は俺のことなど一言で切って捨て、アリサ殿の背に語り掛けた。

「お前の愚かさをもう一度教えてやるよ。

僕は言ったよな、なぜこいつを救うことを僕に望まなかったのか、と。

……なあ、どうしてお前はこいつらに頼らなかつたんだ？」

アリサ殿の体が震えた。

水を向けられた彼女の仲間三人も、顔を上げた。

「お前がどう思ってるかはともかく、こいつらはお前を仲間だと思っ

ていた。

お互いに支え合って目的を達成するのが冒険者のパーティってものなんだろう？

その努力を怠ったくせに一方的に悪しざまに罵るのはいかなもんなのかな」

「いや、私達にも」

「おまえはッ!! 独りなんかじゃない、誰かに助けを求める勇気のない意気地なしの陰キャ女だ」

イリーナ殿の声を遮り、『悪魔』はまくし立てる。

「いつまで鳥籠に閉じ込められてるつもりだ？

いつまで鍵のかかってない鳥籠にいるつもりなんだ？

お前が失敗したのは、全部一人でやろうとしたからだ。

一度でも誰かを頼ろうと思ったか？ お前は結局僕に助力以上を

求めなかった。それがその証拠だ」

俺の袖を握るアリサ殿の手の力が強まる。

彼女の身体が震えて、悔し気な声が漏れた。

「一人で好き勝手して、独りよがりの挙句に諦めるとか最悪だね。

まあ、お前みたいな陰キャにはふさわしい有様じゃない？

あの二人組の馬鹿神様が求めているのはヒロイックな英雄譚だし、お前みたいなのは初めからミスキャストだったってわけだ」

『悪魔』は一切の遠慮など無く、本心から心底アリサ殿を馬鹿にしていた。

人間の弱さと愚かさを嘲笑していた。

だけど、俺は知っている。彼の従者は、その愚かな人間ばかりなのだ。

そして彼の言葉は、他の三人にも思い当たるところがあるのか、苦々しそうな表情をしていた。

「力を得たところで、本質は変わらない。

お前は無価値のままにこの世界と共に心中すればいい。

お前の嫌いなお前のままで、ここで朽ち果てればいいさ」

「……………」

「いよいよ、アリサ殿も我慢の限界が来たようだった。

「うるさいうるさいッ、黙ってれば勝手な事ばかり言ってる!!」

「勇気を出すのがどれだけ大変か知らないくせに!!」

「誰かを信じるのがどれだけ怖いか知らないくせにッ!!」

「自分が誰かの信用を裏切るかもしれないのがどれだけ恐ろしいか知らないくせに!!」

「血も涙もない悪魔のくせにッ!!」

「知ってるぞ。」

「僕は悪魔だけど、人間を辞めたつもりは無いからね」

「アリサの激情に対して、『悪魔』は自分にしか聞こえない声でぼそりと呟いた。

「アリサ、私もお前と同じだ。」

「自分一人で解決しようとして全てを失うところだった」

「泣き崩れるアリサ殿に、イリーナ殿が肩を叩いて彼女の頭を胸に抱き寄せた。

「一人で勇気が出ないなら、私達も一緒に勇気を出そう。」

「もう、あなたを独りにしないわ……」

「リリウムがそっとアリサ殿の背中をさすりその身を寄せた。

「友情の結束なんて、正直オレは馬鹿馬鹿しいって思うぜ。」

「だけど、俺たちは一蓮托生だ。結束が必要なら、お互いの命を守り合う血盟でも構わないだろ。」

「慣れ合わなかったっていい、力を貸せよアリサ」

「最後にクリスティーナが彼女の心に訴えかけた。

「ごめんなさい、ごめんなさい。」

「わたし、ずっとみんなが、怖かったんです」

「アリサはこの時初めて、みんなに本音を口にしたのかもしれない。

「バラバラだった彼女達四人は、この時になってようやく本当の一つのパーティーになったのかもしれないかった。」

「さて、私は概ね満足ですが、私達の契約もこれまでです。」

「貴方も最後にこれと言って活躍も無いまま終わりにしますか？」

「そう言われても」

良い雰囲気がアンズ様で台無しになってしまいそうだ。

「まあいいか、私もこれで本当にお別れですし。」

機嫌も良いので最後に本当に何か一つ願い事を聞いてあげますよ」

そしてアンズ様はこの土壇場でそんなことを言い出した。

『悪魔』はそんな彼女を軽蔑したように見っていた。

「女神様。我々の願いはただひとつだけです」

パーティメンバーの意見をまとめたイリーナが、別れ際の願いを女神に伝えた。

「我々に、もう一度やり直すチャンスをください」

「やっぱり、私はお前たちが嫌いです」

しかし、アンズ様はきつちりとその願いを聞き届けてくれた。

「さようなら、救いに溺れた愚かな人たち。」

私は運命の化身ですので、嫌でもあなた達を命運を見届けていますよ」

その声をきっかけに、俺たちの意識は途絶えた。

## エピソード 徒労の終わり

「解せんな」

世界の最果ての城にて、魔王は呟いた。

この世界を滅ぼす為に派遣された彼は、いくつかの世界を破壊すれば連鎖的に全てが崩壊すると聞いていた。

彼は己の仕事は完璧にこなしたはずだった。

彼を遣わした神々もとつくに人々を見放している。

この世界の存続の必要は無いに等しい。

だと言うのに、彼の上司は「泣きの一回」を受け入れた。

これ以上見定めることなど無いのに。これ以上人類の不甲斐なきに失望する必要はないのに。

だが、もう一度あの勇者たちが自分たちに挑みに来ると言うのなら、それは悪くない。

魔王の望みは、神々の望み。

ヒトの可能性を信じる二柱に創造された彼は、人類を試さずにはいられない。

「いずれにせよ、これで最期だ」

そうして眼を閉じ、微睡んでいた魔王に報告が入ったのはすぐだった。

魔王城に侵入者が来た、と。

§ § §

「私はもう、魔王とは戦わないわよ……」

「その必要はない。安心しろ。」

いや、より正確に言うなら勝つ必要は無いと言うべきだろう」



最期のチャンスとしてまだ無事な世界に移動させられた彼女たちは、すぐに連絡を取り合って集結した。

弱気な学徒に、ただの宿屋の娘は安心するようにそう述べた。

「そう言えば、アリサには詳細をちゃんと説明してなかったな」

「私達だつてリスクの高い賭けはしないわ」

神官の娘と、パン屋の娘はそう確認し合った。

「ああ、我らは失敗出来ないからな。」

勝算の高い賭けしかしない」

「それが、魔王城に乗り込むって話なの？」

「今なら警戒されていないからな、そしてそのチャンスは二度とないだろう」

「ところでさ」

パン屋の娘——ステラは二人の会話を遮ってクリステイーンの方を見やった。

「何で私達の立場が元に戻ってるのに、ちゃっかりあんただけ前のままなの？」

「そりゃあ、オレの願いが叶った結果だろ」

クリステイーンはみすぼらしい一般庶民に戻った三人を見渡し意地悪く笑った。

「……まあ、一人だけズルいなんて言わないわ」

「我らも流石に懲りたしな……」

「結局は高望みしないのが一番だよ」

すっかり後悔している元姫と元騎士の娘は、最後まで庶民だったアリサに溜息を吐かれていた。

「とにかく、城内のマップは頭に入っている。

例の『お宝』はちゃんとあるんだろうな? ——アラン」

クリステイーンはこの場の最後の一人、花屋の息子に声を掛けた。

「ああ、ブツは備品の保管庫にあるはずだ」

「よし。じゃあ行くか、アリサ頼んだ」

「うん」

段取りの最終確認を行い、お互いに顔を見合わせた五人は顔を見合

わせ頷いた。

そして、アリサが魔法を発動させた。

その直後、彼女達の姿が掻き消えた。

「敵襲、敵襲!!」

そして魔王城は襲撃に遭い、大騒ぎとなった。

「クリステイーン、任せた」

「おうよ。そつちも死ぬなよ」

五人は二手に分かれた。

「フレアブラスト!!」

アリサが爆発魔法を放った。

魔王城の二階部分が丸ごと吹き飛んだ。

焼け焦げた敵が悲鳴を上げているのが聞こえた。

「これ以上好きにさせるな!!」

隊列を組んだ魔物の軍勢が、彼らに押し寄せて来た。

魔法や弓矢の遠距離攻撃が雨のように降り注いだ。

「任せろ、この程度なら問題ない」

イリーナが前に立ち、タワースールドで地面を鳴らすと防御範囲が拡張し見えない壁のようになって攻撃を防いだ。

「アラン!! 合わせて」

「ああッ、いくぞステラ!!」

攻撃をやり過ぎすと敵の前に剣士二人が躍り出た。

「鉄斬一閃!!」

「斬魔ノ太刀!!」

敵に有無を言わせぬ剣舞の嵐。

ステラが前衛を切り崩し、後衛をアランが撫で斬りにした。

「魔力感知発動!! 敵影確認、数五十ツ、第二陣来るよ」

アリサが魔法のソナーを発動させると、新手の接近を察知した。

「姫、ブランクがあるにしては技の冴えは衰えませんか」

「姫はもうやめて、アラン」

彼の軽口にステラは頬を赤らめて睨み返した。

その後、光弾が降って来た。敵の攻撃だ!!

「油断するな、馬鹿者」

二人の前に割り込んで、攻撃を防いだイリーナが二人を叱責する。

「悪い!!」

「借りは戦働きで返すわ」

さあ、もう一戦だ。

「あつた、これだ!!」

その頃、四人を陽動としてクリステイーンは魔王城の備品保管庫に侵入していた。

ここは宝物庫のように防備が嚴重ではない為、開錠ひとつであつさり入れた。

彼女は目的の物を奪取すると、すぐにその場を後にしたのだが。

「困りますね、備品の持ち出しには申請書類を提出してもらわなければ」

「げッ」

彼女の前に現れたのは、魔造将——即ち、女神メアリースの化身だった。

「あなた方が何をするつもりなのか、何を仕出かすつもりなのか、概ね把握いたしました。」

なるほど、妙手かと判断いたします」

「主上に告げ口するかい?」

イリーナが建てた作戦は、結局のところこの世界の管理者たる女神メアリースが否と言えれば不成立なのである。

彼女らのやろうとしていることは“可能”なだけで、ルール上はまったく問題ないが、ゲームマスターの神経を逆撫でする行為だった。

「……いえ、私もあなた達の成すことに興味があります。」

貴方も知っているでしょう、魔王様が派遣されただけの世界が存続を許されたか」

「ああ。……あんたは、見逃してくれるのか？」

「我々は総体なのです。本体が全ての決定権を握っているように見えるだけで、あれはそういう役割ロールに過ぎません。」

あの本体の振る舞いはかつての生前の行動に則った表現をしているだけ。

本体と我ら分体に上下はありません」

「それは……」

クリステイーンは実はかなりの衝撃を受けた。

神とは絶対。無限の女神とも称される存在の主人格の振る舞いは全て、*“演出”*に過ぎないと彼女は語ったのだ。

「……ならもつとマシンに出来ないんですかね」

「我らは人類の概念そのもの、人間味が無ければ親しみも湧かないでしょう？」

女神の化身は*“お茶目”*に笑ってみせた。

その仕草に、クリステイーンは背筋にゾツとした。

「ですが、忘れないことです。」

——私は人類の愚かさを熟知している。あなたのすることが安易な道だと思わないことです」

「たしかに、そうかもな。」

人間つてのは下らない馬鹿な連中ばっかだ」

だけど、クリステイーンは笑ってみせた。

どこまでも傲岸に、不遜に。

「だが、オレはオレを信じている。」

その他ならぬオレが、勝算ありとしてこの賭けに乗ったんだ。

他の有象無象はともかく、このオレを舐めんじゃねえ」

「そうですか、楽しみにしています」

どこまでも無機質な女神の化身に見送られ、クリステイーンは立ち去った。

「勇者たちよ、人類を照らす光となるのです。」

あなた達が、人類の可能性を示すのです」

「第五陣、来るよ!!」

「了解!!」

陽動を務める四人は激闘を未だ繰り広げていた。

魔王軍は無尽蔵、無制限の軍勢。終わりなど来ない。

「おいッ、お前ら!! 目的のブツは手に入れた!! ずらかるぞ!!」

「よし来た!!」

だがそこにクリスティーンが合流した。

彼らは勝利条件をクリアした。

「待機呪文解放!! 空間転移、発動!!」

アリサがあらかじめ詠唱し待機させていた魔法を解放した。

即座に五人の姿が掻き消える。

こうして、魔王城の内部をかき回すだけかき回した五人は、嵐のように立ち去ったのだった。

§ § §

「はあ、はあ、上手く行ったな」

「やっぱり、機動力こそが正義だな」

まんまと鉄火場から逃げおおせた五人は、汗を拭って息を整えた。

「これが、『鍵』か。まさかこんなものとは……」

クリスティーンが魔王城から奪ってきたのは、小さな棒状の物体だった。

それはこの世界の誰にとっても、データに存在するだけで価値のない代物だった。

そのはずだったモノを、イリーナは全てを逆転する鍵に変えた。変える積りなのだ。

「おい、なに安心してやがる。本番はこれからだろ。」

これを手に入れることは、第一条件に過ぎないんだ」

「分かっているさ」

だが、イリーナは不敵に笑った。

運命シナリオを書き換える準備は終わったのだと、確信したからだ。

「それじゃあ、始めましょうか。」

—— 私達の、本当の勇者行脚を」

そう口にしたステラは、どこか皮肉っぽく自虐的な笑みを浮かべていた。

一か月後。

「陛下ッ、此度の争乱の原因たる自称勇者一行を捕らえました!!」

「連れて参れ、余が直々に沙汰を言い渡す」

ここはヒルデン王国、その王城。

国王は最近国内を騒がせている危険分子を捕らえたと報告を受け、執務室から謁見の間へと移動した。

危険分子たちの犯した罪は、国家騒乱。

手続きを省いて王が直々にそして速やかに処刑を言い渡す大罪だった。

そうして、罪人たちが連れて来られた。

「若いな。お前たちが自称勇者一行か」

縄に繋がれ、連行されたのは若い男女だった。

「罪状を確認しよう。」

お前たちが我が国内にて妄言を流布し、民衆を扇動していた。これに相違ないな?」

「我らの言葉が妄言という言葉以外は、概ね間違いありません」

勇者一行の一人——イリーナが口を開いた。

「たわけたことを。」

魔王が現れ、この世界は何度も滅ぼされているなどと、気が狂った邪教の妄言以外何物でもないわ!!」

王のそばに控える宰相が声を荒げた。

「……おや宰相殿、ご息女は息災でしょうか」

「貴様と娘が何の関係がある」

「なあ、イリーナ。さつさとやっちまおうぜ。」

この国は結局最後まで魔王軍に攻め滅ぼされたことが無いんだから、説得するだけ無駄だろ」

揺さぶりをかけようとしたイリーナだったが、そんな彼女にじれったく感じたクリステイーンが退屈そうに口を挟んだ。

「……聖光法国と魔法帝国の了承は得られた以上、ここで拘留され無駄に時間を浪費するのは下策か。」

——アリサ

「ウインドカッター」

次の瞬間、アリサの魔法が全員の拘束を切り裂いた。

彼らが自由を取り戻した直後、動いた人物が居た。

「ギルバード・クリファ伯爵!!」

ステラがかつての師にして恩人の名を呟いた。

彼は一太刀にて五人をまとめて斬り捨てるべく動いたのだ!!

「させない!!」

武装解除されないように髪の中に隠していたナイフで、ステラは彼の一撃を弾いた。

「アイテムボックス!! 宝剣をッ」

彼を無力化する為に、アランも虚空から剣を取り出し応戦した。

「その剣は、この世に二振りもない我が家の家宝ッ。」

それをどこで手に入れたッ!!」

「貴方からですよ、知らないのも当然ですが」

「戯言を!!」

かつての師、かつての父、その本気の太刀筋にアランも負けじと一合一合と刃を重ねていく。

「おいアラン、目的を間違えるな。」

「まったく、行くぞ、——全員、こつちを見ろ!!」

その直後、クリステイーンが手にした棒状の物体から光が放たれた。

「ぐッ、これは?!」

それを目にした、ギルバード卿の脳裏に見知らぬ光景がフラッシュバグする。

『筋が成っていないぞ、アラン!!』

『私の息子です。多忙極まる姫様の一時の慰めになれば、と』

『今まで言わなかったが、お前を養子に取ったのは、夢に出た女神の啓示であった』

『不安かね』

『私も初めはそうだった』

『自分の全てを出し切れればいい。』

『そうすればお前なら、必ず上手くいく』

『ああ、そうなのか。すまない、後を任せてしまうな……』

『このような……柔らかな姫様の手は、貴女様の幼い頃のことを、思い……出……し』

からん、と、ギルバード卿は剣を取り落とした。

「アラン……お前なのか」

「思い出して、頂けましたか……」

安堵したようにアランは剣を下ろした。

ギルバード卿は周囲を見渡すと、周囲の兵士や貴族たちも自身のうちが生じた未知の記憶に混乱しているようだった。

「あの光は……」

「あれは、別世界同士の同一存在の記憶を統一するための機械なんです」

クリステインが魔王城から奪ってきた棒状の物体、それは別世界の自分から記憶を継承する為の装置だった。

アランが魔人将だった時、リーパー隊へ説明を省くために使用した代物だった。

アランの話聞いたイリーナが、それを使えば人類を説得できると考えたのだ。

それこそが、この詰みの盤面をひっくり返す逆転の一手だった。「そんな説明じゃわかりにくいだろ。」



あれだよあれ、運命の女神様の奇跡でいいだろ」

「雑過ぎ……」

クリステイーンの物言いに思わずアリサがボソツと呟いた。

「さて、宰相殿、お久しぶりです」

「……そ、その方はイリーナ、なのか？」

「魔王との戦いの際には、お世話になりました」

イリーナが恭しく宰相に頭を下げた。

彼女は宰相とは見知った仲だった。この王国が魔王軍と戦うために改革が必要になった際、いつも手を組んでいた。

「此度が最後のチャンス故、人類を守る策を用意して参りました」

「だ、騙されるな!! そやつらは国家の敵だ、魔王に我らを売り渡してきたのだ!!」

そう叫んだのは、国王だった。

彼は青褪め、震えていた。彼も思い出したのだ、自身を何度も幽閉に追いやった、目の前の鉄の女のことを。

その時だった。

玉座の間の扉が開いたのは。

「レナスティ姫の御なりだ!!」

扉を開け、ソフィアが先導し己の仕えるべき者をエスコートした。

「陛下、見苦しいですわ」

本物の、正真正銘の立場を取り戻したレナスティ姫が現れたのだ。

「ステラ……」

ステラが彼女の登場に思わず目を見開いた。

「お前も、また、余を幽閉するつもりなのか!!」

「私は彼女らと共に、大いなる女神に出会いました。

彼女達の言葉の正当性は、私が保証します」

本来、国王を幽閉したのはレナスティ姫だったステラだったのだが、彼はそれを知る由も無いので大いに恐れていた。

「お父様……」

「来るな、来るな!! 衛兵、衛兵!! こ奴らを退ける!!」

国王の言葉は、誰にも届かなかった。

なぜなら、ここにいる面々は思い出していた。

彼と、彼女、どちらに治められた方がよかったか。

「誰か、誰かッ」

「お父様」

記憶の混濁で錯乱している国王に、しかしレナスティ姫はその足元に膝を曲げて彼の手を取った。

「今まで、ほったらかしにして申し訳ございませんでした。

もう一度、親子をやり直しましょう。もうあなたを遠ざけたりは致しませんから」

その言葉に愕然とした国王だったが、やがてゆっくりと俯いて頷いた。

「もうお父様をのけ者にしたりしません。

これからすることは、人類すべての同意が必要なのですから」

そう言って、彼女はこの場の全員に訴えかけた。

「姫様、助かりました」

「……ふふ、私が出てなくても何とかなつたかしらね？」

レナスティ姫は子供っぽくイリーナにウインクした。

「いえ、本当に助かりました。

今度こそ誰も取りこぼしなく、全てを救うつもりだったので」

レナスティ姫はイリーナの目を見て、他の四人の顔も見た。

全員、その言葉が本気だと理解し、彼女は微笑んだ。

「あなた達こそが、本当に勇者と呼ばれるにふさわしいのでしょよね」

こうして、全ての準備は整った。

更にひと月後。

「実に、意外だった」

魔王は地上を見下ろしながらそう呟いた。

彼は今、珍しく魔王城から離れていた。

魔王は城の奥にて待ち受けるべし、そんな美学に反して玉座から腰を上げたのは理由があつたからだ。

「魔王様、お加減はいかがでしようか」

魔王に侍る四将が一人、魔導将が問う。

「悪くない、此度の招待、実に興味深い」

彼らは今、空に居る。

空飛ぶ巨大な黒船に乗り、目的地へ向かっていた。

やがて、空の航海も終わりがやって来た。

彼が招待された会場に到着したのだ。

そこは、毎回派手に破壊したりしなかつたりする、聖光法国の聖殿だった。

国際的な会議にも使用されるここに、彼は招かれた。

「魔王様の御前である!!」

魔導将が会場に到着すると同時に宣言した。

そこには、この世界の各国要人、国主が勢揃いしていた。

「魔王様」

代表として、レナスティ姫が片膝を突いて彼の前に跪いた。

「我らこの世界の人類は、全面降伏いたします。」

そして我々全て、偉大なる女神メアリース様の庇護を受け入れま  
す」

「そう来たか」

魔王は思わず喜色を浮かべた。

「随分な賭けに出たものだ。」

人類の歴史とは、虐殺と迫害の連続だ。

人類の概念そのものたるメアリース様がお前たちを滅ぼすと言つたらその通りになる。全面降伏とはそう言うことだ。それでも構わないな？」

魔王は人類の乾坤一擲の策を瞬時に理解した。

イリーナが提案した逆転の根底破壊。シナリオオブレイク

戦って人が死ぬなら、戦いに持ち込まさなければいい。そんな逆転の発想だった。

その為の最低条件が、魔王城の備品の奪取だった。  
フレーパーテキスト  
在るだけの設定から、これってこうできるよね、とゲームマスター  
に提案する究極の理論武装。  
マンチキン

「全て、神に委ねます」

レナスティ姫は聖者のように微笑み返した。

「魔造将」

「ここに」

魔王の呼びかけに、女神の化身が影のように現れた。

「メアリース様の判断を伝えます。」

我が庇護を求める者を皆殺しにするなんて、そんな非人道的なことはできない。

——彼らの提案を受け入れる、だそうです」

しん、と静まり返った。

歓声は無かった。

ただ、誰もがやり切ったと言うことに涙をした。

記憶を取り戻した彼らは皆、疲れていた。全員が、アラン達の味わった地獄の繰り返しをその身に味わったようなモノだったからだ。

「驚いた、メアリース様がそのような判断をなされるとは」

「人類の意思統一は、ハッキリ言って困難を極めます。」

思想、文化、立場、性別、その他諸々を含め、人々は常にバラバラです。

——たとえばそれが、滅ぼされる直前になっても。

それを一つの意見に統一するのは、文句なしの偉業と言えます」

女神は、彼らの行動を評価した。

彼らは自分たちの価値を示したのだ。

「……此度の一件は、大変勉強になりました」

魔導将はこの稀有な方法で世界を救った人々を見渡した。

「我が最初の仕事か、このような案件だったのは実に興味深かった。

これより先、どれだけ世界を滅ぼそうとも得難い案件であっただろう」

魔王はそのように宣言し、彼らと同じ席に着いた。

「では、子細をまとめようか」

§ § §

エピローグ「勇者たちのその後」

「よし、アラン。頼む」

「任された」

俺は10フィート棒を取り出し、迷宮の通路の先を探った。  
プチッ

「あッ」

がらん、ゴロゴロゴロゴロ。

「大岩だああ!!」

俺たちは逃げ帰った。

「はあはあ、糸が切れて大岩が来るとか殺意高すぎだろ!!」

「このタイプのトラップは棒で感知前に別の方法で調べる他ないな」

逃げ帰った俺たちは、拠点の町で一息吐いた。

「やっぱり魔法で感知する?」

「魔法にも限りがある。魔法でしかできないことに魔法を使うべきだ」

アリサの提案に、イリーナは首を横に振った。

「逃げなくても、あれくらいの大岩なら私が斬り捨てたのに」

「あんな大質量では切ったところで止まるわけないだろう」

脳筋なステラの物言いに突っ込みつつ、酒場へと入った。

俺たちは席に着くと。

「イリーナ、なんで普通にアランの横に座ってるの」

「うん?」

「今日は私の順番なのに!!」

テーブルの俺の横に何げなく座ったイリーナは俺の顔を見てフツと笑った。

「彼は私の相棒だ、隣に居て当然だろ」

「はあ!？」

彼女の発言に俺は思わず声を上げた。

「もう一回殺し合う?」

「構わないけど、勝つのは私だよ」

「落ち着け、二人とも!!」

何とか殺気を漲らせる二人を落ち着かせると、俺たちはウエイトレ  
スに料理を注文した。

「やはりシーフは専門が居ないとダメだな。

こんな時にクリステイーンが居ればな」

「あいつ、今頃神官として働いてるのかな」

イリーナとアリサが、かつての戦友に想いを馳せていた。

俺たちは人類を救った。

だが、俺たちの故郷は元々撤去予定だったらしく、人類だけが助  
かった形だ。

住人たちはそれぞれ要望をだして、別の世界へ旅立っていった。

俺とイリーナ、ステラとアリサは冒険者の活動が主産業の世界へと  
身を置くことにした。

今日も俺たちはダンジョンに潜り、そこから資源を持ち帰る日々  
だ。

「アラン、やっぱり冒険者なんて辞めましょ。

一緒にスロウラに帰ってパン屋でもしましょう」

「ステラだけ抜け駆けなんて許さないから!!」

二人の言い争いも、慣れたものだった。

さっさと食事を終わると、露店を見回ることになった。

「なあ、アリサ」

「なんですか、アランさん」

順番なので俺の片腕に抱き着くアリサに、俺は胸の蟠りを口にし  
た。

「今にして思うと、お前がアンズ様に願って現れたのは、俺じゃなくて

あの悪魔だったんじゃないのかって思うんだ」

「だったら、何ですか？」

運命の相手じゃなかったら、一緒に成っちゃダメだと？」

「そうじゃないけど……」

アリサは胸元に手をやった。

かつてそこに有ったブローチを撫でるように。

「あんな他人を馬鹿にしたような奴、私の理解者なわけないじゃない。

私はもう諦めない。ずっとあなたの側に居る」

こうなったら彼女は頑固で、俺は流されるままになってしまう。

いつか答えを出さなければならぬのだろう。

何者でもない、誰でも良い誰かだった俺は、いつか掛け替えのない

誰かに成れるのだろうか。

それはまだ、分からない。

「あああああ!!」

その時、別の露店を見ていたステラの声が聞こえた。

どうした、とそちらを見に行くと、俺は目を見開いた。

「あら、アラン君。久しぶり」

そこに居たのは、レナスティ姫だった。

と言っても、その格好は庶民そのものだったが。

「姫様、どうしてここに!?!」

「どうしてもなにも、政治経験を生かして父上がこの町の議員に立候補しているのよ。

私も、ステラのお父さんと一緒にこつちでパン屋をすることになつてね」

ソフィアや孤児院の子たちも手伝ってくれるのよ、と彼女は生き生きと笑っていた。

「いつでもうちの店に寄ってね、サービスして上げるから」

俺の手を取って、可愛らしくウインクする姫様。

「いやはや、お前の周りは退屈しないな。アラン」

彼女に嫉妬心を燃やす二人を、横からイリーナが楽しそうに笑って見守っていた。

「お前たちの行いは、私も驚かされた」

クリステイーンはその師たる魔導将と共に、邪悪の女神リエーサセツタから言葉を貰っていた。

「やはりお前は私が見込んだだけはある。

これからのお前の働きに期待するぞ」

「勿体無きお言葉です」

二人は頭を下げると、女神の気配は消え去った。

「さーて、これでオレは晴れて未来の大神官か。

神サマに気に入られるとか、これでオレの将来は安泰だな」

「さて、どうでしょうな」

不遜な態度だが、師である魔導将はこの場は指摘しなかった。

「この業界にいるとよく言われることですが、神に好かれるのと嫌われるのは同じことである、と。

そううまくいくのでしょうかね」

「師匠は心配症だな。

安心しろって、いつかオレの師匠だって、周りに自慢させてやるよ」  
クリステイーンは彼女の知り合いが見れば目を疑うような屈託のない笑みを浮かべた。

彼としても、彼女の才能は知っているので大丈夫かと思いついた。  
しかしながら、彼の心配は現実となるのはもうすぐ先だった。

クリステイーンがフリー素材さながらにいろいろな世界に派遣されまくると知るのは、もう間もなくの事である。



「はい、これにて今回のセッションは終了いたしまーす」

「お疲れ様でしたー」

「おつかれー」

「お疲れです!!」

「いやー楽しかった」

女神アンズライールがルールブックを閉じると、卓を囲んでいた神々が拍手をしました。

「次はどんなシナリオで楽しもうか？」

「また同じ駒で遊ぼうかな」

「私も私も、今回のシナリオで愛着が湧いちゃった」

「賛成、でも次は別のゲームで遊びたいな」

神々は口々に此度のセッションの感想を言い合いました。

楽しそうに、笑い合いながら。

なぜなら、彼らは人間の営みを愛しているのですから。

今日も、明日も、これからもずっと、人間たちの生き死にに一喜一憂することでしょう。

「残念だけど、それも終わりだよ」

そんな中に、空気の読めない奴が現れました。

黒いローブの、子供のような外見をしたちっぽけな悪魔でした。

「誰かと思えば、下級悪魔が何の用だ」

「我々の遊びを邪魔するか」

「失せろ、さもなくなれば消えるか？」

「貴様など、我らのシナリオには不要だ」

神々が彼に敵意を向けた時でした。

タダの人間と変わりないほど弱々しい『悪魔』が、虚空から一振りの魔剣を取り出しました。

「ば、馬鹿なッ、なんで貴様のような木っ端悪魔がそれを!!」

「まさか実在していたのか!？」

「い、いや、たすけ——」

ざしゅ、ばさッ、ずしや

「か、神殺しの、魔剣——なぜ、お前のような悪魔がッ  
ぐしや

「……………私達神々は不滅の存在。

火を消しても、〃火〃と言う現象は消えません。

相変わらず、無駄なことをしているんですね」

「お前に言われたくないよ」

神々の血糊のように纏わりついた魔力を刀身から振り払い、『悪魔』はその切っ先を彼女に向けました。

「人間の意思は、人間だけのものだよ」

「試してみますか、それを」

「ああ。お前もずっと、それを望んでたんだろう？」

女神は微笑み、悪魔は大上段から刃を振り下ろしました。

ああ、そして、幕が下りた——。

く FIN く

## あくまで客人

「はあ、困ったな……」

俺はギルドに張り出されているメンバー募集の張り紙を見て溜息を吐いた。

ここは迷宮都市。

ダンジョンでの資源を主産業に発展し、成長してきた。

探索ギルドはダンジョンに潜る冒険者を統括し、同時にダンジョンへとけしかける。

具体的には、ランキングがあるのだ。

ダンジョンの資源を換金し、その額に応じて知名度を得られる寸法である。

勿論、ランキング上位の冒険者パーティはギルドに優遇されるし、町の人達からも覚えも良くなる。

周囲からおだてられるのは気分が良いモノである。

そしてランキング首位は、この街の全ての冒険者の羨望的である。

それくらいの目標があった方が、モチベーションが上がると言うものだ。

ただ、俺はそこまでランキングなどに興味は無かった。

この街のカラクリ、いやこの世界の構造について知ってしまったいるからである。

この世界もまた、女神メアリース様の箱庭。

ダンジョンとはかの御方が用意したアトラクションであり、適度な緊張感と達成感を得る為の大掛かりな体験型のゲームコーナーに過ぎない。

別にそれに不満があるわけではない。

ダークエルフの長老がかつて言っていたように、それを言い出したら、こうして息を吸うことすら神々の掌の上のことなのだから。

俺が悩んでいるのは、周囲の期待である。考えても見て欲しい。

俺たちのパーティは、俺以外三人はあの魔王様に真正面から戦いを挑めるような連中なのだ。

ダンジョンの階層ボスの合同攻略などには必ず呼ばれるし、頼りにもされている。

なのに、ランキングは56位。これは全体から見れば真ん中より少し上の順位だ。

お前らボスアタックだけじゃなくもつとダンジョン探索に力を入れろ、とギルド上層部にお叱りを受けたわけである。

そりゃあ、あんたらは利益が欲しいから、そんな他人事のように言えるわけである。

俺たちのパーティのメンバーは、名声やお金にはあまり興味の無い連中ばかりだ。

いや、正確に言うならもう名声やお金に付随する面倒ごとがこりごりだって奴らばかりである。

その日の糧と少々の貯金があれば、あとは何もいらないと悟る羽目になった枯れた面子なのである。

「アラン、メンバーは見つかった？」  
俺はその声に首を振った。

すると、そつと俺に近づいていたアリサが俺の腕を自身に絡め取る。

「別にランキングやギルドの評価なんて気にしなくていいのよ。

私はあなたと一緒に居られればそれで」

「あ、アリサ!!」

その時である、ステラの声が聞こえたのは。

彼女はずんずんとギルドの入り口から歩いてくると、俺の空いている腕を引っ張った。

「抜け駆けするなって、言ったよね!!」

「別に、こんなのスキンシップじゃない」

ぷい、とアリサはそっぽを向いた。

ステラはその態度に頬を引きつらせていた。訂正。こいつらはちつとも枯れてなどいない。

周囲から舌打ちの音が聞こえる。

ギルドホールは酒場も兼ねている。なんでギルドの仕事の幹旋場が酒場も兼ねているのかと言えば、それが伝統だからとしか言えない。

いくつかのテーブルにはむさい男たちが昼間から酒を呷り、こつちを見ては憎悪を込めて睨んでくる。

代わって欲しいなら代わってやるよ。

俺は二人が喧嘩をおっぱじめたので、するりと逃げ出しギルドから出た。

もう慣れたものである。

「やっぱり俺じゃなくてイリーナ殿がリーダーをやればよかったんだ……」

俺はそんな心境を吐露し、町中を歩く。

俺たちのパーティ編成を試してみよう。

俺、アタッカー。

イリーナ殿、タンク。

ステラ、アタッカー。

アリサ、ソーサラー。

圧倒的に、戦闘特化なのである。

スカウトとか、シーフが居ないのだ。

アリサはヒーラーを兼ねているので、物理攻撃でダメージを稼ぐ編成なのだが、殲滅力はともかく索敵はどうしても苦手になってしまう。

クリステインが居ないのが本当に痛い。

優秀なスカウトやシーフはパーティの生命線。

どこも人手不足でギルドで募集を掛けても全くマッチングできない。

さて、どうしたものかと考えていると。

「さあ、今ならパンが焼きたてだよ!!」

美味しいパンが早い者勝ちだよ!!」

知り合いのパン屋で呼び込みをしているソフィア殿を見つけた。

「おや、アランか、お前も買っていくか？ 焼きたてだよ」

「ああ。貰うよ」

知り合いことレナスティ元姫のパン屋はそれなりに繁盛していた。

かつての親父さん達と一緒に頑張っているようだった。

それにこのソフィア殿が気づいたらしれっと合流していた。

「なあ、ソフィア殿」

「なんだ？ 知り合いだからと値引きはせんぞ」

「違うよ。うちのパーティーに入ってくれないか？」

ソフィア殿のジョブは闇騎士。

シーフとタンクの技能を併せ持つ、今の俺たちには喉から手が出るほど欲しい人材だった。

俺がそう言うと、彼女は露骨に嫌そうな顔になった。

「冗談も大概にしろ。」

最近レナが孤児院の経営も始めたのだ。

人手はまったく足りていない。むしろお前たちが手伝え」

「そうだよなあ」

レナスティ元姫はその経営手腕をいかに発揮し、このパン屋も二店舗目も計画してるとかなんとか。

「ソフィアを引き抜いちやダメだよ、アランくん」

そんな話をしていると、店内でパンの品出しをしていたレナスティが寄ってきた。

「仕方ないだろ、こっちは優秀なシーフが必要なんだ」

「うふふ、なら私が仲間になってあげよっか？」

昔から冒険者には興味があつたんだ」

彼女はそんな茶目つ気たつぷりな笑みでウイंकしてきた。

流星は看板娘である。元上流階級とは思えない。

「馬鹿なことを言わないでくれ、レナ!!」

冒険者なんて危ない仕事、させられるか!!」

当然、この過保護なソフィアは顔を真っ赤にして彼女の肩を掴ん

だ。

「あはは、冗談だよ。冗談」

彼女は小さく舌を出して太陽のように笑った。

この仕草には並んでいる常連客達もメロメロである。

「でもアラン君たちなら、すぐに良い人が見つかるよ。」

だって、孤児院設立の援助をしてくれたんだもの。神様は見ているわ」

生憎だけど、その神様はいろいろと雑なんですわ。

なんて、言えるはずも無く俺は苦笑いするほかなかった。

優秀なスカウトやシーフなんて、そうかんとんには見つからない。

そう思っていたのだが、意外なところから巡り合わせと言うのはやってくるもので。

「アラン、お前に会いたいって人が来てるよ」

拠点にしてる宿屋の女将さんが、そんなことを言ったのだ。

ギルドを通さない依頼はままあるので、俺はその類かと思ったら。

「やあ、アラン」

そこに居たのは予想外の人物だった。

「あなたは、——赤錆さん!？」

何と、現れたのは赤錆さん。あの『悪魔』の眷属だった。

「あんだ、何しに来たんだけ？」

「それには深く難しい理由があつてだな」

彼女は腕を組んで、難しそうに唸った。

ともかく、俺達は近くのカフェに移動し、彼女の事情を聴いてみた。

そして、要約すると。

「つまり、家出つてことか?」

「失礼な!!」

しかし、どう聞いてもそれ以外には聞こえなかった。

「我が主は、この私を軽んじすぎている!!」

だん、とテーブルを両手で叩いて怒気を占める赤錆さん。

「この間も、我が主は戦場で私を盾にして弾避けにしたのだ!!」

後から文句を言ったら、『お前はそれくらいしかできないじゃん』っ

て!!」

「それは、気の毒に……」

俺の脳裏には、楽しそうに赤錆さんを盾にするクソガキ悪魔の顔が浮かび上がった。

「私は我が主の役に立てるのだ!!」

そこで私は思った。実績があればあの方も思い直すだろう、とな  
!!」

「それで、俺のところには?」

「ああ。お前たちはダンジョンの攻略をしているのだろうか?

ならこの私の力も役に立つと思っただけな」

「そうは言ってもなあ」

赤錆さんは従士であり、役割は騎士などのジョブに代表されるタンク役と思われる。

俺達のパーティに必要な役割とは掛け離れていた。

「赤錆さん、あんた斥候とか鍵開けとかできるのか?」

「そんなことで良いなら、任せろ。」

ピッキングも仲間の怪盗から教わったことがある」

いや怪盗で……。

「頼む、あの人を見返したいんだ!!」

両手を合わせて、拝むように頼み込んでくる赤錆さん。

「……まあ、試験雇用で良いなら」

「助かる!!」

こうして、彼女が我がパーティに加わったのだが。

「大丈夫なのか、あの人は」

イリーナ殿が不安そうに赤錆さんを見ていた。

俺達は翌日、早速赤錆さんをダンジョンの比較的浅い場所へ連れてきた。

「さあ、任せろ!!」

ふんすふんす、と気合十分の赤錆。



そんな彼女をイリーナ殿は心配そうに見ていた。

「……相手は悪魔の従僕だ、使えない者を雇わないだろう、普通」  
「だと良いがな」

どう見ても素人丸出しの彼女に、イリーナ殿は溜息を吐いた。

「実際のところ、どうなの？」

「何で私に聞くの？」

「知り合いだったんでしょ？」

ステラに問われ、アリサはイヤそうな顔になった。

「私のアレの上司としか殆ど接してないわよ。」

でもあいつの従者はみんな優秀だったし、大丈夫なんじゃない？」

「とにかく、今回の依頼の確認を行うぞ」

雑談もそこそこ、イリーナ殿はみんなを集める。

「今回ギルドから受けた依頼の内容は、この階層のマッピングだ。」

「可能な限り、安全な道を確認することが目的となる」

なぜ、もう既に攻略済みの階層のマッピングが必要なのか？

それはダンジョンは定期的に構造が変化するからだ。

五階層ごとに転移ポータルがあり、途中の階層を無視できたりでき

るのだが、採取できる資源は階層によって偏りがある。

なので、ダンジョンの構造は可能な限りすべて把握する必要がある出て

くるわけだ。

ダンジョンは階層ごとに特徴が違うのだが、この階層は城砦がモ  
チーフになっているのか、石造りでトラップが多い場所となっている。

スカウトやシーフの才能を見るにはもってこいの場所だ。

それらの説明を、イリーナ殿は赤錆さんにした。

「つまり、私が先頭に立ってトラップなどを解除すればいいのだな？」

「ああ、頼む」

「わかった、では行くこうではないか!!」

そうして、意気揚々と歩き出した赤錆さん。

カチツと彼女の足元のタイルが少し沈んだ。

風切り音と共に、どこからともなく矢が飛んできた。

「ギョウ?」

運悪く、矢は赤錆さんの頭部に直撃。

彼女は倒れこんだ。

「おい、大丈夫か!？」

「アリサ、ヒールの準備を!!」

私達はすぐに彼女に駆け寄った。

この階層で即死する威力のトラップは無いはずだが……。

「ふう、びっくりした」

赤錆さんはむくりと起き上がった。

彼女はぴんぴんしていた。

「今の喰らって、無事なのか?」

「あれ、言ってなかったか?」

赤錆さんは頭に刺さった矢を引っこ抜いて捨てた。

「我ら悪魔の従者は複数人に見えて、全員彼の一部に過ぎない。

私は『悪魔』と言う概念の一部に過ぎず、基本的には不死身なのだ」

なにそれ、ズルい。

「故にトラップの類は全て任せろ。

先行して全て踏み抜いて解除してくれる!!」

私達は思った。

この人、馬鹿だ。

偶にいる、戦士たちだけのパーティで、トラップなど全部踏み抜い

て解除してくれる、みたいな漠探知であった。

「む、これは……」

更に進んでいくと、石造りの通路を横切るように大きな水路が道を

塞いでいた。

跳ね橋があるにはあるが、それは向こう側からしか下ろせない構造

になっている。

「面倒な構造に出くわしたな」

イリーナがぼやく。

恐らく、水中にはサハギンなどの水中系の魔物が潜んでいる。

跳ね橋を下ろす為にパーティを分断して進むか、全員で足場の悪い

所を進むか、という二択を迫られるのである。

「察するに、あの橋を下ろせればいいのか？」

「流石にあなた一人で行かせるのも気が引ける」

「なんか水路で転んで流されそうだし、とはイリーナは言わなかった。」

「いいや、これくらいなら大丈夫だ。」

いざ、——変身!!」

すると、赤錆さんの姿が変化した。

頭部からは左右に赤毛をかき分けるようにヤギの角が生え、背中から一對のコウモリの翼が出現した。

そしておまけとばかりに悪魔みたいな尻尾が生えてきた。

「……ああ、先生が自分たちはエーテル体だって言ってたけど、そういう事なのね」

アリサはそれを見て納得したように頷いた。

「あれ、どういうことなの？」

「イメージで姿とか自由自在ってこと」

困惑しているステラに、アリサが説明してみせた。

「なんと言うか、本当に悪魔だったんだな……」

正直彼女の言動は悪魔のイメージとはかけ離れている為、ようやくイリーナ殿は実感したようだった。

俺達がそうして衝撃を受けている間に、赤錆殿はふわふわぱたぱたと空を飛んで向こう側へたどり着き、跳ね橋を下ろした。

「よし、次に行くぞ!!」

彼女の笑顔がまぶしい。

俺達はその後、彼女の犠牲で幾つもの罠を踏破した。

マッピングは数日掛けて終了した。

己を顧みないしその必要が無い赤錆さんのお陰で、俺達は気疲れはしつつも何とか依頼を完了した。

なお、赤錆さんは魔物との戦いでは殆ど役に立たなかった。

俺達が強いと言うのもあるが、彼女はちよつと、うん、言及は控える。

依頼完了をギルドに報告し、俺達は宿に戻ろうとその道中で。

「おい」

あの『悪魔』が、待ち構えていたのだ。

「げ、我が主……」

「お前は僕の従者、僕のモノだ。」

勝手にいなくなるとかどういいう了見なの？」

赤錆さんは一瞬しゅんとなったが、ハツとなって胸を張った。

「彼らは私を必要としてくれているのだ。我が主と違ってな!! な

あ、そうだろう!？」

「なにいつてんの、お前」

胡乱な彼の視線がこちらに向いた。

「正直、見ていてひやひやするんで、お引き取り下さい」

「友人として付き合うのなら楽しいけど、背中を預ける仲間としてはちよっと」

アリサとステラはそんな無情なことを言った。

「わざわざ迎えに来てにいるんだ。戻って話し合いなさい」

と、イリーナ殿は大人の対応をした。

「じゃあ、とりあえず不採用ってことで皆良いな?」

俺の言葉に、皆が頷いた。

「そ、そんな……」

赤錆さんはショックを受けたようで、不機嫌そうな自分の主と俺たちを何度も交互にみやる。

「わ、わかった……」

赤錆さんはうな垂れると、彼女の手を『悪魔』は引っ張って歩き出す。

数歩目には、彼らの姿は消えていた。

「あの彼が心配するのもよくわかる……」

イリーナ殿の言葉に、私たちは頷くのだった。

それからしばらく、俺達は変わらぬ日々を過ごしたのだが。

「アラン、聞いてくれ!!」

赤錆さんはまた家出してきたのだ。

俺は面倒に思いつつも、彼女の話をきいてやることにした。

俺は、彼女は自分がいかに苦労しているのか、身の上話を聞いてやることから始めたのだった。